

宮城県文化財調査報告書第219集

# 原田遺跡・下萩沢遺跡

－ 一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅰ－

平成21年3月

宮城県教育委員会  
国土交通省東北地方整備局

## 序 文

ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、高規格道路の建設や大規模な工業団地造成などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなった一般国道4号築館バイパス建設工事に先立って実施した栗原市原田遺跡と下萩沢遺跡の発掘調査報告書です。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成21年3月

宮城県教育委員会

教育長 小林 伸一

## 例 言

1. 本書は国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施了一般国道4号築館バイパス建設に伴う原田遺跡、下萩沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が行った。また、調査に際しては栗原市教育委員会の協力を得ている。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々及び機関からご指導・ご協力を賜った(敬称略)。

岡村道雄(前奈良文化財研究所) 井上雅孝(滝沢埋蔵文化財センター) 津野 仁(とちぎ生涯学習文化財団)

八木光則(盛岡市中央公民館) 千葉長彦・三浦実(栗原市教育委員会)

東北歴史博物館 宮城県多賀城跡調査研究所 栗原市教育委員会

4. 第2図は、国土交通省国土地理院発行「築館(1998年11月発行)」、「金成(1998年5月発行)」の(1:25,000)の地形図を複製して使用した。また、第3・4図は「築館都市計画図(1:2,500)」を複製して使用している。
5. 測量基準点の座標値は、原田遺跡および下萩沢遺跡第1次調査が日本測地系(改正前)に基づく平面直角座標X系、下萩沢遺跡第2次調査は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、両遺跡で使用した測量基準点は以下の通りである。

(原田遺跡・下萩沢遺跡第1次調査)

原田遺跡: T-4 : X = -141,437.333, Y = 17,682.888	下萩沢遺跡: T-4 : X = -141,437.333, Y = 17,682.888
T-7 : X = -141,517.264, Y = 17,636.780	T-7 : X = -141,517.264, Y = 17,636.780
T-14 : X = -141,561.076, Y = 17,548.304	TS-1 : X = -141,038.772, Y = 17,794.688
T-15 : X = -141,588.209, Y = 17,529.052	TS-2 : X = -141,093.498, Y = 17,829.844
T-16 : X = -141,612.679, Y = 17,559.546	TS-4 : X = -142,094.851, Y = 17,774.047
T-17 : X = -141,628.102, Y = 17,546.272	TS-00 : X = -141,005.351, Y = 17,851.796
	ST-7 : X = -141,116.002, Y = 17,663.240

(下萩沢遺跡第2次調査)

TB13 : X = -140,763.859, Y = 17,927.212	TB17 : X = -140,741.806, Y = 17,923.256
TB16 : X = -140,756.193, Y = 17,924.384	

6. 遺構図中に示された方位はすべて座標北を表している。磁北と座標北の偏差は西に約 $7^{\circ}10'$ である。
7. 図版1は昭和51年に国土地理院が撮影した空中写真(cto\_76\_16\_c25b\_6)を使用し、加筆を行っている。
8. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。番号は遺跡ごとに遺構の種類に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。また、下萩沢遺跡は調査が1次と2次に分かれ、場所が異なることから第2次調査の番号は201から使用している。  
S A: 堀跡・柱列跡 S B: 掘立柱建物跡 S D: 溝・区画溝跡 S K: 土塼 S I: 竪穴住居跡  
S P: 墓 S X: 竪穴遺構・焼成遺構・焼け面・その他の遺構

9. 平面図にはそれぞれスケールを付しているが、遺構の縮尺は原則として以下の通りである。  
竪穴住居跡・竪穴遺構・竪穴状遺構: 1/60 掘立柱建物跡・堀跡: 1/80 材木堀跡: 1/200  
墓・焼成遺構・焼け面・土塼・溝: 1/60または1/80
10. 平面図の黒・赤・緑の実線・破線は新旧関係を表している(新:黒←赤←緑:旧)。また、遺構内の土器は青、カマド構築に関連する土器は赤で表示した。
11. 本書では、遺構表現や遺物表現に以下のカラートーンを使用している。



12. 本書の土色・土質の記述にあたっては「新版標準土色帖 1994年版」(小山・竹原 1994)に準拠した。
13. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、基本の縮尺は以下の通りである。  
土器: 1/3 石製品: 1/2または2/3 土製品: 1/2 金属製品: 1/2
14. 本書では遺物の実測図に付した番号と図版番号とは原則的に一致する。同一図版の場合には写真番号は省略した。また、どちらかが掲載しない場合は「-」と記載した。
15. 土器の説明では製作においてロクロを使用しているもの「ロクロ調整」と表記し、使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。
16. 原田遺跡 S I 30・70住居跡で出土した掛甲小札・鉄鐔などは株式会社京都科学に保存処理を委託した。
17. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議ののち、原田遺跡・下萩沢遺跡第1次調査を大和幸生、下萩沢遺跡第2次調査を生田和宏が行った。
18. 遺跡の調査成果については、現地説明会、古代城柵官衙遺跡検討会、宮城県遺跡調査発表会等で公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
19. 発掘調査の記録や出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

## 目次

原田遺跡・下萩沢遺跡第1次調査	1
調査要項	2
第一章 遺跡の概要と周辺の遺跡	
1. 遺跡の位置と地理的環境	3
2. 周辺の遺跡	4
第二章 調査に至る経緯と調査の経過	
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査の経過	9
第三章 調査の方法と基本層序	
1. 調査の方法	10
2. 基本層序	10
第四章 発見した遺構と遺物	
I. 原田遺跡	12
1. 竪穴住居跡	12
2. 竪穴遺構	78
3. 掘立柱建物跡	86
4. 堀跡	96
5. 井戸跡	99
6. 焼成遺構	99
7. 土壌	101
8. 溝跡	107
9. その他の遺物	108
II. 下萩沢遺跡	109
南区	
1. 竪穴住居跡	109
2. 竪穴状遺構	173
3. 掘立柱建物跡	174
4. 堀跡	186
5. 木棺墓	186
6. 土壌	187
7. 溝跡	187
8. 焼面遺構	196
9. その他の遺物	196
北区	
1. 竪穴住居跡	197
2. 竪穴遺構	200
3. 掘立柱建物跡	201
4. 土壌	204
5. 溝跡	204
6. その他の遺物	205
西区	
1. 竪穴住居跡	205
2. 竪穴遺構・竪穴状遺構	210
3. 掘立柱建物跡・堀跡	212
4. 土壌	214
5. 溝跡	215
6. その他の遺物	215

## 第五章 総括

### I. 古代の遺構と遺物

1. 遺物について	218
(a) 土器	218
1) 土師器の分類	218
2) 須恵器の分類	227
3) 土器群の設定	229
4) 土器群の年代	234
(b) 鉄製品	237
1) 小札	237
2) 鉄鐔	240
2. 遺構について	241
(a) 遺構の年代	241
(b) 遺跡の様相	245
(c) 焼失住居跡について	246
(d) 竪穴住居の構造	247
3. 遺跡の性格について	252

### II. 古代以外の遺構と遺物

第六章 まとめ	256
引用・参考文献	257

下萩沢遺跡第2次調査	261
調査要項	262
1. 調査の経緯と概要	263
2. 発見した遺構と遺物	
(1) 県道若柳・築館線より北側	263
(2) 県道若柳・築館線より南側	268
3. まとめ	269
引用・参考文献	270

原田遺跡・下萩沢遺跡(第1次) 挿図目次

第1図	遺跡の位置	3	第60図	S 104B住居跡出土遺物	126
第2図	原田遺跡・下萩沢遺跡の位置と周辺の古代の遺跡	5	第60図	S 105B住居跡	128
第3図	調査区的位置	8	第62図	S 105B住居遺物及び炭化材出土状況	129
第4図	原田遺跡遺構位置図	13-14	第63図	S 105B住居跡出土遺物(1)	131
第5図	S 130A住居跡	17-18	第69図	S 105B住居跡出土遺物(2)	133
第6図	S 130B住居跡遺物及び炭化材等出土状況	19-20	第70図	S 105B住居跡出土遺物(3)	134
第7図	S 130C住居跡出土遺物(1)	24	第71図	S 106B住居跡(1)	138
第8図	S 130B住居跡出土遺物(2)	26	第72図	S 106B住居跡(2)	139
第9図	S 130B住居跡出土遺物(3)	28	第73図	S 106C住居跡出土遺物(1)	141
第10図	S 130B住居跡出土遺物(4)	30	第74図	S 106C住居跡出土遺物(2)	143
第11図	S 130B住居跡出土遺物(5)	32	第75図	S 107B住居跡	147
第12図	S 130B住居跡出土遺物(6)	34	第76図	S 107B住居跡出土遺物	148
第13図	S 130B住居跡出土遺物(7)	35	第77図	S 109B住居跡	150
第14図	S 130B住居跡出土土製品・鉄製品	38	第78図	S 109B住居跡及び出土遺物	151
第15図	S 130B住居跡出土土甲小札	40	第79図	S 161A・B住居跡	154
第16図	S 131B住居跡	44	第80図	S 161B住居跡出土遺物	155
第17図	S 131B住居跡出土遺物(1)	46	第81図	S 161A住居跡出土遺物	157
第18図	S 131B住居跡出土遺物(2)	47	第82図	S 162B住居跡	158
第19図	S 132A・B住居跡	50	第83図	S 162B住居跡出土遺物(1)	159
第20図	S 132B住居跡出土遺物(1)	52	第84図	S 162B住居跡出土遺物(2)	160
第21図	S 132B住居跡出土遺物(2)	52	第85図	S 163B住居跡	163
第22図	S 161A・B住居跡	57	第86図	S 163B住居跡出土遺物	165
第23図	S 161B住居跡出土遺物	60	第87図	S 164A・B住居跡	167
第24図	S 170B住居跡	62	第88図	S 164B住居跡遺物及び炭化材・炭化繊維出土状況	168
第25図	S 170B住居跡遺物及び炭化材出土状況	63	第89図	S 164B住居跡出土遺物(1)	170
第26図	S 170B住居跡出土遺物(1)	65	第90図	S 164B住居跡出土遺物(2)	172
第27図	S 170B住居跡出土遺物(2)	67	第91図	S X08・09彫穴状遺構	174
第28図	S 170B住居跡出土遺物(3)	69	第92図	S B41・42建物跡	175
第29図	S 170B住居跡出土遺物(4)	70	第93図	S B43・44・49・50・52建物跡	177
第30図	S 170B住居跡出土金属製品	72	第94図	S B45・48建物跡	179
第31図	S 191住居跡	75	第95図	S B46・47建物跡	181
第32図	S 191B住居跡出土遺物	77	第96図	S B53・54建物跡	182
第33図	S X01彫穴遺構及び出土遺物	79	第97図	S A57建物跡、S D8・72・73・76建物跡	184
第34図	S X05彫穴遺構	80	第98図	S P75・76棺及び出土遺物	186
第35図	S X04・05彫穴遺構及びX05C0彫穴遺構出土遺物	82	第99図	S K10・16・17・18・19・20・25・土壁、S D23溝跡	187
第36図	S X07A・B彫穴遺構	84	第100図	S K10・25・28・31・34・36・65土壁出土遺物	189
第37図	S X50彫穴遺構	84	第101図	S K26・27・28・31・36・65・68・69土壁	189
第38図	S B11・12・13・14・15建物跡	87	第102図	S K26・68・69出土遺物	193
第39図	S B33・34・35・36建物跡、S A41溝跡	89	第103図	S K66・67・70土壁	194
第40図	S B42・82建物跡	91	第104図	S K67土壁出土遺物	195
第41図	S B56・57建物跡	92	第105図	S K70土壁出土遺物	196
第42図	S B73・74建物跡	94	第106図	S D23・33・35・74溝跡	196
第43図	S B83・85・86建物跡、S A87溝跡	95	第107図	南区その他の遺物	197
第44図	S A99材木跡	97	第108図	北区遺構配置図	201
第45図	S E86中半部出土遺物	99	第109図	S 1102B住居跡及び出土遺物	208
第46図	S X38・39・40・41彫穴遺構及びX39C彫穴遺構出土遺物	100	第110図	S E110土器出土遺物	210
第47図	S K37・52・53・62・71・93・94・95土壁	102	第111図	S B103・104・105・106建物跡	202
第48図	S K17・18・19・20・75・76・77・78・79土壁	103	第112図	S B107・108建物跡	204
第49図	S K21・51・54・55・81・90・96・97土壁	104	第113図	S D82土器跡、S K83土壁	206
第50図	S K02・16・22・23・72・84・89・92土壁	105	第114図	内1区遺構配置図	207
第51図	S K72土壁出土遺物	106	第115図	S 1111A・B住居跡及びS 1111B住居跡出土遺物	207
第52図	S D08・09・10・59・60溝跡	108	第116図	S 1112、S 1113A・B住居跡及び出土遺物	209
その他の出土遺物		108	第117図	S X129彫穴遺構及び出土遺物	211
第54図	下萩沢遺跡遺構配置図	111-112	第118図	S X118彫穴状遺構	212
第55図	南区北半部遺構配置図	113	第119図	S B116・117・121建物跡、S A115材木跡、S 1141C溝跡	212
第56図	南区中央部遺構配置図	114			
第57図	南区南半部遺構配置図	115	第120図	S K119・122土壁	215
第58図	S 101住居跡及び出土遺物	116	第121図	土器部類の分類	220
第59図	S 102住居跡	118	第122図	土器部類の分類(1)	225
第60図	S 102住居跡出土遺物	119	第123図	土器部類の分類(2)	225
第61図	S 103住居跡	121	第124図	土器部類の分類	227
第62図	S 104C住居跡	122	第125図	小札の分類	226
第63図	S 104C住居跡出土遺物	124			
第64図	S 104A・B住居跡	125			

原田遺跡・下萩沢遺跡(第1次) 図版目次

図版1	遺跡周辺の空中写真	6	図版32	井戸跡、地蔵遺構	101
図版2	原田遺跡・下萩沢遺跡の空中写真	11	図版33	土壁、溝跡	107
図版3	S 130住居跡	21	図版34	S 101住居跡	117
図版4	S 130B住居跡細部(1)	22	図版35	S 101B住居跡出土遺物	120
図版5	S 102住居跡細部(2)	23	図版36	S 102住居跡	123
図版6	S 130B住居跡出土遺物(1)	25	図版37	S 103住居跡	121
図版7	S 130B住居跡出土遺物(2)	27	図版38	S 104A・B・C住居跡	122
図版8	S 130B住居跡出土遺物(3)	29	図版39	S 105住居跡	130
図版9	S 130B住居跡出土遺物(4)	31	図版40	S 105B住居跡出土遺物(1)	132
図版10	S 130B住居跡出土遺物(5)	33	図版41	S 105B住居跡出土遺物(2)	135
図版11	S 130B住居跡出土遺物(6)	36	図版42	S 106A・B・C住居跡	140
図版12	S 130B住居跡出土土製品・鉄製品	39	図版43	S 106C住居跡出土遺物(1)	142
図版13	S 130B住居跡出土土甲小札	41	図版44	S 106C住居跡出土遺物(2)	144
図版14	S 130B住居跡出土遺物	42	図版45	S 107B住居跡	148
図版15	S 131住居跡	45	図版46	S 160B住居跡	152
図版16	S 131B住居跡出土遺物	48	図版47	S 161A・B住居跡	153
図版17	S 132A・B住居跡	51	図版48	S 161B住居跡出土遺物	156
図版18	S 132B住居跡出土遺物(1)	53	図版49	S 162B住居跡出土遺物	161
図版19	S 132B住居跡出土遺物(2)	55	図版50	S 163B住居跡	164
図版20	S 161A・B住居跡	58	図版51	S 163B住居跡出土遺物	166
図版21	S 161B住居跡出土遺物	61	図版52	S 164B住居跡	169
図版22	S 170B住居跡	64	図版53	S 164B住居跡出土遺物(1)	171
図版23	S 170B住居跡出土遺物(1)	66	図版54	S B41・42・45・46・47・48・53・54建物跡	185
図版24	S 170B住居跡出土遺物(2)	68	図版55	S K10・25・28・31・34・36・65土壁出土遺物	190
図版25	S 170B住居跡出土遺物(3)	71	図版56	土壁、溝跡	192
図版26	S 170B住居跡出土金属製品	73	図版57	S K26土壁出土遺物	194
図版27	S 170B住居跡出土遺物(4)	73	図版58	S K67土壁出土遺物	195
図版28	S 191B住居跡	76	図版59	S 102住居跡	200
図版29	S 191B住居跡出土遺物	78	図版60	S B104・105・106・107・108建物跡	215
図版30	彫穴遺構	85	図版61	S 1112B住居跡、S 1113A・B住居跡	210
図版31	竪立建物跡、溝跡、材木跡	98	図版62	S B116・117建物跡	214

原田遺跡・下萩沢遺跡(第1次) 表目次

第1表	S 130B住居跡出土遺物観察表	37	第6表	原田遺跡・下萩沢遺跡等住居跡属性表	216
第2表	S 130B住居跡出土土甲小札観察表	42	第7表	原田遺跡・下萩沢遺跡等柱建物跡属性表	216
第3表	S 170B住居跡出土遺物観察表	72	第8表	原田遺跡・下萩沢遺跡土壁属性表	217
第4表	S 102住居跡出土遺物観察表	136	第9表	遺構出土土器一覧表	231-232
第5表	S 106C住居跡出土遺物観察表	145	第10表	カマド属性表	232

下萩沢遺跡(第2次) 挿図目次

第1図	調査区全体図	264	第5図	S K33土壁平面図・断面図	268
第2図	S B20建物跡平面図・断面図	265	第6図	S D34溝跡断面図	268
第3図	S 1302住居跡平面図・断面図	266	第7図	築造若衝・築起掘り南側の歩道設置箇所を確認調査区	268
第4図	S 1302住居跡出土遺物	267			

下萩沢遺跡(第2次) 図版目次

図版1	A-D区と検出遺構	271	図版2	E区、築造若衝・築起掘り確認調査区とS102B住居跡出土遺物	272
-----	-----------	-----	-----	--------------------------------	-----

平成16年度

は ら だ 遺 跡  
原 田

しもはぎさわ  
下萩沢遺跡第1次調査



原田遺跡SI30住居跡 炭化材検出状況

## 第一章 遺跡の概要と周辺の遺跡

### 調査要項

遺跡名（遺跡番号：遺跡記号）

原田遺跡（宮城県遺跡地名登録番号41036：BG）

下萩沢遺跡（宮城県遺跡地名登録番号41067：TW）

源光遺跡（宮城県遺跡地名登録番号41068）

高田山遺跡（宮城県遺跡地名登録番号41099）

所在位置

原田遺跡：栗原市築館字萩沢新田前

下萩沢遺跡：栗原市築館字下萩沢

源光遺跡：栗原市築館字源光

高田山遺跡：栗原市築館字南小山

調査原因：一般国道4号築館バイパス建設工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所 旧築館町（現栗原市）教育委員会

調査期間・面積

分布調査：平成14年9月26日

確認調査：平成15年3月10日～18日、4月14日～4月22日

高田山遺跡	対象面積	約1,230㎡	調査面積	約220㎡
原田遺跡	対象面積	約19,540㎡	調査面積	約4,960㎡
源光遺跡	対象面積	約4,000㎡	調査面積	約640㎡
下萩沢遺跡	対象面積	約17,000㎡	調査面積	約2,800㎡

事前調査：平成16年4月12日～12月9日

原田遺跡	調査面積	約9,600㎡
下萩沢遺跡（第1次調査）	調査面積	約8,500㎡

調査員

確認調査：村田晃一 茂木好光 高橋栄一 白崎恵介 稲毛英則 天野順陽 佐藤憲幸 千葉直樹  
千葉長彦 三浦 実（旧築館町教育委員会）

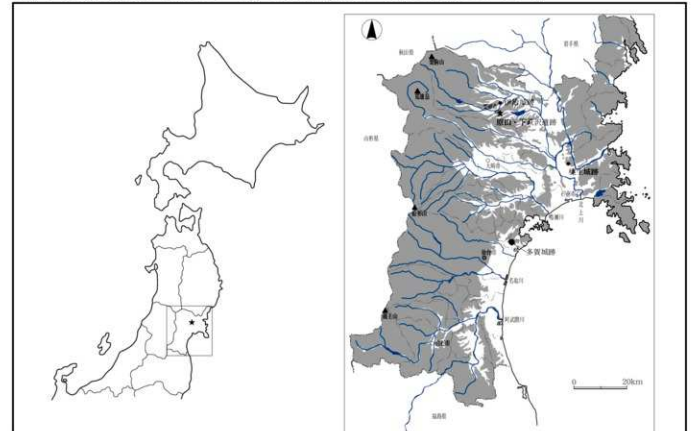
事前調査：高橋栄一 三好秀樹 大和幸生 保原恒雄 田中政幸  
千葉長彦 三浦 実（旧築館町教育委員会）

### 1. 遺跡の位置と地理的環境（第1・2図、図版1）

原田遺跡は栗原市（旧築館町）築館字萩沢に、また、下萩沢遺跡は栗原市築館字下萩沢に所在する。栗原市は旧築館町ほか9町村が平成17年4月1日に合併して誕生した新しい市で、宮城県の北西部を占めており、その南東部にある旧築館町が中心となっている。両遺跡はこの旧築館町の市街地から約800mほど東に位置している。

宮城県北部の地形を見ると、西側に奥羽山脈、東側に北上高地、その間の東寄りに北上川が流れている。栗原市の地形を見ると西部には奥羽山脈が縦走り、東側には奥羽山脈から派生する数多くの丘陵が緩やかな起伏を保ちつつ迫川低地へと連なっている。これらの大小の丘陵は陸前丘陵と呼ばれ、奥羽山脈の東麓に源を発する迫川水系（一迫川・二迫川・三迫川）によって複雑に解析され、樹枝状を呈する。

旧築館町の中央部は一迫川の南岸に位置し、陸前丘陵の一部である築館丘陵が東西に延びる標高30～70mのなだらかな丘陵地帯となっている。原田遺跡、下萩沢遺跡は、ともにこのなだらかな丘陵部の標高約30mの平坦部に立地している。この丘陵は、東側の荒川へ注ぐ沢によって南北に分断されており、最も南側の丘陵南東端部に原田遺跡、沢を隔てた北側に源光遺跡、更にその北側に沢を隔てて下萩沢遺跡が位置している。ともに沖積地との比高差は約20mである。



第1図 遺跡の位置

原田遺跡が立地する丘陵は北側に沢が東から入り込み、南東～東側は丘陵末端が急斜面となっている。遺跡の範囲は丘陵南東部の東西 500m、南北 300m ほどで、調査対象地は開田のため丘陵頂部がなだらかになっており、現況は水田として利用されている。

下萩沢遺跡が立地する丘陵は南側には大きな沢が入り込み、北側は丘陵末端部となっている。遺跡の範囲は東向きの丘陵頂部の東西 200～400m、南北 900m ほどである。調査対象地は丘陵の南半部に当たる県道若柳築館線の南側の地域で、現況は水田として利用されている。

## 2. 周辺の遺跡 (第 2 図)

原田遺跡・下萩沢遺跡周辺には、旧石器時代から近世の遺跡が数多く見られる。これらの多くは前述の迫川水系の河岸段丘上や丘陵上に立地している。ここでは両遺跡に関連する縄文時代と古代を中心に周辺の概略を記す。

〔縄文時代〕縄文時代の主な遺跡としては、縄文遺跡、佐内屋敷遺跡、木戸遺跡、嘉倉貝塚がある。

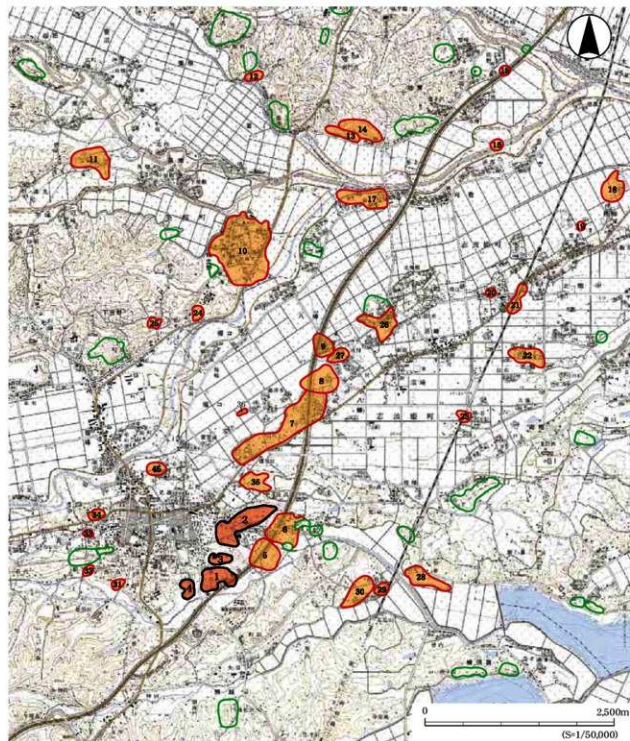
縄文遺跡は下萩沢遺跡の約 1.2 km 東に位置し、縄文時代中期末 (大木 10 式期) の複式炉を伴う住居跡などが発見されている (宮城県教育委員会 1975、築館町教育委員会 2005)。佐内屋敷遺跡、木戸遺跡は、下萩沢遺跡の約 500m 東に位置し、ともに縄文時代中期 (大木 8b 式期) の住居跡などが発見されている (宮城県教育委員会 1983・1980)。また、原田遺跡の 2.5 km 東に位置し、平成 11～14 年に調査された嘉倉貝塚では、縄文時代前期後葉～晩期までの遺物、遺構が発見され、なかでも前期後葉から中期初頭 (大木 5 式期～大木 7a 式期) の環状集落の様子が具体的に判明している (宮城県教育委員会 2003、築館町教育委員会 2003)。

〔古代〕古代の遺跡は縄文時代の遺跡の数に比べて格段に多くなる。

官衙としては、下萩沢遺跡の北 3.5 km に神護景雲元 (767) 年には造営が完了した古代の城郭である伊治城跡がある。昭和 52 年から宮城県多賀城跡調査研究所、昭和 62 年から築館町 (現栗原市) により発掘調査が継続して実施されてきている (宮城県多賀城跡調査研究所 1978～1980、築館町教育委員会 1988～2004)。これまでの発掘調査で、伊治城は築地塀で方形に囲われた中に正殿、前殿、脇殿などが計画的に配置された政庁、それを更に取り囲むように築地塀と溝で方形に区画された内郭、また更に内郭を大溝と土塁または築地塀で囲む外郭の三重構造をなすことが明らかになり、平成 16 年には国指定の史跡になった。

集落遺跡としては佐内屋敷遺跡、木戸遺跡、宇南遺跡、鶴ノ丸遺跡、山の上遺跡、御駒堂遺跡、糠塚遺跡、長者原遺跡があり、東北縦貫自動車道や新幹線の建設等に伴うこれらの遺跡の発掘調査の結果、古墳時代～古代の集落の様相が判明してきた。

下萩沢遺跡の東 500m に位置する佐内屋敷遺跡では、奈良時代の住居跡 6 軒と平安時代の住居跡 23 軒が発見され、奈良時代と平安時代の住居跡では、住居跡の分布、住居方向、カマド方向などに違いが見られた (宮城県教育委員会 1983)。下萩沢遺跡の東 500m に位置する木戸遺跡では、奈良時代前半の住居跡が発見されている (宮城県教育委員会 1980)。下萩沢遺跡から北東約 2～3 km に位置する宇南遺跡と鶴ノ丸遺跡では平安時代の住居跡が発見されている (宮城県教育委員会 1980・1981)。下萩沢遺跡の北東約 1.2 km に位置する山ノ上遺跡では 8 世紀前半の住居跡が 1 軒発見されている (宮城



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	野田遺跡	丘陵	集落	縄文・古	16	野宮遺跡	段丘	散佈地	古
2	下萩沢遺跡	丘陵	集落	縄文・古	20	竹ノ内遺跡	段丘	散佈地	古
3	原田遺跡	丘陵	散佈地	縄文・中・近	21	大穴遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中
4	高山山頂遺跡	丘陵	散佈地	縄文・古	22	藤原遺跡	段丘	集落	古
5	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落	縄文・古	23	藤原遺跡	段丘	集落	縄文・古
6	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文・古	24	大仏古墳群	丘陵斜面	古墳	古
7	藤原遺跡	段丘	集落	縄文・古	25	藤原遺跡	丘陵斜面	散佈地	古
8	宇南遺跡	段丘	集落	縄文・古	26	近藤遺跡	丘陵	集落	古
9	鶴ノ丸遺跡	丘陵	集落	縄文・古	27	安代遺跡	段丘	集落	古
10	伊治城跡	段丘	城郭	古	28	嘉倉貝塚	丘陵	貝塚	縄文・古
11	長谷川遺跡	丘陵	集落	古	29	長谷川遺跡	丘陵	散佈地	縄文・古
12	大穴古墳群	丘陵斜面	古墳	古	30	野宮遺跡	丘陵	集落	縄文・古
13	藤原古墳群	丘陵斜面	古墳	古	31	小遺跡	丘陵	散佈地	縄文・古
14	山ノ上遺跡	丘陵	集落	古	32	月下下遺跡	丘陵	散佈地	縄文・古
15	長者原遺跡	丘陵	集落	古	33	本郷遺跡	丘陵	集落	縄文・古
16	河合谷遺跡	自然堤防	散佈地	縄文・古	34	青野遺跡	段丘	散佈地	古
17	河合谷遺跡	自然堤防	散佈地	縄文・古	35	大穴山遺跡	段丘	散佈地	古
18	糠塚遺跡	段丘	集落	古	36	栗原遺跡	丘陵	集落	古

第2図 原田遺跡・下萩沢遺跡の位置と周辺の古代遺跡





図版1 遺跡周辺の空中写真

国土交通省撮影cta\_76\_16\_c25b\_6を  
修正・加工して使用している

県教育委員会 1980)。下萩沢遺跡の北約 1.5 km に位置する御駒堂遺跡は 7 世紀末～9 世紀初めの集落で、なかでも 8 世紀前半に関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や住居構造が検出されており（宮城県教育委員会 1982）、古代栗原郡の建郡以前の律令体制の辺境政策を考える上で貴重な成果を上げている。下萩沢遺跡の北東約 6.5 km に位置する糠塚遺跡では奈良時代の集落の様相が明らかになり、出土した土器は宮城県北の 8 世紀後半の基準資料となっている（宮城県教育委員会 1978）。下萩沢遺跡から北西約 5 km に位置する長者原遺跡では 8 世紀後半～9 世紀代の集落が発見されている（栗駒町教育委員会 1995）。

生産遺跡としては、発掘調査によるものではないが、下萩沢遺跡から北東約 4 km に位置する塚塚窯跡があり、開田工事中に多量の須恵器や窯壁体などが出土している。また、下萩沢遺跡から北西約 5 km に位置する岩ノ沢窯跡では須恵器が採集され、下萩沢遺跡から北東 9.3 km に位置する小迫神社窯跡では、瓦が採集されている。いずれも未調査のため詳細は不明だが、小迫神社窯跡は伊治城へ須恵器や瓦を供給したとされている。

以上の他に下萩沢遺跡から北西約 9 km に、33 基の小円墳が確認されている鳥矢ヶ崎古墳群がある。昭和 46 年に 2 基の古墳が発掘調査され、青銅製の鈎帯金具や巖手刀などが発見されている（東北学院大学考古学研究所 1971）。また、下萩沢遺跡の北約 6 km と北北東約 5.5 km には、古墳時代後期から奈良時代と考えられている大沢横穴墓群と姉齒横穴墓群があり、これらは内陸に位置する横穴墓としては北限にあたるものである。

[中世]

中世については、前述の木戸遺跡で 5 種の堅穴遺構が発見された。いずれも壁沿いに柱穴があり、対となって上屋構造を支えていたと考えられている。また、前述の鶴ノ丸遺跡では、鎌倉後期から江戸時代まで続いた館跡も発見されている。主郭とそれを取り囲む腰郭からなり、更に土塁と二重の堀で面されている。この他に照越館跡、萩沢城跡、嘉倉館跡等が知られているが、詳細は不明である。

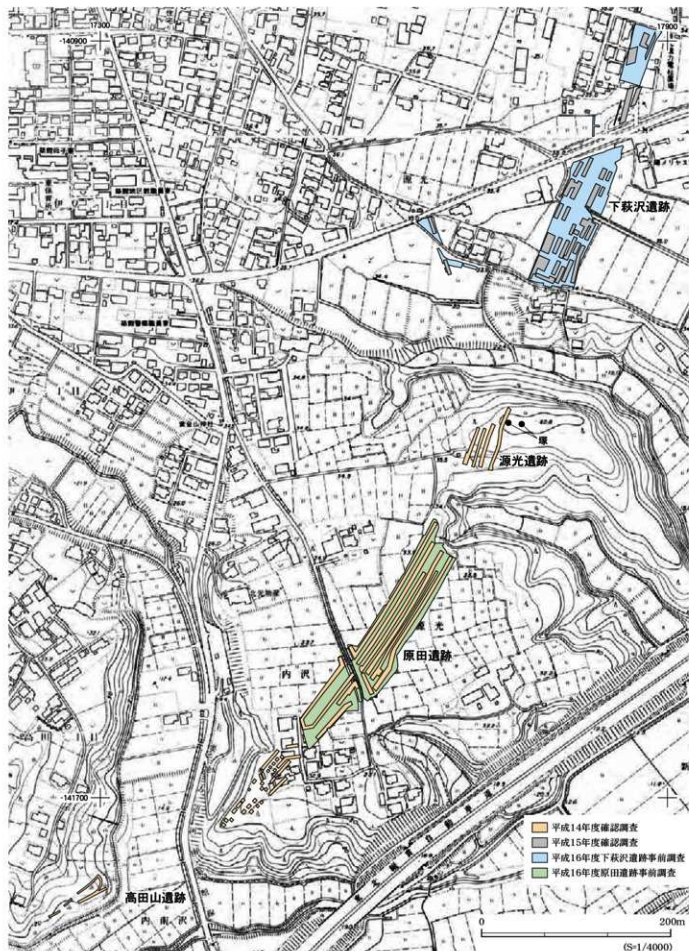
## 第二章 調査に至る経緯と調査の経過

### 1. 調査に至る経緯

旧築館町内を縦断する国道 4 号の交通混雑緩和及び市街地の地域振興等の理由により、旧築館町赤坂を起点に市街地を迂回し旧志波姫町を通り旧築館町城生野に至る延長約 7 km、路線幅 25m、4 車線のバイパス計画が昭和 56 年に都市計画決定された。

その後、平成 14 年 6 月に宮城県教育委員会は、国土交通省東北地方整備局に対し、計画地内に周知の遺跡が存在していることと、地形的にみて新たな遺跡の存在も想定されることから、遺跡の取扱について協議を申し入れ、周知の遺跡も対象とした分布調査と試掘調査を 9 月に実施した。

その結果、周知の遺跡である高田山遺跡の丘陵裾部では遺構・遺物は発見されず、原田遺跡隣接地



第3図 調査区的位置

では、古代の土壌や土師器、須恵器が発見され、原田遺跡の範囲が事業地まで広がることを確認した。また、原田遺跡の北側の丘陵南斜面では縄文土器の散布がみられ、丘陵頂部では中世以降と考えられる塚を確認した。さらに谷を挟んだ北側の平坦部で竪穴住居跡や古代の土器を発見した。このことから前者を源光遺跡、後者を下萩沢遺跡として遺跡台帳に新たに登録した。以上の成果を踏まえ、国土交通省東北地方整備局と保存協議を行った結果、計画を変更して保存することになった源光遺跡の塚以外は、いずれも工事前の平成16年度に、記録保存のために本発掘調査を実施することになった。

平成16年度に実施する発掘調査のため、平成15年3月と4月に、遺跡の範囲と密度を正確に把握するための確認調査を高田山遺跡、原田遺跡、源光遺跡、下萩沢遺跡で実施した。

確認調査は、平成15年3月10日～18日、同年4月14日～22日に実施した。丘陵部の本線予定地内に、高田山遺跡は4本、原田遺跡は33本、源光遺跡は4本、下萩沢遺跡は本線と進入路予定地に31本の確認トレンチを設定した（第3図）。

この調査の結果、原田遺跡では丘陵南端部での遺構・遺物の分布はみられず、丘陵中央部と北側で古代の竪穴住居跡や掘立建物跡、土壌などが多く発見された。下萩沢遺跡では、丘陵頂部の平坦面は開田のために削平は受けているものの、古代の竪穴住居跡や掘立建物跡などの遺構は良好に残っていることが判明した。また、高田山遺跡と源光遺跡では、事業地内に遺構・遺物は分布しないことが判明した。

原田遺跡、下萩沢遺跡から出土した遺物は、主に古代の土師器や須恵器であった。ただし、わずかながらに縄文土器・弥生土器や石器なども含まれており、新発見の遺跡である下萩沢遺跡は、少なくとも縄文～古代にわたる複合遺跡であることが判明した。

## 2. 調査の経過

前述の確認調査の結果を受けて、平成16年4月から国道4号築館バイパス建設予定地内の事前調査に入ることとなった。

原田遺跡は、調査対象地を市道や水稲耕作のための用水路が横断している。この部分の発掘調査については、道路や用水路の付け替えが必要なことから、一括して秋に行うこととした。発掘調査は、市道以南の南区から開始することとし、4月12日から表土剥ぎを開始した。その結果、これまでの確認調査で検出している竪穴遺構、掘立建物跡、土壌などの他に井戸跡、溝跡を検出した。引き続き精査にうつり、4月28日に終了した。その後、市道北側の北区の表土剥ぎを開始し、竪穴住居跡や掘立建物跡などを検出した。順次検出した遺構について精査を行い7月8日にそれらの作業を終了した。

9月13日から用水路部分の表土剥ぎを行い、竪穴住居跡や材木崩跡を検出した。また、市道の迂回路が完成したため、現市道部分の表土剥ぎを11月4日から開始し、竪穴住居跡を検出した。これらの遺構についても精査、補足調査、図面作成を行い、すべての作業を11月11日に終了した。

下萩沢遺跡では、調査区を南北に横断する市道を境に、北側を北から北-1区、北-2区とした。また、市道南区は南区とし、西側から本線への進入路部分を北側から西-1区、西-2区、西-3区、西-4区とした。

調査は、原田遺跡の調査と並行して6月11日より北-1区の表土剥ぎから開始した。竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡などを検出し、順次それらの精査に取りかかった。7月1日からは南区の表土剥ぎを開始した。南区は中央部を市道が横断しており、この市道部分の調査は、道路の付け替えが必要なことから最後に行うこととした。南半部で南北方向と東西方向に規則的に並ぶ掘立柱建物跡や、竪穴住居跡、土壇など、北半部で竪穴住居跡等を検出した。また、バイパスに取り付く県道からの進入路部分の西区は、10月12日から表土剥ぎを開始し、区画溝跡と材木崩跡、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などを検出し、直ちに精査を行った。11月22日から南区市道部分と北-1区で一部未調査であった西側部分及び北-2区の表土剥ぎを行い、市道部分で掘立柱建物跡2棟、北-1区で掘立柱建物跡2棟、北-2区で溝跡と土壇を検出した。順次これらの精査を行い、12月9日にすべての調査を終了した。

なお、平成16年10月14日に原田遺跡及び下萩沢遺跡の空中写真撮影を行った。また、同年10月16日には現地説明会を行い、地元の方々を中心に約150名の参加を得た。

### 第三章 調査の方法と基本層序

#### 1. 調査の方法

この調査は国道4号築館バイパス建設に係わる原田遺跡・下萩沢遺跡の発掘調査である。調査対象地は両遺跡の立地する丘陵頂部を分断する南北に長い調査区である。遺構の実測は、計画道路幅杭を基準にしたトータルステーション及び電子平板を用いて行ったが（基準とした座標値は例言を参照のこと）、出土遺物が多い部分については、任意に設けた基準点による直角座標を用いて行った。

また、報告書の平面図の作成に際しては、国家座標に基づく  $X = -140,900,000$ 、 $Y = 17,900,000$  を原点とした。したがって、W-100、S-100とした場合は、原点からそれぞれ西へ100m、南に100mの位置であることを示す。

記録写真は中判カメラ（白黒・カラーリバーサル）と800万画素のデジタルカメラの両方で撮影した。

#### 2. 基本層序

原田遺跡と下萩沢遺跡は同一の丘陵上に立地しており、両遺跡の間には東側から入り込む2条の沢と源光遺跡が位置している。両遺跡の丘陵平坦部は水田として利用されてきており、開田工事による削平を受けている。このため、両遺跡における地層の堆積の状況は必ずしも良好とはいえない。両遺跡の敷地点で堆積状況を確認した結果、両遺跡の堆積は同じ層序を示している。基本層序は以下の通りである。

- 1層：調査区全体で見られる表土もしくは水田耕作土である。暗褐色（10YR3/3）のシルトで、層厚15～30cmである。
- 2層：主に下萩沢遺跡北区と西区のほぼ全域で見られた旧表土である。黒褐色（10YR2/3）のシルトで、自然堆積層である。原田遺跡及び下萩沢遺跡の南区では部分的に薄く残存しているのみで



1 原田遺跡全景（南から）



2 下萩沢遺跡全景（西から）

図版2 原田遺跡・下萩沢遺跡の空中写真

- ある。層厚は残存状況が良好な下沢遺跡北区で10cmである。
- 3層：両遺跡のほぼ全域で見られる旧表土と黄褐色土の漸移層である。黒褐色（10YR2/3）シルトに褐色（10YR4/6）のシルトが混じる。層厚は10～20cmである。
- 4層：両遺跡のほぼ全域で見られるローム層である。黄褐色（10YR5/6）のしまりのない粘質シルトで、層厚は10～15cmである。
- 5層：両遺跡のほぼ全域で見られるローム層である。黄褐色（10YR5/6）のしまりのある粘質シルトで、層厚は10～15cmである。
- 6層：両遺跡のほぼ全域で見られるローム層である。黄褐色（10YR5/6）の粘土で、しまりのある粘土で、層厚は30～40cmである。
- 7層：両遺跡のほぼ全域で見られる砂礫層で、基盤と見られる。
- 遺構の確認面は4層で、以下4層を地山と呼ぶ。

## 第四章 発見した遺構と遺物

### I. 原田遺跡（第4図）

調査区は、市道で南北に分断されることから、南側を南区、北側を北区とした。また、南区は更に市道以西を南-1区とし、市道部分は北から南-2区、南-3区とした。遺構の分布状況を見ると、南区と北区の境になる市道付近には竪穴遺構や掘立柱建物跡などが集中し、南区西側では遺構分布は散漫となる。北区は竪穴住居跡や掘立柱建物跡などがいくつかのブロックを形成している。

検出した遺構は竪穴住居跡6軒、竪穴遺構6棟、掘立柱建物跡19棟以上、掘立柱跡2条、材木跡1条、井戸跡1基、焼成遺構4基、土壌34基、溝跡4条である。

遺物は奈良・平安時代の土師器や須恵器・石製品（砥石など）・金属製品（鉄鎌・小札・鉄鐔・刀子など）が出土している。また、遺構堆積土や遺構確認面から縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器が若干ではあるが出土している。

#### 1. 竪穴住居跡

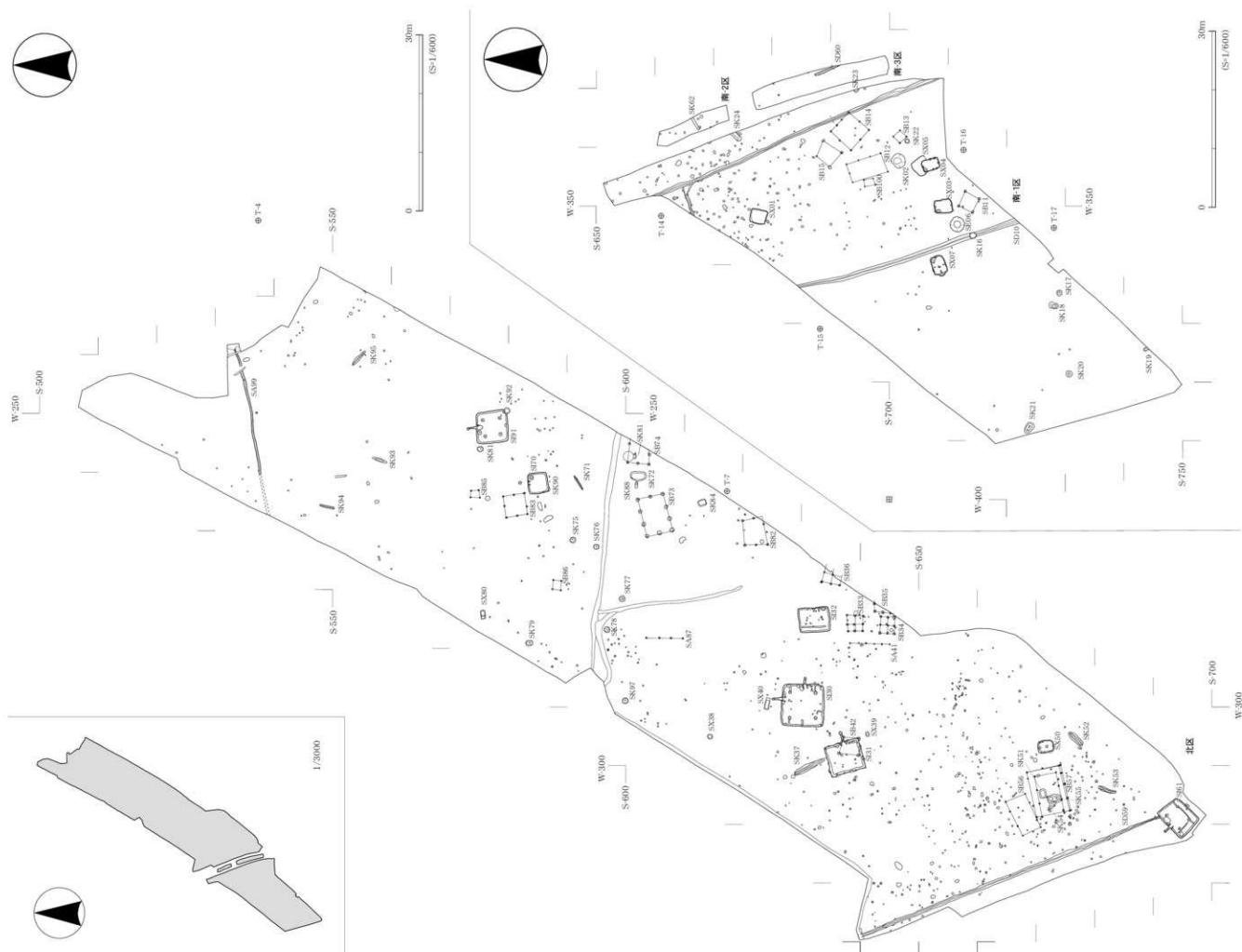
##### 【S130住居跡】（第5・6図、図版3～5）

北区南半部中央で検出した。床面に多量の炭化材・焼土ブロックの他に不規則な焼け面が認められることから、この住居は火災に遭っていると考えられる。カマドは北辺から東辺に造り替えられている。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈する。規模は東西が南辺で7.0m、南北が西辺で7.2mである。

〔方向〕 西辺のみと北で東へ約2度偏する。

〔壁〕 壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りのよい東壁で37cmである。古いカマドの煙道部分は土を埋め戻して壁としている。



第4図 原田遺跡確認位置図

[堆積土] 23層(1～20、28～30層)認められる。

住居内の堆積土は13層に細分される。1～4層が黒色・黒褐色シルト、5層が灰白色火山灰層、6・7層が焼土や炭化材を少量含む黒褐色シルト、10～12層が床面を覆う層で炭化材を多量に含む黒褐色土・暗褐色シルトで、火災時の屋根葺土の崩落土である。13層が暗赤褐色の焼土の大ブロックの屋根葺土の一部と考えられる。14層が炭化材、焼土、地山黄褐色シルト粒を含む暗赤褐色シルトで火災直後の堆積と考えられる。15層は地山粒、焼土を含む黒褐色土で、古いカマド煙道部の修復部分が住居使用時に自然崩落して堆積したものと考えられる。

カマド部分の堆積土としては、新しいカマドでは、8・9層が火災後の煙道部の自然堆積、16～19層が炭化物、地山粒、焼土を含む暗褐色シルト・にぶい暗赤褐色シルト・にぶい黄褐色シルトで、燃焼部・煙道部の崩落土、20層が炭化物や地山粒を含むカマド使用時の燃焼部の堆積土である。

古いカマド部分の堆積土としては、28層が焼土を含む煙道部崩落土、29・30層が地山粒、焼土を多量に含むカマド使用時の煙道部の堆積土である。

[床面] 床面はほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面としている。北東隅～旧カマド付近では、カマドを移し替えた後に白色粘土を含む粘質シルトで一部を貼床している。また、西辺付近では約4cm間隔の格子状の圧痕(敷物痕跡)が南北3.3m×東西1.8mの範囲で確認された(図版4-7)。

[柱穴] P1～P6、P12の7個の柱穴を検出した。

P1～P4は住居平面形の対角線上に位置している主柱穴である。柱穴の掘り方は住居掘り方埋土に覆われており、床面では柱痕跡だけが確認された。柱穴の平面形はP1、P3、P4が長径48～57cm、短径45～55cmの不整な円形を、P2が径54cmの不整な円形を呈する。深さは37～50cmである。柱痕跡はP1、P2が長径33～35cm、短径25～28cmの楕円形を呈し、P3、P4が径30～35cmの円形または不整な円形を呈する。

P5は南東隅、P6は南西隅の周溝及び壁材痕跡上面で検出した壁柱穴と考えられる小柱穴である。P5は長辺20cm、短辺18cmの不整な方形を、P6は径20cm前後の円形を呈する。深さはP5が19cm、P6が15cmである。柱痕跡は検出されなかった。

P12は南辺中央壁際から約65cm内部の床面で検出した柱穴である。平面形は長径22cm、短径17cmの楕円形を呈し、深さが45cmである。径20cmほどの円形の柱痕跡を確認しており、埋土は暗褐色のシルトである。柱痕跡は外へ傾いており、角度は床面から壁に向かって約62度である。位置などから住居の入り口施設に関連する可能性が考えられる。

[カマド] カマドは北辺から東辺へ造り替えられている。

古いカマドは北辺中央やや東寄りに付設されたものである。造り替えに際して燃焼部は取り払われたため、側壁基底部分の一部と底面の焼面が痕跡的に残存しているにすぎない。以上の痕跡から推測される古いカマドは、燃焼部側壁が白色粘土を含む褐色土で構築されていたと考えられ、燃焼部の焚き口が幅43cm、奥行75cmほどである。燃焼部底面はほぼ平坦で、残存側壁の先端部と底面は共に焼けて赤変している。また、燃焼部中央やや左寄り、側壁構築土と同じものを用いてマウンド状に高めた残痕を認めたが、支脚を据えた跡の可能性が考えられる。煙道部は長さ1.68mで、先端に向かって

緩やかに上向きに傾斜している。煙道と燃焼部の底面との間には7 cmほどの段差がある。煙出しピットは長径37 cm、短径28 cmの不整楕円形を呈し、深さ37 cmである。また、煙道部は埋め戻されているため、地下式か半地下式は不明である。

新しいカマドは東辺中央に付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は白色粘土を含むにぶい黄褐色の粘質シルトを積み上げ構築している。焚き口部両端は、芯材として、白色粘土を含むにぶい黄褐色土を充填した土師器の甕(第10図46・48)を逆さに据えて補強している。カマドの規模は燃焼部内壁の焚き口部で幅60 cm、奥壁で幅40 cm、奥行が90 cmである。燃焼部底面はほぼ平坦である。側壁・底面共に焼けて赤変している。燃焼部中央左寄りて褐色のシルトのマウンド状に高まりの上に、土師器の甕(第8図40)の底部と須恵器の高台坪(第7図17)を重ねたものを逆さに据え支脚としている。燃焼部と煙道部との間には10 cmほどの段差がある。煙道部は長さ1.65 mで、先端に向かって緩やかに上向きに傾斜している。煙出しピットは長径40 cm、短径30 cmの不整楕円形を呈し、深さ28 cmである。煙道部は堆積土に地山ブロックが認められないことから、半地下式であった可能性が考えられる。

〔貯蔵穴〕住居跡の隅、壁沿いやカマド近くで貯蔵穴(註1)を6個(P7、P8、P9～P11、P13)検出している。

P9は古いカマドの西側に、またP11・P10は東側に位置している。P9は長径65 cm、短径47 cmの不整な楕円形を呈し、深さは約15 cmである。断面形は逆台形状を呈し、底面は北西側に下向きに傾斜する。堆積土は1層が白色粘土や焼土、土器を含む黒褐色シルト、2層が地山粒、焼土粒を含む暗褐色シルトで、2層は自然堆積であるが、1層は埋め戻されている。東側のP11は長径35 cm以上、短径40 cmの楕円形を呈し、深さは13 cmである。土器や地山ブロックを多量に含む褐色のシルトで埋め戻されている。P10はP11と重複してこれより新しいもので、長径45 cm、短径30 cmの楕円形を呈し、深さは13 cmである。炭化物、地山粒、土器を含む黒褐色のシルトで埋め戻されている。これらの中で、P9とP11は古いカマドの除去後になされた貼床に覆われている。

北東隅で検出したP8は、長径58 cm、短径40 cmの楕円形を呈し、深さは15 cmほどである。堆積土は、1・2層が地山ブロック、焼土粒、炭化物を含む自然堆積で、3・4層は白色粘土ブロック、地山ブロック、焼土粒、炭化物、土器を含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

新しいカマドの北側のP7は、長軸45 cm、短軸42 cmの不整な方形を呈し、深さは15 cmである。堆積土は土器、炭化物、焼土を多量に含む黒褐色のシルトの自然堆積である。

P13は新しいカマドの側壁下で発見されたもので、長径76 cm、短径70 cmの不整な楕円形を呈し、深さは22 cmである。堆積土は1層が炭化物、灰を含む暗褐色シルトで、2層が炭化物と多量の地山ブロックを含む褐色シルトである。いずれも埋め戻されている。

これらの中で、P9とP11は古いカマドの除去後になされた貼床に覆われ、P13は新しいカマドの側壁下で検出されていることから、いずれも古いカマドが機能していた時の貯蔵穴である。特にP9はカマドとの位置関係から機能していたのは古いカマド廃絶直後から旧カマドを埋めて壁が作られまでの間と考えられる。また、P10は貼床には覆われていないが、焼土を含まない堆積土で埋め戻されて



第5図 S130住居跡





1 SI30住居跡 炭化材検出状況 (西から)



2 SI30住居跡 (西から)

図版3 SI30住居跡





1 新カマド断面（西から）



2 新カマド付近炭化材出土状況



3 新カマド断面



4 新カマド検出状況



5 新カマド検出状況



6 北辺炭化材検出状況



7 西辺炭化材出土状況及び敷物痕跡



8 土壌状濃褐色白色粘土と炭化材検出状況



1 北辺炭化材上端土検出状況



2 炭化した槽検出状況



3 新カマド南脇土器出土状況



4 新カマド前土器出土状況



5 鉄錘 (伊23) 出土状況



6 小丸出土状況（北から）



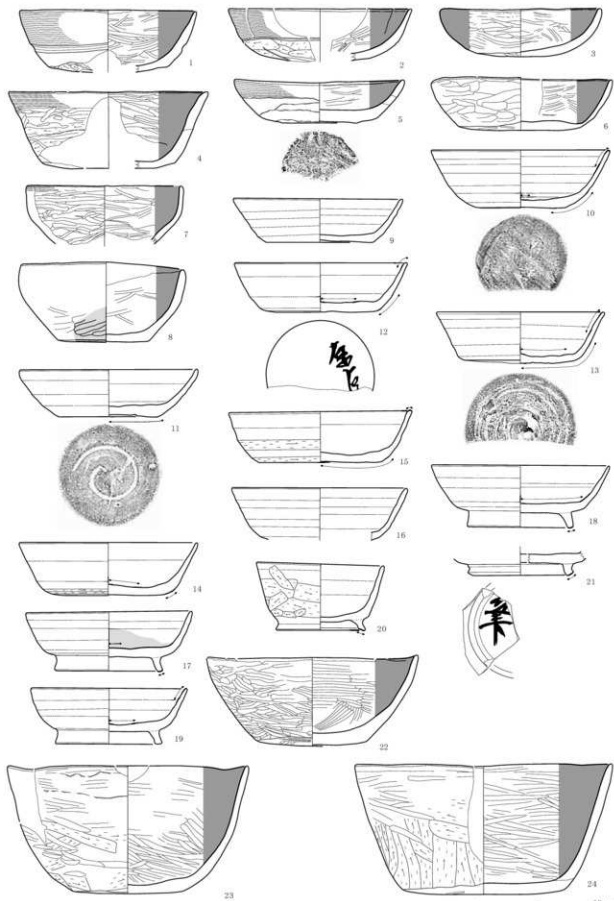
7 北西隅炭化植物繊維（副産）検出状況



8 西辺中央炭化竹材（敷物）

図版4 S30住居跡細部（1）

図版5 S30住居跡細部（2）

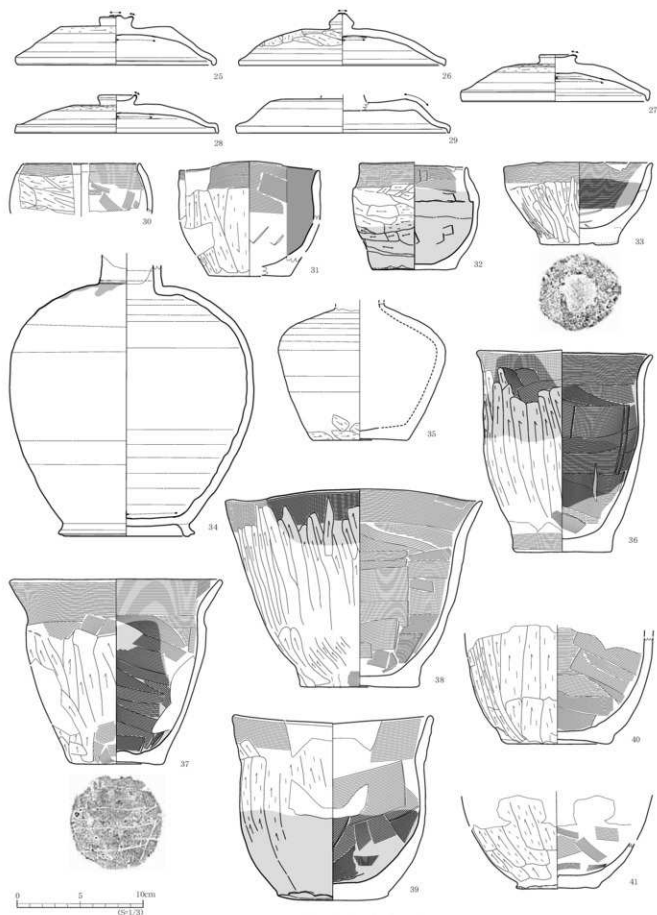


第7图 SI30住居跡出土遺物(1)



図版6 SI30住居跡出土遺物(1)

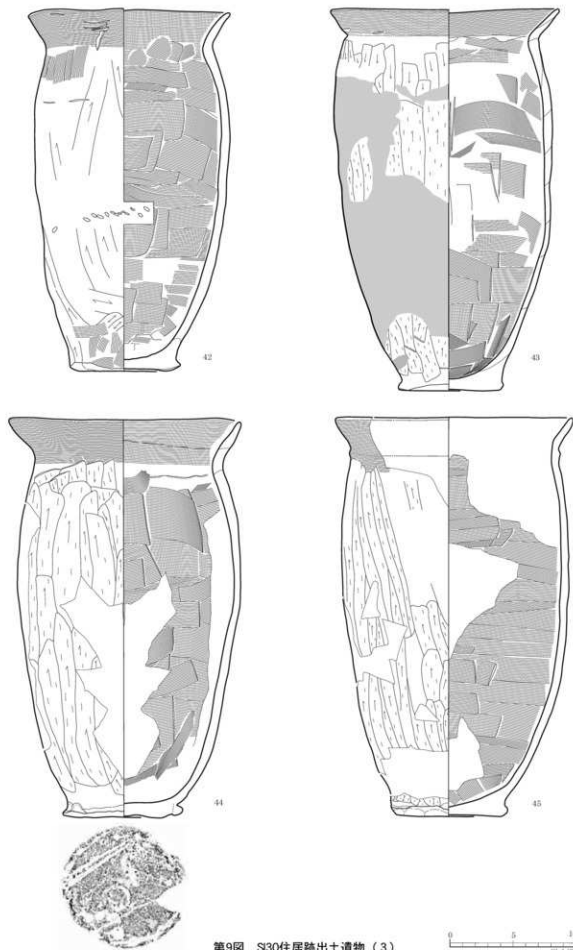
1~24: S=1/3 12破部: S=1/5



第8圖 S30住居跡出土遺物（2）



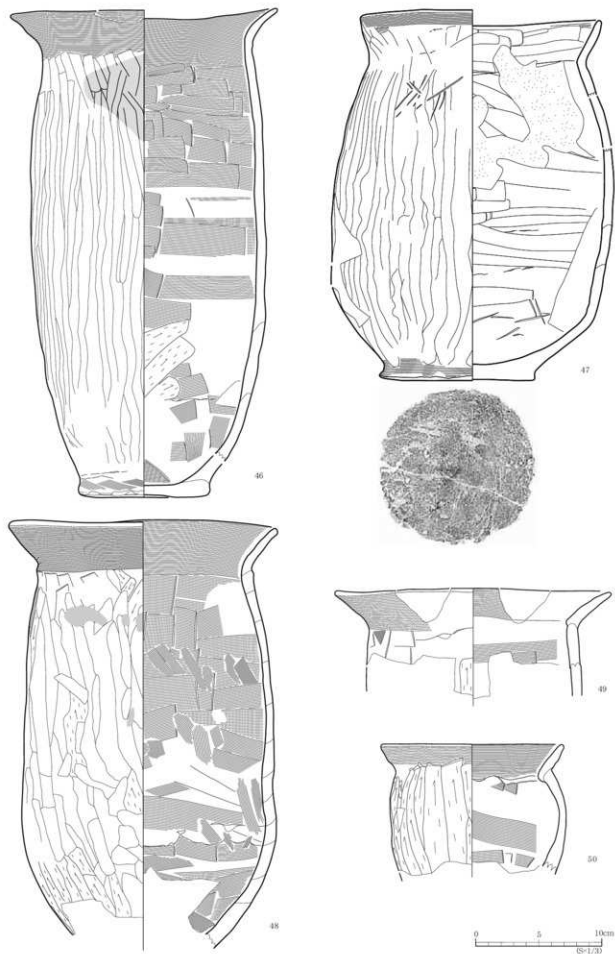
圖版 7 S30住居跡出土遺物（2）



第9圖 S130住居跡出土遺物(3)



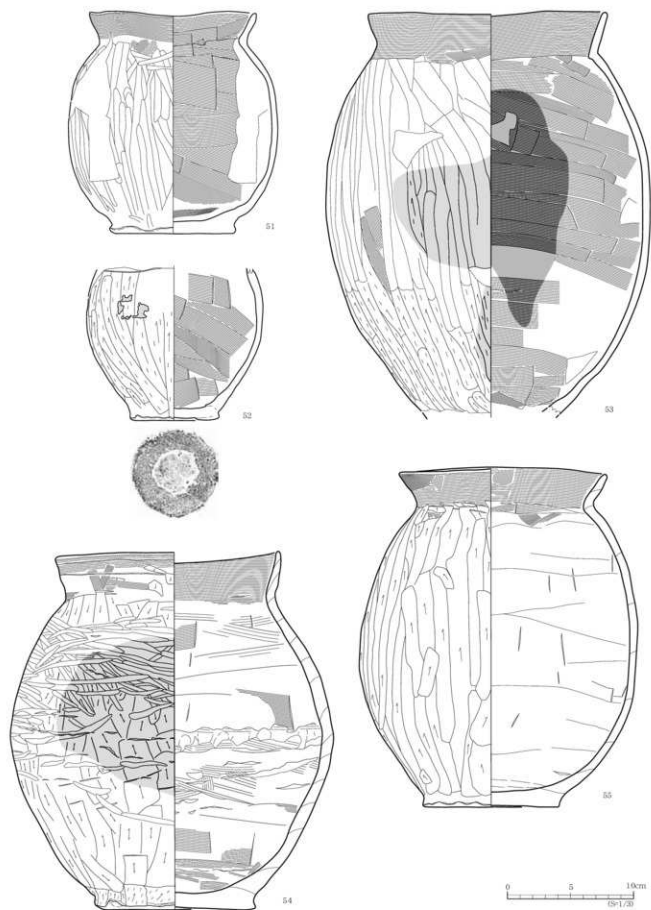
図版8 S130住居跡出土遺物(3)



第10圖 S130住居跡出土遺物（4）



図版9 S130住居跡出土遺物（4）

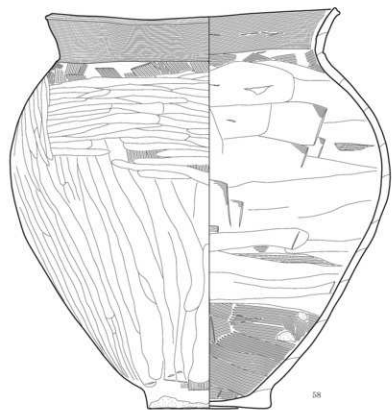
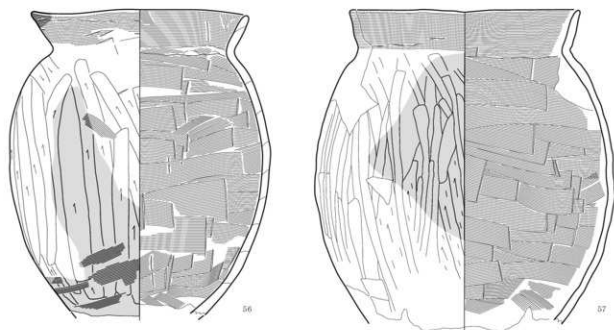


第11圖 S30住居跡出土遺物（5）

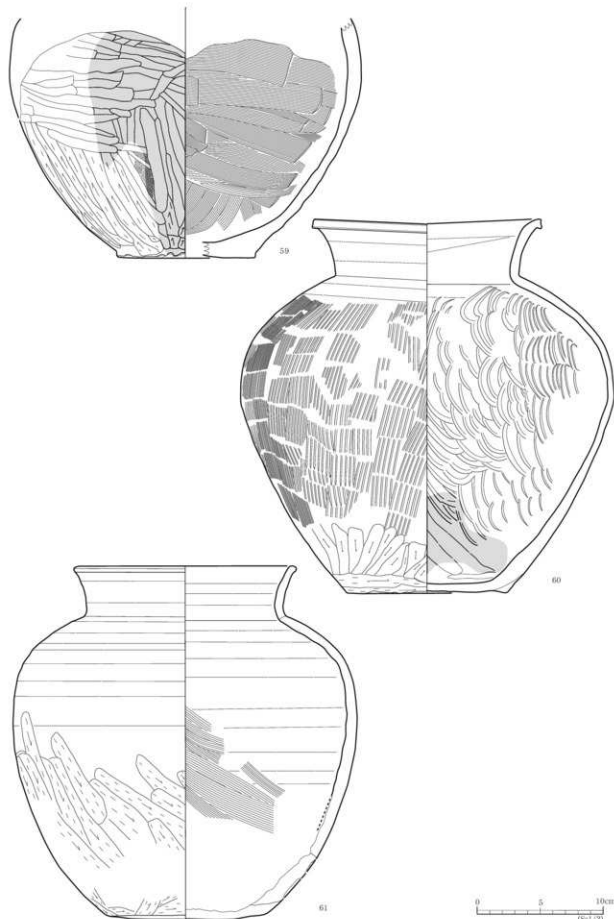


S1~S3・S5・S6 1.5・1/3

圖版10 S30住居跡出土遺物（5）



第12図 S30住居跡出土遺物 (6)



第13図 S30住居跡出土遺物 (7)



図版11 S30住居跡出土土遺物(6)

いることから古いカマドが機能していた時の貯蔵穴である可能性が考えられる。

一方 P7・P8 は、P7 がカマドとの位置関係から、また P8 の堆積土が焼土・炭化物などを多く含む自然堆積であることから、いずれも新しいカマドが機能していたものと考えられる。

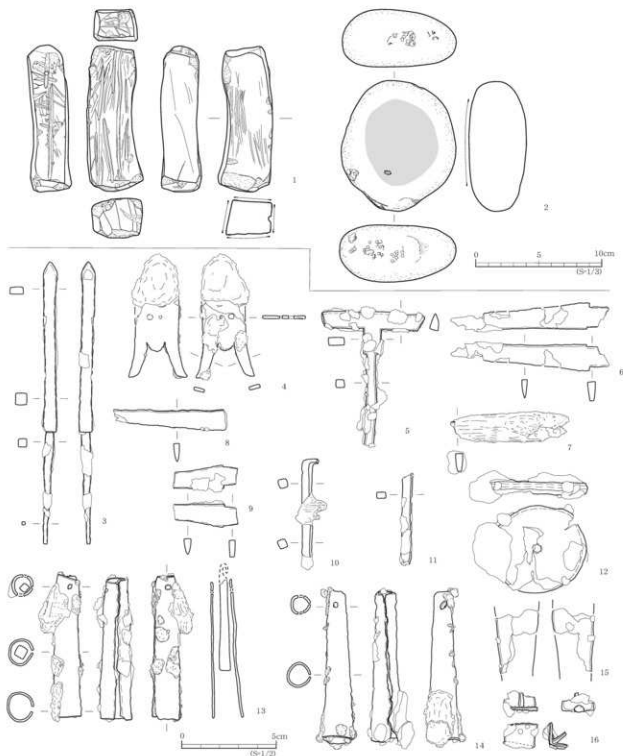
〔その他のビット〕 上記の貯蔵穴のほかに、新しいカマドの南側で小ビットを4個、古いカマドの南側で4個、合計8個の小ビットを検出している。新しいカマドの南側にあるビットをみると、P14は長径40cm、短径25cmの楕円形を呈し、P15～P17の平面形は径20～25cmの円形を呈する。いずれ

No.	図録	分類	形状	寸法	重量		特徴	備考		
					計量	測定				
1	上層部	灰	153	縦長土壇	14	111.1	149	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	818
2	上層部	灰	146	横長土壇	1.9	144.0	143	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	819
3	上層部	灰	142	縦長土壇	1.5	142.0	142	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	820
4	上層部	灰	136	横長土壇	1.4	135.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	821
5	上層部	灰	130	縦長土壇	1.2	131.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	822
6	上層部	灰	126	横長土壇	1.0	124.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	823
7	上層部	灰	120	縦長土壇	0.9	119.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	824
8	上層部	灰	116	横長土壇	0.8	113.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	825
9	中層部	灰	108	縦長土壇	0.7	107.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	826
10	中層部	灰	104	横長土壇	0.6	103.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	827
11	中層部	灰	100	縦長土壇	0.5	97.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	828
12	中層部	灰	96	横長土壇	0.4	93.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	829
13	中層部	灰	92	縦長土壇	0.3	89.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	830
14	中層部	灰	88	横長土壇	0.2	85.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	831
15	中層部	灰	84	縦長土壇	0.1	81.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	832
16	中層部	灰	80	横長土壇	0.0	77.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	833
17	中層部	灰	76	縦長土壇	0.0	73.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	834
18	中層部	灰	72	横長土壇	0.0	69.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	835
19	中層部	灰	68	縦長土壇	0.0	65.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	836
20	中層部	灰	64	横長土壇	0.0	61.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	837
21	中層部	灰	60	縦長土壇	0.0	57.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	838
22	中層部	灰	56	横長土壇	0.0	53.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	839
23	中層部	灰	52	縦長土壇	0.0	49.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	840
24	中層部	灰	48	横長土壇	0.0	45.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	841
25	中層部	灰	44	縦長土壇	0.0	41.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	842
26	中層部	灰	40	横長土壇	0.0	37.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	843
27	中層部	灰	36	縦長土壇	0.0	33.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	844
28	中層部	灰	32	横長土壇	0.0	29.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	845
29	中層部	灰	28	縦長土壇	0.0	25.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	846
30	中層部	灰	24	横長土壇	0.0	21.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	847
31	中層部	灰	20	縦長土壇	0.0	17.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	848
32	中層部	灰	16	横長土壇	0.0	13.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	849
33	中層部	灰	12	縦長土壇	0.0	9.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	850
34	中層部	灰	8	横長土壇	0.0	5.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	851
35	中層部	灰	4	縦長土壇	0.0	1.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	852
36	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	853
37	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	854
38	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	855
39	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	856
40	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	857
41	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	858
42	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	859
43	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	860
44	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	861
45	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	862
46	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	863
47	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	864
48	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	865
49	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	866
50	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	867
51	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	868
52	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	869
53	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	870
54	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	871
55	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	872
56	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	873
57	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	874
58	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	875
59	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	876
60	中層部	灰	0	横長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	877
61	中層部	灰	0	縦長土壇	0.0	0.0	141	灰・白土質土壇 二次焼成土壇	61	878

表1 表1 S30住居跡出土土遺物観察表

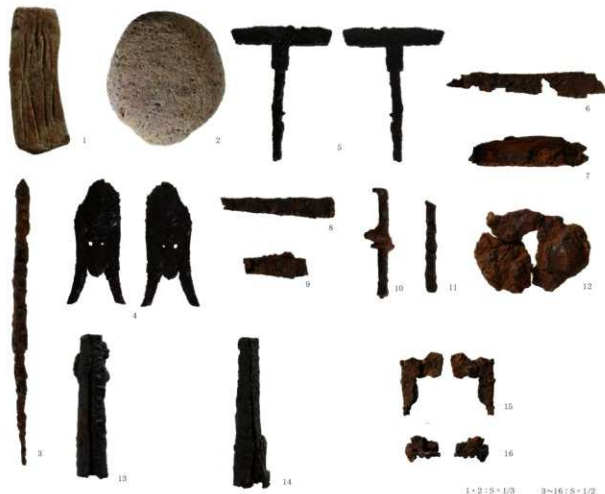
も深さは10cmほどである。一方、古いカマドの南側にあるビットをみると、P18は古いカマド機能時の焼け面を掘り込んでおり、平面形は長径33cm、短径30cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。堆積土は炭化物・焼土混じりの黒褐色シルトの自然堆積である。P19～21は平面形は径15～20cmの円形を呈し、深さは10cmほどで、いずれも炭化物混じりの黒褐色シルトの自然堆積である。古いカマドの南側に位置するこれらのビットは、堆積土に炭化物や焼土が入ることから火災前には機能しているとみられ、間仕切りなどに関連するビットの可能性もある。





第14図 SI30住居跡出土石製品・鉄製品

No.	種類	部位	寸法				材質	特徴	図番	
1	石製	鏃頭	長さ13.5cm	幅4.5cm	厚3.2cm	重29.6g	石製	鏃目	12① R43	
2	石製	鏃・鏃頭	長さ19.4cm	幅3.1cm	厚4.6cm	重47.9g	石製	鏃目	12② R43	
3	鉄製品	鏃	長さ13.5cm	幅2.2cm	厚3.6cm				12③ P55	
4	鉄製品	鏃	長さ13.5cm	幅2.2cm	厚4.4cm				12④ P57	
5	鉄製品	鏃	長さ11.7cm	幅2.1cm	厚3.9cm	重量約3.2cm			12⑤ P58	
6	鉄製品	釵子	長さ4.5cm	幅1.1cm	厚2.9cm				12⑥ P64	
7	鉄製品	刀中骨	長さ23.5cm	幅2.1cm	厚3.9cm	重量約1.0cm			12⑦ P56	
8	鉄製品	釵子	長さ6.5cm	幅1.2cm	厚2.9cm				12⑧ P57	
9	鉄製品	釵子	長さ5.5cm	幅1.2cm	厚3.4cm				12⑨ P57	
10	鉄製品	釵子	長さ5.5cm	幅1.2cm	厚3.1cm				12⑩ P59	
11	鉄製品	釵子	長さ4.5cm	幅1.2cm	厚3.2cm				12⑪ P57	
12	鉄製品	鐵劍	長さ40cm	幅4cm	厚0.6cm				12⑫ P25	
13	鉄製品	鐵劍	長さ24cm	幅3.5cm	厚0.6cm	重量約4.4cm	重量約4.4cm	重量約4.4cm	重量約4.4cm	12⑬ P24
14	鉄製品	鐵劍	長さ21cm	幅3.5cm	厚0.6cm				12⑭ P25	
15	鉄製品	鐵劍	長さ21cm	幅3.5cm	厚0.6cm				12⑮ P25	
16	鉄製品	鐵劍	長さ21cm	幅3.5cm	厚0.6cm				12⑯ P25	



図版12 SI30住居跡出土石製品・鉄製品

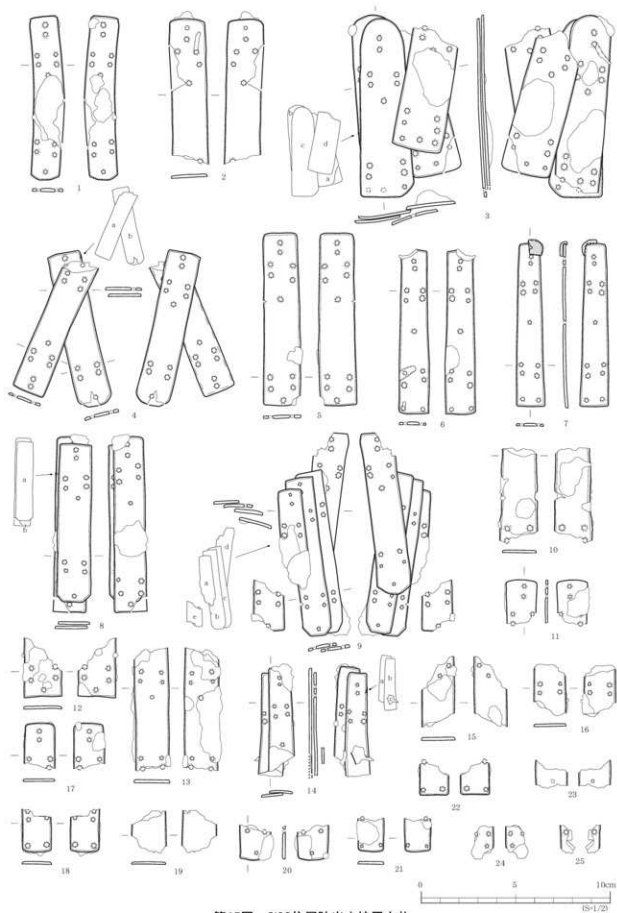
〔周溝・壁材痕跡〕古いカマドが付設されていた北辺中央部を除いて、全周する。上幅が22～34cm、深さが15～20cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む褐色のシルトで埋め戻されている。この周溝内の壁際に沿って幅4～10cm、深さ10～14cm暗褐色のシルトが断続的に認められた壁材の痕跡と考えられた。また、新しいカマド下では、長さ120cm、幅10cmの範囲に、深さ約20cmの壁材の抜き穴とみられる褐色シルトが認められた。

〔その他の溝〕周溝からほぼ直角に分岐する溝を東辺と西辺で各2条、南辺で1条発見している。

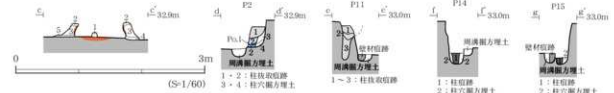
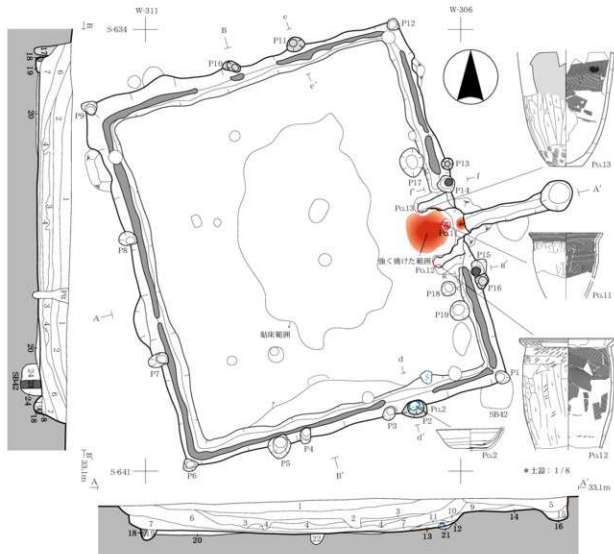
東辺の2条(M1・M3)と西辺の1条(M2)は主柱穴の柱へ取り付いている。長さ90～110cm、幅15～30cm、深さ12～20cmで、断面形はU字形をなす。堆積土は周溝と同様に暗褐色シルトで、その上面で幅5～10cmほどのしまりのない褐色のシルトが断続的に認められた。

南辺の周溝から分岐しているM4は、やや東寄りに傾いて北へ約70cm続き、そこでほぼ直角に西へ曲がって50cm続いて終わる。堆積土は周溝と同様に暗褐色シルトで、その上面でM1～M3と同様な幅5～10cmほどのしまりのない褐色のシルトが認められた。さて、この褐色のシルトであるが周溝の壁材痕跡と思われるものと一連のもので、M1～M4の痕跡も何かしらの材痕跡と考えられる。

以上のほかに西辺中央部で周溝から分岐しているM5は周溝と重複し、これより新しい。長さ95cm、幅18～28cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をなす。堆積土は地山ブロックを含むしまりのない暗褐色シルトである。M5は周溝より新しいがM1～M4同様の溝跡と思われる、褐色のシルトが



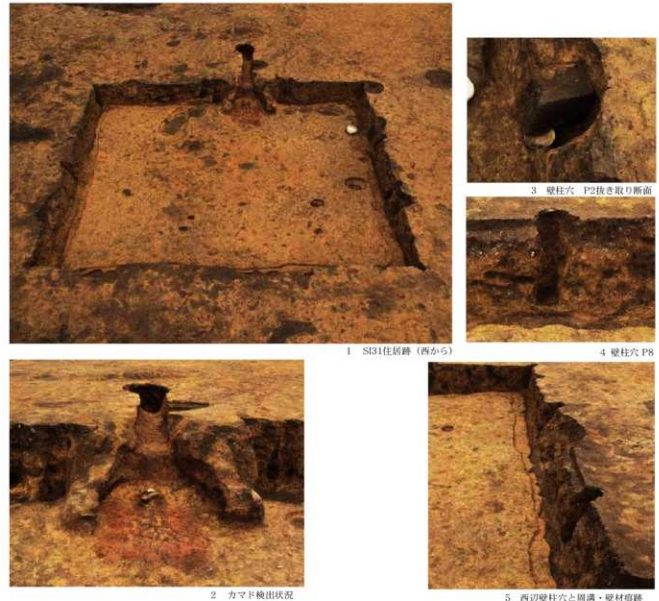




No.	土質・土性	層・人物など	備考	No.	土質・土性	層・人物など	備考
1	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む		12	黄褐色のV字状シルト	焼土を多量に、炭化物少量含む	カマド燃焼層の周溝
2	黒色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	自然層	13	黒褐色のV字状シルト	焼土を少量含む	壁材
3	白～黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	自然層	14	黒褐色のV字状シルト	焼土を少量含む	カマド燃焼層の周溝
4	灰白色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む		15	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
5	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	16	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
6	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	17	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
7	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	18	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
8	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	19	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
9	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	20	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
10	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	21	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
11	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	22	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
12	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	23	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝
13	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層	24	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を多量に含む	カマド燃焼層の周溝

No.	土質・土性	層・人物など	備考
1	灰白色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層
2	黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層
3	白～黒褐色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層
4	灰白色のV字状シルト	炭化物・焼土を挟み下層に含む	カマド燃焼層

第16図 S31住居跡



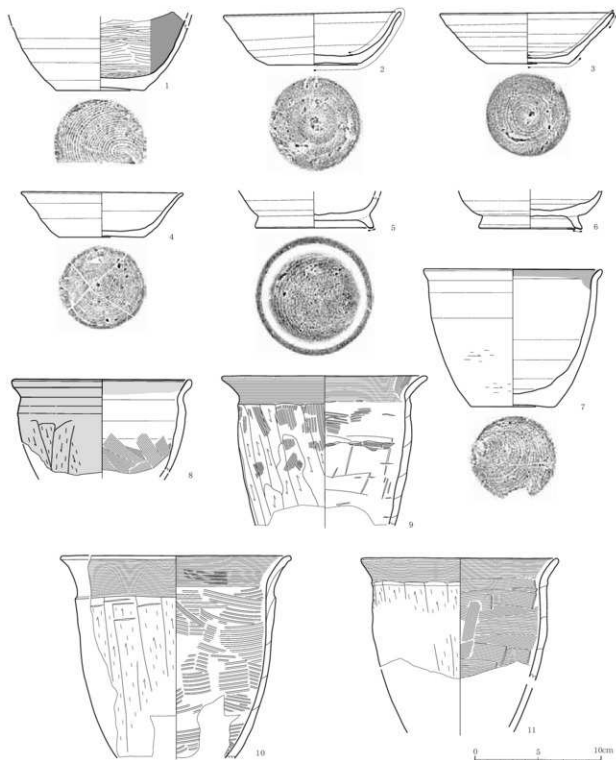
図版15 S31住居跡

は、5・9～11層が多量の焼土ブロック、焼土粒、炭化物を含む燃焼部と煙道部の崩落土、12～16層がカマド使用時の堆積層である。

〔床面〕ほぼ平坦である。中央部は地山面で、周辺部が黒褐色土ブロックを含む明黄褐色シルトで貼床されている。

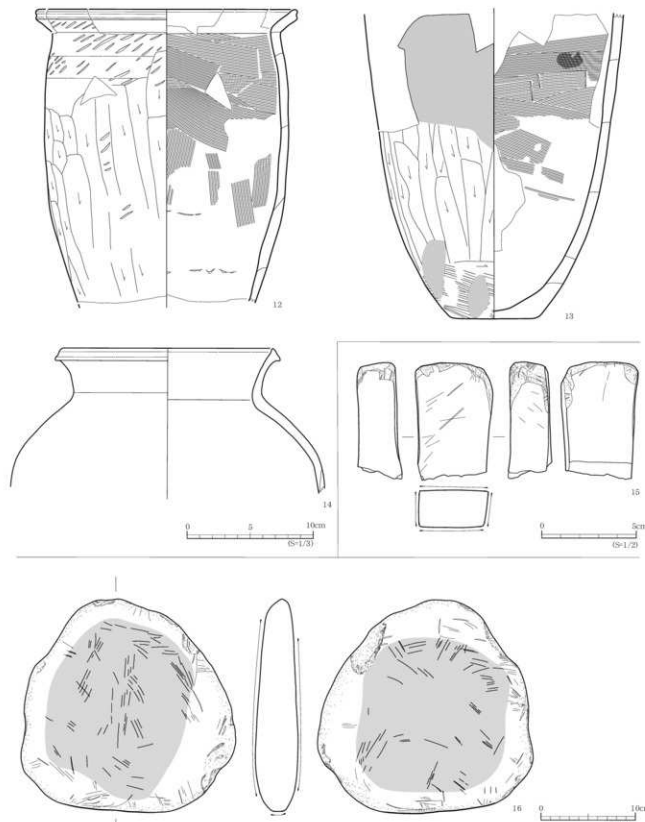
〔柱穴〕住居の四隅と各辺の壁で16個の壁柱穴を検出した(P1～P16)。柱穴の平面形は、P1～P12、P14、P16が長径20～42cm、短径16～28cmの楕円形や不整形の円形、P13が径19cmの円形、P15が一辺25cmの隅丸方形を呈する。各柱穴の深さは37～67cmである。柱痕跡はP14、P15で検出しており、径12～13cmの円形を呈する。

壁柱穴の配置を見ると、住居の四隅で各1個、北辺と西辺で各2個、東辺と南辺で各4個確認されている。西辺と北辺では、それぞれ2個の柱穴が一定の間隔で規則的に配置されている。一方、東辺のP13～P16については、カマド挟んだ南北のほぼ同位置に2個まとまって配されている。北側にはP13とP14が、また約1.5m離れたカマドの南側にはP15とP16がある。このうちP15



No.	器種	分類	期位	検出	経緯		特徴	図録	図録
					口徑	底径			
1	土製器	甕	中2層内層上	13	71	62	外：D70mm 底：H60mm(厚) 横線・内：ツギキキ一筋(底層) (二次焼成による表面とんがれ) 磨りほじり	16-10	8-13
2	土製器	甕	中2層内層上	13	141	72	内：D70mm 底：H60mm(厚) ツギキキ	16-10	8-13
3	土製器	甕	中2層	139	68	68	内：D70mm 底：H60mm(厚) ツギキキ	16-10	8-13
4	土製器	甕	中2層	132	129	68	内：D70mm 底：H60mm(厚) ツギキキ	16-10	8-13
5	土製器	甕	中2層	135	58	58	内：D70mm 底：H60mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
6	土製器	甕	中2層	135	92	103	内：D70mm 底：H60mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
7	土製器	甕	中2層	132	142	68	内：D70mm 底：H60mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
8	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
9	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
10	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
11	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13

第17図 S13住居跡出土遺物(1)



No.	器種	分類	期位	検出	経緯		特徴	図録	図録
					口徑	底径			
12	土製器	甕	中2層	140	100	100	外：(口縁部) 横線(口) ツギキキ 内：ツギキキ一筋(底層) (二次焼成による表面とんがれ) 磨りほじり	16-10	8-13
13	土製器	甕	中2層	140	100	100	外：(口縁部) 横線(口) ツギキキ 内：ツギキキ一筋(底層) (二次焼成による表面とんがれ) 磨りほじり	16-10	8-13
14	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
15	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13
16	土製器	甕	中2層	134	—	—	外：D70mm(厚) 横線(口) ツギキキ	16-10	8-13

第18図 S13住居跡出土遺物(2)



図版16 S131住居跡出土遺物

と P16 は重複 (P15 → P16) していることから、この部分では改修が行われていることがわかる。また、南辺でも東辺と同様に、柱穴が 2 個までまって南辺をほぼ 3 分割する位置に存在していることから、東辺同様、柱の位置を多少変更するような改修が行われた可能性がある。

【カマド】東辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は灰黄褐色土を含むにぶい黄褐色土で構築している。規模は燃焼部内壁で見ると、焚き口で幅 72 cm、奥壁で幅 47 cm で、奥行が 57 cm である。燃焼部焚き口部の両側は、芯材としてにぶい黄褐色土を充填した土師器甕 (第 18 図 12・13) を逆さに据えて補強されている。燃焼部底面はほぼ平坦で、側壁と共に焼けて亦変している。奥壁で約 25 cm 立ち上がり煙道底面へ続いている。白色粘土と土器片を用いて作り出した高まりに、土師器甕 (第 17 図 11) の上半部を据えて支脚としている。

煙道部は長さ 1.78m で、先端の煙出しピットに向かって緩やかに上向きに傾斜している。煙出しピットは径 50 cm 円形を呈し、深さ 40 cm である。また、煙道部は、地山ブロックが入らないことから半地下式の構造である可能性が考えられる。

【周溝・壁材痕跡】周溝は、カマドが付設されている東辺中央を除いて全周する。周溝の上幅 25 ~ 40 cm、深さ 7 ~ 15 cm で、断面形はやや開き気味の U 字形を呈する。地山ブロックを含む灰黄褐色のシルトで埋め戻されている。また、この周溝内の壁際に沿って、南東隅や南・北・西辺などの一部で途切れるが、幅 4 ~ 13 cm、深さ 10 cm 程の黒褐色のシルトが認められ、壁材痕跡と考えられる。

【その他の施設】カマド南北両側の側壁際で P17 ~ P19 を検出した。北側の P17 は長径 45 cm、短径 38 cm の楕円形を呈し、深さ 9 cm である。地山ブロックを含む灰黄褐色のシルトで埋め戻されている。南側の P18、P19 は、いずれも径 25 ~ 30 cm の円形を呈し、深さは 8 ~ 10 cm である。地山ブロック・炭化物を含む黒褐色のシルトで埋め戻されている。

【出土遺物】床面の遺物はなく、僅かに床直上から底部がへら切りの須恵器環 (第 17 図 2)、非ロクロ調整の土師器甕 (第 17 図 10)、磨石 (第 18 図 16) が出土しているのみである。カマド堆積土からロクロ調整の土師器環 (第 17 図 1)、非ロクロ調整の土師器甕 (第 17 図 9・10)、支脚に転用された甕 (第 17 図 11)、側壁芯材に転用されたロクロ調整で、へらケズリ調整後に底部周辺が叩き調整されている土師器甕 (第 18 図 12・13) などが出土している。また、堆積土 7 層からは底部切り離しがへら切りの須恵器環 (第 17 図 3)、同高台杯 (第 17 図 5)、ロクロ調整の土師器甕 (第 17 図 8)、須恵器甕 (第 18 図 14)、砥石 (第 18 図 15)、同 6 層からは底部が回転糸切りの須恵器環 (第 17 図 4)、同高台杯 (第 17 図 6)、ロクロ調整の土師器甕 (第 17 図 7) が出土している。

#### 【S132A・B 住居跡】 (第 19 図、図版 17)

北区中央部の東側で検出した。カマドが付設された東辺以外を拡張し、全体を建て替えている (S132A → S132B)。最初に新しい S132B について記載し、古い S132A については確実に把握できたことのみを記す。

#### 【S132B 住居跡】

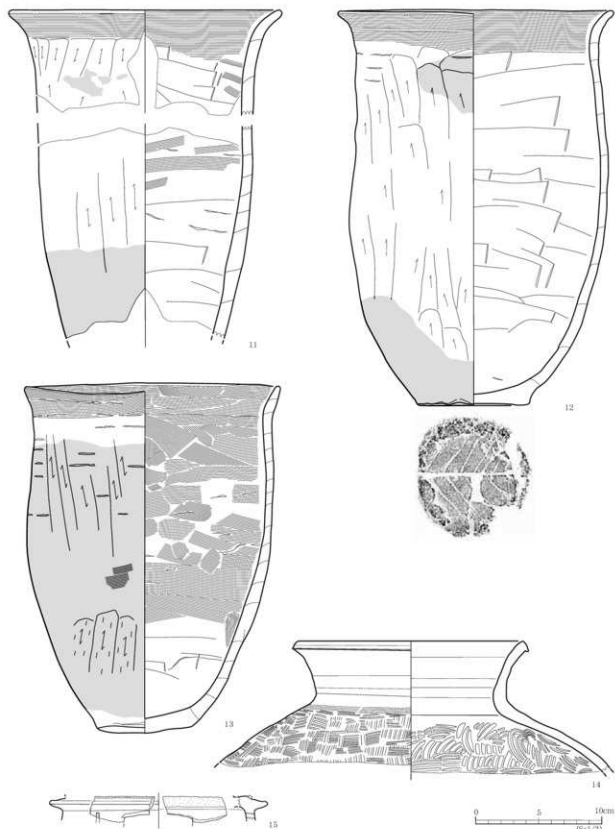
【平面形・規模】隅丸長方形を呈する。規模は東西が南辺で 4.2m、南北が西辺で 5.1m である。

【方向】東辺で見ると北で西へ約 4 度偏する。









No.	器種	分類	形状	部	法量	特 徴	図名	図号
11	土師器	壺	1C	全ツテ	12.0	黒、ヨコナデ一帯(ウズ) 胎土に粘土付着、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着	11	11.11
12	土師器	壺	1C	全ツテ	21.0	黒、胎土に粘土付着、ヨコナデ一帯(ウズ) 一帯に粘土付着、一帯に粘土付着、木製板一帯に粘土付着	12	12.2
13	土師器	壺	1C	全ツテ	20.0	黒、胎土に粘土付着、ヨコナデ一帯(ウズ) 一帯に粘土付着、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着	13	13.1
14	土師器	壺	1C	全ツテ	12.0	黒、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着	14	14.1
15	土師器	壺	1C	全ツテ	11.0	黒、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着、胎土に粘土付着	15	15.1

第21図 S32B住居跡出土遺物(2)



図版19 S32B住居跡出土遺物(2)

～15 cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む暗褐色のシルトで埋め戻されている。また、この周溝内の壁際に沿って北東隅や東辺の一部でまばらになるが、幅4～10 cm、深さ7～20 cmの壁材痕跡と考えられる黒褐色のシルトが認められた。

【出土遺物】床面からは須恵器の高台環(第20図5)、カマドの北側壁際に据えられた須恵器中甕(第21図14)、非クロロ調整の土師器鉢(第20図7)・甕(第20図10、第21図12)が出土している。床直上からは非クロロ調整の土師器甕(第20図9)が出土している。貯蔵穴からは非クロロ調整の土師

器环（第20図1）・椀（第20図6）・甕（第21図13）などが出土している。

カマド崩落土からは非ロクロ調整の土師器环（第20図3）・甕（第20図8、第21図11）などが出土している。また、堆積土3層からは非ロクロ調整の土師器环（第20図2）、須恵器环（第20図4）、須恵器円面硯の破片（第21図15）など出土している。

#### 〔SI32A 住居跡〕

〔平面形・規模〕長方形を基調としているものと考えられ、規模は東西約3.4m、南北が西辺で4.1m以上である。

〔方向〕SI32Bと同様に東辺でみると北で西へ約4度偏する。

〔床面〕SI32Bの中央部は、SI32Aの床面をそのまま利用していることから、掘り方埋土上面を床面としている。

〔柱穴〕住居長軸の中軸線上の2箇所です柱穴（P6・P7）を床面で検出した。柱穴の平面形は、P7が長径27cm、短径21mの楕円形、P8が径31cmの円形を呈する。深さはP7が32cm、P6が44cmである。いずれも柱痕跡は検出されなかった。

〔その他の柱穴〕SI32Bカマド両側壁下の壁際で、前述のSI32Bで検出したP3・P4と重複し、これらより古いP8・P9を検出した。P8の平面形は長径20cm、短径18cmの楕円形を呈し、深さは23cmである。P4の平面形は一辺が20cmの隅丸方形を呈し、深さは28cmである。いずれもかも径10cmの柱の抜き取り痕跡が認められた。これらの柱穴は、P3・P4とほぼ同じ位置にあり、P3・P4より古いことから、SI32Aに伴うP3・P4と同じ性格の柱穴と考えられる。したがって、住居のカマド部分は住居の拡幅時に改修されているとみられる。

〔カマド〕カマド本体は残存していないが、前述の柱穴P8・P9よりこの位置にカマドは付設されていたとみられ、SI32Bに伴うP3・P4より間隔が狭いことから、古い時期のカマドは新しい時期のカマドよりやや小さかったと推定される。

〔周溝〕西辺で長さ4.1mを確認できただけである。上幅15～25cm、深さ13cmで、断面形はU字形を呈する。地山粒を含む暗褐色のシルトで、埋め戻されている。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

#### 〔SI61A・B住居跡〕（第22図、図版20）

北区南東隅付近で検出した。カマドが付設された北辺以外を拡張している（SI61A→SI61B）。最初に新しいSI61Bについて記載し、古いSI61Aについては確実に把握したことをのみを記す。

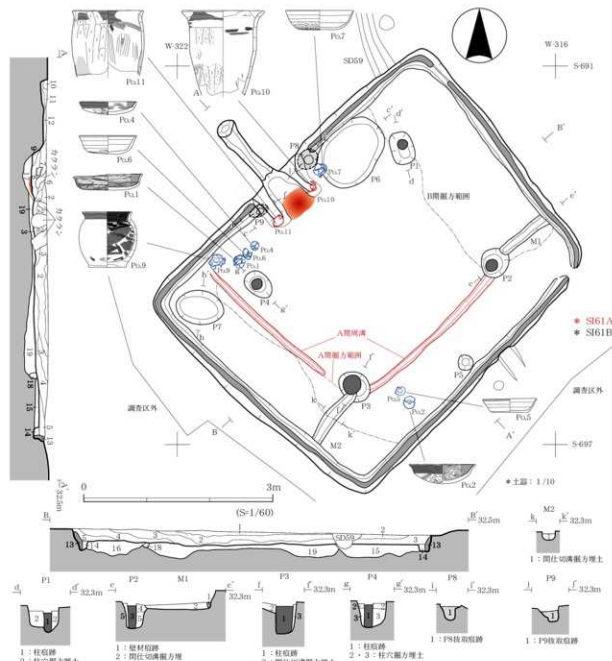
#### 〔SI61B住居跡〕

〔平面形・規模〕隅丸長方形を呈する。規模は東西が北辺で6.0m、南北が西辺で4.7mである。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約36度偏する。

〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りのよい北壁25cmである。

〔堆積土〕12層認められる。住居内の堆積土としては、1層が灰白色火山灰層で、2～5層が地山粒や焼土・炭化物を多量に含む壁崩落土などの自然堆積土である。カマド部分の堆積土としては、6～9層が焼土、炭化物、白色粘土などを多量に含むカマド燃焼部崩壊土、10～11層が焼土ブロック、



No.	土色・土性	層入物など	備考	No.	土色・土性	層入物など	備考
1	白褐色の砂状シルト	褐色の炭屑		11	褐色の砂状シルト	灰・焼土の付着層	壁崩壊土
2	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		12	褐色砂状シルト	褐色の炭屑	壁崩壊土の焼土
3	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		13	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
4	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		14	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
5	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		15	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
6	白褐色の砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		16	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
7	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		17	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
8	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		18	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
9	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む		19	白褐色の砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む	壁崩壊土
10	褐色砂状シルト	焼土・炭屑・焼土・焼土多量に含む					

No.	土色・土性	層入物など	備考
1	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	
2	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	
3	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	
4	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	
5	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	
6	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	
7	白褐色の砂状シルト	自然堆積土	

第22図 SI61A・B住居跡



1 SI61B住居跡 (南東から)



3 カマド左脇土器出土状況



4 主柱7P3と溝M2



2 カマド出土状況(南東から)



5 SI61A住居跡 (南東から)

図版20 SI61A・B住居跡

灰を多量に含むカマド煙道部崩落土、12層が炭化物、地山粒を多量に含むカマド使用時の煙道内の堆積である。

〔床面〕中央部はほぼ平坦で、拡張した周辺部がやや高く、掘方埋土上面を床面としている。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上の4箇所で見つかった主柱穴(P1～P4)を床面で検出した。平面形は、P1が長さ52cm、短辺36cmの隅丸長方形、P2～P4が長径50～54cm、短径35～45cmの不整形円形または楕円形を呈する。深さは42～52cmである。いずれの柱穴でも柱痕跡が認められ、径17～28cmの円形を呈する。

〔カマド〕北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は掘り方を伴い、側壁は白色粘土を含むにぶい黄褐色土で構築している。規模は、燃焼部内壁の焼き口で幅55cm、奥壁で幅33cm、奥行が80cmである。燃焼部焼き口部の両側は、芯材として白色粘土を含むにぶい黄褐色土を充填し

た土師器の甕(第23図10・11)を逆さに据えて補強している。燃焼部底面はほぼ平坦で、側壁下側・底面共に強く焼けて赤変・硬化している。燃焼部と煙道部との間には17cmの段差がある。煙道部は長さ1.15mで、先端に向かってやや下向きに傾斜している。煙出しピットは長径31cm、短径22cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。

〔溝・壁材痕跡〕カマドが付設されていた北辺中央を除いて、全周する。上幅15～30cm、深さ7～12cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む暗褐色のシルトで埋め戻されている。また、この溝内の壁際に沿って続く幅4～10cm、深さ8～25cmの暗褐色のシルトが認められ、壁材痕跡と考えられる。

〔その他の溝〕東辺と西辺の各周溝から直角に分岐して主柱穴P2とP3の柱に接続するM1・M2がある。M1とM2は幅がともに15～22cm、長さは、M1が85cm、M2が90cm、深さが約10cmである。堆積土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色のシルトで、埋め戻されている。材の痕跡は確認できなかった。

〔その他の施設〕南辺中央壁際(P5)に1個とカマド東側の壁際(P6)と住居北西隅(P7)で各1個検出した。P5は壁から約35cm離れており、平面形は径26cmの円形を呈する。深さは17cmほどである。堆積土は、地山混じりの暗褐色のシルトの自然堆積である。材の痕跡は確認できなかったが、位置などから住居の入り口施設に関連する可能性が考えられる。P6の平面形は長径118cm、短径87cmの楕円形を呈し、深さ8～13cmである。白色粘土ブロック、炭化物、焼土ブロックを含む褐色のシルトで、埋め戻されている。P7の平面形は長径76cm、短径53cmの楕円形を呈し、深さ19cmである。地山ブロック、地山粒、炭化物を含む暗褐色のシルトで埋め戻されている。

〔出土遺物〕床面からは非ロクロ調整の土師器杯(第23図1・2・4)・甕(第23図9)、須恵器杯(第23図5～7)が出土した。この他にカマド燃焼部焼き口の補強として利用された非ロクロ調整の土師器甕(第23図10・11)がある。また、堆積土からは非ロクロ調整の土師器杯(第23図3)、やや厚手で手捏ね須恵器鉢(第23図8)、用途不明の石製品(第23図12)などが出土している。

#### 〔SI61A住居跡〕

〔平面形・規模〕方形を基調としているものと考えられ、規模は東西3.6m以上、南北約3.7mである。

〔方向〕西辺でみると北で西へ約36度偏する。

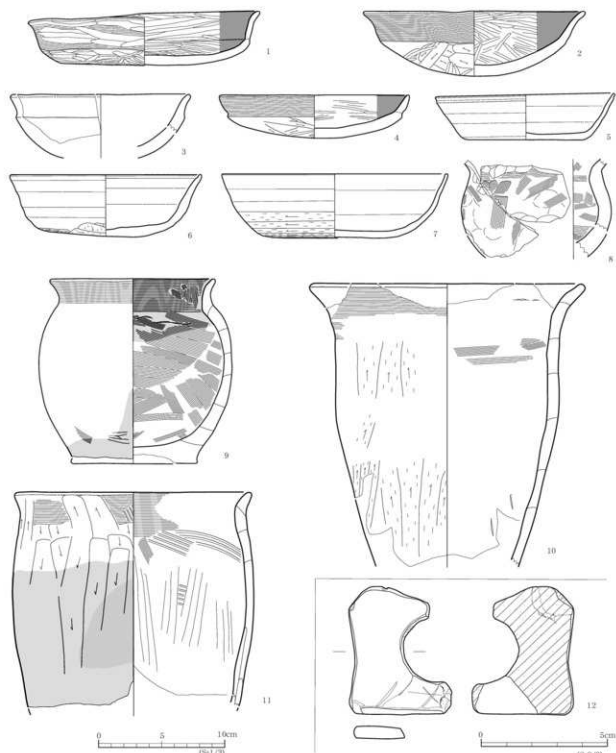
〔床面〕掘り方埋土上面を床面としている。

〔柱穴〕主柱穴は認められない。

〔その他の柱穴〕SI61Bのカマド西側壁下の2箇所で見つかったP8・P9柱穴を検出した。P8・P9は、平面形が長径32～35cm、短径18～30cmの楕円形を呈し、深さは25cmほどである。柱痕跡は確認できなかったが、これらは位置からカマド部分の住居の壁構築に関連する柱穴と考えられる。

〔カマド〕カマド本体は残存していないが、P8・P9の存在から、SI61Bと同様の位置に付設されていたと考えられる。

〔溝・壁材痕跡〕西辺で長さ2.4m、南辺で、両端部をSI61Bの主柱穴P2、P3で壊されるが、長さ約2.5m検出している。上幅8～15cm、深さ8～13cmで、断面形はU字形を呈する。地山粒を含む



No.	器種	分類	形状	口径	底径	高さ	特徴	図番	備考	
										11図
1	土師器	鉢	丸底	18.5	—	3.0	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	211	表1
2	土師器	鉢	丸底	20.0	—	3.1	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	212	表2
3	土師器	鉢	丸底	14.0	—	1.6	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	213	表3
4	土師器	鉢	丸底	18.0	—	3.4	赤 (口) 3コマナギ 赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	214	表4
5	土師器	鉢	丸底	18.4	—	3.7	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	215	表5
6	土師器	鉢	丸底	21.8	—	3.9	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	216	表6
7	土師器	鉢	丸底	14.0	—	3.1	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	217	表7
8	土師器	鉢	丸底	13.0	—	1.2	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	218	表8
9	土師器	鉢	丸底	13.0	—	1.2	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	219	表9
10	土師器	鉢	丸底	13.0	—	1.2	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	220	表10
11	土師器	鉢	丸底	13.0	—	1.2	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	221	表11
12	土師器	鉢	丸底	13.0	—	1.2	赤・黒・緑 3コマナギヘラミナリ(底)	西1ヘラミナリ→彩色器用 輪・縁	222	表12

第23図 S16B住居跡出土遺物



図版21 S16B住居跡出土遺物

暗褐色のシルトで埋め戻されている。また、この周溝内で壁材痕跡は確認できなかった。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

【S170住居跡】(第24・25図、図版22)

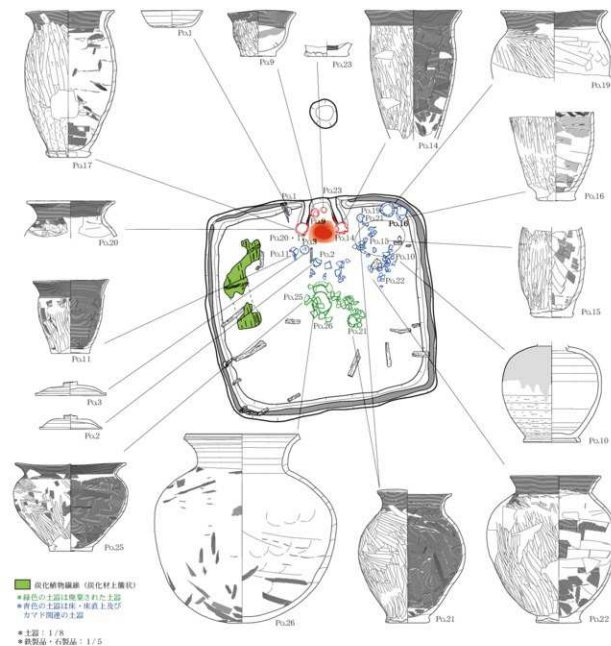
北区北半部の東側で検出した。SK90 土壌と重複し、これより新しい。堆積土や床面から炭化材、焼土ブロックなどが多量に検出されることから、この住居は火災に遭っていると考えられる。また、火災後にやや多くの土器が廃棄されている。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈する。規模は、東西が北辺で3.4 m、南北が西辺で3.3 mである。

〔方向〕 東辺でみると北で西へ約5度偏する。

〔壁〕 壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りのよい西壁で27 cmである。

〔堆積土〕 10層認められた。住居内の堆積土としては、1層が灰白色火山灰を含む灰黄褐色シルト、2層が炭化物、廃棄された土器を多量に含む黒褐色シルト、3層が炭化物、焼土、地山ブロックを含む



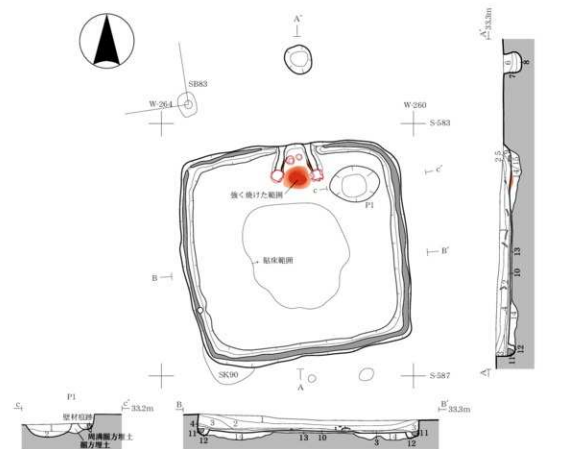
第25図 S170住居跡遺物及び炭化材出土状況

暗褐色シルトで、いずれも自然堆積である。4層は火災で生じた炭化物の薄い堆積層である。10層は住居が機能していた時の自然堆積である。カマド部分の堆積土としては、5層が地山ブロック、焼土を含む黒褐色シルトのカマド燃焼部崩壊土、9層が焼土を含むいぶい黄褐色シルトのカマド燃焼部の自然堆積土、6～8層が煙出しピット内の自然堆積である。

〔床面〕 ほぼ平坦で、周辺は掘方埋土上面を床面とし、中央部は貼床している。

〔柱穴〕 主柱穴、壁柱穴は認められない。

〔カマド〕 北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなるが、煙道部は後世の削平で完全に失われており、煙出しピットが残存しているだけである。燃焼部の側壁は黄褐色土で構築している。カマド



第24図 S170住居跡

No.	土色・土質	層人物など	備考
1	黄褐色の砂状シルト	焼土の付着したロケット多量に含む	自然堆積
2	いぶい黄褐色のシルト	焼土の付着したロケット多量に含む	自然堆積
3	灰白色のシルト	火山灰を含む	自然堆積
4	黒褐色のシルト	炭化物を含む	自然堆積
5	黒褐色のシルト	炭化物を含む	自然堆積
6	黒褐色のシルト	炭化物を含む	自然堆積
7	黒褐色のシルト	炭化物を含む	自然堆積
8	黒褐色のシルト	炭化物を含む	自然堆積

の規模は、燃焼部内壁の焚き口で幅 40 cm、奥壁で幅 25 cm、奥行 60 cm である。焚き口部の両側は、芯材として黄褐色土を充填した土師器甕（第 27 図 14・17）を逆さに据えて補強している。側壁・底面共に焼けて赤変している。燃焼部底面はやや浅く窪み奥壁に向かってやや下向きに傾斜している。支脚として燃焼部中央の右寄りに土師器甕の底部（第 28 図 23）、左側壁寄りに土師器鉢（第 26 図 9）を共に逆さに据えている。燃焼部と煙道部との間には約 10 cm の段差がある。煙出しピットは長径 45 cm、短径 42 cm の不整な楕円形を呈し、深さ 28 cm である。煙道部の長さは煙出しピットの位置から推定すると約 1.6m と考えられる。

[周溝・壁材痕跡] カマドが付設されていた北辺中央を除いて全周する。上幅 13～37 cm、深さ 6～12 cm で、断面形は U 字形を呈する。地山ブロックを含むいぶい黄褐色のシルトで埋め戻されている。また、この周溝内の壁際に沿って幅 4～12 cm、深さ 5～10 cm の暗褐色シルトが認められた。北西隅で一旦途切れるが、壁材の痕跡と考えられる。

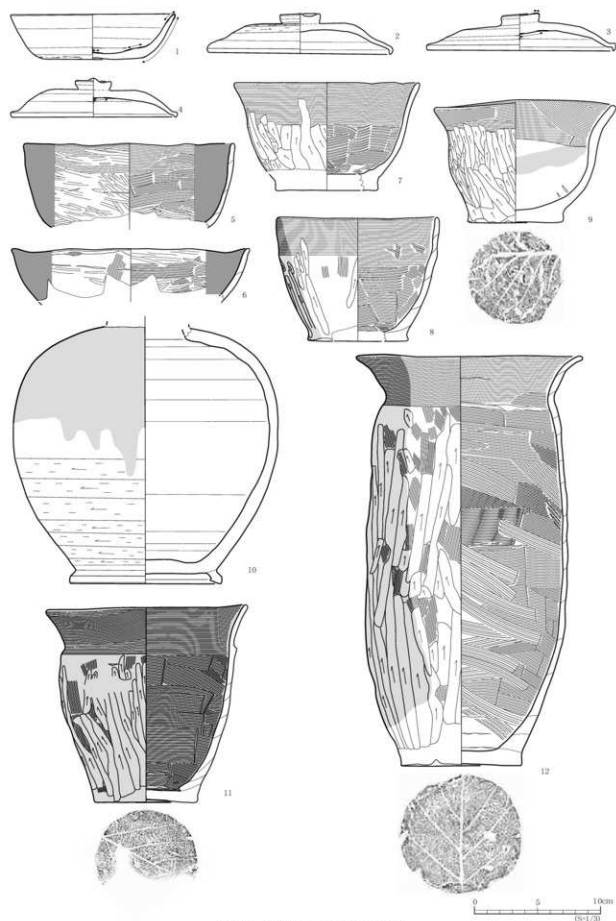


1 S170住居跡炭化材・土器出土状況 4 カマド右脇貯蔵穴断面



2 S170住居跡（南から） 3 カマド焼出状況

図版22 S170住居跡



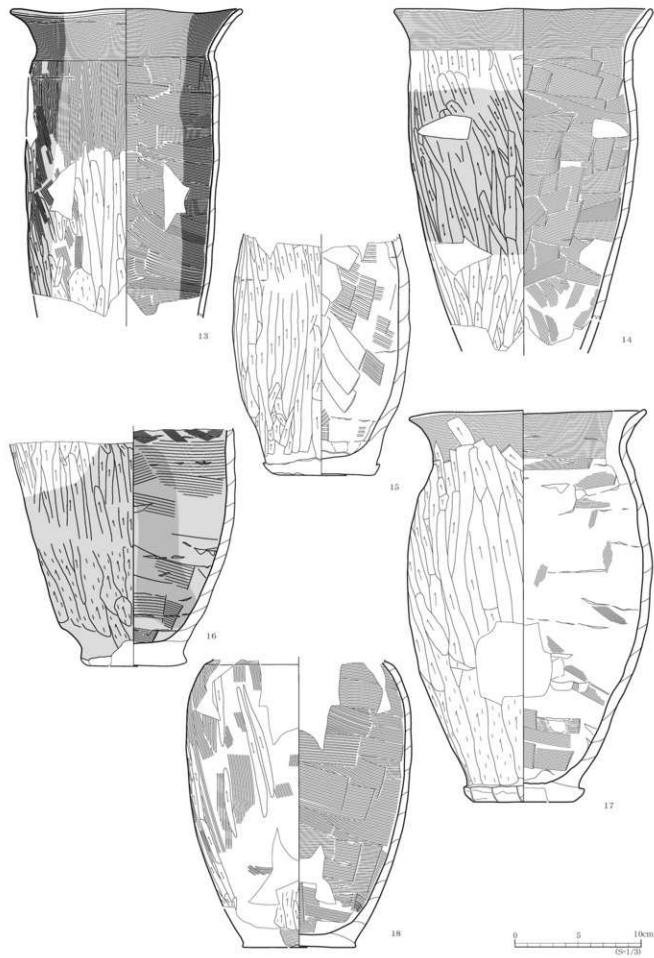
第26図 S170住居跡出土遺物（1）



図版23 S170住居跡出土遺物（1）

〔その他の施設〕カマド東側の北東隅で1個（P1）検出した。平面形は長径80cm、短径57cmの楕円形を呈し、深さ20cmである。地山ブロック、白色粘土ブロックを含むいびい黄褐色のシルトで埋め戻されている。

〔出土遺物〕床面から非ロクロ調整の土師器甕（第26図11、第27図15、第28図19・20・21・22）、須恵器壺（第26図10）の他、鉄釘（第30図1・2）・鉄鏃（第30図3）・不明鉄製品（第30図4）が

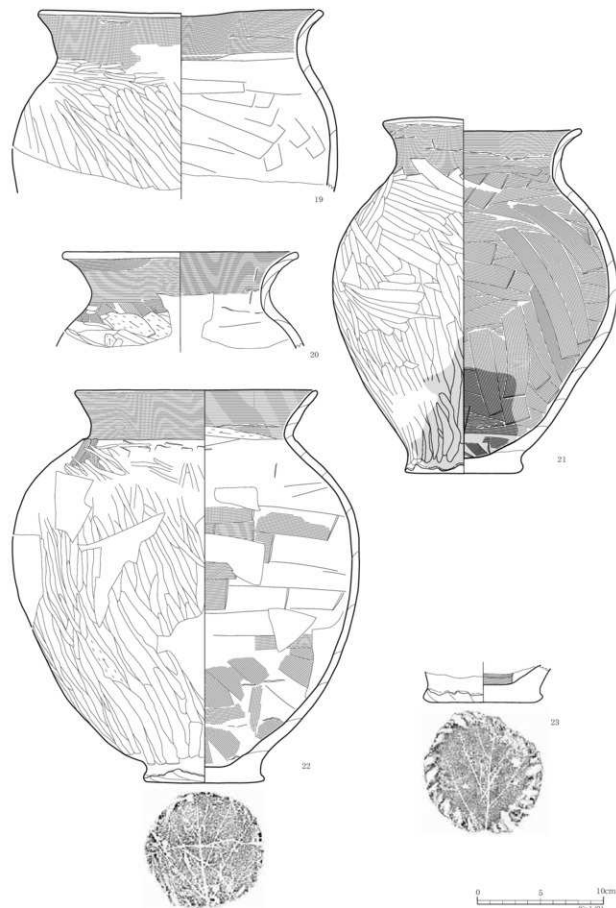


第27図 S170住居跡出土遺物（2）



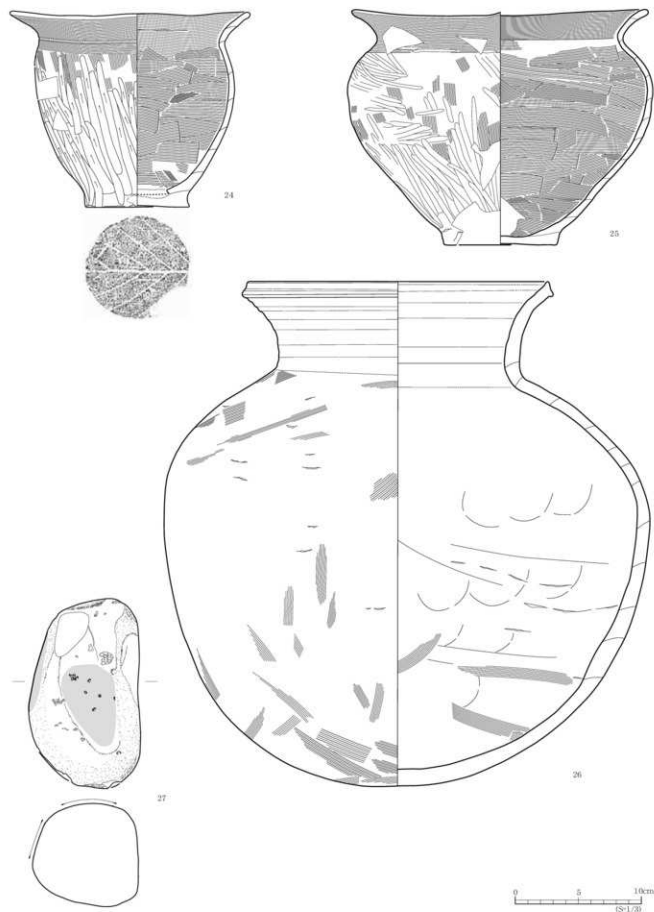
圖版24 S170住居跡出土遺物（2）

12~14, 17: S=1/3  
14口縁部: S=任意



第28圖 S170住居跡出土遺物（3）





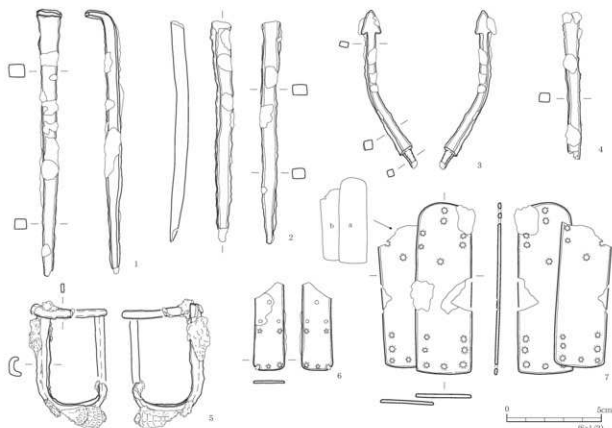
第29圖 S170住居跡出土遺物（4）



21. 22. 24. 25 : S-1/4  
26 : S-1/5  
27 : S-1/2



図版25 S170住居跡出土遺物（3）



図版26 S70住居跡出土金属製品

1~7: 1/2

No.	種類	部位	形状	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出所	図番	図尺
1	針	全長	直線	約14.1cm	約1.5cm	約0.2cm					26:1	2/3
2	針	全長	直線	約11.7cm	約0.8cm	約0.2cm					26:2	2/6
3	針	全長	直線	約8.0cm	約0.5cm	約0.2cm					26:3	2/4
4	針	全長	直線	約5.0cm	約0.3cm	約0.2cm					26:4	2/2
5	針	全長	直線	約4.0cm	約0.2cm	約0.2cm					26:5	2/2
6	板	全長	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm					26:6	2/2
7	板	全長	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm					26:7	2/2

第30図 S70住居跡出土金属製品

No.	図番	分類	部位	形状	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出所	図尺
1	13	土器	甕	直線	約14.1cm	約1.5cm	約0.2cm				26:1	2/3
2	14	土器	甕	直線	約11.7cm	約0.8cm	約0.2cm				26:2	2/6
3	15	土器	甕	直線	約8.0cm	約0.5cm	約0.2cm				26:3	2/4
4	16	土器	甕	直線	約5.0cm	約0.3cm	約0.2cm				26:4	2/2
5	17	土器	甕	直線	約4.0cm	約0.2cm	約0.2cm				26:5	2/2
6	18	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:6	2/2
7	19	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:7	2/2
8	20	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:8	2/2
9	21	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:9	2/2
10	22	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:10	2/2
11	23	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:11	2/2
12	24	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:12	2/2
13	25	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:13	2/2
14	26	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:14	2/2
15	27	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:15	2/2
16	28	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:16	2/2
17	29	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:17	2/2
18	30	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:18	2/2
19	31	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:19	2/2
20	32	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:20	2/2
21	33	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:21	2/2
22	34	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:22	2/2
23	35	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:23	2/2
24	36	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:24	2/2
25	37	土器	甕	直線	約11.0cm	約10.0cm	約0.5cm				26:25	2/2

第3表 S70住居跡出土遺物観察表



図版27 S70住居跡出土遺物

出土している。

床面直上からは非ロクロ調整の土師器鉢（第26図5・8）・甕（第27図16、第29図24）、須恵器杯（第26図1）・蓋（第26図3・4）、鉄製小札（第30図7）が出土している。

カマドからは支脚として利用された非ロクロ調整の土師器鉢・甕（第26図9、第28図23）、焚き口部の芯材として使用された土師器甕（第27図14・17）が出土している。

堆積土の2層からは非ロクロ調整の土師器鉢（第26図6・7）・甕（第26図12、第27図13・18、第29図25）、須恵器蓋（第26図2）・甕（第29図26）、鉄製小札（第30図6）、精尻金具（第30図5）などがまとめて出土している。

### 【SI91住居跡】（第31図、図版28）

北区北半部の東側で検出した。SK92・96土壌と重複し、SK96より新しく、SK92より古い。カマドの改修途中で構築後すぐに廃絶し、埋め戻された可能性がある。

〔平面形・規模〕ほぼ隅丸正方形を呈する。規模は東西は北辺で5.2m、南北は西辺で5.3mである。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約10度偏する。

〔壁〕壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りの良い西壁で32cmである。

〔堆積土〕9層認められた。住居内の堆積土としては1～4層・13層があり、1層が地山粒、炭化物を含む黒褐色シルト、2層が地山ブロック、黒褐色シルト、焼土、炭化物を含むいぶい黄褐色シルト、3層が地山粒を多量に含む暗褐色シルト、4層が壁際堆積した地山ブロックを含む黒褐色シルト、13層が砂を含む灰黄褐色シルトである。このうち、13層が住居が機能していた時の堆積、1・3・4層が廃絶後の自然堆積であるが、2層は埋め戻された可能性が考えられるものである。カマド部分の堆積土としては、5層がカマド燃焼部の崩落土、6・7層が煙道部の崩落土である。8層はカマドが使用されていた時に堆積した多量の焼土ブロック、灰、炭化物、粘土ブロックを含む暗褐色シルトである。

〔床面〕ほぼ平坦で、周辺部は掘方埋土上面を床面とし、中央部は貼床している。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上の4箇所の床面で支柱穴（P1～P4）を検出した。いずれも柱痕跡が認められる。柱穴の平面形はP1、P3、P4が長径54～63cm、短径54～56cmの不整な円形を呈し、P2は長径55cm、短径45cmの隅丸方形を呈する。深さは30～35cmである。柱痕跡は径20～22cmの円形を呈する。

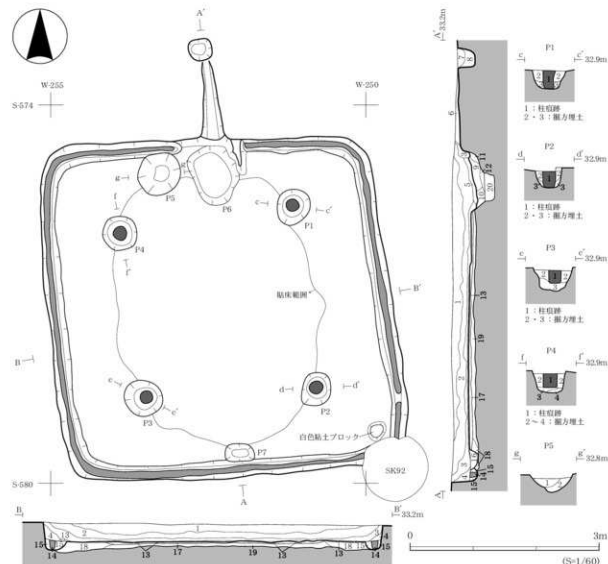
〔カマド〕北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなり、一度改修されている。

改修されたカマドは、平面形が長軸95cm、短軸70cmの不整な方形をなし、深さが20cmほどの掘り方（P6）を伴い、側壁は白色粘土を含むいぶい黄褐色土で構築されている。規模は、西側の側壁が残存していないが、東西約70cm、南北90cm前後と推定される。燃焼部底面には焼面が認められず、直接灰白色粘土の固まりが乗っていた。このことから新しいカマドは構築途中で廃棄されたかあるいは構築後すぐに壊れてしまったと考えられる。燃焼部と煙道部との間には15cmの段差がある。煙道部は長さ1.6mで、先端に向かってやや左上向きに傾斜している。煙出しピットは北辺35cmの隅方形を呈し、深さ27cmである。

〔貯蔵穴〕カマド西側の壁際に貯蔵穴を1個（P5）検出している。平面形は径65cmの円形を呈し、

深さ27cmである。堆積土は1層で、地山小ブロック、炭化物、焼土を含むいぶい黄褐色のシルトの自然堆積である。

〔周溝・壁材痕跡〕カマドが付設されていた北辺中央を除いて全周する。上幅18～31cm、深さ10～12cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む黄褐色のシルトで埋め戻されている。また、この周溝内の壁際に沿って幅4～8cm、深さ10～12cmの壁材痕跡と考えられる黒色のシルトが



No.	土色・土質	層入物など	備考	No.	土色・土質	層入物など	備考
1	黒褐色の河川堆積シルト	細砂・細石・鉄製小札・焼土・炭化物	自然堆積	11	黄褐色の河川堆積シルト	炭化物・焼土・鉄製小札、焼土・河川小石	自然堆積土
2	灰色の河川堆積シルト	粘土・粘土塊・鉄製小札・鉄製小札	人為堆積	12	褐色の河川堆積シルト	粘土を含む	自然堆積土
3	黄褐色の河川堆積シルト	地山粒を多量含む	自然堆積	13	黄褐色の河川堆積シルト	砂を含む	自然堆積
4	黄褐色の河川堆積シルト	焼土ブロック・焼土を含む	自然堆積	14	黄褐色の河川堆積シルト	焼土を含む	自然堆積
5	灰白色の河川堆積シルト	焼土・河川小石・鉄製小札・鉄製小札	カマド燃焼部崩落土	15	黄褐色の河川堆積シルト	焼土を含む	自然堆積
6	黄褐色の河川堆積シルト	炭化物・焼土を含む	カマド煙道部崩落土	16	灰色の河川堆積シルト	粘土を含む	自然堆積
7	黄褐色の河川堆積シルト	炭化物・灰・焼土を含む	カマド煙道部崩落土	17	黄褐色の河川堆積シルト	焼土を含む	自然堆積
8	黄褐色の河川堆積シルト	焼土ブロックを多量含む	カマド燃焼部崩落土	18	黄褐色の河川堆積シルト	焼土ブロックを含む	自然堆積
9	黄褐色の河川堆積シルト	鉄製小札・鉄製小札・鉄製小札	自然堆積	19	いぶい黄褐色の河川堆積シルト	焼土ブロックを含む	自然堆積
10	黄褐色の河川堆積シルト	炭化物・焼土・河川小石を含む	自然堆積	20	黄褐色の河川堆積シルト	SK92埋積土	

P6(単位)

No.	土色・土質	層入物など	備考
1	黄褐色の河川堆積シルト	焼土・炭化物	自然堆積
2	いぶい黄褐色の河川堆積シルト	焼土・焼土・炭化物	自然堆積

第31図 SI91住居跡



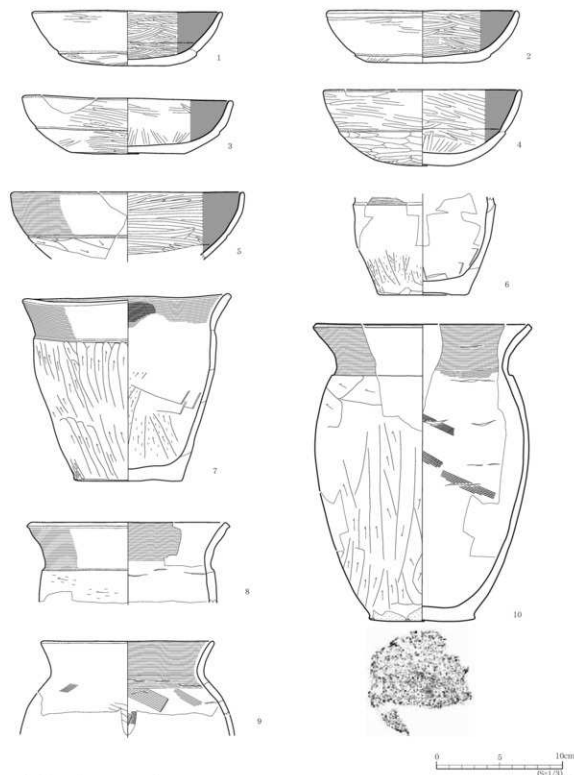
図版28 S91住居跡

認められた。

[その他の施設] 南辺中央壁際でP7を検出している。周溝の掘り方より新しい。長辺47cm、短辺26cmの隅丸長方形を呈し、深さは10cmほどである。堆積土にはぶい黄褐色シルトが1層で、材などの痕跡は認められない。位置からみて、住居の入り口施設に関連する据え方などの可能性が考えられるが、部材の痕跡が認められないことから判然としない。

また、南東隅付近の床面で白色粘土の塊を検出している。白色粘土の塊は、カマドの構築に用いられたとみられ、前述のS130 堅穴住居跡では壇上施設の上で発見されている。本住居では壇上施設が伴わないことは明らかであるが、それ以外の何らかの施設が存在したのか否かについては不明である。[出土遺物] 床面、床直上から少量の土師器が出土している。床面からは非ロクロ調整の土師器坏(第32図1)・甕(第32図10)、床直上からは非ロクロ調整の土師器坏(第32図3)がそれぞれ出土している。

カマド側壁崩落土から非ロクロ調整の土師器甕(第32図7・9)が出土している。また、堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏(第32図2・4・5)・鉢(第32図6)・甕(第32図8)が出土している。



No.	器種	名称	形状	規格	法量	材質	特徴	図例
1	土師器	坏	丸底	250	152	—	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	251 図1
2	土師器	坏	丸底	215	114.6	—	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	252 図2
3	土師器	坏	丸底	215	168	50	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	253 図3
4	土師器	坏	丸底	215	138	—	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	254 図4
5	土師器	坏	丸底	174	118.5	—	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	— 図5
6	土師器	甕	2口	175	70	80	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	— 図6
7	土師器	甕	2口	175	165	85	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	— 図7
8	土師器	甕	2口	175	113.5	—	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	— 図8
9	土師器	甕	2口	175	113.5	—	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	— 図9
10	土師器	甕	2口	175	113.5	80	赤土(白→赤)ヘラ土器(6組)非ロクロ調整のヘラ土器(厚肉壁)しい。内:ヘラ土器一色塗	255 図10

第32図 S91住居跡出土遺物



図版29 S191住居跡出土遺物

1~4. 7. 10: S・1/3

10縦断面: S・任意

## 2. 竪穴遺構

平面形と規模は小型の竪穴住居跡の一部と共通するが、カマドが付設されており周溝が認められないものを竪穴遺構とした。

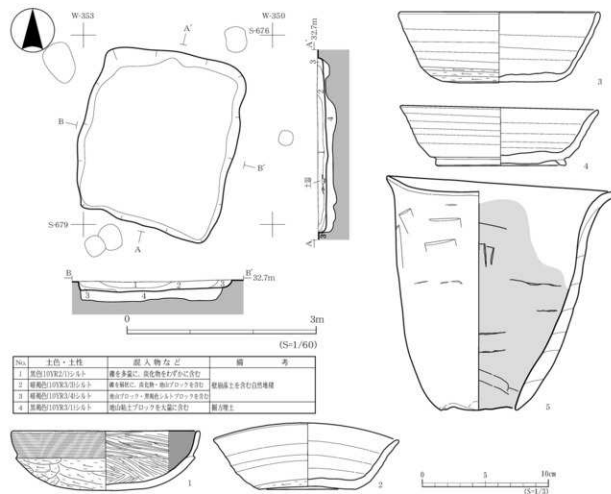
### 【SX01 竪穴遺構】(第33図、図版30)

南-1区東半部の北側で検出した。重複する遺構はない。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、規模は東西が北辺で2.3m、南北が東辺で2.8mである。

[方向] 東辺でみると北で東へ約14度偏する。

[壁] 壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りの良い西壁で約13cmである。



No.	土色・土性	層人番号など	備考
1	黒褐色に10%以上のシルト	層土層に、炭化物層が認められる	
2	軽褐色に10%以上のシルト	層土層に、炭化物層、動物フクロ骨が認められる	軽褐色土を含む自然堆積
3	軽褐色に10%以上のシルト	黒山土・赤・黒褐色シルト・フクロ骨が認められる	
4	軽褐色に10%以上のシルト	黒山土層上部のフクロ骨層に認められる	軽褐色土

No.	図種	分層	層位	厚さ	特 徴	図例	説明
1	土層	黒	10	0.10	黒: 20%シルト・4%動物フクロ骨	西: 10%シルト・10%炭化物層	自然堆積
2	土層	黒	11	0.10	黒: 20%シルト・4%動物フクロ骨	西: 10%シルト・10%炭化物層	自然堆積
3	土層	黒	12	0.10	黒: 20%シルト・4%動物フクロ骨	西: 10%シルト・10%炭化物層	自然堆積
4	土層	黒	13	0.10	黒: 20%シルト・4%動物フクロ骨	西: 10%シルト・10%炭化物層	自然堆積
5	土層	黒	14	0.10	黒: 20%シルト・4%動物フクロ骨	西: 10%シルト・10%炭化物層	自然堆積



第33図 SX01竪穴遺構及び出土遺物

1~5: S・1/3

〔堆積土〕3層認められ、いずれも自然堆積である。1～3層は小礫、炭化物、地山ブロックを含む黒色シルト・暗褐色シルトである。

〔床面〕中央部がほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面としている。

〔出土遺物〕床面から遺物は出土していないが、堆積土2層から比較的多く出土している。出土した土器には、非ロクロ調整の土師器杯(第33図1)・瓶(第33図5)の他に、須恵器杯(第33図2・3)・高台杯(第33図4)がある。このうち、須恵器の杯は、底部から体部下端にかけて施された回転ヘラケズリ調整のため切り離し技法が不明で、相対的に底部が大ききものである。

#### 〔SX03 竪穴遺構〕(第34図、図版30)

南-1区東半部の北東側で検出した。SB42建物跡と重複し、これより古い。

〔平面形・規模〕隅丸長方形を呈する。規模は東西が南辺で2.3m、南北が東辺で2.7mである。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約10度偏する。

〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りの良い北壁で27cmである。

〔堆積土〕8層認められ、いずれも自然堆積である。1～8層は、炭化物、砂礫、地山粒などを含む黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色のシルトである。

〔床面〕ほぼ平坦で、地山を床面としている。

〔柱穴〕南辺・北辺中央部の壁際で主柱穴(P1、P2)を検出した。平面形はP1が長径32cm、短径28cm、P2が長径34cm、短径32cmの楕円形を呈し、深さはともに約50cmである。いずれも柱痕跡を検出しており、P1が径16cm、P2が径21cmのほぼ円形を呈する。

〔その他の施設〕北西隅でP3を検出した。平面形は長辺77cm、短辺52cmの隅丸長方形を呈し、深

さは4cmほどである。堆積土は住居内の堆積土の5層である。

〔その他〕東辺中央部北よりの壁面で、長さ15cm、幅5cmほどの範囲で焼け面を確認したが、その成因などについては不明である。

〔出土遺物〕図示できる資料はないが、須恵器杯の体部破片やスサ入りの焼土塊が出土している。

#### 〔SX04 竪穴遺構〕(第35図、図版30)

南-1区東半部の南側で検出した。SX05竪穴遺構と重複し、これより新しい。

〔平面形・規模〕隅丸長方形を呈する。規模は東西が北辺で1.9m、南北が西辺で2.8mである。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約29度偏する。

〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りの良い北壁で33cmである。

〔堆積土〕5層認められ、いずれも自然堆積である。1～5層は地山ブロック、炭化物、焼土を含む黒褐色・暗褐色シルトである。

〔床面〕ほぼ平坦で、地山面を床面としている。

〔柱穴〕南辺・北辺中央部の壁際で各1個(P1、P2)、東辺・西辺南半部の壁際で各2個(P3～P6)の主柱穴を検出した。柱穴の平面形は長径27～34cm、短径18～25cmの不整な楕円形を呈し、深さは約30cmである。いずれも柱痕跡を検出しており、径約10cmの円形ないし不整な円形を呈する。深さはP5が約8cmと浅いが、他は約30cmである。西辺のP3と東辺のP4、西辺のP5と東辺のP6がそれぞれほぼ対になる位置にあり、P3とP5は約60cm、P4とP6は約76cm離れている。また、東辺のP4、P6は柱痕跡の方向が建物内部方向へやや傾斜している。

〔その他の施設〕北西隅でP7を検出した。平面形は長径70cm、短径55cmの不整な楕円形を呈し、深さは6cmほどである。堆積土は焼土、炭化物を含む暗褐色のシルトで、自然堆積である。

〔その他〕北西隅の土壌から建物中央方向に向かって幅・奥行共に50cmほどの範囲に炭化物と焼土の分布がみられた。また、北辺西端部の壁面で、長さ17cm、幅5cmほどの範囲で焼け面を確認したが、その性格・成因などについては不明である。

〔出土遺物〕図示できる資料はないが、須恵器杯や非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土している。

#### 〔SX05 竪穴遺構〕(第35図、図版30)

南-1区東半部の南側で検出した。全体的に残存状態が悪い。前述のSX04竪穴遺構と重複し、これより古い。

〔平面形・規模〕一辺2.8mの隅丸正方形を呈する。

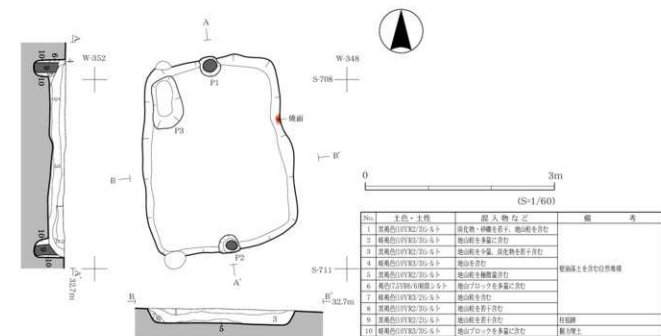
〔方向〕東辺でみると北で西へ約37度偏する。

〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りの良い西壁で7cmである。

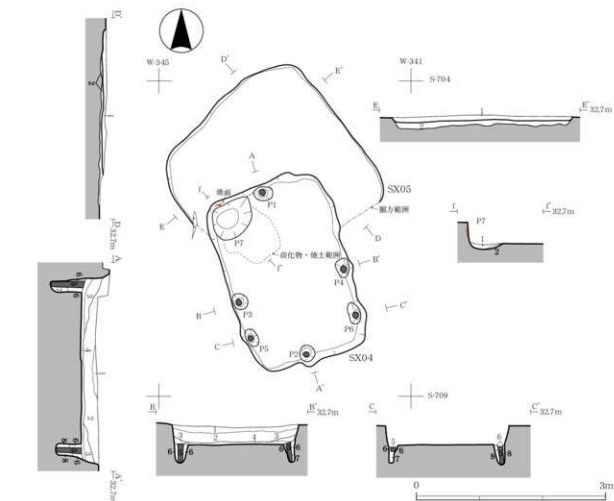
〔堆積土〕1層認められた。地山粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面としている。

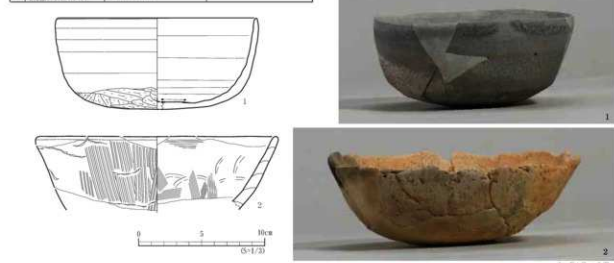
〔出土遺物〕遺物は床直上から底部に手持ちヘラケズリが施された須恵器杯(第35図1)、非ロクロ調整の土師器鉢(第35図2)が出土している。



第34図 SX03竪穴遺構



SX04 (A-A', B-B', C-C')		SX05 (P7 (F))	
No.	層・人物・土質	No.	層・人物・土質
1	堆積土(IV)X30シルト	1	堆積土(IV)X30シルト
2	堆積土(IV)X30シルト	2	堆積土(IV)X30シルト
3	堆積土(IV)X30シルト	3	堆積土(IV)X30シルト
4	堆積土(IV)X30シルト	4	堆積土(IV)X30シルト
5	堆積土(IV)X30シルト	5	堆積土(IV)X30シルト
6	堆積土(IV)X30シルト	6	堆積土(IV)X30シルト
7	堆積土(IV)X30シルト	7	堆積土(IV)X30シルト



No.	器種	形状	期別	検出	位置	特徴	図例	説明
1	鉢	丸	AS	SX05B1	110	丸口・口縁部	1	丸口・口縁部
2	土器	鉢	AS	SX05B1	110	丸口・口縁部	2	丸口・口縁部

第35図 SX04・05竪穴遺構及びSX05竪穴遺構出土遺物

### 【SX07A・B 竪穴遺構】

南-1 区東半部の南側で検出した。柱穴の配置と柱の抜き取り痕跡から、一度拡張されていると考えられる (SX07A → SX07B)。最初に新しい SX07B について記載し、古い SX07A については確実に把握したことのみを記す。

### 【SX07B 竪穴遺構】 (第 36 図、図版 30)

[平面形・規模] 東西が北辺で 3.0m、南北が西辺で 2.2m の隅丸長方形の西辺中央部に、幅 1.2m、奥行き 45 cm ほどの張り出しを持つ。

[方向] 北辺でみると西で南へ約 20 度偏する。

[壁] 壁は直立に立ち上がり、高さは残りの良い西壁で 37 cm である。

[堆積土] 13 層認められる。いずれも自然堆積で、地山粒、地山ブロック、炭化物を含む黒褐色シルト・暗褐色シルト・褐色シルト・黄褐色シルト・黒色粘質シルトである。

[床面] ほぼ平坦で、地山を床面としている。

[柱穴] 主柱穴を 3 個、壁柱穴を 4 個を検出している。主柱穴 (P1・P3・P4) は、東西中軸線上の東辺壁際で P4、西辺壁際付近で P1、中心よりやや西よりで P3 を検出した。P1 と P3 が約 1.1 m、P3 と P4 が約 1.8 m 離れている。柱穴は長径 20 ~ 38 cm、短径 13 ~ 33 cm の不整な楕円形を呈する。深さは約 50 ~ 52 cm である。P1 では柱が抜き取られているが、P3 と P4 で柱痕跡を確認しており、径 22 cm の円形を呈する。

壁柱穴 (P5・P7 と P6・P8) は、南北両辺の西半部壁際の各 2 箇所で見出している。北辺の P6 と P8、南辺の P5 と P7 はともに約 30 cm 間隔をおいて東西に並んでいる。北辺の P6・P8 と南辺の P5・P7 は、それぞれ東西中軸線を中心としたほぼ対象の位置にある。柱穴は径 15 cm 前後の円形や不整形を呈し、深さは 5 ~ 13 cm である。P7、P8 で柱痕跡を検出しており、約 10 cm の円形を呈する。

[その他の施設] 北東隅で P11 を検出している。平面形は長径 90 cm、短径 68 cm の楕円形で、深さ 23 cm である。堆積土は 4 層に分けられ、地山粒、焼土、地山ブロックを含む黒色粘質シルト・黒褐色シルト・暗褐色シルトと黄褐色砂で、いずれも自然堆積である。

[その他] 北東隅の土壌から建物中央部に向かって幅・奥行き共に 70 cm ほどの不定な範囲に炭化物と焼土の分布がみられたが、その性格などについては不明である。

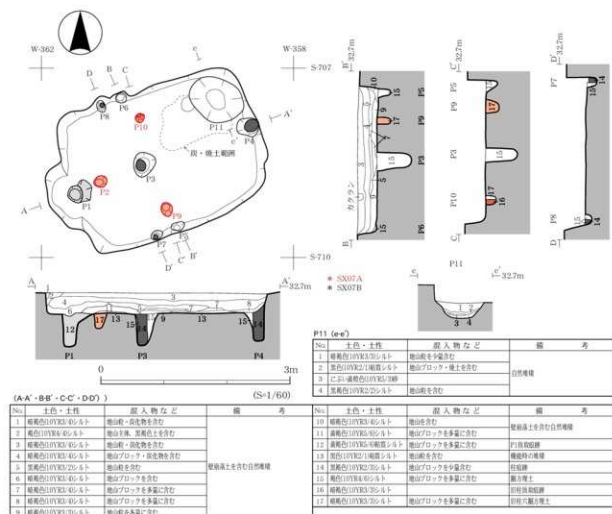
[出土遺物] 図示できる資料はないが、堆積土から須恵器甕の胴部破片が出土している。

### 【SX07A 竪穴遺構】 (第 36 図、図版 30)

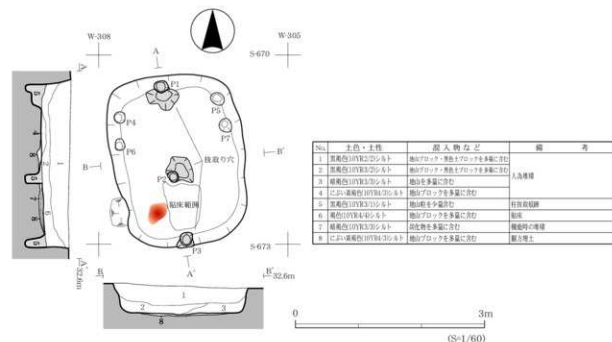
[柱穴] 前述の主柱穴 P1 に隣接する東側、南辺の壁柱穴 P5 の北側、北辺の壁柱穴 P6 の南東側の 3 箇所で見出している。これらは、東西中軸線上にある P2 を頂点とした二等辺三角形をなすように配置されている。平面形は P2 が長径 22 cm、短径 17 cm に楕円形、P9 が長径 23 cm、短径 18 cm の楕円形、P10 が径 15 cm の不整形円形を呈し、深さは 21 ~ 24 cm である。柱痕跡は検出されず、P10 で抜き取り穴を確認した。位置から P2 を主柱穴、P9 と P10 が壁柱穴とすることも可能である。

### 【SX05 竪穴遺構】 (第 37 図、図版 30)

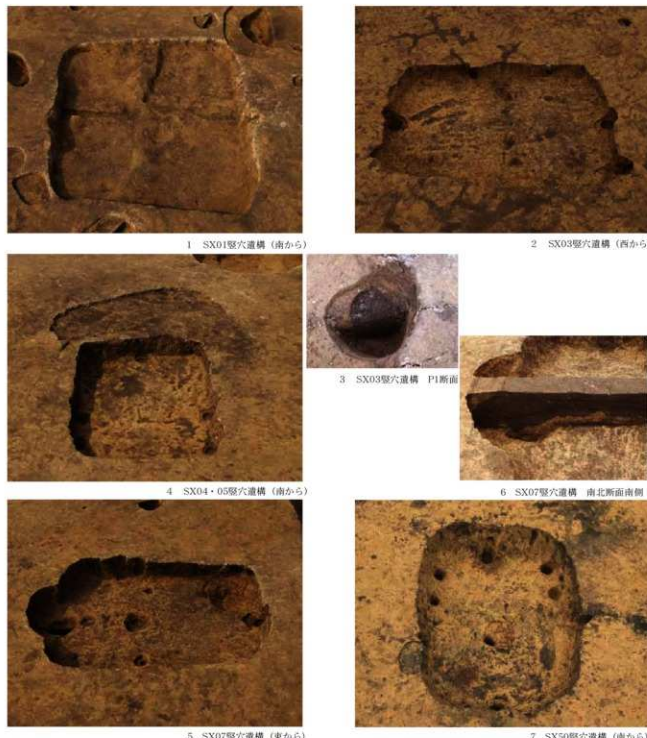
北区南半部の東側で検出した。



第36図 SX07A・B竪穴遺構



第37図 SX50竪穴遺構



図版30 竪穴遺構

[平面形・規模] 隅丸長方形を呈する。規模は東西が北辺で約 2.0m、南北が東辺で約 2.5m である。  
[方向] 西辺でみると北で西へ約 11 度偏する。  
[壁] 壁はやや開きながら立ち上がり、高さは残りの良い北壁で 47 cm である。  
[堆積土] 5 層認められる。遺構が使用されていた時の堆積で、炭化物を多量に含む暗褐色シルトの 7



層を除く4層はいずれも埋め戻されたもので、地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト・暗褐色シルトである。

[床面] ほぼ平坦で、中央部は掘方埋土上面を床面とし、周辺部は地山を床面としている。

[柱穴] 主柱穴を3個(P1～P3)、壁柱穴を4個(P4～P7)検出している。主柱穴は、南北中軸線上の北辺壁際でP1、南辺壁際付近でP3、中心よりやや南よりでP2を検出した。P1とP2は約1.5m、P2とP3が約1.8m離れている。柱穴は長径20～38cm、短径13～33cmの楕円形を呈する。深さは約26～32cmである。P1～P3は、柱が抜き取られている。

壁柱穴は、東西両辺の北半部壁際の各2箇所検出している。東辺のP5とP7、西辺のP4とP6はともに約40cm間隔をおいて南北に並んでいる。東辺のP5・P7と西辺のP4・P6は、それぞれ南北中軸線を中心としたほぼ対象の位置にある。柱穴は径15cm前後の円形や不整形円形を呈し、深さは13～34cmである。いずれでも柱は抜き取られている。

[その他] 南西隅付近では、長軸39cm、短軸21cmの不整形な範囲で焼け面を検出した。その性格などについては不明である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

### 3. 掘立柱建物跡

#### [SB11 建物跡] (第38図)

南-1区東半部の南側に位置する。東西1間、南北1間の建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出し、すべてで柱痕跡を確認している。

平面規模は北側柱列と東側柱列でともに2.7mである。建物跡の方向は、北側柱列でみると西で北へ約23度偏する。柱穴は長辺42～52cm、短辺35～38cmの隅丸長方形を呈する。深さは42～52cmである。埋土は地山粒・地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径14～15cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

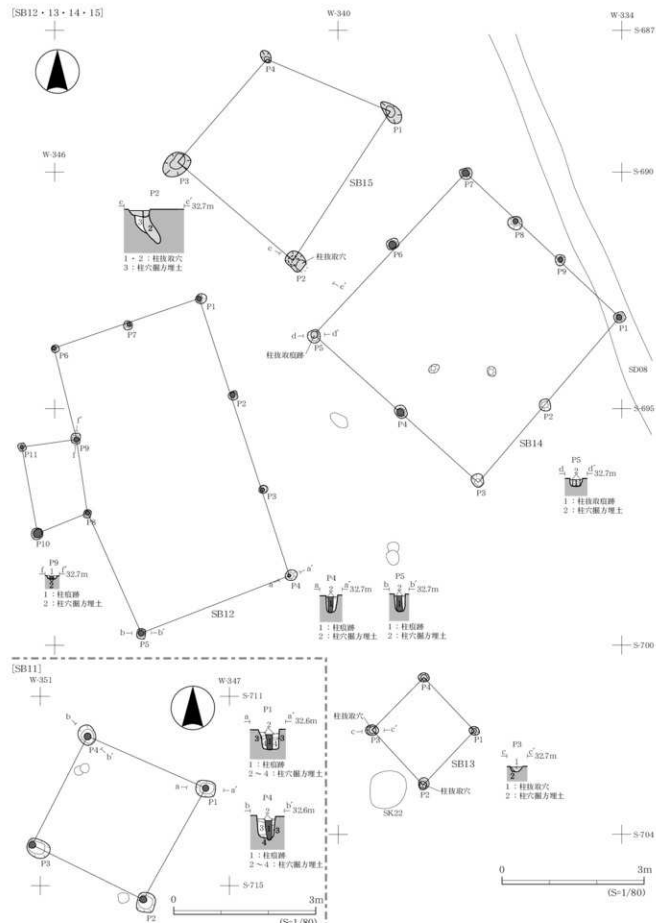
#### [SB12 建物跡] (第38図、図版31)

南-1区東半部の南側に位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟で西側柱列の中央に1間の張出しを持つ。柱穴は、西側柱列の2箇所と南妻棟通下柱穴を除く9箇所、張出しで2箇所検出しており、いずれでも柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が東側柱列で総長6.2m、柱間寸法は北から2.1m・2.1m・1.9m、梁行は北妻で総長3.3m、柱間寸法は東から1.6m・1.7mである。張出しの出は西側柱列から1.2mである。建物跡の方向は東側柱列でみると北で西へ約18度偏する。柱穴は一边が20cmほどの隅丸長方形、径18～20cmの円形、長辺20～26cm、短辺19～22cmの隅丸長方形を呈する。深さは35～37cmである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径8～12cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

#### [SB13 建物跡] (第38図、図版31)

南-1区東半部の南側に位置する。東西1間、南北1間の建物跡である。柱穴と柱抜き取り穴をそれ



第38図 SB11・12・13・14・15建物跡

ぞれ2箇所を確認している。

平面規模は南側柱列・東側柱列ともに約1.6mとみられる。建物跡の方向は南側柱列でみると西で北へ約43度偏する。P2、P3で柱穴を部分的に確認しているが、特徴は不明である。柱抜き取り穴は長径20～28cm、短径19～23cmの楕円形を呈する。深さは8～14cmである。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。遺物は出土していない。

#### 【SB14 建物跡】(第38図、図版31)

南-1区東半部の南側に位置する。南北2間、東西は北側柱列が3間、南側柱列が2間のほぼ正方形の建物跡である。7箇所で柱痕跡を確認しているが、東側柱列の2箇所では、柱が抜き取られている。SD08溝跡と重複し、これより古い。

平面規模は南北が西側柱列で総長4.7m、柱間寸法は北から2.2m・2.5m、東西が北側柱列で総長4.5m、柱間寸法は東から1.8m・1.2m・1.5mである。建物跡の方向は東側柱列でみると北で東へ約43度偏する。柱穴は長辺23～31cm、短辺20～31cmの隅丸長方形または不整形を呈する。深さは17～30cmである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径12～18cmのほぼ円形を呈する。柱抜き取り穴は径14cm円形をなし、堆積土は炭化物を含む黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

#### 【SB15 建物跡】(第38図、図版31)

南-1区東半部の南側に位置する。東西1間、南北1間の南北棟建物跡である。1箇所(P2)で柱穴と柱抜き取り穴を確認している以外、いずれでも柱痕跡が確認されないことから、柱穴は柱抜き取り穴で壊されているとみられる。

平面規模は桁行きが東側柱列で約3.8m、梁行が北側柱列で約2.8mである。建物跡の方向は東側柱列でみると北で東へ約31度偏する。柱穴は大部分が抜き取り穴に壊されており、平面形は不明だが、深さが約30cmと推定できる。埋土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトである。抜き取り穴は長径30～68cm、短径20～46cmの不整な楕円形を呈する。深さは17～50cmである。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。遺物は出土していない。

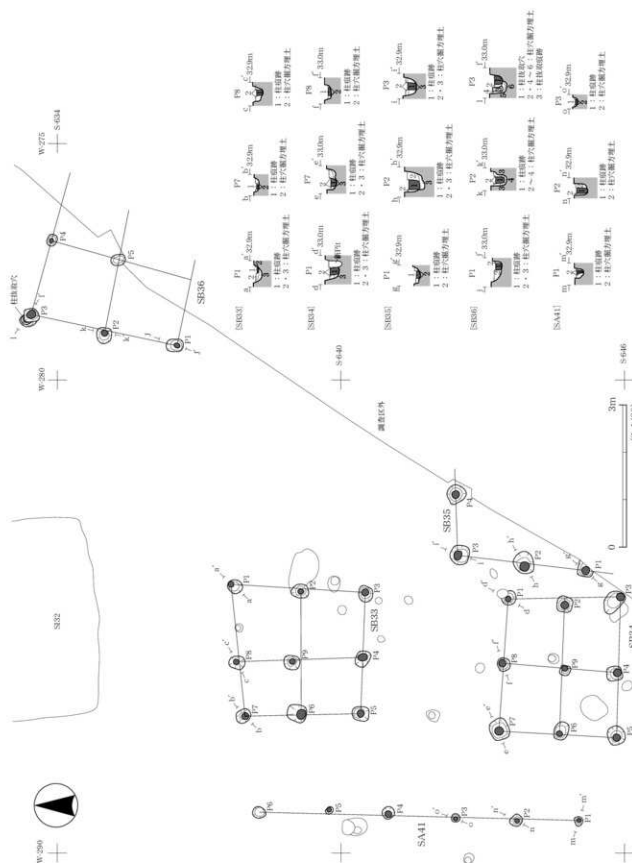
#### 【SB33 建物跡】(第39図、図版31)

北区南半部の東側に位置する。東西2間、南北2間の総柱建物跡である。9箇所すべての柱穴を検出し、いずれでも柱痕跡を確認している。後述するSB34建物跡と東側柱列をほぼ揃えて南北に並び、西側には2mの間隔をあけて併行するSA41柱列跡が位置している。

平面規模は北側柱列で総長2.8m、柱間寸法は東から1.6m・1.2m、東側柱列で総長2.8m、柱間寸法は北から1.5m・1.3mである。建物跡の方向は東側柱列でみると北で東へ約3度偏する。柱穴は長辺32～40cm、短辺32～36cmの隅丸長方形または不整形を呈する。深さは10～20cmである。埋土は地山ブロックを含む褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径11～16cmのほぼ円形を呈するものや、長径21～23cm、短径16～19cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB34 建物跡】(第39図、図版31)

北区南半部の東側に位置する。東西2間、南北2間の総柱東西棟建物跡である。9箇所すべての柱



第39図 SB33・34・35・36建物跡、SA41南跡

穴を検出し、いずれでも柱痕跡を確認している。SB33 建物跡と東側柱列をほぼ揃えて南北に並び、西側に2mの間隔をあけて併行するSA41柱列跡が位置している。

平面規模は桁行が南側柱列で総長3.0m、柱間寸法は1.5m等間、梁行が西側柱列で総長2.5m、柱間寸法は北から1.4m・1.1mである。建物跡の方向は南側柱列でみると西で北へ約2度偏する。柱穴は長辺21～53cm、短辺21～40cmの隅丸長方形または隅丸方形を呈する。深さは9～21cmである。埋土は地山粒を含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径12～17cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB35 建物跡】(第39図、図版31)

北区南半部の東側に位置する。建物跡の東半部は調査区外であるが、東西1間以上、南北2間以上の建物跡である。4箇所で見出し、すべてで柱痕跡を確認している。

平面規模は西側柱列で総長2.7m以上、柱間寸法は北から1.4m・1.3m、北側柱列で総長1.3m以上である。建物跡の方向は西側柱列でみると北で東へ約7度偏する。柱穴は長辺42～48cm、短辺36～41cmの隅丸長方形または不整形な方形を呈する。深さは15～42cmである。埋土は地山粒・地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径17～20cmの円形または楕円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB36 建物跡】(第39図)

北区南半部の東側に位置する。建物跡の東半部は調査区外であるが、東西1間以上、南北2間の建物跡である。5箇所で見出し、P5を除いて柱痕跡が確認された。

平面規模は西側柱列で総長3.2m、柱間寸法は1.6m等間、北側柱列で1.6m以上である。建物跡の方向は西側柱列でみると北で東へ約23度偏する。柱穴は長辺26～37cm、短辺20～30cmの隅丸長方形または隅丸方形を呈する。深さは20～35cmである。埋土は地山粒を含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～21cmの円形または楕円形を呈する。遺物は出土していない。

なお、P3で柱穴に重複が認められていることから一度建て替えられている可能性も考えられる。

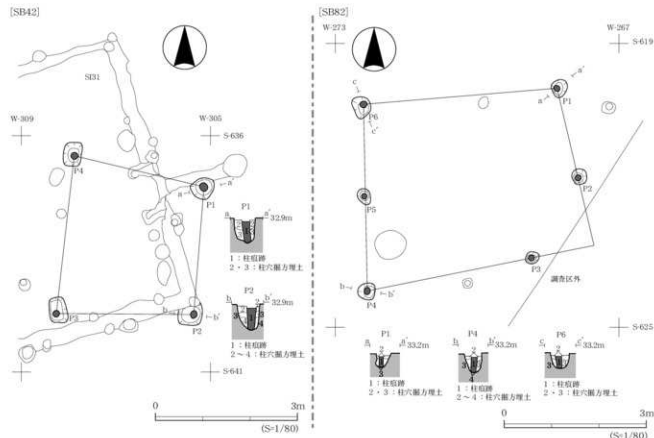
#### 【SB42 建物跡】(第40図、図版31)

北区南半部の西側に位置する。東西1間、南北1間の建物跡で、平面形は台形を呈する。4箇所すべての柱穴を検出し、いずれでも柱痕跡を確認した。SI31住居跡と重複し、これよりも古い。本建物跡は、南側柱列の柱筋をSB33建物跡の南側柱列とほぼ揃えている。

平面規模は東側柱列で2.7m、北側柱列で2.8mである。建物跡の方向は東側柱列でみると北で東へ約5度偏する。柱穴は長辺40～55cm、短辺40～45cmの隅丸方形または隅丸長方形を呈する。深さは30～56cmである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径13～18cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB56 建物跡】(第41図、図版31)

北区南半部の東側に位置する。桁行3間、梁行2間の東西棟建物跡である。東妻棟通り下の柱穴を除き、9箇所で見出し、すべてで柱痕跡を確認している。SB57建物跡と平面的に重複するが新旧関係は不明である。



第40図 SB42・82建物跡

平面規模は桁行が北側柱列で総長6.5m、柱間寸法は東から1.9m・2.8m・1.8m、梁行は西妻で総長3.4m、柱間寸法は北から1.9m・1.5mである。建物方向は北側柱列でみると東で北へ約26度偏する。柱穴は長径20～27cm、短径17～22cmの楕円または円形を呈する。深さは20～43cmである。埋土は地山粒、地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～15cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

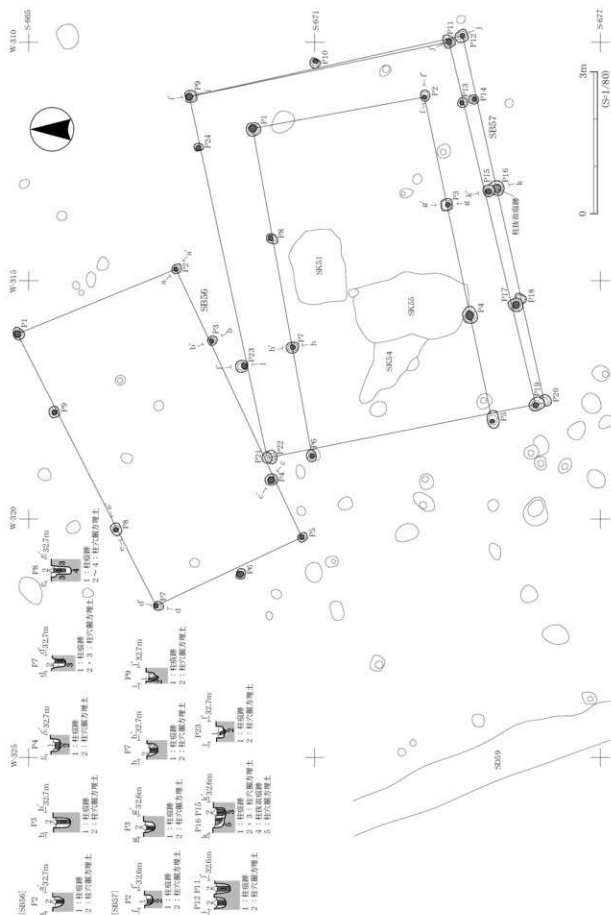
#### 【SB57 建物跡】(第41図、図版31)

北区南半部の東側に位置する。桁行3間、梁行1間の身舎に、東・南・北に廂が付く建物跡で、廂だけ一度改修されている。身舎では8箇所すべての柱穴を検出している。廂では北側柱列の1箇所で見出しできなかった。SK51・54・55土壌、SB56建物跡と重複し、SK54・55より新しいが、SK51、SB56との新旧関係は不明である。

身舎の平面規模は、桁行が北側柱列で総長7.1m、柱間寸法は東から2.4m・2.4m・2.3m、梁行は西妻で3.9mである。建物跡の方向は北側柱列でみると東で北へ約10度偏する。

廂は一度改修されている。新しい廂は、北側柱列で総長7.9m、柱間寸法が東より1.1m・4.7m(2間分)・2.1m、東妻で総長5.6m、柱間寸法が北から2.7m・2.9m、南側柱列で総長7.9m、柱間寸法が東より1.3m・2.0m・2.5m・2.1mである。廂の出は、北と南が西妻でともに約1m、東が南北両側柱列の東延長部で0.9mと1.1mである。

古い廂は、南廂の出が西妻で約1.2mと新しいものより20cmほど大きい、南廂以外はほとんどが同位置で改修されているため新しい廂の場合と差異はない。



第41図 SB56・57建物跡

柱穴は身舎・廂とも長径26～36cm、短径20～30cmの楕円または不整な円形を呈する。深さは20～35cmである。埋土は地山粒、地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～15cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB73 建物跡】(第42図、図版31)

北区北半部の東側に位置する。桁行3間、梁行2間の東西棟建物跡である。10箇所すべての柱穴を検出し、いずれでも柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が北側柱列で総長7.1m、柱間寸法は東から2.4m・2.3m・2.4m、梁行は東妻で総長4.3m、柱間寸法は北から2.1m・2.2mである。建物跡の方向は北側柱列でみると東で北へ約12度偏する。柱穴は長辺51～64cm、短辺49～66cmの隅丸方形または隅丸長方形を呈するものや長径58～72cm、短径54～65cmの不整な楕円形を呈する。深さは20～36cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径14～20cmのほぼ円形や長径18～27cm、短径16～20cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB74 建物跡】(第42図)

北区北半部の東側に位置する。建物跡の東半部は調査区外であるが、東西2間以上、南北2間の東西棟建物跡とみられる。4箇所柱穴を検出しており、すべてで柱痕跡を確認している。SK89土壌と重複するが、新旧関係は不明である。

平面規模は東西が北側柱列で総長3.3m以上(2間分)、南北は西側柱列で総長3.7m、柱間寸法は北から1.8m・1.9mである。建物跡の方向は西側柱列でみると北で東へ約5度偏する。柱穴は長辺35～44cm、短辺35～41cmの隅丸方形または径30～40cmの不整円形を呈する。深さは20～30cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径11～18cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB82 建物跡】(第40図)

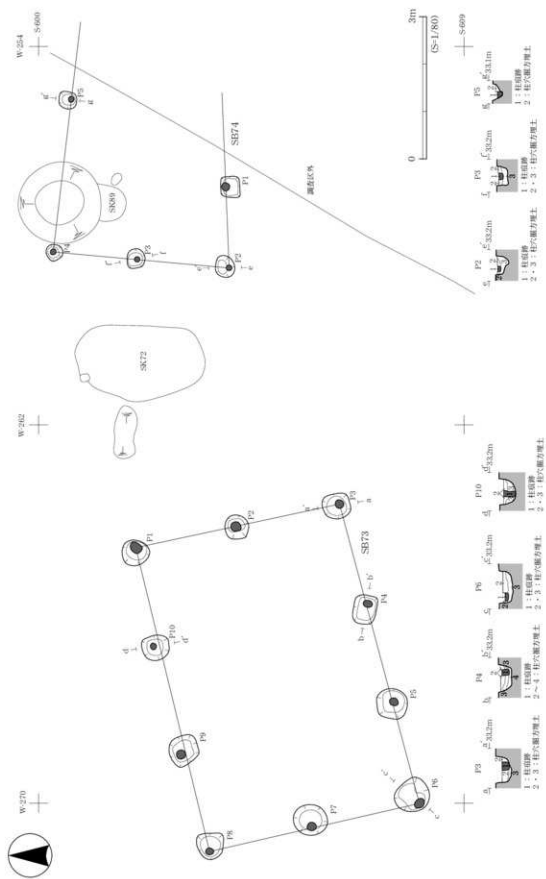
北区南半部の東側に位置する。建物跡の南東部は調査区外であるが、南側柱列が3間、北側柱列が1間、東西両妻が2間の東西棟建物跡と推定される。6箇所柱穴を検出しており、すべてで柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が北側柱列で総長4.1m、梁行は西妻で総長3.9m、柱間寸法は北から1.9m・2.0mである。建物跡の方向は北側柱列でみると東で北へ約4度偏する。柱穴は長辺37～45cm、短辺35cmの不整な隅丸方形や長径33～35cm、短径26～32cmのほぼ円形または楕円形を呈する。深さは15～50cmである。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～15cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB83 建物跡】(第43図)

北区北半部の中央に位置する。東西2間、南北2間の建物跡である。8箇所すべての柱穴を検出しており、いずれでも柱痕跡を確認している。

平面規模は、東西が北側柱列で総長3.7m、柱間寸法は東から1.7m・2.0m、南北が西側柱列で総長3.7m、柱間寸法は北から1.9m・1.8mである。平面形は正方形をなすが、南側柱列の柱穴の位置が西



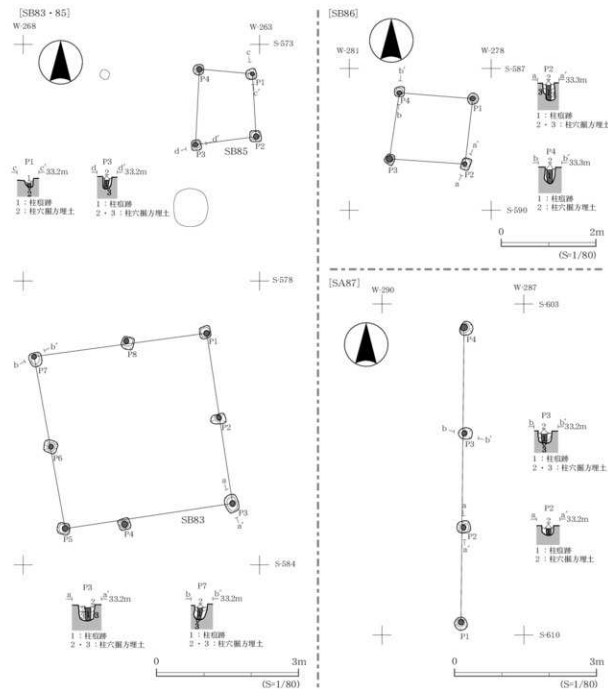
第42図 SB73・74建物跡

妻側に寄っていることから、南側柱列は3間であった可能性も考えられる。建物跡の方向は北側柱列でみると東で北へ約7度偏する。

柱穴は一辺が23～27cmの隅丸方形や長辺34～37cm、短辺20～28cmの隅丸長方形を呈する。深さは10～36cmである。埋土は地山ブロックを含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～14cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB85 建物跡】(第43図)

北区北半部の中央に位置する。東西1間、南北1間の建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出しており、いずれでも柱痕跡を確認している。



第43図 SB83・85・86建物跡、SA87堀跡

平面規模は南北が西側柱列で1.6m、東側柱列で1.3m、東西が南側柱列で1.3m、北側柱列で1.1mであり、平面形は台形をなす。建物跡の方向は西側柱列でみると北で東へ約3度偏する。

柱穴は一辺が22～25cmの隅丸方形を呈する。深さは12～30cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は径8～12cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB86 建物跡】(第43図)

北区北半部の中央に位置する。東西1間、南北1間の東西棟建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出しており、いずれでも柱痕跡を確認している。

平面規模は西側柱列で1.4m、南側柱列で1.6mである。建物跡の方向は南側柱列でみると東で南へ約4度偏する。

柱穴は一辺が22～25cmの隅丸方形を呈する。深さは23～36cmである。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトを基調としている。柱痕跡は径8～13cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

4. 堀跡

【SA41 堀跡】(第39図、図版31)

北区中央部の東側に位置する。南北5間の堀跡である。6箇所で柱穴を検出し、そのうちP1を除く5個で柱痕跡を確認した。SB33・34建物跡の西側柱列から約2mの間隔をおいた西側に位置している。堀跡の規模は、総長約6.8m、柱間寸法は北から約1.4m・1.3m・1.4m・1.3m・1.4mである。堀跡の方向は北で東へ約2度偏する。柱穴は一辺が20～25cmの隅丸方形を呈する。深さは23～30cmである。埋土は地山粒、地山ブロック、炭化物を含む暗褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～15cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

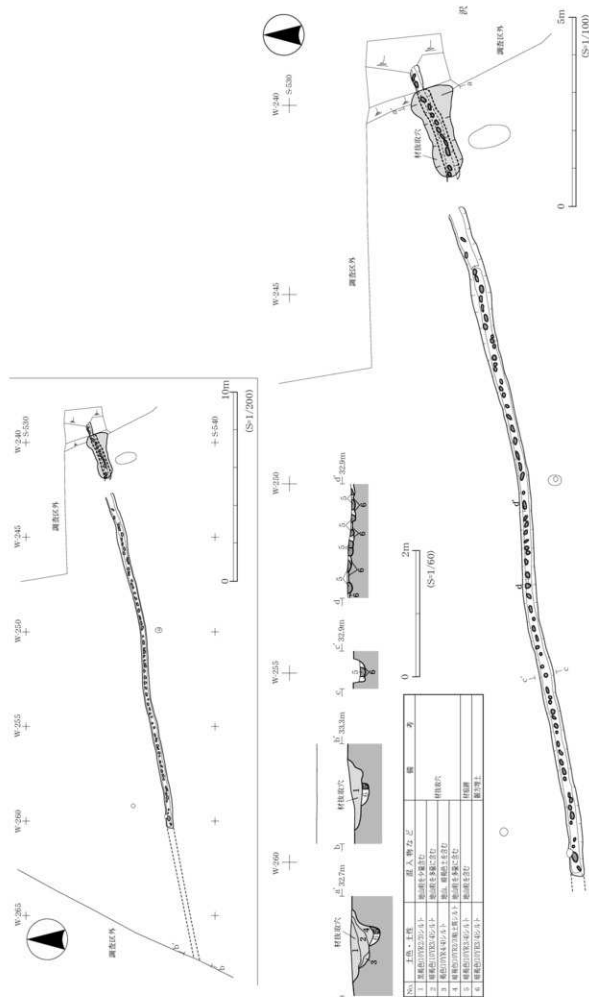
【SA87 堀跡】(第43図)

北区中央部に位置する。南北3間の堀跡である。4箇所柱穴を検出し、すべてで柱痕跡を確認した。堀跡の規模は総長6.2mで、柱間寸法は北から2.2m・2.0m・2.0mである。堀跡の方向は北で東へ約1度偏する。柱穴は一辺が25cmの隅丸方形や長辺30cm、短辺25cmの隅丸長方形を呈する。深さは12～25cmである。埋土は地山粒、地山ブロック、炭化物を含む灰黄褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は径10～13cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

【SA99 材木堀跡】(第44図、図版31)

北区北端に位置する。溝状の掘方に丸木材などを立て並べた東西方向の材木堀で、約22m検出している。西端部は後世の削平で調査区内で途切れているが、東西ともさらに調査区外へ続いている。

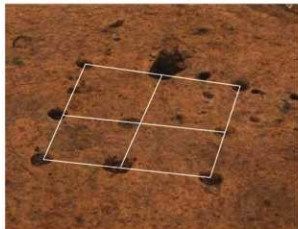
掘方の上幅は27～57cm、深さ10～20cmである。断面形はU字形を呈する。方向は、多少蛇行しているが、東で北に約11度偏する。埋土は暗褐色のシルトである。径10cmの円形や長径25cm、短径10cmの楕円形を呈する材痕跡を10～35cm間隔で検出した。このような痕跡から丸木材や割材が用いられていたと考えられる。遺物は出土していない。



第44図 SA99材木堀跡



1 SB12-13-14-15-100建物跡（北から）



2 SB33建物跡（西から）



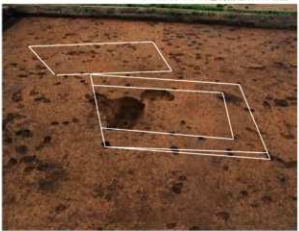
3 SB33-34-35建物跡とSA41跡跡



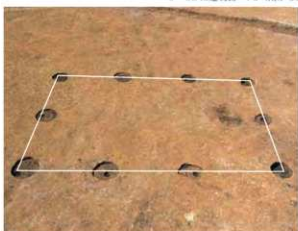
4 SB33建物跡 P8（北から）



5 SB42建物跡 P2（南から）



6 SB36-37建物跡



7 SB73建物跡（南から）



8 SA99材木堀跡（北から）



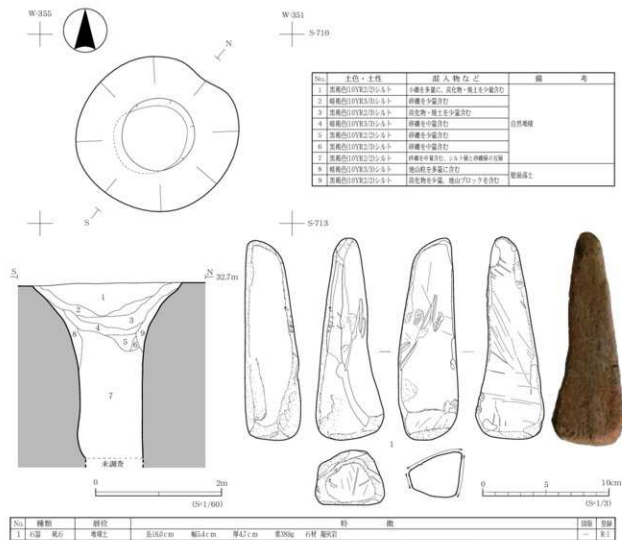
9 SA99材木堀抜き取り堀跡（北から）

図版31 掘立柱建物跡、堀跡、材木堀跡

## 5. 井戸跡

### 【SE06 井戸跡】（第45図、図版32）

南-1区北半部の南側に位置する。平面形は長径250cm、短径235cmのほぼ円形で、断面形は漏斗状を呈する素堀りの井戸跡である。約3mまで掘り下げたが、崩落の危険性により完掘できなかった。ボーリング調査により更に1m以上深いことが明らかになっており、深さは4m以上である。堆積土は炭化物や焼土、砂礫を含む黒褐色シルト・暗褐色シルトでいずれも自然堆積である。遺物は、堆積土から須恵器甕の胴部破片と、砥石（第45図1）が出土している。



第45図 SE06井戸跡及び出土遺物

## 6. 焼成遺構

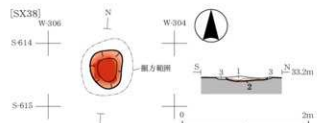
### 【SX38 焼成遺構】（第46図、図版32）

北区北半部の西側に位置する。長径90cm、短径80cmの楕円形の掘方を伴い、底面・側壁ともに火熱で赤く変色・硬化している。平面形は長径60cm、短径50cmの不整楕円形を呈する。深さは約10

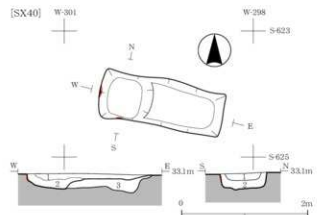
cmで、断面形は皿状を呈する。堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積である。1層が炭化物、地山粒を含む黒褐色シルト、2層が多量の焼土と少量の黒褐色土を含む暗褐色シルトである。遺物は出土していない。

#### 【SX39 焼成遺構】(第46図、図版32)

北区北半部の中央に位置する。長辺80cm、短辺65cmの隅丸方形を呈する掘方を伴い、底面・側壁ともに火熱で赤変・硬化している。平面形は長径55cm、短径50cmの不整楕円形を呈する。深さは約8cmで、断面形は皿状を呈する。堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積である。1層は多量の炭化物・焼土粒を、2層は多量の炭化物・焼土ブロックを含む暗褐色シルトである。堆積土から須恵器壺の口縁部破片(第46図1)が出土している。



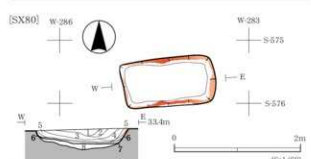
No.	土色・土性	産人物など	備考
1	黒褐色(1)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	自然堆積
2	暗褐色(2)の暗褐色シルト	焼土と少量の黒褐色土を含む	自然堆積
3	黒褐色(3)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土



No.	土色・土性	産人物など	備考
1	黒褐色(1)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	自然堆積
2	暗褐色(2)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
3	黒褐色(3)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土



No.	土色・土性	産人物など	備考
1	黒褐色(1)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	自然堆積
2	暗褐色(2)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
3	黒褐色(3)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土

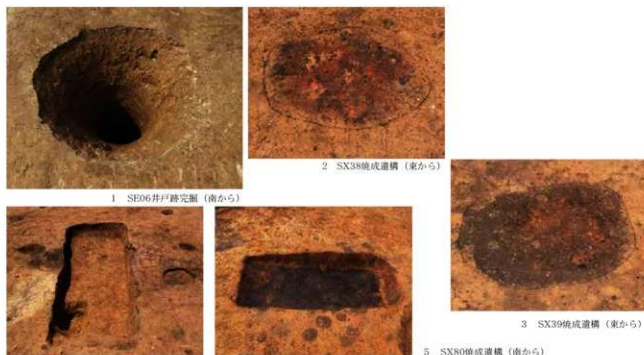


No.	土色・土性	産人物など	備考
1	黒褐色(1)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	自然堆積
2	暗褐色(2)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
3	黒褐色(3)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
4	黒褐色(4)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
5	黒褐色(5)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
6	黒褐色(6)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
7	黒褐色(7)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土
8	黒褐色(8)の暗褐色シルト	炭化物・焼土粒を多数含む	堆積土



No.	器種	分期	群位	形状	口径	底径	高さ	重量	材質	図録	図録
1	須恵器	Ⅱ	ⅡB	一辺	10.6	—	10.0	—	内青・ロウナガ	—	X1

第46図 SX38・39・40・80 焼成遺構及びSX39焼成遺構出土遺物



図版32 井戸跡・焼成遺構

#### 【SX40 焼成遺構】(第46図、図版32)

北区北半部の中央に位置する。長辺200cm、短辺76cmの長方形を呈する。西壁中央に10cm×5cm、南壁西端部に10cm×5cmほどの焼面が認められる。深さは東側で約10cm、西側で約30cmである。短軸方向の断面は箱形を呈する。堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積である。1層は多量の地山粒と黒褐色ブロックを含む明褐色シルト、2層は多量の炭化物・焼土を含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

#### 【SX80 焼成遺構】(第46図、図版32)

北区北半部の西側に位置する。平面形は長辺150cm、短辺80cmの長方形を呈する。側壁全体に火熱による赤変・硬化が断続的に認められる。底面は埋め戻して作り出しており、ほぼ平坦で、西側から東側に向かって下向きに傾斜している。深さは西側で約10cm、東側で約25cmである。短軸方向の断面形は箱形を呈する。堆積土は7層に分けられ、1～6層は廃絶後の自然堆積、7層は使用時の炭化物層である。1～6層は地山粒・炭化物・焼土を含む褐色粘質シルト、灰黄褐色粘質シルト、黒褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。

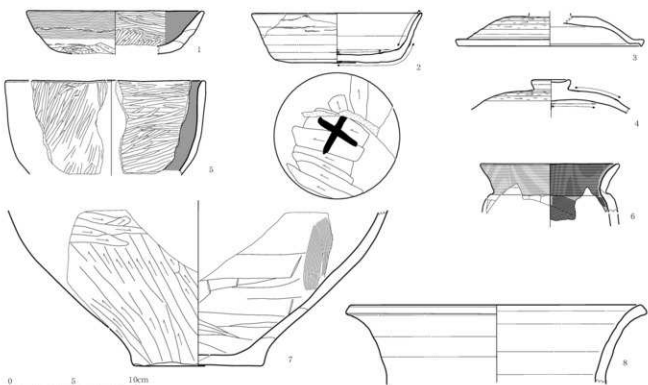
## 7. 土壌 (第47～50図、図版33)

土壌は、平面形や堆積土などの違いから、I類：縄文時代の陥し穴と考えられるものと、II類：性格不明のものに分けられる。I類の陥し穴は25基あり、A類：溝状を呈するものと、B類：円形・方形を基調とするものに分けられる。また、II類土壌は9基あるが、この中のSK72土壌からは古代の土器(第51図1～8)がまとまって出土している。なお、土壌の平面形・規模・重複関係などは









No.	器種	分數	素材	形状	口部		底高	特徴	調査	説明	
					口径	底径					
1	土器鉢	1/26	埴輪土	2/5	11.42	0.40	無	119	3070子	不明瞭な器(底) 浮輪(ヘラケツリ) 内:ヘラケツリ(赤褐色) 平底碗状	→ B.1
2	土器鉢	赤 1/60	埴輪土	2/3	11.60	1.00	有	120	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.2
3	土器鉢	赤	埴輪土	1/3	11.40	-	有	121	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.4
4	土器鉢	赤	埴輪土	1/6	12.00	-	有	122	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.5
5	土器鉢	赤 A	埴輪土	1/6	11.50	-	有	123	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.3
6	土器鉢	赤	埴輪土	1/11	11.11	-	有	124	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.7
7	土器鉢	赤	埴輪土	1/6	11.44	-	有	125	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.8
8	土器鉢	赤	埴輪土	1/22	11.22	-	有	126	3270子(底) 1200ヘラケツリ(黒) 蓋付	蓋付	→ B.6



第51図 SK72土壙出土遺物

第 8 表にまとめてある。

## 8. 溝跡

### 【SD08・10・59・60 溝跡】(第 4・52 図)

南-1 区中央部から北区南端部にかけて検出した平行する南北方向の 4 条の溝である。SD08 の西側約 26m に SD10、東側約 8m に SD60、約 15m に SD59 がそれぞれ位置している。

SD08 は長さ約 53.3m、SD10 は長さ約 39.5m 検出しているが、両端とも調査区外へ続いている。SD59 は長さ約 60.6m 検出しており、北端は調査区外へ続いているが、南端は途切れている。SD60 は長さ約 4.6m 検出しているが、南端は調査区外へ続いている。

SD08 は SD09 溝跡、SB14 建物跡と重複し、いずれよりも新しい。SD10 は SK16 土壙と重複し、これより古い。SD59 は SI61 住居跡と重複し、これより新しい。

SD08 は上幅 51 ~ 74 cm、深さ約 20 cm で、断面形は逆台形をなす。堆積土は 2 層に分けられ、地山ブロックなどを含む自然堆積の黒褐色シルトと褐色シルトである。SD10 は上幅 72 ~ 91 cm、深さ約 50 cm で、断面形は逆台形をなす。堆積土は 4 層に分けられ、いずれも地山を含む自然堆積の暗褐色

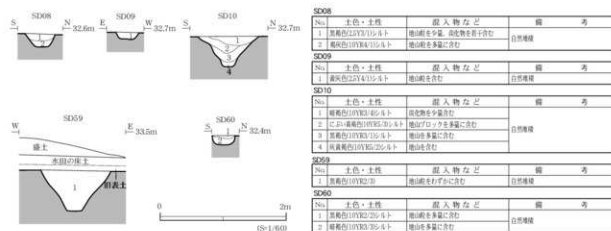


図版33 土壙・溝跡

色シルト・にぶい黄褐色シルト・黒褐色シルト・灰黄褐色シルトである。SD59 は上幅 26 ～ 98 cm、深さ約 60 cm で、断面形は逆台形をなす。堆積土は 1 層で、地山粒を含む自然堆積の黒褐色シルトである。SD60 は、上幅 30 ～ 47 cm、深さ約 13 cm で、断面形は浅めの U 字形をなす。堆積土は 2 層に分けられ、地山粒を含む自然堆積の黒褐色シルト・暗褐色シルトである。いずれからも遺物は出土していない。

#### 【SD09 溝跡】(第 4・52 図)

南-1 区東半部に位置する「L」形の溝跡で、SD08 溝跡と重複しこれより古い。南北方向の溝は、SD08 に覆られているが、西側へ曲がり、長さ約 5.4m 続いて調査区外へ続いている。上幅 38 ～ 120 cm、深さ約 10 cm で、断面形は逆台形をなす。堆積土は 1 層で、地山粒を含む自然堆積の黄灰色シルトである。遺物は出土していない。



第52図 SD08・09・10・59・60溝跡

## 9. その他の遺物



第53図 その他の出土遺物

No.	種類	遺物・部位	図	図	説明
1	縄文土器	瓦葺き溝跡部	図1	図2	瓦葺き溝跡部
2	土器	土器片	図3	図4	土器片

北区中央部の遺構確認中に縄文土器 1 点(第 53 図 1)と南区で石織(第 53 図 2)を検出した。縄文土器は胎土に繊維を含み、外面に 0 段多条の羽状縄文が施されている深鉢の破片である。胎土や施文方法から縄文時代早期末～前期前葉の土器と考えられる。石織は頁岩製の縦長のもので、先端部と基部が欠損している。

## II. 下栽遺跡

検出した遺構は、堅穴住居跡 17 軒、堅穴遺構 2 棟、堅穴状遺構 3 棟、掘立柱建物跡 26 棟以上、塀跡 1 条、材木塀跡 1 条、木棺墓 1 基、土壇 42 基、焼面 2 箇所、区画溝跡 1 条、溝跡 4 条である。

遺構は調査区のほぼ全域にわたり分布している。南区の南半部は堅穴住居跡や掘立柱建物跡をはじめとする遺構が多数確認され、堅穴住居跡や掘立柱建物跡の重複関係が見られる場合もあった。南区北半部及び北区は小型の堅穴住居跡や規模の小さな掘立柱建物跡がまばらに点在し、西-1 区では区画施設である材木塀跡とそれに伴う溝周辺に堅穴住居跡、掘立柱建物跡などが確認され、これらの各遺構には重複関係が見られた。西-2～4 区は削平により遺構等は検出されなかった。

遺物は古代の土師器・須恵器・石製品(砥石・石製垂飾品など)・土製品(土玉)・金属製品(鉄鏃・鋤先・刀子など)が出土している。また、遺構堆積土や遺構確認面から縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器などが若干ではあるが出土している。

以下、南区、北区、西区の順に遺構と遺物の説明を行う。また、堅穴状遺構は、堅穴住居跡、堅穴遺構などの可能性が考えられるが、削平等で性格が特定できなかったものごとである。

### 南区(第 55・56・57 図)

#### 1. 堅穴住居跡

##### 【S101 住居跡】(第 58 図、図版 34)

南区南半部の中央付近で検出した。SB45 建物跡、SK32 土壇と重複し、これらより古い。堆積土中に焼土、炭化物が見られ、床面から炭化材が検出されていることから、この住居跡は火災に遭っていると考えられる。なお、この住居は埋め戻されている。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈する。規模は東西が南辺で 3.2m、南北が東辺で 3.3m である。

[方向] 東辺でみると北で西へ約 9 度偏する。

[壁] 西辺はやや緩やかに立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。高さは残りのよい南壁で 15 cm である。

[堆積土] 8 層認められる。住居内の堆積土としては、1 層が地山ブロックを含む黒褐色シルトで、埋め戻されている。2・3 層が地山粒、地山ブロック、焼土、炭化物を含む暗褐色シルト・黒褐色シルトで、火災によって生じた住居の壁などの崩落土とその後の自然堆積である。カマド部分の堆積土

としては、4・5層が焼土ブロック、炭化物、白色粘土、地山ブロックなどを多量に含むカマド燃焼部崩落土、6・7層が焼土、炭化物を含むカマド煙道部崩落土である。8層が焼土、炭化物を含む暗褐色粘質シルトで、カマド燃焼部使用時の堆積と考えられる。

【床面】ほぼ平坦である。掘方埋土上面を床面としている。

【柱穴】発見されていない。

【カマド】北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなり、煙道部は煙道の一部と煙出しピットを検出した。燃焼部は、側壁下部が地山を削り出して作られ、その上に白色粘土を含む暗褐色土で構築されている。カマドの規模は、燃焼部内壁の焼き口部で幅47cm、奥壁で幅35cm、奥行55cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、長径40cm×短径33cmの楕円形の範囲が焼けて赤変、硬化している。燃焼部と煙道部との段差は10cmほどである。煙道部の煙出しピットは径26cmほどの円形を呈し、深さは15cmほどである。煙出しピットの位置から煙道部の長さは約1.2mと考えられる。

【出土遺物】遺物は少量出土しており、図示できるものとしては、床面から出土した底部の切り離し技法が静止糸切りでヘラクレス調整が加えられた須恵器環（第58図2）、堆積土から出土した非ロクロ調整の土師器環（第58図1）・甕（第58図3）、カマド内堆積土4・5層から出土した非ロクロ調整の土師器甕（第58図4）がある。

#### 【SI02住居跡】（第59図、図版36）

南区中央部の東側で検出した。SB42建物跡と重複し、これより新しい。堆積土中に焼土、炭化物が見られ、床面から炭化材を検出していることから、この住居跡は火災に遭っていると考えられる。

【平面形・規模】隅丸方形を呈する。規模は東西が北辺で2.9m、南北が東辺で3.5mである。

【方向】東辺でみると北で東へ約12度偏する。

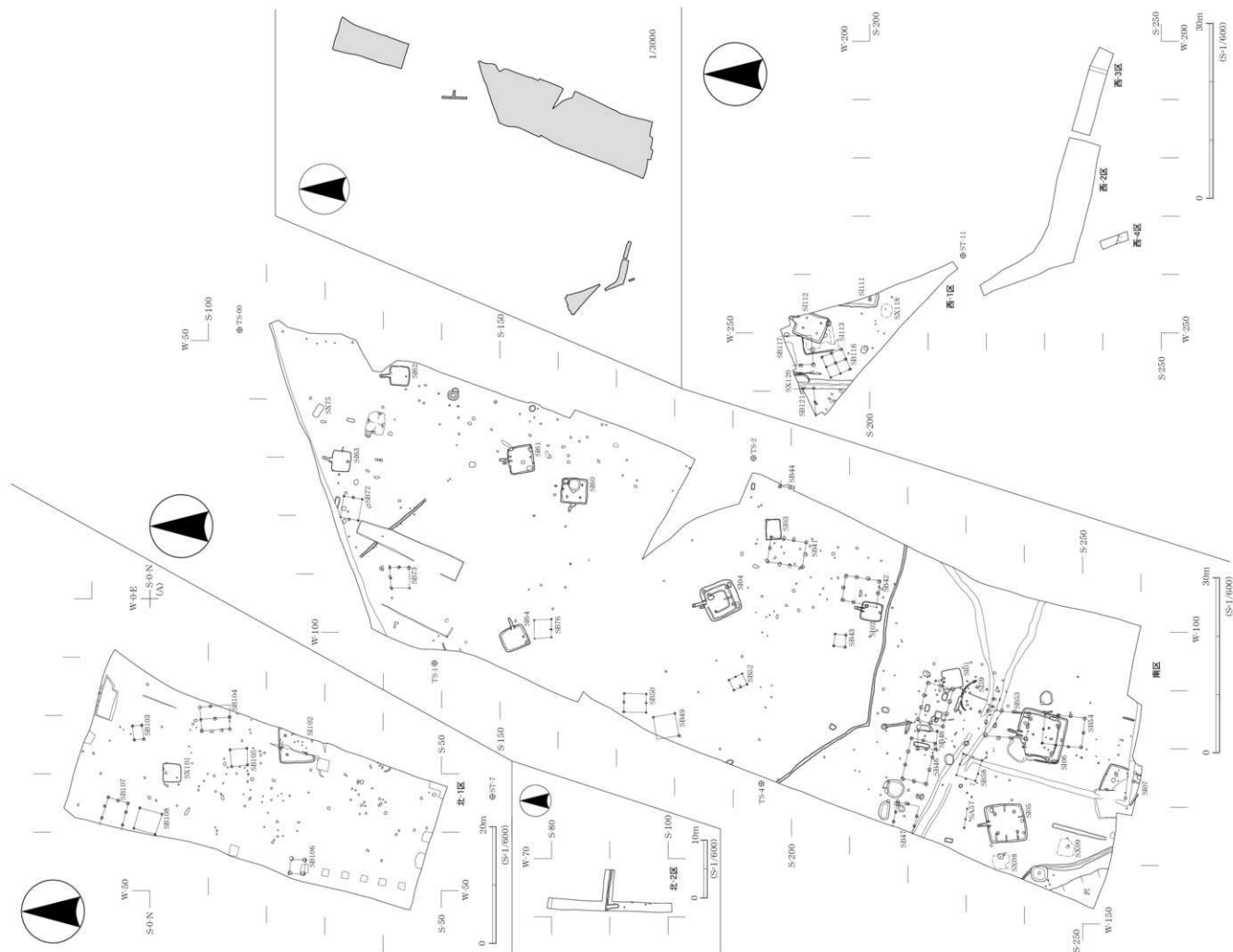
【壁】東・西辺はやや緩やかに、他はほぼ垂直に立ち上がる。高さは残りのよい南壁・西壁で27cmである。

【堆積土】11層認められる。住居内の堆積土としては、1層が灰白色火山灰層、2～4層が地山粒、炭化物、焼土、地山ブロックを含む黒色シルト・黒褐色シルトで、火災後の自然堆積である。5・6層は多量の地山ブロック、炭化材を含む明褐色シルトで、壁などの崩落土と考えられる。カマド部分の堆積土としては、7・8層が白色粘土ブロック、焼土ブロックを含むカマド燃焼部・煙道部の崩落土である。9～11層は焼土粒、炭化物、地山粒、地山ブロックを含むカマド使用時の燃焼部・煙道部の堆積と考えられる。

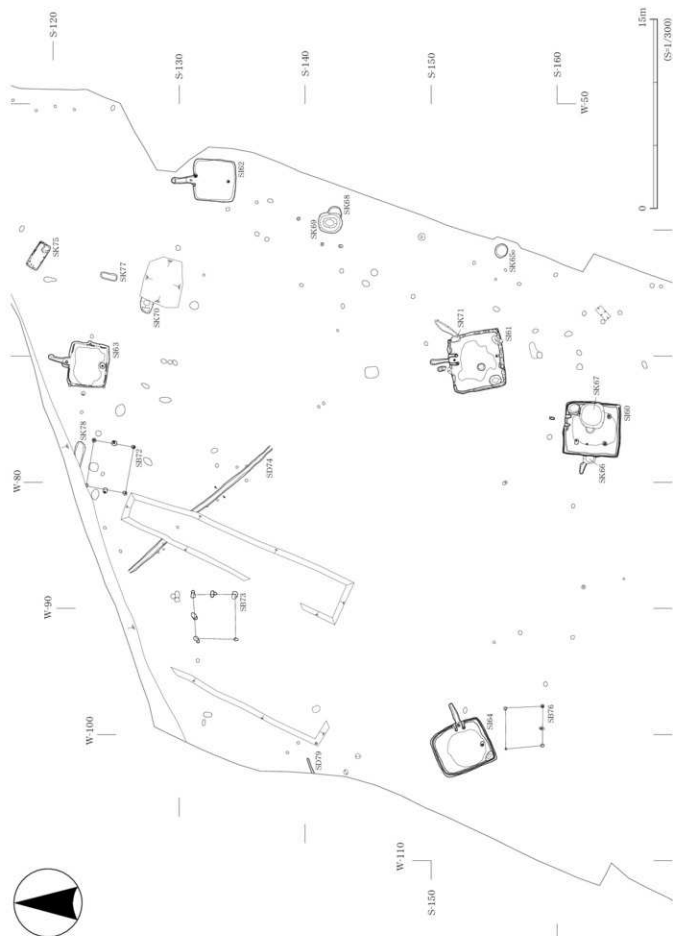
【床面】ほぼ平坦である。掘方埋土上面を床面としている。

【柱穴】主柱穴は確認されていないが、南辺中央壁際で柱穴（P1）を検出した。長辺44cm、短辺36cmのやや不整な隅丸方形を呈し、深さ20cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は径14cmの円形を呈する。柱は壁から約35cm離れている。位置関係からP1は、入口の施設に関連する据え方と考えられる。

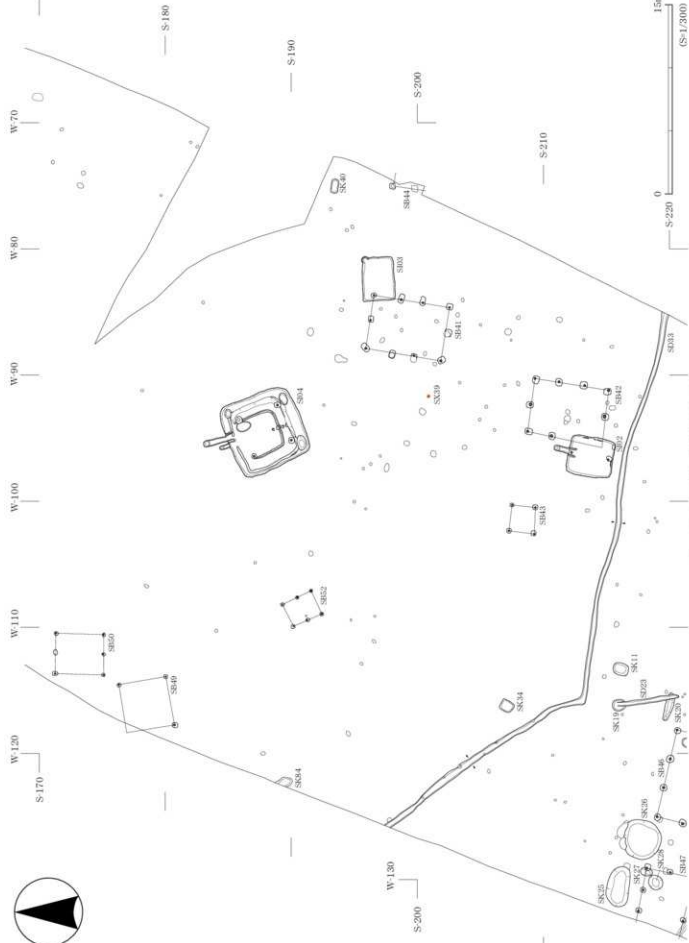
【カマド】北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は白色粘土を含む黒褐色土で構築されている。カマドの規模は燃焼部内壁の焼き口部で幅55cm、奥壁で幅45cm、奥行50cm



第54図 下駄穴遺跡跡地配置図



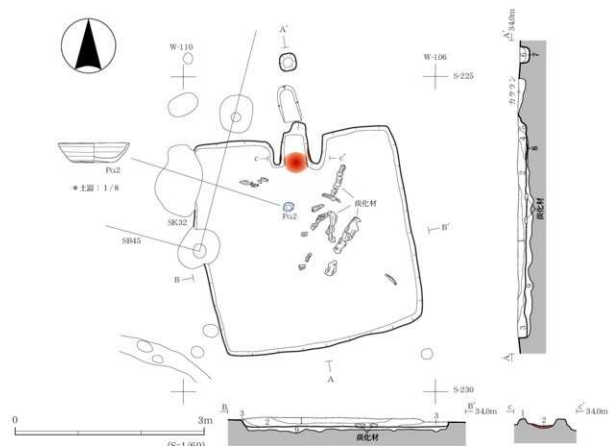
第55号 南区北半部遺構配置図



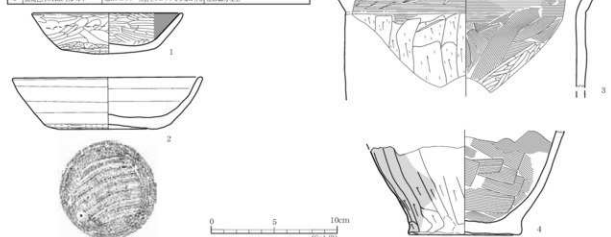
第56图 南区中央部温槽配置图



第57图 南区南半部温槽配置图



No.	土色・土性	層人物など	備考	No.	土色・土性	層人物など	備考
1	黒褐色の砂状シルト	焼付コトを伴う	人為的層	1	黒褐色の砂状シルト	台形土器土器	カマ Flice
2	黒褐色の砂状シルト	炭化材・焼付・焼土・炭化物を伴	火災跡として又は火災後の層	2	黒褐色の砂状シルト	焼付コト・黒土・カマ Fliceを伴	炭化土
3	黒褐色の砂状シルト	焼付コトを伴	層				
4	黒褐色の砂状シルト	焼付コト・黒土・炭化物を伴	カマ Fliceを伴				
5	黒褐色の砂状シルト	焼付コト・黒土を伴	カマ Fliceを伴				
6	黒褐色の砂状シルト	焼土・炭化物を伴	カマ Fliceを伴				
7	黒褐色の砂状シルト	焼土・炭化物を伴	カマ Fliceを伴				
8	黒褐色の砂状シルト	焼土・炭化物を伴	カマ Fliceを伴				
9	黒褐色の砂状シルト	焼付コト・黒土・カマ Fliceを伴	層				



No.	図録	分類	形状	口径	径差	高さ	容積	特徴	出所
1	25	土器	鉢	12	11	3.3	18	黒土・黒褐色の砂状シルト・焼付コトを伴	35-1 東1
2	26	土器	鉢	10	11	2.8	14	黒土・黒褐色の砂状シルト・焼付コトを伴	35-1 東2
3	27	土器	鉢	10	11	2.8	14	黒土・黒褐色の砂状シルト・焼付コトを伴	35-1 東2
4	28	土器	鉢	10	11	2.8	14	黒土・黒褐色の砂状シルト・焼付コトを伴	35-1 東2

第58図 SI01住居跡及び出土遺物



1 SI01住居跡(南から)



3 須恵器環P3出土状況



2 カマド焼出状況(南から)



4 炭化材焼出状況

図版34 SI01住居跡

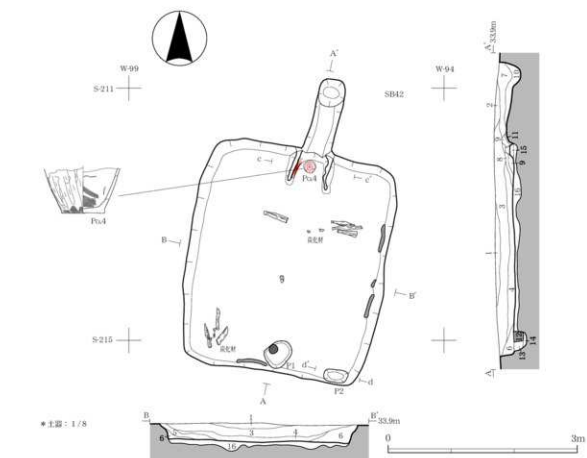


図版35 SI01住居跡出土遺物

である。燃焼部底面はほぼ平坦である。西側壁内面は焼け、赤変している。側壁構築土と同じ黒褐色土で作出したマウンド状の高まりに土器器壁(第60図4)の胴下半～底部を逆さに据えて支脚としている。煙道部との段差は20cmほどである。煙道部は長さ120cmで、底面は先端に向かって緩やかに下向きに傾斜している。煙出しピットは長径44cm、短径41cmの楕円形を呈し、深さは33cmである。

[壁材痕跡] 東辺から南辺にかけて、部分的に長さ15～48cm、幅3～6cm、深さ4cmほどの黒褐色





No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	硬褐色のシルト	硬褐色の土	
2	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	自然堆積
3	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
4	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
5	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
6	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
7	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
8	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
9	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
10	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
11	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
12	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
13	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
14	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
15	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	
16	黒色のシルト	焼土・炭化物を含む	

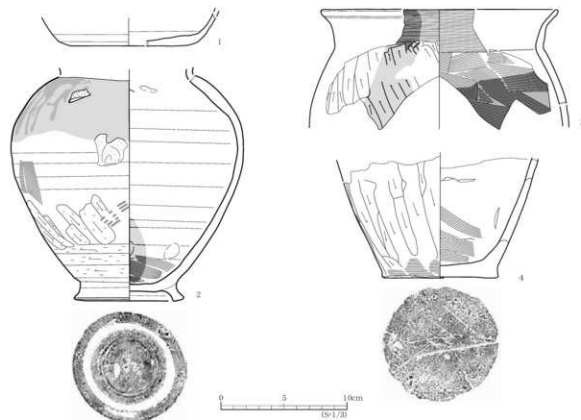
No.	土色・土性	埋入物など	備考
1	硬褐色のシルト	硬褐色の土	

第59図 S102住居跡

のシルトが認められた。壁際に据えた壁材の痕跡か、あるいはそれらが抜き取られた跡の可能性が考えられる。

〔その他の施設〕南東隅でピット（P2）を検出している。平面形は長辺 37 cm×短辺 23 cm の隅丸長方形を呈し、深さは約 9 cm である。地山を多量に含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔出土遺物〕図示できる資料は少ない。カマドからは支脚に転用された非クロク調整の土師器甕の底部（第 60 図 4）が出土している。その他に堆積土から須恵器坏（第 60 図 1）・壺（第 60 図 2）、非クロク調整の土師器甕（第 60 図 3）が出土している。



No.	器種	分器	形状	図号	図説	出土層	特徴	図説
1	須恵器	坏	口縁部	1021	有：口沿下内面（裏面）に十字 内：口沿下子 底：踵へ入りキリ十字 糸溝	1		表1
2	須恵器	壺	胴	1022	有：右半部から左半部にかけて10cm×10cmの格子状の刻み 内：口沿下子-踵付十字 底：底縁部から口沿下子まで	2		表2
3	土師器	甕	口縁部	1023	有：口沿下子-踵付十字 内：口沿下子-踵付十字 底：底縁部から口沿下子まで	3		表3
4	土師器	甕	口縁部	1024	有：口沿下子-踵付十字 内：口沿下子-踵付十字 底：底縁部から口沿下子まで	4		表4



第60図 S102住居跡出土遺物



1 SI02住居跡 (南から)



2 カマド出土状況(南から)

図版36 SI02住居跡

### 【SI03 住居跡】 (第61図、図版37)

南区中央部の東側で検出した。SB41 建物跡と重複し、これより古い。

〔平面形・規模〕 隅丸長方形を呈する。規模は東西が南辺で3.4m、南北が西辺で2.5mである。

〔方向〕 西辺でみると北で西へ約3度偏する。

〔壁〕 壁はやや緩やかに立ち上がる。高さは残りのよい東壁で12cmである。

〔堆積土〕 5層認められた。住居内の堆積土としては、1・2層が地山ブロックを多く含む黒褐色シルト・にぶい黄褐色シルトで、埋め戻されている。3層が地山粒を含む黒色シルトの自然堆積である。カマド部分の堆積土としては、4層が焼土ブロック、炭化物を含む褐色シルトで、カマド燃焼部崩落土と考えられる。5層が炭化物、焼土を含む褐色粘質シルトで、カマド使用時の燃焼部の堆積と考えられる。

〔床面〕 ほぼ平坦である。掘方埋土上面を床面としている。また、北東隅から西辺や南辺にかけて床面が特に硬化している範囲が認められた。

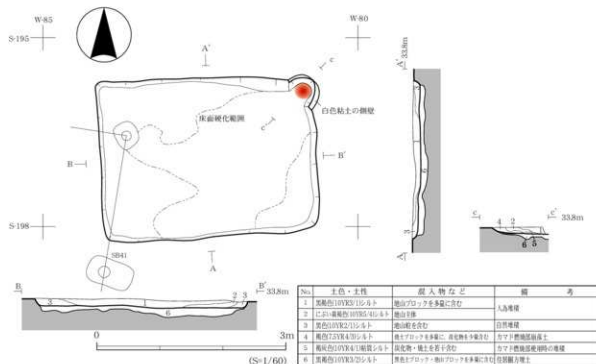
〔柱穴〕 主柱穴は発見されていない。

〔カマド〕 北東隅に付設されている。燃焼部だけを検出している。燃焼部は住居北東隅から外側に向かって「□」形に張り出し、側壁の内側には白色粘土を貼り付けている。規模は、燃焼部内壁の焚き口部で幅60cm、奥行45cmである。燃焼部の底面はほぼ平坦で、中央部の長径28cm×短径25cmの楕円形の範囲が赤変、硬化している。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

### 【SI04A・B・C住居跡】

南区中央部の中央付近で検出した。規模を拡張する建て替えが2度認められる (SI04A → SI04B → SI04C)。SI04A から SI04B への建て替えは、北辺をそのまま利用し、東辺、南辺、西辺を約1m拡張している。SI04B から SI04C への建て替えは、各辺を50cm～100cm拡張し、カマドの位置も東へ約50cm移している。最初に新しい SI04C について記載し、古い SI04A・B については確実に把握したことをのみを記す。



第61図 SI03住居跡



1 SI03住居跡 (南から)



2 カマド出土状況(南西から)

図版37 SI03住居跡

### 【SI04C住居跡】 (第62図、図版38)

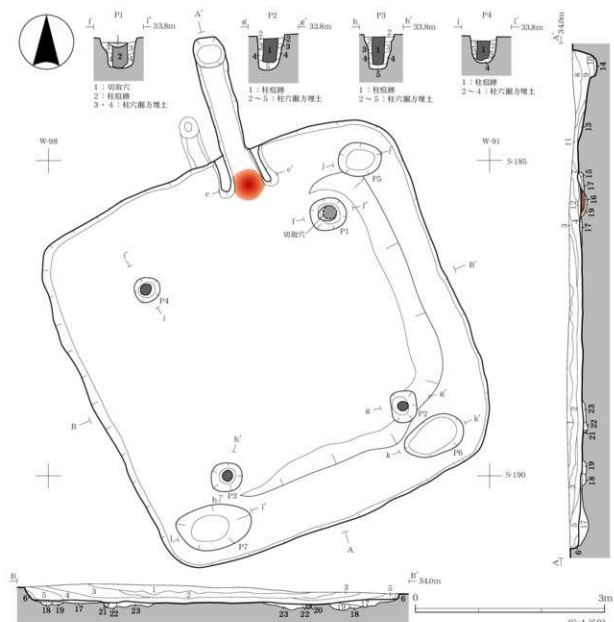
〔平面形・規模〕 ほぼ隅丸正方形を呈する。規模は東西が北辺で6.1m、南北が西辺で5.7mである。

〔方向〕 東辺でみると北で西へ約21度偏する。

〔壁〕 西壁はやや緩やかに立ち上がるが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは残りのよい西壁で26cmである。

〔堆積土〕 14層認められる。住居内の堆積土としては、1層が焼土粒を含む黒色シルト、2層が灰白色火山灰層、3・4層が地山粒、焼土粒、炭化物を含む黒褐色シルト、5・6層が地山ブロックを含む黄褐色シルト・褐色シルトで、いずれも自然堆積である。カマド部分の堆積土としては、7層が白色粘土ブロック、焼土ブロックを多量に含むカマド燃焼部崩落土、8～11層が地山ブロック、白色粘土ブロック、焼土ブロック、地山ブロックなどを含むカマド煙道部崩落土である。12～14層が焼土粒、炭化物を含むカマド使用時の燃焼部・煙道部の堆積である。

〔床面〕 中央部付近がやや凹むが、全体的にほぼ平坦である。縁辺部は SI04C 掘方埋土上面を床面と



No.	土色・土質	層・人物など	備考	No.	土色・土質	層・人物など	備考
1	黒色のIVW2シロト	焼土敷全面		14	黒色のIVW2シロト	炭化物・焼土を多量に含む	ナリ焼部奥壁の埋め戻
2	黒色のIVW2シロト	灰白色土面層		14	黒色のIVW2シロト	炭化物を多量に含む	
3	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		15	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	ナリ焼部土を呈す層
4	黒色のIVW2シロト	炭化物・炭化物を多量に含む	壁部焼土を含む住居構	16	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	ナリ焼部土を呈す層
5	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		17	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
6	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		18	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
7	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	ナリ焼部・埋め戻層	19	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
8	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		20	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
9	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		21	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
10	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		22	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
11	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む		23	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む	埋め戻層
12	黒色のIVW2シロト	焼土・焼灰を多量に含む					



第62図 SI04C住居跡



1 SI04C住居跡 (南東から)



2 カマド検出状況(南東から)



4 SI04A-B住居跡 (北西から)



3 主柱穴(P1)断面



5 B期P8-9, A期P11-12柱穴断面(西から)

図版38 SI04A・B・C住居跡

し、中央部は SI04A・B の床面を利用している。また、東辺と南辺の壁際では、掘方埋土を周辺より高く埋め戻すことで、幅約 50 cm ほどの範囲のなだらかな段をなす高まりを作り出している。

[住穴] 住居平面形の対角線上の 4 箇所 の床面で主柱穴 (P1 ~ P4) を検出した。いずれも柱痕跡が認められる。また、P1 では長径 32 cm、短径 26 cm の楕円を呈する深さ 9 cm の切取り穴を確認した。主柱穴の平面形は、P1 ~ P3 が長辺 48 ~ 57 cm、短辺 40 ~ 51 cm の隅丸方形、P4 が径 40 cm の不整形円形を呈する。深さは 43 ~ 55 cm である。柱痕跡は径 18 ~ 23 cm の円形や長径 23 cm、短径 20 cm の楕円を呈し、深さは 32 ~ 43 cm である。

[カマド] 北辺中央東寄り に付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は白色粘土を含む灰黄褐色土で構築している。規模は、燃焼部内壁の焚き口で幅 55 cm、奥壁で幅 45 cm、奥行 55 cm である。燃焼部底面は一度補修されている。新しい時期の底面はほぼ平坦で、燃焼部から煙道部にかけて緩やかに上向きに傾斜し、そのまま煙道底面に続いているが、古い時期の底面は奥壁で約 4 cm の段差がある。側壁・底面共に強く焼けて亦変している。煙道部は長さ 1.9 m で、底面は先端に向かって緩やかに下向きに傾斜している。煙出しピットは径 50 cm の円形を呈し、深さは 40 cm である。

[その他の施設] 北東隅 (P5)、南東隅や西より (P6)、北西隅 (P7) の 3 箇所 で土層を検出した。P5 の平面形は長径 65 cm、短径 53 cm の楕円形を呈し、深さ 7 cm である。炭化物・焼土ブロックを多量に含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。P6 の平面形は長径 98 cm、短径 60 cm の楕円形を呈し、深



No.	図種	素材	形状	寸法	特徴	時期	
1	陶器	黄褐色土	1/2	122	42	底・縁に黒い点状の痕跡あり	Ⅱ-1
2	土器	黄褐色土	1/2	122	42	底・縁に黒い点状の痕跡あり	Ⅱ-1
3	土器	黄褐色土	1/2	122	42	底・縁に黒い点状の痕跡あり	Ⅱ-1
4	土器	黄褐色土	1/2	122	42	底・縁に黒い点状の痕跡あり	Ⅱ-1
5	土器	黄褐色土	1/2	122	42	底・縁に黒い点状の痕跡あり	Ⅱ-1
6	土器	黄褐色土	1/2	122	42	底・縁に黒い点状の痕跡あり	Ⅱ-1

第63図 SI04C住居跡出土遺物

さ 30 cmである。P7の平面形は長径 120 cm、短径 70 cmの楕円形を呈し、深さ 34 cmである。共に地山粒、地山ブロックを多量に含む暗褐色・黒褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】遺物の出土が少なく、図示できる資料も少ない。床面から、非ロクロ調整の土師器甕の底部（第 63 図 4）、P6 堆積土から非ロクロ調整の土師器甕（第 63 図 2）が出土している。堆積土からは底部の切り離し技法が静止糸切りで、回転ヘラケズリが施されている須恵器杯（第 63 図 1）と鉄製の軸部（第 63 図 5）が出土している。掘方埋土から非ロクロ土師器甕（第 63 図 3）が出土している。

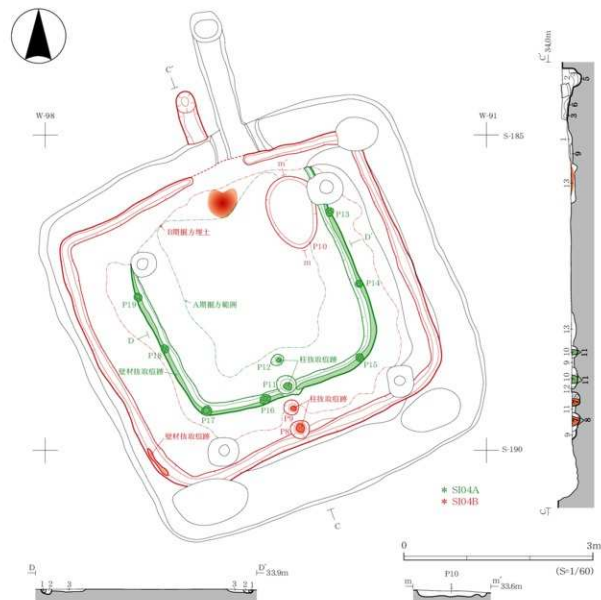
【SI04B 住居跡】（第 64 図、図版 38）

【平面形・規模】隅丸方形形状を呈する。規模は東西が南辺で 5.0m、南北が西辺で 4.4mである。

【方向】東辺でみると北で西へ約 22 度偏する。

【床面】SI04C 拡張時に部分的に削平されているが、燃焼部底面の焼面などが残存していることから、縁辺部は SI04B 掘方埋土上面を床面とし、住居中央部は SI04A の床面を再利用したと考えられる。

【柱穴】主柱穴は確認されていないが、南辺中央付近の壁際の床面に柱穴を 2 個（P8、P9）確認した。P8 は壁際に位置し、平面形は径 30 cm の円形を呈し、深さ 12 cm である。径 14 cm の円形を呈し、深さ 12 cm の柱の抜き取り痕跡が認められた。P9 は壁から約 60 cm 内側に位置し、平面形は径 23 cm の円形で、深さ 12 cm である。径 10 cm の円形を呈し、深さ 12 cm の柱の抜き取り痕跡が認められた。P8・9 は、位置関係からみて、この住居の入り口の施設に関連する据え穴の可能性が考えられる。



SI04A - D (D)				P10 (mm)			
No.	土色・土質	層人物など	備考	No.	土色・土質	層人物など	備考
1	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	1	10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
2	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	2	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
3	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	3	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土

SI04A - B (C)				P10 (mm)			
No.	土色・土質	層人物など	備考	No.	土色・土質	層人物など	備考
1	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	8	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
2	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	9	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
3	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	10	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
4	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	11	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
5	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	12	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
6	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	13	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土
7	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土	14	黄褐色の10V32シルト	掘方埋土	掘方埋土

第64図 SI04A・B住居跡

【カマド】拡張以前の SI04A に付設された北辺中央部のカマドをそのまま使用している。煙道の一部、煙出しピットと、長軸 50 cm、短軸 48 cm の不整形を呈する燃焼部底面の赤色硬化した焼面を検出した。煙道は長さ約 50 cm 残存しており、幅 30 cm、深さ 10 ~ 20 cm で、煙出しピットは長径 35 cm、短径 30 cm の楕円形を呈し、深さ 30 cm である。



第65図 SI04B住居跡出土遺物

〔貯蔵穴〕カマド東側の1箇所（P10）で確認した。平面形は長径116cm、短径76cmの楕円形を呈し、深さは約10cmである。地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

〔周溝・壁材痕跡〕カマドが付設されていた北辺中央を除いて全周する。上幅15～25cm、深さ約7cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロック・地山粒を含む暗褐色のシルトで埋め戻されている。また、南西隅付近の周溝内の壁際に沿って、幅4～8cm、深さ約5cm、長さ55cmにわたって壁材の抜き取り跡と考えられる暗褐色のシルトが認められた。

〔出土遺物〕出土した遺物は少ないが、図示できる資料としては、煙道堆積土から非クロロ調整の土師器甕（第65図1）が出土している。

〔SI04A住居跡〕（第64図、図版38）

〔平面形・規模〕隅丸方形を呈する。規模は東西が南辺で3.4m、カマドの位置から推定すると南北が約3.8mである。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約23度偏する。

〔床面〕床面はSI04B・C拡張時に部分的に削平されていると考えられるが、カマド燃焼部底面の焼面などが残存していることから、周辺部は掘方埋土上面、住居中央部は地山を床としていたと考えられる。

〔柱穴〕後述する周溝の東・南・西辺埋土上面で、ほぼ等間隔に並ぶ壁柱穴を7個（P13～P19）と南辺中央付近の壁際の床面で柱穴を2個（P11、P12）検出した。壁柱穴の平面形は径20～25cmの円形を呈し、残存する深さは約10cmである。柱痕跡はいずれでも認められない。P11は壁際に位置し、平面形は径30cmの円形を呈し、深さ10cmである。径15cmの円形を呈し、深さ10cmの柱の抜き取り跡が認められた。P12は壁から約55cm内側に位置し、平面形は長径22cm、短径18cmの楕円形で、深さ10cmである。径10cmの円形を呈し、深さ10cmの柱の抜き取り跡が認められた。P11・12は、位置関係からみてこの住居の入り口の施設に関連する掘え穴の可能性が考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕住居拡張時に壊された北辺を除いて、東・南・西辺で確認している。上幅15～25cm、深さ6cmほどで、断面形はU字形を呈する。地山ブロック混じりの暗褐色のシルトで埋め戻されている。また、東・南・西辺の周溝内の壁際に沿って幅5～10cm、深さ5cmほどの壁材の抜き取り跡と考えられる暗褐色のシルトが認められた。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔SI05住居跡〕（第66・67図、図版39）

南区南半部の西側で検出した。堆積土や床面から炭化材、焼土ブロックなどが多量に検出されることから、この住居は火災に遭っていると考えられる。また、本住居跡は埋め戻されている。

〔平面形・規模〕やや菱形を呈する隅丸方形である。規模は東西が南辺で6.2m、南北が西辺で6.3mである。

〔方向〕東辺でみると北で西へ約4度偏する。

〔壁〕壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りのよい西壁で30cmである。

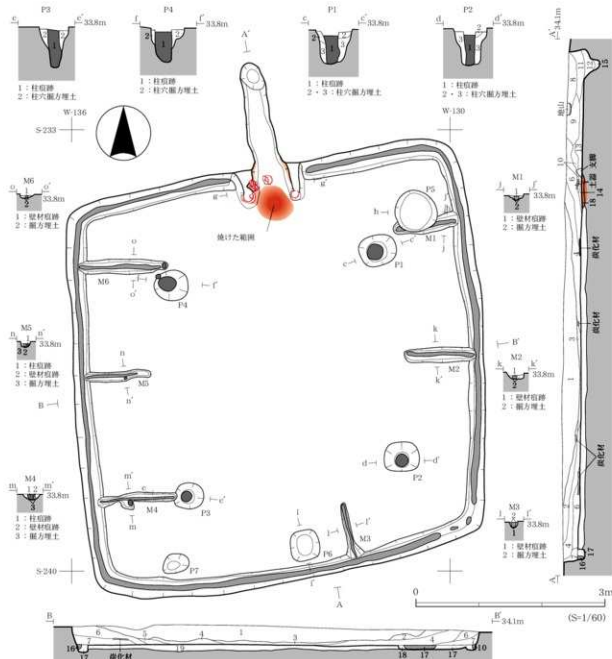
〔堆積土〕16層認められた。住居内の堆積土としては、1層が地山ブロックを多量に含む火災後に埋め戻された黒褐色シルトである。2層が炭化物、地山粒を含む暗褐色シルトで火災後の自然堆積である。3層が炭化材や焼土、地山粒を含む暗褐色の崩落土と考えられ、4層が炭化材を多量に含むにぶい黄褐色シルトで、壁または屋根の崩落土と考えられる。5層が焼土を多量に含むにぶい赤褐色シルトで屋根葺土、6層が炭化物を多量に含む褐色のシルトで屋根の崩落土と考えられる。7層が炭化物、地山粒を含む黒褐色シルトで壁崩落土である。カマド部分の堆積土としては、8・9・11～13層が地山ブロック、白色粘土、焼土ブロックを含む煙道崩落土、10層が焼土、炭化物を含む白色粘土でカマド天井崩落土である。14・15層が炭化物、焼土を含むカマド使用時の堆積である。

〔床面〕ほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面としている。

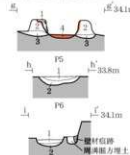
〔柱穴〕住居平面形の対角線上の4箇所（床面）で主柱穴（P1～P4）を検出した。平面形は、P1が長辺55cm、短辺45cm、P2が長辺50cm、短辺40cmの隅丸方形をなし、P3が長径45cm、短径42cm、P4が長径55cm、短径50cmの不整形円形をなす。深さは54～64cmである。いずれも柱痕跡が認められ、径18～28cmの円形や長径30cm、短径24cmの楕円を呈する。

〔カマド〕北辺中央に付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部焚き口より手前に赤変し硬化した範囲が広がることから、燃焼部は補修されて規模が小さくなった可能性が考えられる。

燃焼部の側壁は白色粘土を含むにぶい黄褐色土で構築している。燃焼部の焚き口部両側は、芯材として非クロロ調整の土師器甕（第69図17・18）を逆さに据えて補強されている。また、燃焼部西側壁内面は粘土と土師器甕（第68図13、第70図21）を用いて補修されている。カマドの規模は、燃焼部内壁の焚き口部で幅62cm、奥壁で幅53cm、奥行が55cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、長径55cm、短径50cmの楕円形の範囲で焼面が見られた。側壁も底面共に焼けて赤変している。側壁構築土と同じ白色粘土を含むにぶい黄褐色土で作ったマウンド状の高まりの上に非クロロ調整の土師器甕（第68図12）底部を逆さに据えて支脚としている。燃焼部底面は段差なく煙道底面へ続いている。煙道部は長さ1.65m、高さ0.2mで、底面は燃焼部から先端にかけてはほぼ平坦である。

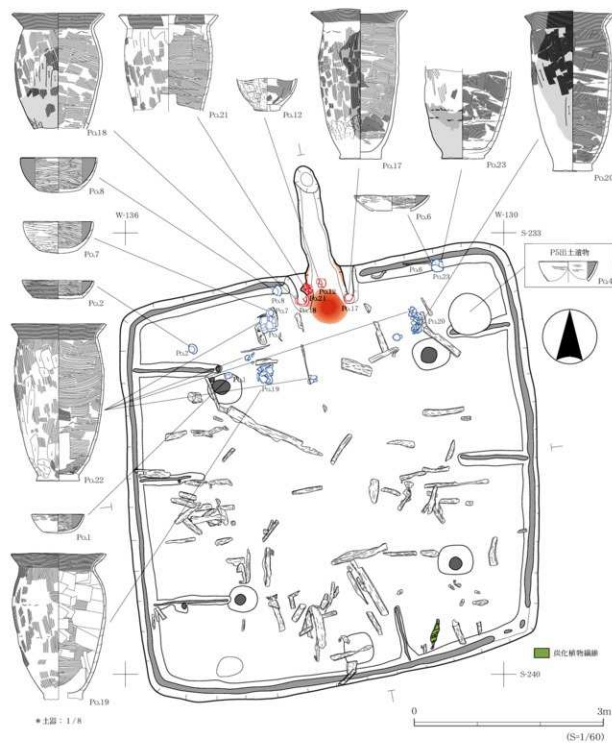


No.	主色・土層	層入物など	備考	No.	主色・土層	層入物など	備考
1	黄褐色のIV区シルト	黒山・焼土・焼物・コウロクを伴う	火焔層	11	黄褐色のIV区シルト	焼物・焼土・コウロクを伴う	炉・アトク・土間上アトクを伴う
2	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	木炭層の付着層	12	白・黄褐色のIV区シルト	焼物・焼土・コウロクを伴う	炉・アトクを伴う
3	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	焼土・焼土・焼土を伴う	13	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
4	白・黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む	14	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
5	白・黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む	15	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
6	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む	16	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
7	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む	17	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
8	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む	18	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
9	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む	19	黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・土間上アトクを伴う	炉・アトクを伴う
10	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炭化物を多量に含む				



第66図 S05住居跡

No.	主色・土層	層入物など	備考
1	白・黄褐色のIV区シルト	炭化物・焼土・コウロクを伴う	炉・アトクを伴う
2	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炉・アトクを伴う
3	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炉・アトクを伴う
4	黄褐色のIV区シルト	炭化物を多量に含む	炉・アトクを伴う



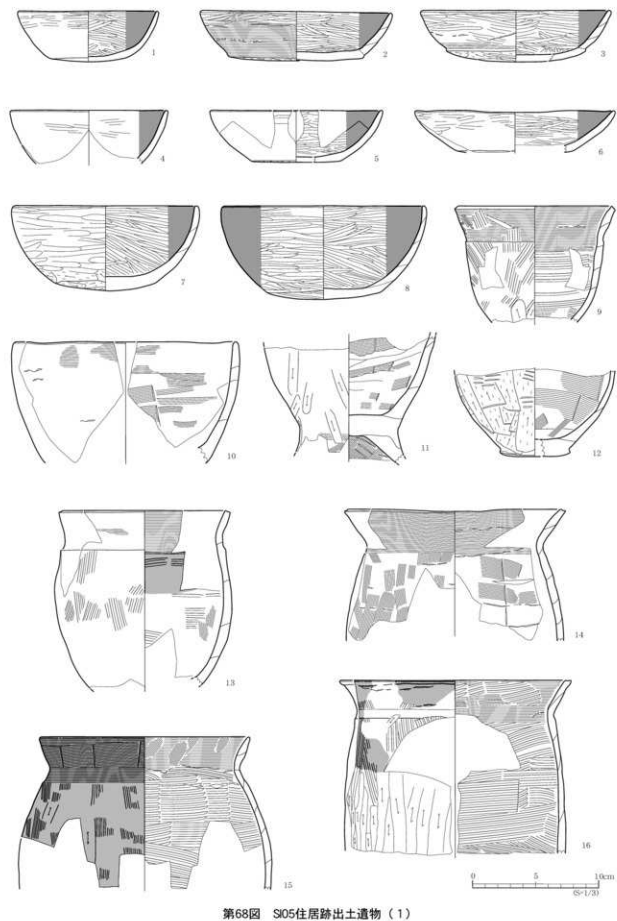
第67図 S05住居跡遺物及び炭化材出土状況

煙出しピットは長さ 48 cm、短径 34 cm の不整形円形を呈し、深さ 40 cm である。

[周溝・壁材痕跡] カマドが付設されていた北辺中央を除いて全周する。上幅 22 ~ 28 cm、深さ 7 ~ 11 cm で、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む褐色のシルトで埋め戻されている。また、南東隅でまばらになるが、周溝内の壁際に沿って続く、幅 6 ~ 11 cm、深さ 8 ~ 11 cm の壁材痕跡と考え



図版39 SI05住居跡

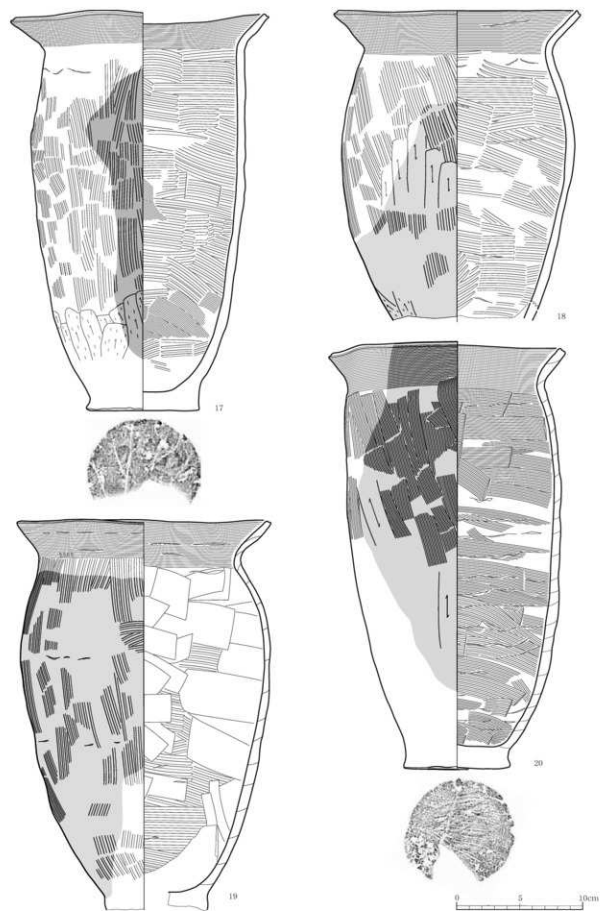


第68図 SI05住居跡出土遺物(1)



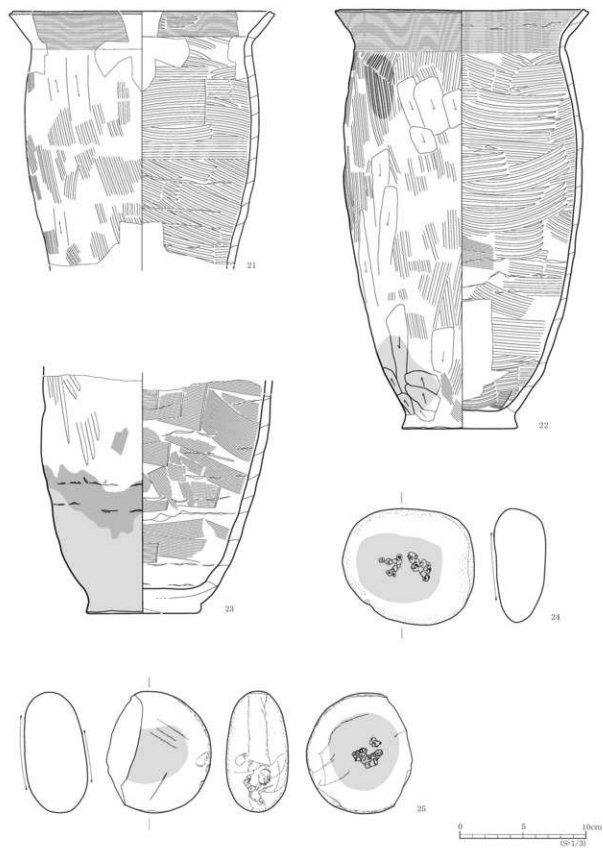
図版40 S105住居跡出土遺物 (1)

1~3, 7~9, 11, 13, 15, 17: 5~1.0



第69図 S105住居跡出土遺物 (2)





第70圖 S105住居跡出土遺物（3）



圖版41 S105住居跡出土遺物（2）

19、20、22、23：S-1/3  
24、25：S-1/2

No.	図様	分類	形状	形状	材質		特徴	出所	
					口径	高さ			
1	土師器	埴	浅鉢	直径約13.5	5.4	11.2	6.4	40	東1
2	土師器	埴	浅鉢	直径約12.5	2.0	14.0	10.0	13.9	東1
3	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	東1
4	土師器	埴	浅鉢	直径約12.5	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
5	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
6	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
7	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
8	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
9	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
10	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
11	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
12	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
13	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
14	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
15	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
16	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
17	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
18	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
19	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
20	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
21	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
22	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
23	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
24	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1
25	土師器	埴	浅鉢	直径約14.0	11.4	11.4	11.4	11.4	東1

第4表 S05住居跡出土土物観察表

られる暗褐色シルトが認められた。

[その他の溝] 周溝からほぼ直角に分岐している間仕切りと考えられる溝を東辺で2条、南辺で1条、西辺で3条検出している。東辺北側のM1はP5に横されているが、幅8～28cm、長さ約100cm、深さ4～9cm、M1から約2m南側のM2は、幅20～24cm、長さ105cm、深さ約10cmである。南辺東半部のM3は、幅8～28cm、長さ87cm、深さ約8cm、西辺南半部のM4は幅8～15cm、長さ123cm、深さ約8cm、M4から約2m北にある中央部のM5は幅11～15cm、長さ105cm、深さ約8cm、M5から約1.7m北側のM6は幅13～24cm、長さ141cm、深さ約8cmである。いずれも周溝と同様に褐色色のシルトで埋め戻されており、幅4～6cmの柱痕跡と思われる暗褐色シルトが溝状に認められる。この中のM4は、北西隅の支柱へ取り付くように続いている。また、M4では西半部南側に接して、M5では東半部南側に接して、M6では東端部とそのすぐ南西側に径4～8cmほどの柱痕跡が認められる。

[その他の施設] 北東隅(P5)と南東隅付近(P7)で2基の土壇を検出している。いずれも埋め戻されている。P5は平面形が径68cmの円形を呈し、深さ20cmで、埋土は地山小ブロック、炭化物、焼土ブロック、白色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色・褐色シルトである。P7は平面形が長径43cm、短径30cmの不整形円形を呈し、深さ10cmで、埋土は焼土、炭化物などを含む暗褐色シルトである。

以上の他に南辺中央付近壁際の床面でP6を検出した。平面形は一边が45cmの隅丸方形を呈し、深さは13cmほどである。堆積土は炭化物・焼土を含む暗褐色・にぶい黄褐色のシルトで、自然堆積とみられる。壁とピットの中心の距離は約50cmで、その位置と形状から入り口の施設に関連する据え穴から施設を抜き取った跡とみられる。

[出土土物] 遺物は比較的多量に出土している。床面からは非ロクロ調整の土師器甕(第68図14・15、第69図20、第70図22)、磨石(第70図24)、床直上から非ロクロ調整の土師器坏(第68図1・2・6)・椀(第68図7・8)・甕(第69図19、第70図23)、P5からは非ロクロ調整の土師器坏(第68図4)が出土している。カマドからは、焼き口部の補強に利用された非ロクロ調整の土師器

甕(第68図13、第69図17・18)の他に、側壁の補修に利用された非ロクロ調整の土師器甕(第70図21)、支脚とし利用された非ロクロ調整の土師器甕(第68図12)や崩落土から非ロクロ調整の土師器坏(第68図3・5)・台付甕(第68図11)、磨石(第70図25)が出土している。堆積土からは非ロクロ調整の土師器鉢(第68図9・10)・甕(第68図16)などが出土している。

【SI06A・B・C住居跡】

南区南半部の中央付近で検出した。SB53・54建物跡と重複し、いずれよりも新しい。この住居跡は、カマドが付設される北辺以外の東辺、西辺、南辺を拡張し、主柱穴も位置を変えて新たに造り直している(SI06A→SI06B)。その後、更にほぼ同位置で主柱穴(P1～P4)を再び建て替えている(SI06B→SI06C)。

拡張や建て替えにより古いSI06A及びSI06Bの詳細については不明なところが多いため、最初に新しいSI06Cについて記載し、古いSI06A・Bについては確実に把握したことのみを記す。また、床面に認められた焼け面や炭化物、焼土などの存在、堆積土の状況から、SI06C住居跡は火災に遭っていると考えられる。

【SI06C住居跡】(第71・72図、図版42)

[平面形・規模] 後世の擾乱で北西隅が失われているが、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西が南辺で8.3m、南北が東辺で8.0mである。

[方向] 東辺でみると北で東へ約17度偏する。

[壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がっている。高さは残りの良い東壁で20cmほどである。

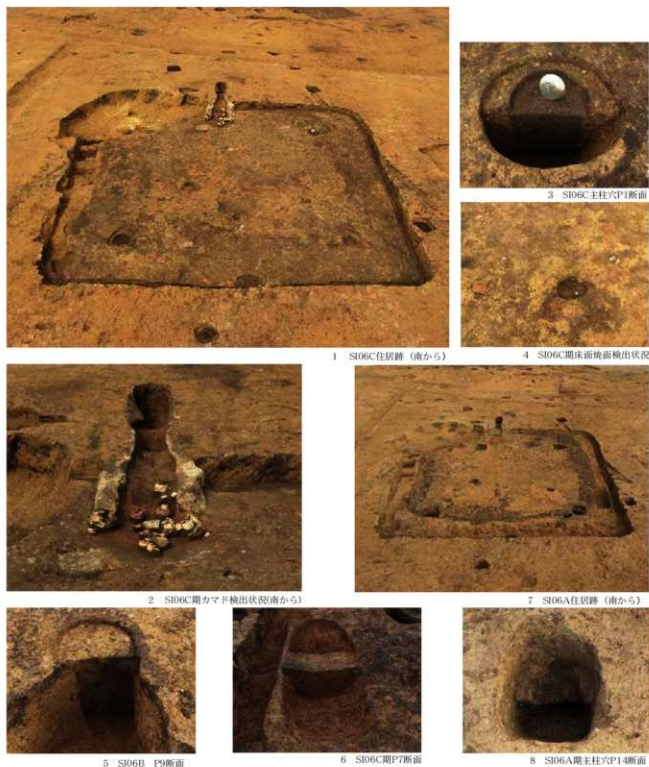
[堆積土] 13層認められる。住居内の堆積土としては、1層が灰白色火山灰層、2～4層が地山粒、炭化物、焼土を含む暗褐色シルトで、火災時は火災後の自然堆積である。カマド部分の堆積土としては、5・7層が白色土、焼土ブロック、炭化物を含むカマド燃焼部の崩壊土、6・8・10・11層が白色粘土・焼土、炭化物を含むカマド煙道部の崩壊土である。9層が白色粘土、炭化物、焼土を含むカマド燃焼部・煙道部崩壊土で、12・13層が地山粒や粘土ブロックを含むカマド使用時の煙道部及び燃焼部の堆積である。

[床面] ほぼ平坦で、中央部が貼床、周辺部は東辺付近が地山、その他が掘方埋土上面を床面としている。また、床面中央の3m四方の範囲に8cm×10cm～19cm×24mほどの小規模な焼面を9カ所検出した。

[柱穴] 住居平面形の対角線上の4箇所で主柱穴(P1～P4)を検出している。P1～P3は床面で検出しているが、北西隅のP4は擾乱の下の地山面で検出した。柱穴の平面形は長辺37～62cm、短辺28～45cmの隅丸方形を呈し、深さは45～55cmである。いずれも柱痕跡が認められ、P1～P3では長径30～35cm、短径30～33cmの不整形円形を呈し、P4では長径13cm、短径11cmの円形を呈する。

[カマド] 北辺中央に付設され、同位置で二度造り替えられている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は白色粘土で構築されている。燃焼部西側の焼き口部は、芯材として、非ロクロ調整の土師器甕(第74図18)を逆さに据えて白色粘土を含むにぶい黄褐色土で補強されている。東側壁の焼き口部は壊されて失われているが、その周辺には焼き口部の補強のために芯材として据えられたと思わ

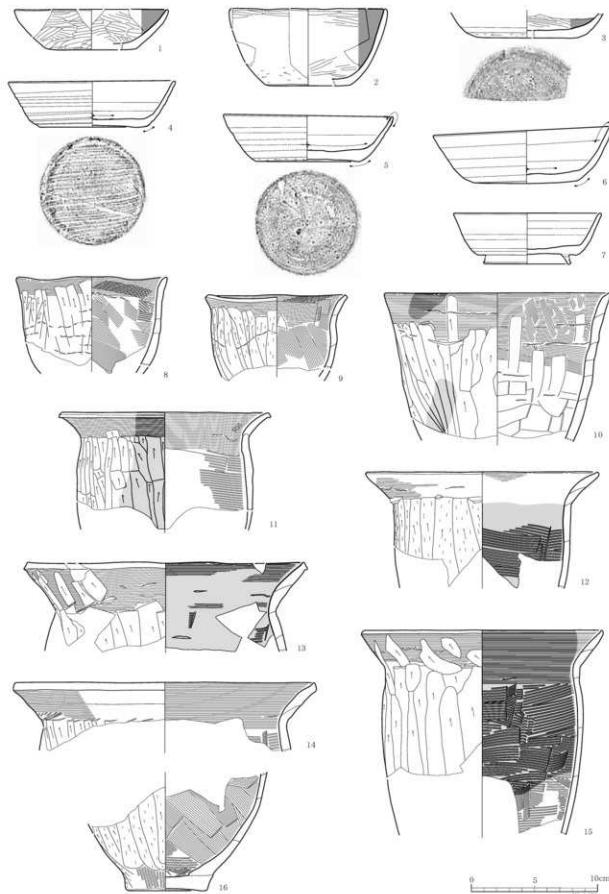




図版42 SI06A・B・C住居跡

は径 33 cm 円形を呈し、深さ 40 cm である。煙道部の構造は堆積土の状況から半地下式のものと考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕攪乱によって壊された北西部は不明であるが、カマドが付設されている北辺中央以外は全周していたとみられる。上幅 25 ～ 36 cm、深さ 12 ～ 18 cm で、断面形はU字形を呈する。地山小ブロック、炭化物、焼土を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。また、周溝内の壁際に沿って



第73図 SI06C住居跡出土遺物(1)





図版43 SI06C住居跡出土遺物(1)

4-9, 15:1/3

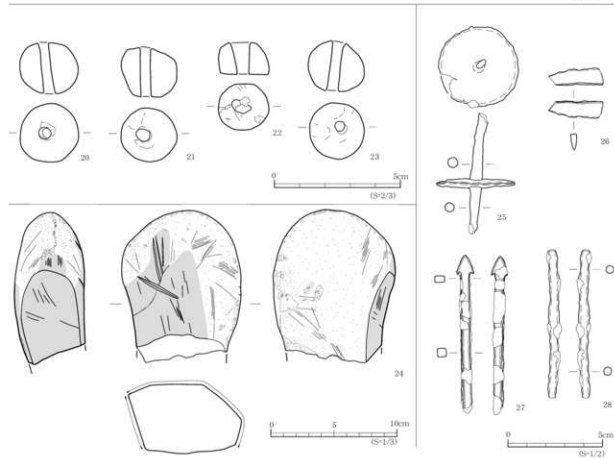
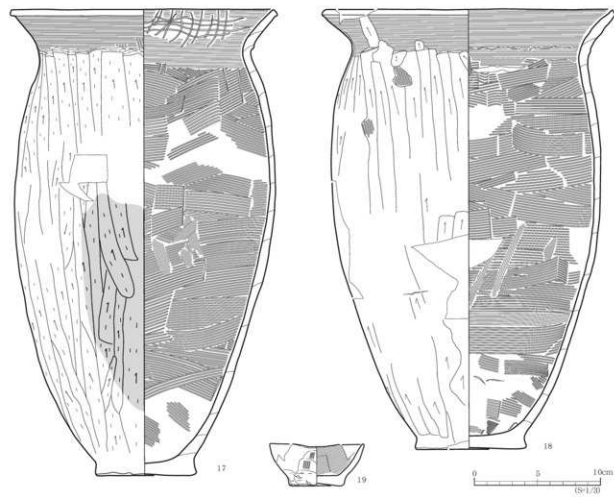
溝状に続く幅 4 ~ 11 cm、深さ 12 ~ 18 cm の壁材痕跡と考えられる黒褐色シルトが西辺と北辺西半部を除いて認められる。

〔その他の溝跡〕周溝からほぼ直角に分岐し、北東隅の主柱穴の柱に取り付く溝跡(M1)を検出している。上幅 10 ~ 13 cm、長さ 105 cm、深さ 3 ~ 5 cm で、地山粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。材の痕跡などは検出されなかった。

〔その他の施設〕カマド東脇(P6)、南東隅付近(P7)、南西隅付近(P10、P11)で土壇を4基検出している。P6は平面形が径 68 cm の円形を呈し、深さ 20 cm である。地山小ブロック、炭化物、焼土ブロック、白色粘土ブロックを含む黄褐色シルト・褐色シルトで埋め戻されている。P7は平面形が長径 43 cm、短径 30 cm の不整形円形を呈し、深さ 10 cm である。焼土、炭化物などを含む暗赤褐色のシルトで埋め戻されている。P10は平面形が長径 70 cm、短径 56 cm の楕円形を呈し、深さは 23 cm である。地山粒を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。P11は平面形が長径 55 cm、短径 53 cm の不整形楕円形を呈し、深さは 25 cm である。地山粒、地山ブロック、炭化物を含む黒褐色の粘質シルト・黄褐色シルトで埋め戻されている。

以上の他に南辺中央東寄りの壁際の床面で P5 を検出した。P5 は壁から約 35 cm 離れている。平面形は長辺 47 cm、短辺 29 cm の隅丸長方形を呈し、深さは 24 cm である。白色粘土ブロックや地山粒、焼土、炭化物を含む暗褐色のシルトで埋め戻されている。柱やその他の部材の痕跡は認められないが、位置からみて入り口の施設に関連する据え穴の可能性が考えられる。その場合、柱や部材が抜き取られ、その後埋め戻されたものと考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から比較的多く出土しているが、床面から出土した遺物は少ない。また、北西部



第74図 SI06C住居跡出土遺物(2)



図版44 S106C住居跡出土遺物(2)

No.	器種	形状	材質	規格	寸法		重量	特徴	図番	図名
					径	高さ				
1	土師器	罎	土	300	116	112	0.3	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表6
2	土師器	罎	土	240	148	120	0.60	片ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ 西ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表6
3	土師器	罎	土	180	123	100	0.15	片ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ 西ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
4	土師器	罎	土	160	133	84	0.17	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
5	土師器	罎	土	140	116	82	0.27	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
6	土師器	罎	土	140	142	85	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
7	土師器	罎	土	130	110	70	0.3	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
8	土師器	罎	土	120	110	70	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
9	土師器	罎	土	120	112	70	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
10	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
11	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
12	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
13	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
14	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
15	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
16	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
17	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
18	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
19	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
20	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
21	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
22	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
23	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
24	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
25	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
26	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
27	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7
28	土師器	罎	土	110	110	60	0.15	片ハナミヤギ 西ハナミヤギ 底ハナミヤギ-須恵器 底ハナミヤギ	-	表7

第5表 S106C住居跡出土遺物観察表

の擾乱からまとまって出土した遺物は、本来的には本住居跡に帰属する可能性が高いとみられることから、参考資料としてここで取り上げることにした。

床面からは非ロクロ調整の土師器罎(第73図10)が出土している。カマドからは非ロクロ調整の土師器鉢(第73図9)と甕(第73図11・16、第74図17・18)が出土している。また、P5の抜取り穴から底石(第74図24)が出土している。

堆積土からは、ロクロ調整の土師器罎(第73図3)や非ロクロ調整の土師器罎(第73図1・2)・甕(第73図12~14)、須恵器罎(第73図6)・高台罎(第73図7)や土玉(第74図20~23)、鉄製品の紡錘車(第74図25)・刀子(第74図26)・鎌(第74図27)・棒状製品(第74図28)などが出土している。また、P1の柱痕跡から須恵器罎(第73図5)が出土している。擾乱からは底部が静止糸切りの須恵器罎(第73図4)や非ロクロ調整の土師器鉢(第73図8)やミニチュア土器(第74図19)が出土している。

【S106B住居跡】(第71・72図、図版42)

本住居跡では南半部の2箇所だけで主柱穴(P8・P9)を検出している。S106Cの南西主柱穴P3と重複し、これより古い柱穴P9と、南東主柱穴P2の南西に隣接するP8である。P9の平面形は径35cmの円形を呈し、深さは60cmである。柱痕跡は径10~12cmの円形を呈する。P8の平面形は長径33cm、短径26cmの楕円形を呈し、深さ50cmである。P8では柱の切り取り穴が認められる。

なお、北半部でこれらに対応する主柱穴については、古い住居の主柱穴をそのまま使用した場合と、最も新しい住居の主柱穴に完全に継がれた場合が考えられる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S106A住居跡】(第71・72図、図版42)

【平面形・規模】北西隅が失われているが、隅丸方形を呈すると考えられ、規模は東西が南辺で

6.7m、南北が東辺で6.4mである。

[方向] 東辺でみると北で東へ約17度偏する。

[床面] SI06B・C構築時に削平されているため不明である。

[柱穴] 住居平面形の対角線上の4箇所まで柱穴(P12～P15)を検出している。P12～P14はSI06C貼床下、P15はC期床面で検出した。柱穴の平面形は、P12、14が長径31～33cm、短径24～31cmの隅丸方形を呈し、P13が長径37cm、短径28cmの楕円形を呈する。深さは32～47cmである。P12・13・15では柱の切り取り穴を確認している。柱痕跡は径10～14cmの円形を呈する。

[周溝] 北西隅を除いて全周する。上幅11～25cmで、深さは5～14cmである。地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。壁材痕跡は検出されていない。

[その他の施設] 南辺中央東よりのB・C期の貼床下からピットを2個(P16、P17)検出した。P16は長径33cm、短径27cm、P17は長径27cm、短径20cmの不整形円形を呈し、深さは13～18cmである。地山を含む黒褐色のシルトで埋め戻されている。壁とピットの中心の距離はP16では約87cm、P17では110cm離れている。ピット内に明確な柱痕跡は見いだせなかったが、位置から入り口施設に関連するピットの可能性が考えられる。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

#### 【SI07住居跡】(第75図、図版45)

南区南半部の南端中央付近で検出した。堆積土や床面から炭化材、焼土粒、炭化物など検出され、この住居は火災に遭っていると考えられる。

[平面形・規模] 西辺と東辺南半部の一部は後世の擾乱により失われ、また、南東隅が調査区外であるが、隅丸方形をなすと考えられる。規模は東西が北辺で4.9m以上、南北が東辺で5.6m以上である。

[方向] 東辺でみると北で東へ約22度偏する。

[壁] 壁はやや緩やかに立ち上がり、高さは残りのよい南壁で27cmである。

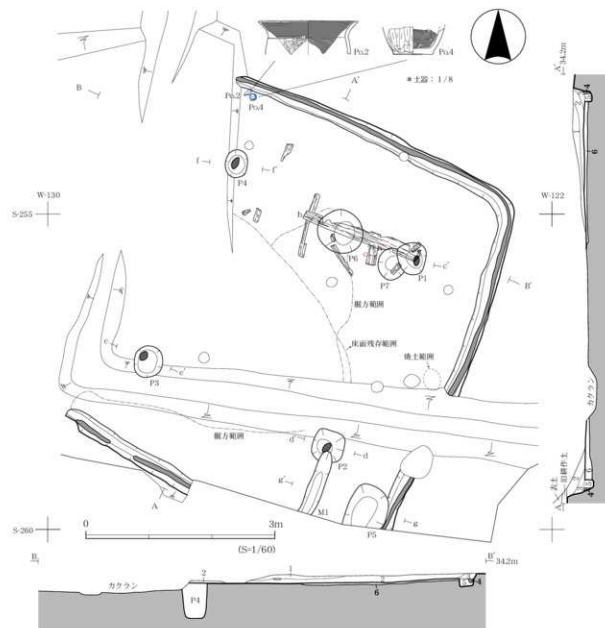
[堆積土] 3層認められた。いずれも住居内の堆積土で、1・2層は地山粒、地山ブロック、炭化材を含む暗褐色シルトと黒褐色シルトである。3層は地山ブロックを含む黒褐色シルトの壁崩落土である。

[床面] ほぼ平坦で、北側中央付近は地山、他は掘方埋土を床面としている。

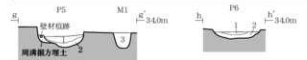
[柱穴] 住居平面形の対角線上の4箇所から柱穴(P1～P4)を検出した。平面形は、P1が長径50cm、短径47cmの不整形円形を、P2が一边50cmの隅丸方形を、P3～P4が長径45～50cm、短径35～45cmの不整形円形を呈する。深さは40～55cmである。いずれも柱痕跡が認められ、長径15～20cm、短径10～11cmの楕円形を呈する。深さは40～55cmである。

[カマド] カマドは燃焼部と煙道部ともに検出されなかった。東辺中央壁際に長径35cm、短径27cmの楕円形の範囲で焼土が広がり、また、後述するP5にはカマド側壁に用いられる白色粘土ブロックや焼土、炭化物などが多量廃棄されていることから、東辺中央付近にカマドが付設されていた可能性が考えられる。

[周溝・壁材痕跡] 北辺、東辺・南辺で確認されていることから、ほぼ全周していたと考えられる。上幅18～30cm、深さ6～13cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含むにがい黄褐色シ



No.	土色・土性	掘入物など	備考
1	暗褐色の砂状シルト	炭化物、焼土ブロックを多数	A火災後の自然堆積
2	黒褐色の粘状シルト	炭化物を多量、炭化土を少量を多数含む	
3	暗褐色の粘状シルト	焼土ブロックを多数	壁崩落土
4	暗褐色の砂状シルト	地山粒を多数含む	壁材痕跡
5	白褐色の粘状シルト	焼土ブロックを多数	埋土層(埋土)
6	暗褐色の粘状シルト	焼土ブロックを多数含む	掘方埋土



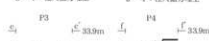
埋土層(埋土)

No.	土色・土性	掘入物など	備考
1	白褐色の粘状シルト	焼土ブロックを多数	A火災後
2	暗褐色の粘状シルト	焼土を多数含む	自然堆積

No.	土色・土性	掘入物など	備考
1	白褐色の粘状シルト	焼土ブロックを多数	A火災後
2	暗褐色の粘状シルト	焼土を多数含む	自然堆積



1: 柱痕跡  
2～4: 柱穴(隅丸方形)



1: 柱痕跡  
2・3: 柱穴(隅丸方形)

第75図 SI07住居跡

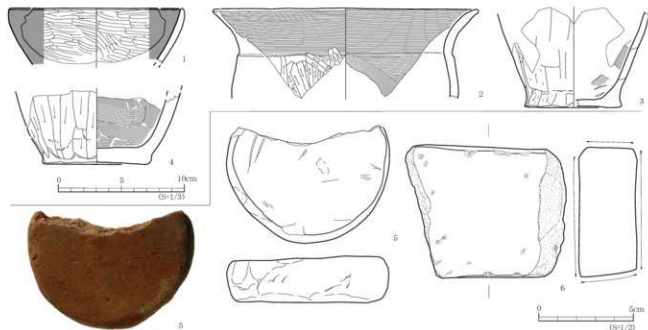
ルトで埋め戻されている。また、この周溝内の壁際に沿って、南辺で一部途切れるが、幅4～9cmの溝状に続く壁材痕跡と考えられる暗褐色のシルトが認められた。深さは5～10cmである。

【その他の溝跡】南東隅の柱 (P2) から南辺に向かって続く溝跡 (M1) を検出している。幅約25cm、長さ105cm以上、深さ22cmで、調査区外へ続く。地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。材などの痕跡は検出されていない。

【その他の施設】東辺南端部壁際でP5を検出した。平面形は長辺75cm以上、短辺64cmの隅丸方形



図版45 S07住居跡



No.	図種	分析	部位	形状	寸法	材質	特徴	出所
1	平面図	壁	南壁	1.5m (1.1m)	1.4m	内: 赤土と白土の層状構造 内: 赤土と白土の層状構造		— 東1
2	平面図	壁	東壁	1.2m (1.1m)	1.1m	内: 赤土と白土の層状構造 内: 赤土と白土の層状構造		— 東2
3	平面図	壁	西壁	1.2m (1.1m)	1.1m	内: 赤土と白土の層状構造 内: 赤土と白土の層状構造		— 東3
4	平面図	壁	北壁	1.2m (1.1m)	1.1m	内: 赤土と白土の層状構造 内: 赤土と白土の層状構造		— 東4
5	平面図	土器	土器	径27cm	高さ15cm	赤土製		— 東5
6	平面図	礎石	礎石	径27cm	高さ15cm	赤土製		— 東6

第76図 S07住居跡出土遺物

を呈すると思われる、深さ25cmである。白色粘土ブロック、焼土・炭化物を多量に含む、にぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

この他に住居中央北半部のP1付近でP6・P7を検出した。P6の平面形は長径80cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さ15cmである。堆積土は暗褐色シルトで、地山ブロックや地山粒を含み、1層は埋め戻され、2層は自然堆積である。P7はP1より古く、平面形が長径50cm、短径30cm以上の不整形円形を呈し、深さは15cmである。地山ブロック、炭化物を含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

【出土遺物】床面から非クロコ調整の土師器壺 (第76図2～4) と円盤状土製品 (第76図5)、P2掘方から砥石 (第76図6)、堆積土から非クロコ調整の土師器坏 (第76図1) が出土している。

#### 【S159住居跡】 (第77図)

南区南半部の中央付近で検出した。後世の削平により床や壁などは残っていないが、周溝の検出状況と柱穴の配置状況や出土遺物から縄文時代の堅穴住居跡と判断した。SB53建物跡、SK16土壇と重複し、SK16より新しいが、SB53との新旧関係は不明である。

【平面形・規模】周溝及び柱穴の位置関係から、長径約6.8m、短径約6.5mの楕円形をなすと考えられる。

【炉】南東寄り検出した南北43cm以上、東西約33cmの範囲に及ぶ焼面の痕跡が炉跡とみられる。

【柱穴】17個検出した (P1～P17)。P1～P8は住居内に位置し、一定の間隔を置いて楕円形に並ぶ主柱穴である。P12～P17は周溝内に、P9・P10は周溝想定線以上に位置する壁柱穴である。

P1～P8は平面形が長径35～52cm、短径32～45cmの楕円形や径30～35cmの円形を呈し、深さは11～46cmである。いずれも柱痕跡が確認された。柱間寸法は1.35～2.36cmほどである。

また壁柱穴は、P9を除いて柱痕跡が確認できなかったが、平面形が径10～20cmの円形や長径30cm、短径15cmの楕円形を呈する。深さは深いもので30cmあり、いずれも周溝底面より深い。

【周溝】北側で約6m検出している他、南側の3箇所で見跡的に認められた。上幅9～33cm、深さ3～10cmで、断面形はやや開き気味のU字形を呈する。地山粒を含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。壁材痕跡は確認されなかった。

【出土遺物】P9の埋土から大木8b～9a式期の深鉢の口縁部 (第77図1) が出土した。

#### 【S160住居跡】 (第78図)

南区北半部の東側で検出した。SK66・67土壇と重複し、いずれよりも古い。西辺をSK66、東半部中央をSK67に壊されている。また、カマドは西辺から北辺へ移し替えられている。

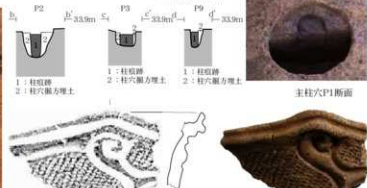
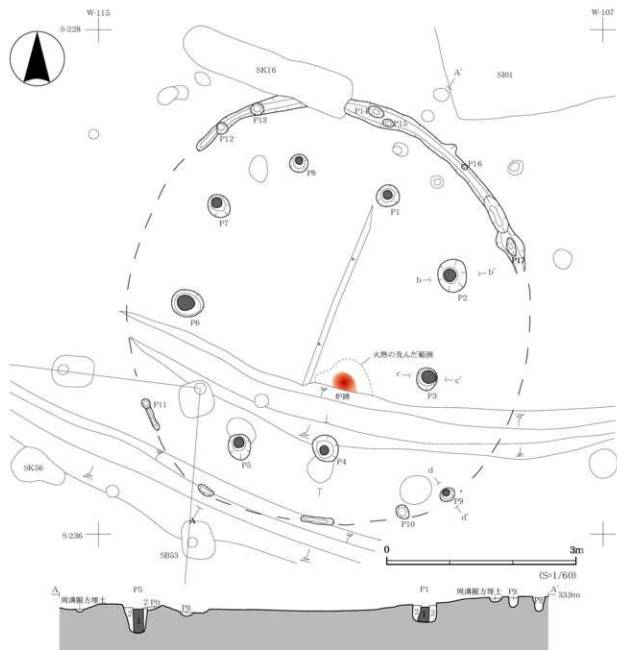
【平面形・規模】隅丸方形を呈する。規模は東西が南辺で4.2m、南北が西辺で4.4mである。

【方向】東辺でみると北で東へ約4度偏する。

【壁】壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りのよい東壁で15cmである。

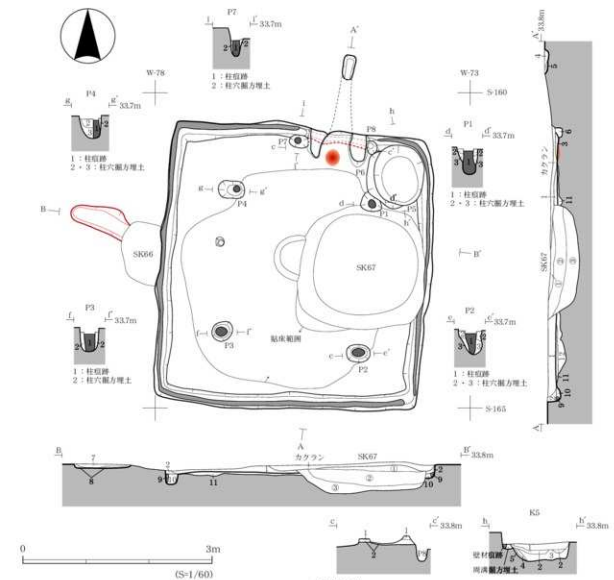
【堆積土】7層認められる。住居内の堆積土としては、1層が炭化物、地山粒を含む黒褐色シルトの自然堆積、2層が地山ブロックを含む黒褐色シルトの壁崩落土である。カマド部分の堆積土としては、3～5層が炭化物、焼土、地山粒を含む新しいカマド燃焼部・煙道部の崩落土である。7、8層は炭化



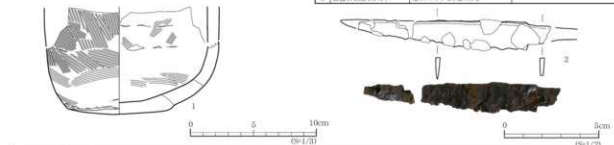


No.	種類	部位	地文・図及説明書文	図説による形状と文	口部・溝部形状	特徴	図説	図説
11	縄文土器	戸の埋積土						図説

第77図 SI59住居跡



No.	土色・土性	層人物など	備考	No.	土色・土性	層人物など	備考
1	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量、焼土を含む	自然層	1	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	焼土の多量を含む	埋土層
2	黄褐色のIVX3シルト	焼土の多量を含む	埋土層	2	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
3	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	3	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
4	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	4	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
5	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	5	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
6	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	6	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
7	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	7	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
8	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	8	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
9	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	9	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
10	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	10	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
11	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	11	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層
12	黄褐色のIVX3シルト	粘土多量を含む	埋土層	12	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	粘土多量を含む	埋土層



No.	器種	分類	形状	材料	用途	特徴	図説
11	土器	片断	片断	粘土	土器	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	図説
12	石器	打石	打石	石	石器	黄褐色のIVX3赤褐色シルト	図説

第78図 SI60住居跡及び出土遺物



図版46 SI60住居跡

物、焼土、地山を含む古いカマドの煙道部の崩落土と考えられる。いずれも自然堆積である。

[床面] ほぼ平坦で、周辺部は掘方埋土上面を床面とし、中央部を貼床している。

[柱穴] 住居平面形の対角線上の4箇所(床面)で主柱穴(P1～P4)を検出した。主柱穴はいずれも長径32～42cm、短径26～30cmの楕円形を呈し、深さは35～42cmである。全てで柱痕跡が認められ、径18～28cmの円形や長径30cm、短径24cmの楕円形を呈する。

[その他の柱穴] カマド両側壁が住居の壁に取り付く部分の外側2箇所、柱穴を各1個(P7、P8)検出した。P7、P8の平面形はP7が長径30cm、短径20cm、P8が長径20cm、短径16cmの楕円形を呈し、深さは25cmほどである。P7で径10cmの円形の柱痕跡が認められた。これらは位置からカマド部分の住居の壁構造に関連する柱穴と考えられる。

[カマド] カマドは西辺から北辺に造り変えられている。古いカマドは、西辺中央付近に付設されていたとみられるが、SK66に大きく壊されたため煙道部の一部を検出できただけである。確認できた煙道の長さ90cm、幅28～41cmで、深さ5cmである。煙道の本来の長さは約1.5mと推測される。

新しいカマドは北辺中央東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部の側壁は白色粘土を含む暗褐色粘質シルトで構築されている。規模は、燃焼部内壁の焚き口で幅55cm、奥壁で幅37cm、奥行43cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、径20cmほどの円形の範囲が焼けて赤変している。燃焼部と煙道部との間には10cm以上の段差がある。煙出しピットは長辺40cm、短辺20cmの隅丸方形を呈し、深さ7cmである。煙出しピットの位置から煙道部の長さは約1.2mである。

[周溝・壁材痕跡] 全周している。上幅18～26cm、深さ6～12cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。周溝内の壁際に沿って、カマド付近と南東隅で途切れるが、幅4～10cmの溝状に続く壁材痕跡と考えられる地山粒を含む黒褐色シルトが認められ、深さは6～12cmである。古いカマド部分には壁材が新たに据えられている。

[その他の施設] 北東隅で一度作り直された土壇(P5、P6)を検出している。P5は長径96cm、短径80cmの楕円形を呈し、深さ30cmで、断面形は逆台形状を呈する。堆積土は多量の白色粘土ブロックと炭化物、焼土、地山を含む暗褐色シルトで、P5は埋め戻されている。P6は、P5によって大きく壊さ

れているが、規模はP5と同程度と推定される。多量の地山ブロックと焼土、白色粘土、炭化物などを含む褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 床面から非ロクロ調整の土師器甕(第78図1)が出土している他、堆積土から刀子(第78図2)が出土している。

#### 【SI61A・B住居跡】

南区北半部の東側に位置し、W-73、S-151付近で検出した。SK71土壇と重複し、これより古い。床面が一度改修され(SI61A→SI61B)、また、カマドをやや東寄りに移し替えている。最初に新しいSI61Bについて記載し、古いSI61Aについては確実に把握したことをのみを記す。

#### 【SI61B住居跡】(第79図、図版47)

[平面形・規模] 隅丸方形を呈する。規模は東西が南辺で4.6m、南北が東辺で4.1mである。

[方向] 東辺でみると北で西へ約12度偏する。

[壁] 壁はやや開き気味に緩やかに立ち上がる。高さは残りの良い南壁で11cmである。

[堆積土] 14層認められる。住居内の堆積土としては、1層が白色粘土ブロックと多量の地山粒を含む自然堆積の暗褐色シルト、2層が地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで壁崩落土と考えられる。カマド部分の堆積土としては、3～13層がカマド燃焼部、煙道部の崩落土で、いずれも自然堆積である。14層がカマド使用時の煙道部の堆積である。

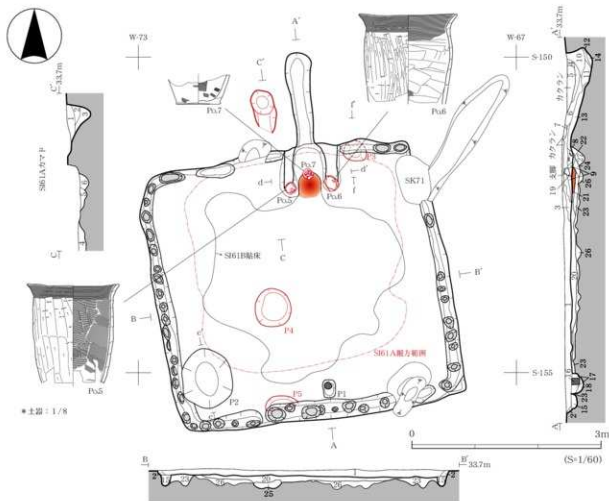
[床面] ほぼ平坦で、周辺部は掘方埋土上面を床面としているが、中央部とカマド燃焼部は貼床している。

[柱穴] 主柱穴は確認されていない。

[カマド] 北辺で中央部からやや東寄りに造り変えられている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は白色粘土を含む灰黄褐色土で構築している。燃焼部の焚き口部両側は、芯材として、白色粘土を含むにぶい黄褐色土を充填した非ロクロ調整の土師器甕(第80図5・6)を逆さに据えて補強されている。規模は、燃焼部内壁の焚き口で幅47cm、奥壁で幅45cm、奥行80cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、長径55cm、短径35cmの楕円形の範囲が焼けて赤変している。底面のほぼ中央部に黄褐



図版47 SI61A・B住居跡

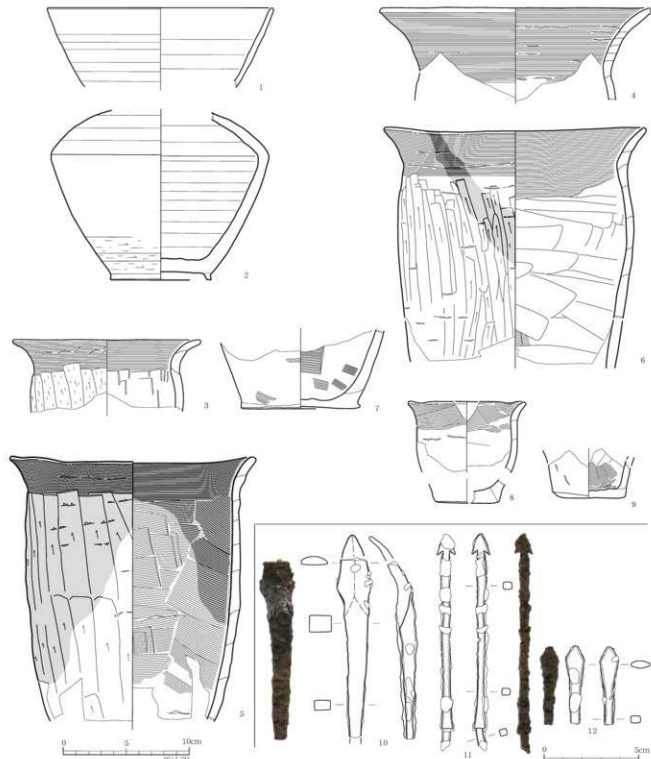


No.	土色・土質	層人物など	備考	No.	土色・土質	層人物など	備考
1	硬褐色のIV区シルト	硬褐色土、硬質プロットを含む	自然層	15	硬褐色のIV区シルト	硬褐色土	埋積層
2	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	自然層	16	硬褐色のIV区シルト	硬褐色・白磁土を含む	P1埋積層
3	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層	17	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	P1埋積層
4	硬褐色のIV区シルト	白磁土・硬質土、硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層	18	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	P1埋積層
5	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロット	埋積ヤマト黒粘土層	19	II区硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積層
6	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む、硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層	20	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積層
7	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む、硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層	21	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層
8	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む、硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層	22	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
9	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層	23	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層
10	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層	24	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層
11	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層	25	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層
12	II区硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層	26	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層
13	II区硬褐色のIV区シルト	硬質土・硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層	27	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積層
14	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	埋積ヤマト黒粘土層				

S61Aマ階連(Cライン)				S61Bカマド (付)			
No.	土色・土質	層人物など	備考	No.	土色・土質	層人物など	備考
1	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	自然層	1	II区硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	全層(埋積)層
2	硬褐色のIV区シルト	硬質プロット・硬質土を含む	人層	2	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
3	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層	3	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
4	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層	4	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
5	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層	5	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
6	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層	6	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
7	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層	7	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層
8	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層	8	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	埋積ヤマト黒粘土層

P2 (c)				P3 (c)			
No.	土色・土質	層人物など	備考	No.	土色・土質	層人物など	備考
1	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	人層	1	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層
2	硬褐色のIV区シルト	硬質プロットを多数含む	人層	2	硬褐色のIV区シルト	硬質土を含む	人層

第79図 S61A・B住居跡



No.	図種	台帳	形状	時期	経路	特徴	出所
1	硬褐色土	19	碗	180	(62)	馬・ロロナチナ 西:ロロナチ	朝9.8.9
2	硬褐色土	19	碗	155	(134)	経路13.5m 馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ(西) 経路10.5m-埋積ヘタチ 西:ロロナチナ	朝9.8.9
3	硬褐色土	19	碗	155	(67)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ(西) 西:ロロナチナ	朝9.8.9
4	硬褐色土	19	碗	122	(12)	馬・ロロナチナ 西:ロロナチナ	朝9.8.9
5	硬褐色土	19	硬質土	23	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
6	硬褐色土	19	硬質土	23	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
7	硬褐色土	19	硬質土	95	(6)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
8	硬褐色土	19	硬質土	110	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
9	硬褐色土	19	硬質土	110	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
10	硬褐色土	19	硬質土	110	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
11	硬褐色土	19	硬質土	110	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9
12	硬褐色土	19	硬質土	110	(16)	馬・ロロナチナ-埋積ヘタチ 西:埋積ヘタチ	朝9.8.9

第80図 S61B住居跡出土遺物



2



6



5



8



9

2, 5, 6, 8, 9: S=1/3

図版48 S161B住居跡出土遺物

色シルトでマウンド状の高まりを作り出し、その上に土師器甕（第80図7）の底部を逆さ据えて支脚としている。燃焼部と煙道部との間には段差はない。煙道部は長さ1.4mで、先端に向けて下向きで傾斜している。

〔周溝〕南辺と北辺で途切れているが、ほぼ全周している。周溝の上幅15～32cm、深さ8～16cm、断面形はU字形を呈する。地山粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。底面には、平面形が長径10～35cm、短径7～20cmの不整な楕円形・円形の近接して並ぶピットが確認された。壁材の底面の痕跡の可能性が考えられる。

〔その他の施設〕南西隅でP2検出している。平面形は長径95cm、短径80cmの楕円形を呈し、深さ24cmである。断面形は皿状を呈する。地山ブロックや黒褐色シルトブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

その他に南辺中央壁際で壁から約53cm離れているP1を検出した。平面形は長辺30cm、短辺20cmの隅丸方形を呈し、深さ16cmである。柱痕跡は径12cmの円形を呈する。位置からみて住居入口の施設に関連する据え方の可能性が考えられる。



No.	器種	形状	時期	検出	品名	特徴	図	説明
1	土師器	破片	縄文	1	灰・コゴテ	赤褐色	1	1

第81図 S161A住居跡出土遺物

〔出土遺物〕床面から須恵器壺（第80図2）、非ロクロ調整の土師器甕（第80図3）、床直上から非ロクロ土師器甕（第80図4）・ミニチュア土器（第80図8）、カマドから非ロクロ調整の土師器甕（第80図5・6・7）が出土している。また、堆積土からは須恵器杯（第80図1）や甕（第80図10）、鉄鏝（第80図11・12）が出土している。

#### 〔S161A住居跡〕（第79図、図版47）

〔平面形・規模〕床面が改修されていることから、平面形は不明であるが、規模は最大でS161と同規模である。

〔カマド〕北辺中央に付設される。煙道部の一部を検出している。煙道部の残存する長さは70cm、幅35cmである。底面は煙道から先端に向かって急激に下向きに傾斜している。煙出しピットは長径40cm、短径35cmの楕円形を呈し、深さ37cmである。

〔その他の施設〕中央付近の貼床下と、南辺中央西寄りの壁際でP3・P4・P5検出している。P3の平面形は長径40cm、短径32cmの楕円形を呈し、深さは6cmである。炭化物、焼土、地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。P4の平面形は径60cmの円形を呈し、深さは10cmである。焼土ブロック、炭化物を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。P5はS161Bの周溝によって壊されているが、長径53cm、短径17cm以上の楕円形を呈すると考えられ、深さ約10cmである。地山を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。このP5は、位置関係から住居入り口の施設に関連する据え穴の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕住居掘方埋土から非ロクロ調整の土師器無頸壺の破片（第81図1）が出土している。

#### 〔S162住居跡〕（第82図）

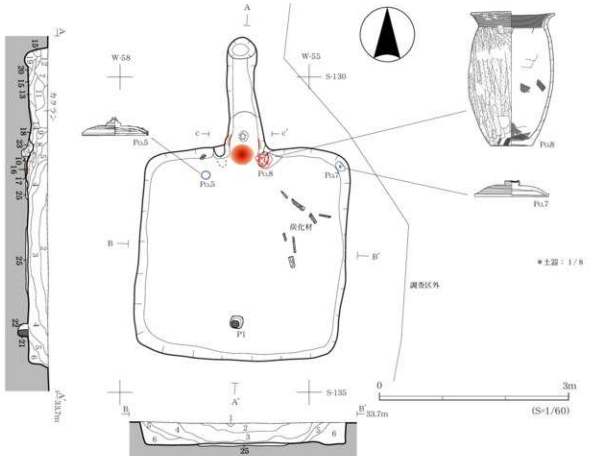
南区北半部の東側で検出した。堆積土や床面から少量の炭化材と焼土などが検出されることから、この住居は火災に遭っている可能性が考えられる。

〔平面形・規模〕隅丸方形を呈する。規模は東西が南辺で3.2m、南北が東辺で3.2mである。

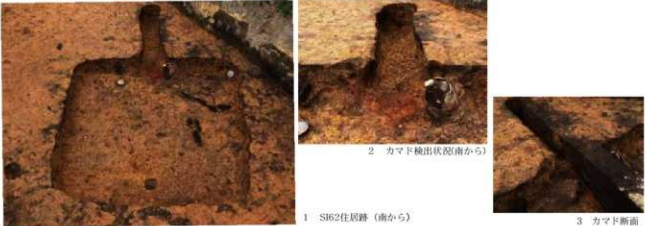
〔方向〕東辺でみると北で東へ約6度偏する。

〔壁〕やや開き気味に立ち上がり、全体的に残りが良く、高さは28～37cmである。

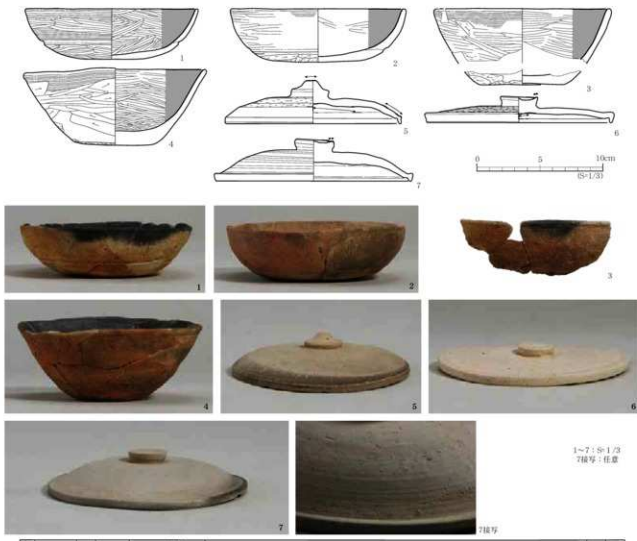
〔堆積土〕20層認められた。住居内の堆積土としては、1層が褐灰色シルト、2層が灰白色火山灰層、3層が炭化物を含む黒褐色シルト、4・5層が地山粒、炭化物、焼土を含む黒褐色シルト・暗褐色シルトで、いずれも自然堆積である。6層が炭化物、地山粒を多量に含むいび黄褐色シルトで、壁など



No.	土色・土性	層人物など	備考	No.	土色・土性	層人物など	備考
1	褐色の砂状シルト	灰白礫を多量に含む		14	赤い褐色の砂状シルト	焼土付・土器付	炉下焼土層崩壊土
2	褐色の砂状シルト	細砂・細砂質土	自然堆積	15	赤褐色の砂状シルト	焼土付・土器付	炉下焼土層崩壊土
3	黄褐色の砂状シルト	炭化物を多量含む	自然堆積	16	黄褐色の砂状シルト	炭化物を多量含む	炉下焼土層崩壊土
4	黄褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑・土器付		17	褐色の砂状シルト	焼土を多量に含む	炉下焼土層崩壊土
5	黄褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		18	褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
6	赤褐色の砂状シルト	炭化物を多量含む		19	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
7	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		20	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
8	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		21	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
9	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		22	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
10	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		23	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
11	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		24	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
12	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		25	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土
13	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む		26	赤褐色の砂状シルト	炭化物・炭屑を多量含む	炉下焼土層崩壊土



第82図 S62住居跡  
1 S62住居跡 (南から)  
2 カマド横出状況(南から)  
3 カマド断面

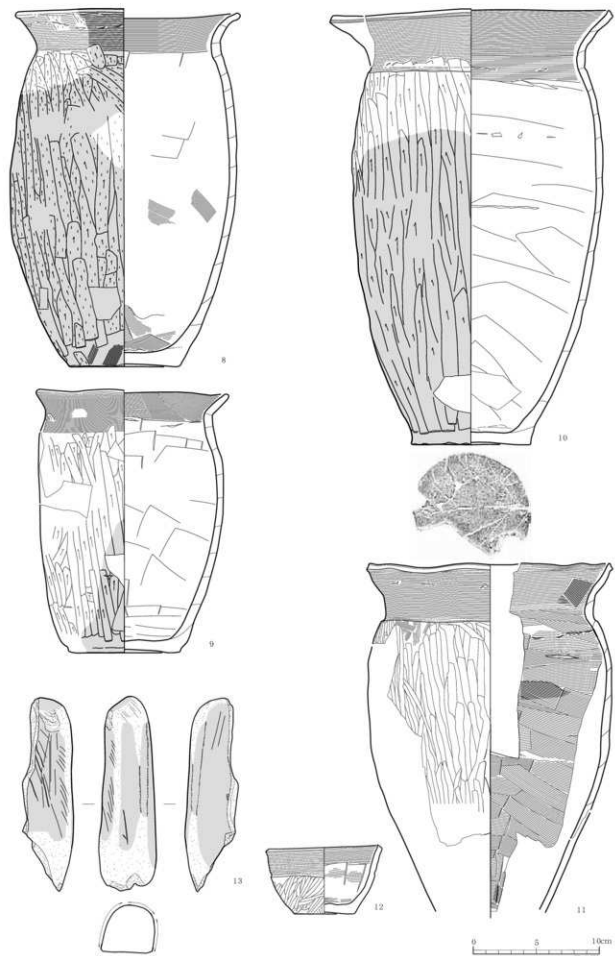


No.	器種	形状	群付	層位	位置	特徴	図録番号
1	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	13/10	40	赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
2	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	42	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
3	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
4	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
5	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
6	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
7	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
8	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
9	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
10	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
11	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
12	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10
13	土鍋	深 13cm 口径 14cm	12	14/0	40	赤(II) 赤(II) コナダヘラリ型赤褐色(底) 直縁・ヘラリ足 内:ヘラリ足手・底面滑潤	89-10

第83図 S62住居跡出土土物 (1)

の崩落土と考えられる。カマド部分の堆積土としては、7層がカマド煙道部の自然堆積、8・9層が地山ブロック、白色粘土ブロックを含むカマド燃焼部崩壊土、11～15層が炭化物、焼土、地山ブロックを含むカマド煙道部崩壊土である。16・17層が炭化物と焼土を含む黒褐色シルト・褐色粘質シルトで、カマド使用時の燃焼部の堆積である。18～20層は炭化物と焼土ブロック・地山ブロックを含む黒褐色シルトでカマド使用時の煙道部の堆積である。

【床面】ほぼ平坦で、中央部は掘方埋土面、周辺部は地山を床面としている。  
【柱穴】主柱穴は確認されていない。



第84圖 S62住居跡出土遺物(2)



圖版49 S62住居跡出土遺物

[カマド] 北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は、住居の外側へ「∩」形に張り出している。住居の壁を約 60 cm の幅で外側へ 50 cm ほど掘り込んで燃焼部を白色粘土を用いて構築している。焚き口部の東側壁には、補強のための芯材として、白色粘土を含むにぶい黄褐色土を充填した非ロクロ調整の土師器甕 (第 84 図 8) が逆さに据えられている。一方、西側壁については、想定される焚き口部西側壁付近のカマド崩落土の上に、側壁構築土と思われる白色粘土や焼土ブロックとともに、補強のための芯材として使用された土器と考えられる非ロクロ調整の土師器甕 (第 84 図 10) が散乱していた。このことからこのカマドは、住居の廃絶に伴って、燃焼部の西側を中心に意図的に壊された可能性が考えられた。

推定されるカマドの規模は、燃焼部内壁の焚き口部で幅約 50 cm、奥壁部分で 50 cm、奥行 85 cm である。燃焼部底面はほぼ平坦で、奥壁に向かって上向きに傾斜している。側壁・底面共に焼けて赤変している。底面中央には、にぶい黄褐色粘土で作り出した高さ 6 cm ほどのマウンド状の高まりが認められた。燃焼部と煙道部の間には 3 cm ほどの緩やかな段差があり、煙道部は長さ 1.24m で、先端に向かってやや下向きに傾斜する。煙出しピットは長径 44 cm、短径 33 cm の不整形円形を呈し、深さ 39 cm である。

[その他の施設] 南辺中央壁際で、壁から約 56 cm 離れている P1 を床面で検出した。平面形は、一辺が 40 cm の隅丸方形を呈し、深さは約 16 cm である。堆積土は地山ブロックを含む褐色シルトで、埋め戻されている。長径 14 cm、短径 12 cm の不整形円形を呈する材の痕跡が確認されている。P1 は、位置からみて、住居の入り口の施設に関連する据え方の可能性が考えられる。

[出土遺物] 床面から遺物は出土していない。しかし、カマド焚き口東側壁から非ロクロ調整の土師器甕 (第 84 図 8)、床直上から非ロクロ調整の土師器杯 (第 83 図 1・4)、須臾器蓋 (第 83 図 5) が出土している。カマド崩壊土から、非ロクロ調整の土師器杯 (第 83 図 2) とカマド焚き口部西側壁部分の補強に用いられたとみられる甕 (第 84 図 10)、ミニチュア土器 (第 84 図 12)、煙道崩落土から非ロクロ調整の土師器甕 (第 84 図 11) が出土している。その他に、堆積土から非ロクロ調整の土師器杯 (第 83 図 3)、須臾器蓋 (第 83 図 6・7)、非ロクロ調整の土師器甕 (第 84 図 9) などが出土している。

#### 【S163 住居跡】 (第 85 図、図版 50)

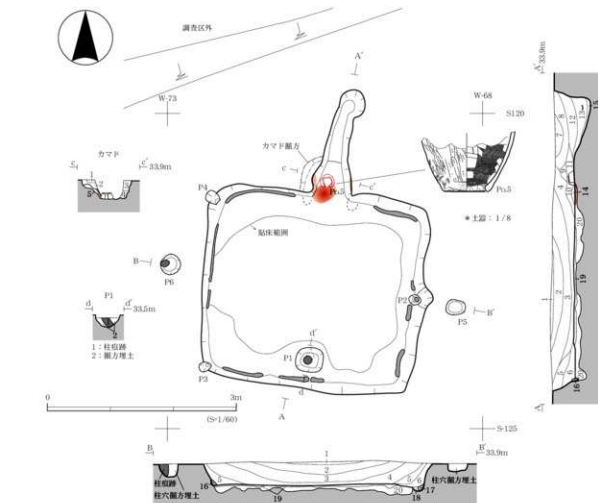
南区北端部中央で検出した。

[平面形・規模] 隅丸方形を呈する。規模は東西が北辺で 3.5m、南北が東辺で 2.9m である。

[方向] 西辺でみると北で東へ 3 度偏する。

[壁] 壁はやや開き気味に立ち上がり、全体的に残りが良く、高さは 30 ~ 45 cm である。

[堆積土] 15 層認められる。住居内の堆積土としては、1 層が黒色シルト、2 層が灰白色火山灰層、3・4 層が炭化物、地山粒を含む黒褐色シルト・暗褐色シルト、5・6 層が地山粒、地山ブロックを含む暗褐色シルト・黒褐色シルトでいずれも自然堆積である。カマド部分の堆積土としては、7・8・12 層が地山ブロック、炭化物、白色粘土を含む灰黄褐色シルト・黒褐色シルト・にぶい黄褐色シルトでカマド煙道部の崩落土、9 ~ 11 層が炭化物、白色粘土ブロック、焼土を含む暗褐色シルトでカマド



No.	主成分・性状	層	備考	No.	主成分・性状	層	備考
1	黒色の砂状シルト	灰白火山灰	自然堆積	12	にぶい黄褐色の砂状シルト	12	焼土・焼土・黒土・黒土を多量に含む
2	灰白の砂状シルト	炭化物・焼土を多量に含む		13	炭化物・焼土を多量に含む	13	焼土・焼土・黒土・黒土を多量に含む
3	黒色の砂状シルト	炭化物・焼土を多量に含む		14	炭化物・焼土を多量に含む	14	焼土・焼土・黒土・黒土を多量に含む
4	黒色の砂状シルト	炭化物・焼土を多量に含む		15	炭化物・焼土を多量に含む	15	焼土・焼土・黒土・黒土を多量に含む
5	黒色の砂状シルト	焼土・焼土を多量に含む	カマド崩壊崩落土	16	炭化物・焼土を多量に含む	16	炭化物・焼土を多量に含む
6	黒色の砂状シルト	焼土・焼土を多量に含む		17	炭化物・焼土を多量に含む	17	炭化物・焼土を多量に含む
7	黒色の砂状シルト	焼土・焼土を多量に含む		18	炭化物・焼土を多量に含む	18	炭化物・焼土を多量に含む
8	黒色の砂状シルト	焼土・焼土を多量に含む		19	炭化物・焼土を多量に含む	19	炭化物・焼土を多量に含む
9	黒色の砂状シルト	焼土・焼土を多量に含む		20	炭化物・焼土を多量に含む	20	炭化物・焼土を多量に含む
10	黒色の砂状シルト	焼土・焼土を多量に含む					

No.	主成分・性状	層	備考
1	灰白の砂状シルト	炭化物・焼土・焼土を多量に含む	カマド崩壊崩落土
2	黒色の砂状シルト	炭化物・焼土・焼土を多量に含む	
3	黒色の砂状シルト	炭化物・焼土・焼土を多量に含む	
4	黒色の砂状シルト	炭化物・焼土・焼土を多量に含む	崩壊土
5	にぶい黄褐色の砂状シルト	炭化物を多量に含む	

第85図 S163住居跡

燃焼部の崩壊土である。13 層が少量の焼土と炭化物や地山ブロックを含む黒褐色シルトで、カマド煙道部の自然堆積である。14 層が焼土や灰を含む褐色シルトでカマド使用時の燃焼部の堆積であり、15 層が炭化物を多量に含む黒褐色シルトでカマド使用時の煙道部の堆積である。

[床面] ほぼ平坦で、周辺部は掘方埋土上面を床とし、中央部は貼床されている。



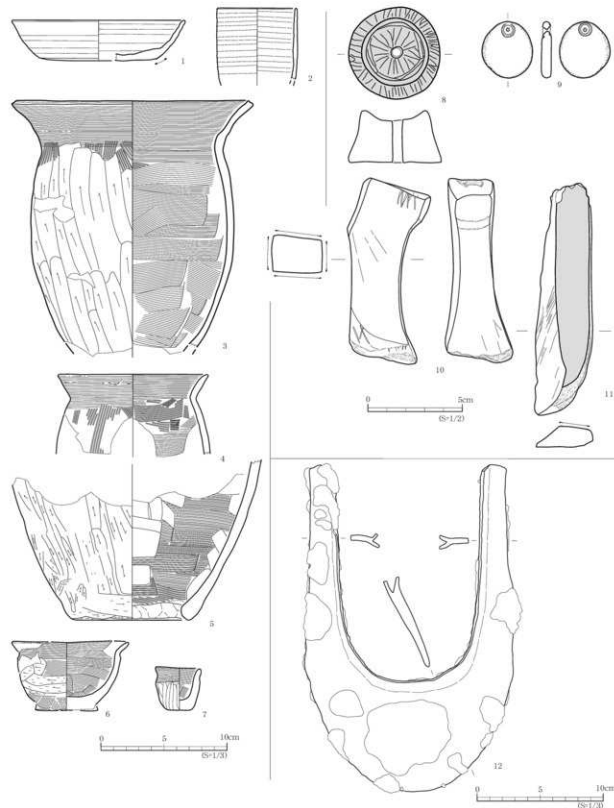
図版50 SI63住居跡

[柱穴] 東辺中央部の壁際及び南西隅と北西隅の3箇所でP2・P3・P4、住居跡東西中軸線上の東西両辺から約50cm外側でP5・P6を検出した。P2が長径18cm、短径15cm、P3が長径20cm、短径15cm、P4が長径22cm、短径20cmの楕円形をなし、深さはP2が床面から8cm、P3とP4が確認面から22cmと18cmである。P2でのみ柱痕跡を確認しており、径8cm円形で深さは8cmである。P5・P6は住居丸柱穴(註2)といわれるもので、P5が長径31cm、短径24cmの隅丸長方形、P6が径32cmの円形をなし、深さはそれぞれ13cmと20cmである。P5では検出できなかったが、P6で長径15cm、短径10cmの楕円形を呈する柱痕跡を確認している。

[カマド] 北辺中央に付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は、住居の外側へ「U」形に張り出して作られている。住居の壁を60cmほどの幅で外側へ約50cm掘り込み白色粘土を用いて燃焼部を構築している。側壁は、西側で一部を残し壊されているため、推定される燃焼部の規模は、焚き口部で幅約60cm、奥行50cmである。燃焼部底面はほぼ平坦で、西側壁の一部と底面共に焼けて変色している。支脚として底面中央に土師器甕の底部(第86図5)を逆さに据えている。燃焼部と煙道部の境は2cmほどの緩やかな段差をなす。煙道部は長さ1.2m、底面は先端に向かって下向きに急傾斜してそのまま先端に至る。

[壁材痕跡] 各辺の壁際で幅3~7cm、深さ10cmで断続的に続く暗褐色シルトを確認している。溝はないが、壁際に据え置いた壁材の痕跡と考えられる。

[その他の施設] 南辺中央の壁際付近の床面でP1を検出している。南壁から約56cm離れている。平面形は、一辺が40cmの隅丸方形を呈し、深さは約16cmである。堆積土は地山ブロックを含む褐色シルトで、埋め戻されている。長径14cm、短径12cmの不整形形を呈する材の痕跡を確認しており、こ



No.	図録	名称	形状	材質	図録	図録	特 徴	図録	図録
1	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
2	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
3	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
4	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
5	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
6	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
7	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
8	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
9	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
10	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
11	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100
12	100	鉢	丸底	土	110	100	内:ロウソク(?) 外:ロウソク(?)	100	100

第86図 SI63住居跡出土遺物





図版51 SI63住居跡出土遺物

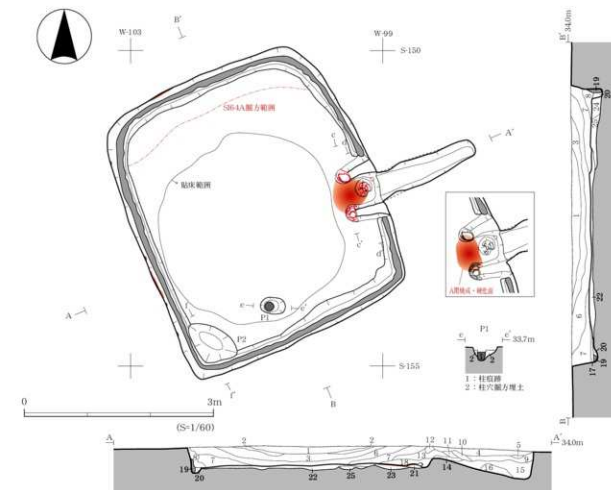
1, 3, 5-7・12・S1・S3  
8-10・S1・12

の材の痕跡は約37度南へ傾いている。このP1は、位置関係と材の痕跡から住居の入り口の施設に関連する据え方と捉えられる。

〔出土遺物〕床面から砥石（第86図11）と鉄製鋤先（第86図12）、床直上から土製紡錘車（第86図8）と砥石（第86図10）が出土している。カマド内堆積土14層からは非クロロ調整の土師器甕（第86図3・4）、支脚として用いられた土師器瓶（第86図5）が出土している。また、堆積土からは須恵器杯（第86図1）・コップ形杯（第86図2）やミニチュア土器（第86図6・7）や石製垂飾品（第86図9）などが出土している。

【SI64A・B住居跡】

南区北半部の西壁際で検出した。東辺、西辺、南辺をそのまま利用し、北辺を北へ60cmほど拡張している（SI64A→SI64B）。SI64Bの堆積土や床面から炭化材、焼土ブロックなどが多量に検出され

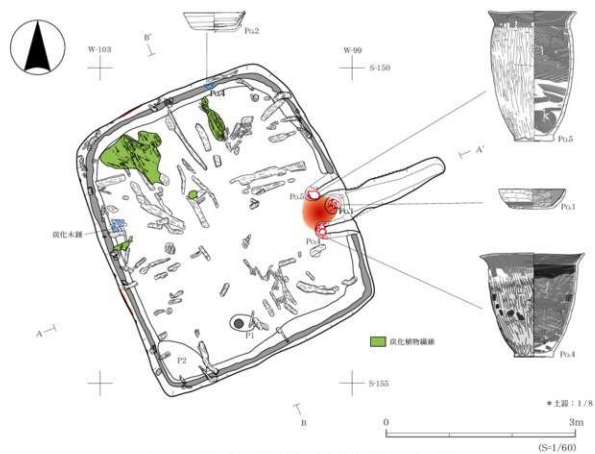


No.	土色・土質	遺人物など	備考	No.	土色・土質	遺人物など	備考
1	白土・粘質シルト	灰内土層		14	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
2	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	15	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
3	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	16	褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
4	白土・粘質シルト	灰内土層	白土層	17	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
5	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	18	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
6	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	19	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
7	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	20	白土・粘質シルト	灰内土層	灰内土層
8	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	21	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
9	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	22	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
10	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	23	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
11	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	24	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
12	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層	25	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
13	黒褐色の珪砂シルト	灰内土層	白土層				

No.	土色・土質	遺人物など	備考
1	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
2	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
3	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
4	白土・粘質シルト	灰内土層	灰内土層
5	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層
6	黒褐色の珪砂シルト	焼土・白土層を多量含む	焼土層

第87図 SI64A・B住居跡

たことから、この住居は火災に遭っていると考えられる。ここではSI64Bについて述べ、古いSI64Aについては確実に把握したことを記す。



第88図 SI64B住居跡炭化材・炭化植物繊維ほか出土状況

【SI64B住居跡】(第87・88図、図版52)

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は東西が南辺で3.7m、南北が西辺で4.2mである。

〔方向〕西辺でみると北で西へ約22度偏する。

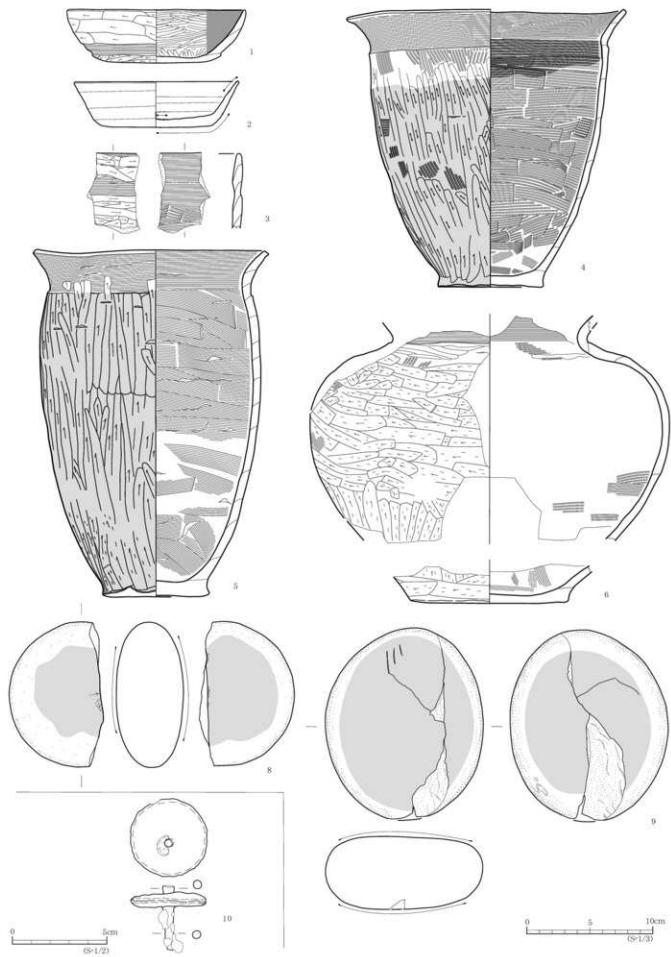
〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、比較的に残りは良く、高さは23～37cmである。

〔堆積土〕18層認められ、いずれも自然堆積である。住居内の堆積層としては、1層が灰白色火山灰層、2層が灰白色火山灰を少量含む黒褐色シルト、3層が炭化物、焼土を少量含む黒褐色シルト、6・7層が焼土、炭化材を含む黒褐色粘質シルト・暗褐色粘質シルト、8層が焼土ブロックを含む暗褐色シルトで壁崩落土、17層が地山ブロックを含む褐色シルトで火災前の壁崩落土である。カマド部分の堆積土としては、4層が炭化物、焼土を含むにぶい黄褐色粘質シルト、5層が黒褐色粘質シルトでカマド煙道部の堆積、9～11・14～16層が多量の焼土粒、地山粒、白色粘土、焼土、炭化物を含む暗褐色・黒褐色粘質シルト、褐色シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルトでカマド煙道部崩落土、12層が焼土を含む暗褐色シルト、13層が多量の炭化物を含む黒褐色シルトでカマド燃焼部崩落土、18層が地山粒・焼土を多量に含む褐色シルトでカマド使用時の堆積と考えられる。

〔床面〕ほぼ平坦で、周辺部は掘方埋土上面を床とし、中央部は貼床されている。



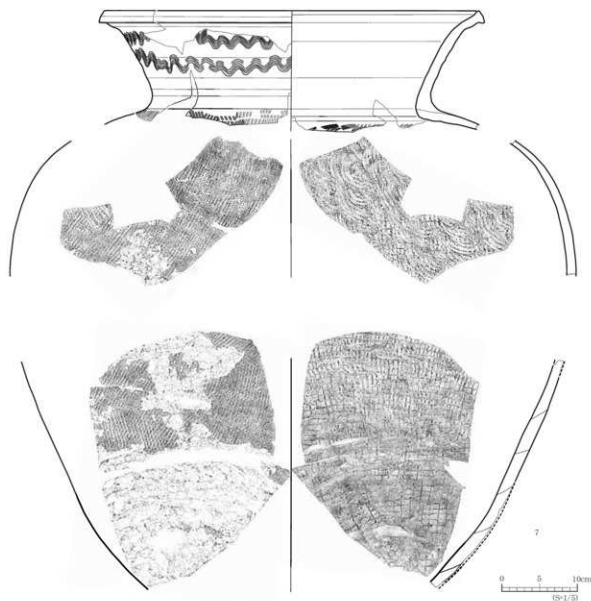
図版52 SI64B住居跡



第89圖 SI64B住居跡出土遺物 (1)



圖版53 SI64住居跡出土遺物



No.	図種	分類	形状	技法	特徴	備考
1	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
2	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
3	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
4	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
5	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
6	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
7	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
8	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
9	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り
10	土器器	罎	1/4切	手摺り	底面に土塗	底面に土塗(底)手摺り

第90図 S164B住居跡出土遺物(2)及び出土遺物観察表

[柱穴] 主柱穴は確認されていない。

[カマド] 東辺中央南寄りに付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は下部が地山の削り出しで、その上に白色粘土を積み上げて構築している。焚き口部の両側壁部分は、白色粘土を含むにぶい黄褐色土を充填した非クロコ調整の土師器甕(第89図4・5)を逆さに据えて補強されている。

規模は、燃焼部内壁の焚き口部で幅40cm、奥壁で幅50cm、奥行60cmである。燃焼部底面はほぼ

平坦で、側壁・底面共に焼けて赤変している。白色粘土を含むにぶい黄褐色土で作出したマウンド状の高まりの上に非クロコ調整の土師器甕(第89図1)を逆さに据えて支脚としている。燃焼部と煙道部との間には約15cmの段差があり、煙道部は長さ1.63mである。底面は先端に向かって下向きに緩やかに傾斜して煙出し部に至る。煙出し部の深さは43cmである。

[周溝・壁材痕跡] カマドが付設されていた東辺中央部を除いて全周する。上幅22~40cm、深さ10~15cmで、断面形はU字形を呈する。炭化物、地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。周溝内の壁際に沿って続く幅6~10cm、深さ6~10cmの黒褐色のシルトが認められ、壁材痕跡と考えられる。

[その他の施設] 南辺中央やや西寄りP1を検出している。壁からは約75cm離れている。平面形は長辺39cm、短辺26cmの隅丸長方形を呈し、深さは23cmである。径16cmの円形を呈する材の痕跡が確認されている。このことと位置から、住居入り口の施設に関連する据え方の可能性が考えられる。

南西隅でP2を検出している。平面形は長径87cm、短径55cmの不整な楕円形を呈し、深さ10cmである。白色粘土、焼土、炭化物を含む黒褐色のシルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 床面から磨石(第89図8)や木錘が3個以上出土した(図版52-7)。また、床直上から須恵器環(第89図2)、カマドから側壁の補強に使用された非クロコ調整の土師器甕(第89図4・5)、支脚に転用された非クロコ調整の土師器甕(第89図1)が出土している。その他カマド崩落土から非クロコ調整の土師器甕(第89図6)、P2から磨石(第89図9)、カマド掘方埋土から非クロコ調整の土師器鉢の破片(第89図3)が出土している。堆積土から須恵器大甕(第90図7)と鉄製紡錘車(第89図10)が出土している。

[S164A住居跡(第87図)]

[平面形・規模] 隅丸方形をなすとみられ、規模は東西が南辺で3.7m、南北は3.7m以上である。

[カマド] S164Bカマド両側壁下で検出した幅60cm、奥行35cmの赤色硬化の範囲から、ほぼ同位置に、B期よりやや大きいカマドが付設されていたと推定される。

## 2. 竪穴状遺構(註3)

[SX08竪穴状遺構](第91図)

南区南半部西側で検出した。SK51土壌と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 掘方の残存範囲から平面形は一辺3mほどの方形と考えられる。

[方向] 比較的掘方が残っていた西辺で見ると北で西へ約1度偏する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[SX09竪穴状遺構](第91図)

南区南半部の西側で検出した。

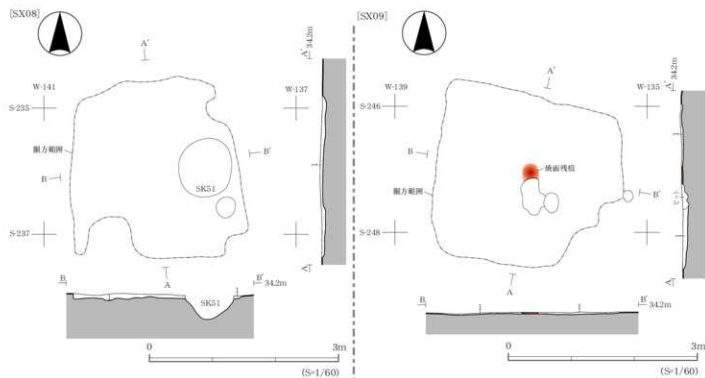
[平面形・規模] 掘方の残存範囲から平面形は東西3m、南北2.7mほどの方形と考えられる。

[方向] 比較的掘方が残っていた西辺で見ると北で東へ約8度偏する。

[その他の施設] 遺構中央部分に焼け面の下層の赤変した部分が25cm×20cmの範囲で検出され、炉

跡の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕破片で図示できなかったが、掘り方埋土中から非ロクロ調整の土師器甕の胴部破片が出土している。



No.	土色・土性	遺入物など	備	考
1	黒褐色のYK2シルト	掘り方埋土を基礎に含む	掘り方土	

No.	土色・土性	遺入物など	備	考
1	黒褐色のYK2シルト	掘り方埋土を基礎に含む	掘り方土	

第91図 SK08・09壁穴状遺構

### 3. 掘立柱建物跡

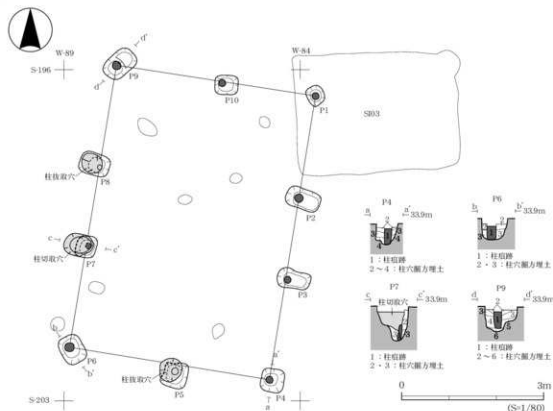
#### 〔SB41 建物跡〕 (第92図、図版54)

南区中央部の東寄りに位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。S103住居跡と重複し、これより新しい。10箇所すべての柱穴を検出しているが、その中のP5・P8で柱の抜き取り穴、P7で柱の切り取り穴を確認している。

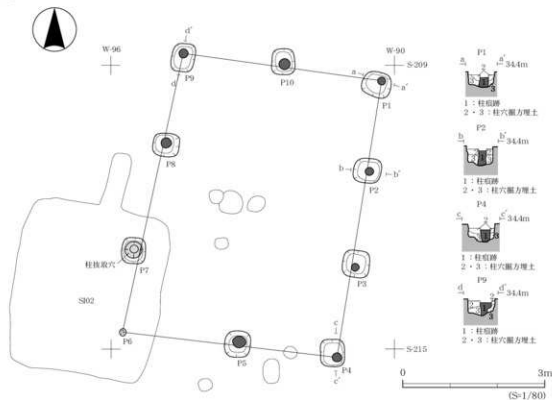
平面規模は桁行が東側柱列で総長6.1m、柱間寸法は北から2.2m・1.8m・2.1m、梁行が北妻で総長4.3m、柱間寸法は東から2.0m・2.3mである。方向は東側柱列でみると北で東へ約9度偏する。柱穴は一边が50cmの隅丸方形や長辺40～75cm、短辺38～50cmの隅丸長方形を呈する。深さは30～72cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は8箇所を確認しており、径12～18cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡とSB42は、約7.5mの間隔で南北に並び、本建物跡の東側柱列とSB42の西側柱列が柱筋を揃えている。また、本建物跡の東約9mに位置するSB44は、建物の方向が本建物跡と同じで、SB44の北西隅の柱が本建物跡の北妻柱筋の東延長線上に位置している。

〔SB41〕



〔SB42〕



第92図 SB41・42建物跡

**【SB42 建物跡】** (第92図、図版54)

南区中央部の東寄りに位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。SI02住居跡と重複し、これより古い。10箇所すべての柱穴を検出し、そのうちP7で抜き取り穴を確認している。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長5.9m、柱間寸法は北から1.9・2.1m・1.9m、梁行は北妻で総長4.2m、柱間寸法は2.1m等間である。方向は東側柱列でみると北で東へ約9度偏する。

柱穴は一辺が50cmの隅丸方形や長辺50～60cm、短辺48～55cmの隅丸長方形を呈する。深さは24～40cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトを基調としている。柱痕跡は8箇所を確認しており、径15～28cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡は、東側柱列の柱筋をSB41の西側柱列と揃えて南北に並んでいる。

**【SB43 建物跡】** (第93図)

南区中央部の中央に位置する。東西1間、南北1間の東西棟建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は南側柱列で2.1m、東側柱列で1.9mである。方向は東側柱列でみると北で東へ約7度偏する。柱穴は長辺30～40cm、短辺30～40cmの隅丸方形を呈する。深さは22～42cmである。埋土は地山ブロックや地山粒を含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡はすべての柱穴で確認されており、径13～15cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡とSB42は、北側柱列の柱筋を揃え、約6m離れて東西に並んでいる。

**【SB44 建物跡】** (第93図)

南区中央部の東壁際で検出した南北に並ぶ2個の柱穴から桁行1間以上、梁行1間以上の建物と推定したものである。いずれれの柱穴でも柱の抜き取り穴を確認した。

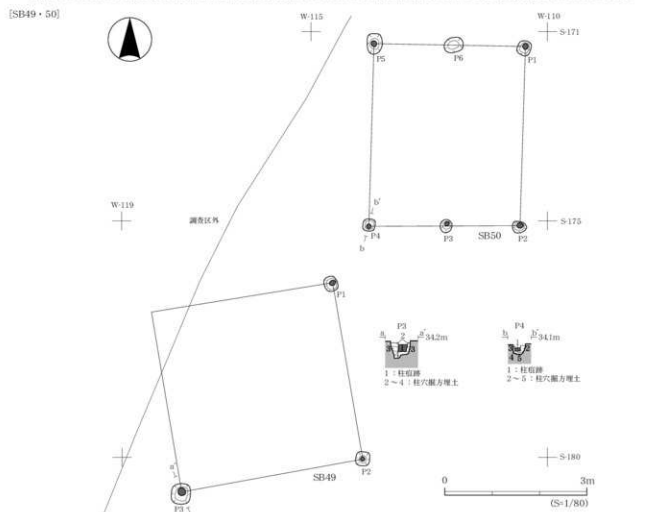
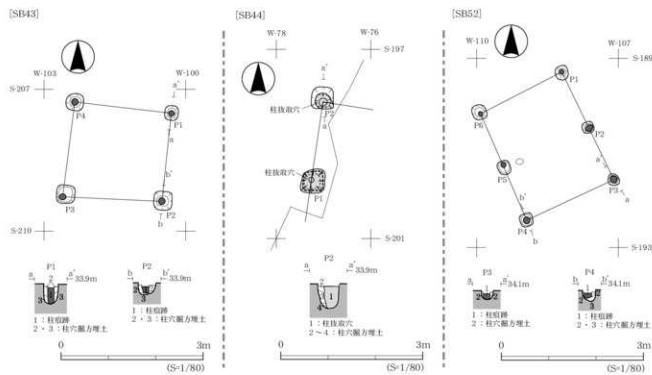
柱間寸法は抜き取り穴の中心で測ると約1.7mである。方向は北で東へ約9度偏する。柱穴は一辺45cm程の隅丸方形を呈する。深さは約50cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。遺物は出土していない。

前述したSB41の北側柱列の東延長線上の約9mに本建物跡の隅柱が位置し、両建物跡の傾きがほぼ等しい。

**【SB45 建物跡】** (第94図、図版54)

南区南半部の中央に位置する。桁行3間、梁行2間の東西棟建物跡である。10箇所すべての柱穴を検出している。SI01建物跡、SK12・13・14・15・24・32土壇と重複し、SI01より新しいが、その他との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長6.6m、柱間寸法は2.2m等間、梁行は東妻で総長4.5m、柱間寸法は北から2.3m・2.2mである。方向は北側柱列でみると西で北へ約14度偏する。柱穴は径60cm程の円形、一辺が50cmの隅丸方形、長辺50～74cm、短辺50～64cmの隅丸長方形を呈する。深さは35～53cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径15～22cmのほぼ円形を呈する。遺物は破片で図示できなかったが、埋土から非ロクロ調整の土師器杯の口縁部破片が出土している。



第93図 SB43・44・49・50・52建物跡

本建物跡はSB46・47と北側柱列の柱筋を描えて東西に並んでいる。

【SB46 建物跡】(第95図、図版54)

南区南半部の西寄りに位置する。桁行3間、梁行2間の東西棟建物跡である。10箇所すべての柱穴を検出している。SB48建物跡、SK18土壌と重複するが新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が北側柱列で総長7.1m、柱間寸法は東から2.4m・2.3m・2.4m、梁行は東妻で総長4.3m、柱間寸法は北から2.1m・2.2mである。方向は北側柱列で見ると西で北へ約12度偏する。柱穴は長辺46～60cm、短辺45～50cmの隅丸方形や長径55～67cm、短径50～60cmの楕円形を呈する。深さは46～70cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡はすべてで確認しており、径15～21cmのほぼ円形をなすもの他に、長径20～23cm、短径16～20cmの楕円形を呈するものがある。遺物は出土していないが、P8の柱痕跡には焼土がみられた。

本建物跡は、SB45・SB47とそれぞれ北側柱列の柱筋を描えて東西に並ぶ。

【SB47 建物跡】(第95図、図版54)

南区南半部の西壁際に位置する。建物西半部は調査区外で、南東隅の柱穴も検出できなかったが、桁行3間以上、梁行2間の東西棟建物跡である。6箇所で柱穴を検出している。SK27・28土壌と重複し、SK27より新しいが、SK28との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が総長不明で、柱間寸法は北側柱列で東から1.8m・1.7m、梁行は東妻で柱間寸法が北から1.9m、総長は、東妻から西へ1間目の柱列で3.7mである。方向は北側柱列で見ると西で北へ約12度偏する。柱穴は長辺44～50cm、短辺38～49cmの隅丸方形、隅丸長方形や長径48cm、短径45cmの楕円形を呈する。深さは19～41cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は6箇所を確認され、径14～17cmのほぼ円形や長径17cm、短径15cmの楕円形を呈する。P1の柱痕跡からは焼土が検出されている。遺物は出土していない。

本建物跡はSB45・46とそれぞれ北側柱列の柱筋を描えて東西に並ぶ。

【SB48 建物跡】(第95図、図版54)

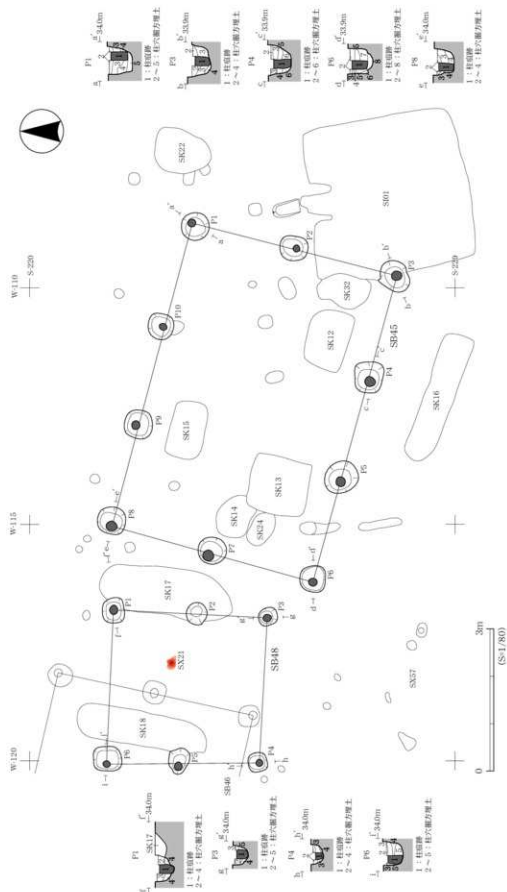
南区南半部の中央に位置する。桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。6箇所すべての柱穴を検出している。SB46建物跡、SK17・18土壌、SX21焼面遺構と重複し、SK17より新しく、SK18より古い。SB46、SX21との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が西側柱列で総長3.2m、柱間寸法は北から1.5m・1.7m、梁行は南妻で総長3.1mである。方向は東側柱列で見ると北で東へ約2度偏する。柱穴は長辺40～55cm、短辺37～52cmの隅丸方形、隅丸長方形や長径48～54cm、短径44～45cmの楕円形を呈する。深さは27～40cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は5箇所を確認され、径15～20cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡とSB53は、約8.3mの間隔で南北に並んでおり、本建物跡の東側柱列とSB53の西側柱列が柱筋を描えている。

【SB49 建物跡】(第93図)

南区中央部の西壁付近くに位置する。北西隅の柱穴は調査区外であるが、東西1間、南北1間の建物



第94図 SB45・48建物跡

跡である。

平面規模は南側柱列で3.9m、東側柱列で3.8mである。方向は南側柱列でみると西で南に約10度偏する。柱穴は長辺30～47cm、短辺30～40cmの隅丸長方形を呈する。深さは12～37cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は検出した3個の柱穴すべてで確認しており、径13～17cmの円形や長径13cm、短径10cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB50 建物跡】(第93図)

南区中央部の西壁付近に位置する。桁行1間、梁行2間の南北棟である。6箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は桁行が東側柱列で3.8m、梁行は南妻で総長3.2m、柱間寸法は1.6m等間である。方向は東側柱列でみると北で東へ約1度偏する。柱穴は一辺が25～30cmの隅丸方形、長辺30～43cm、短辺24～32cmの隅丸長方形や長径27cm、短径25cmの楕円形を呈する。深さは16～32cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は5箇所確認しており、径10～13cmのほぼ円形や長径15cm、短径10cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB52 建物跡】(第93図)

南区中央部の西寄りに位置する。桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。6箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は桁行が東側柱列で総長2.5m、柱間寸法は北から1.3m・1.2mである。梁行は南妻で2.0mである。方向は東側柱列でみると北で西へ約26度偏する。柱穴は一辺が25～31cmの隅丸方形を呈する。深さは14～25cmである。埋土は地山粒を含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡はすべて確認しており、径10～15cmの円形や長径12～16cm、短径12～13cmの楕円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 【SB53 建物跡】(第96図、図版54)

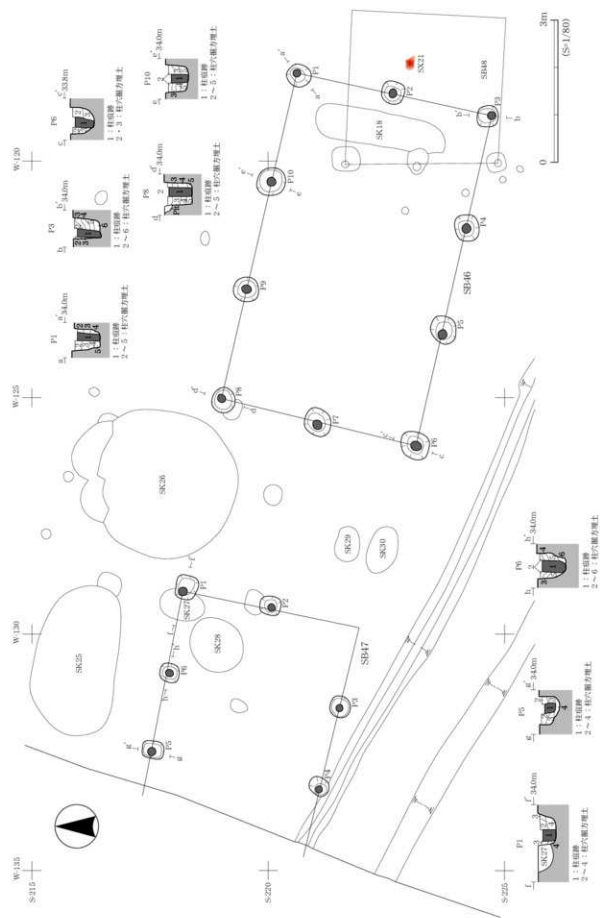
南区南半部の中央に位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。10箇所すべての柱穴を検出している。そのうちのP6では柱が抜き取られている。SI06A・B・C住居跡、SI59住居跡と重複し、SI06A・B・Cより古い。また、SI59との新旧関係は不明である。

平面規模は桁行が東側柱列で総長7.1m、柱間寸法は北から2.4m・2.2m・2.5m、梁行は北妻で総長4.4m、柱間寸法は西から2.2m・2.2mである。方向は東側柱列でみると北で東へ約5度偏する。柱穴は一辺が55cmの隅丸方形や長辺56～68cm、短辺47～50cmの隅丸長方形を呈する。深さは8～40cmである。埋土は地山粒・地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は9箇所確認しており、径13～17cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡はSB54とは東側柱列の柱筋を揃え、約3mの間隔をおいて南北に並ぶ。また、西側柱列の柱筋をSB48の東側柱列と揃え、約8.3mの間隔をおいて南北に並んでいる。

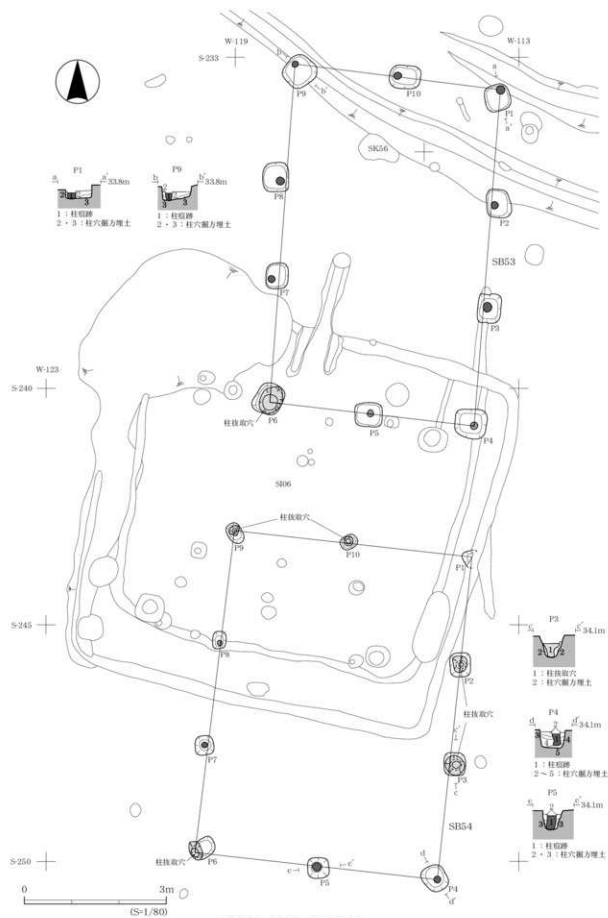
#### 【SB54 建物跡】(第96図、図版54)

南区南半部の中央に位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である。10箇所すべての柱穴を検出している。そのうちP2・P3・P6・P9・P10では柱が抜き取られている。SI06住居跡、SI59住居



第95図 SB46・47建物跡





第96図 SB53・54建物跡

跡と重複し、SI06より古い。

平面規模は桁行が西側柱列で総長約 6.9m、柱間寸法は北から約 2.4m・約 2.2m・約 2.3m、梁行は南妻で総長約 5.1m、柱間寸法は東から 2.6m・約 2.5m である。方向は東側柱列でみると北で東へ約 7 度偏する。柱穴は一辺が 45 cm の隅丸方形や長辺 37 ～ 57 cm、短辺 27 ～ 49 cm の隅丸長方形を呈する。深さは 10 ～ 45 cm である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は P4・P5・P7・P8 の 4 箇所を確認されており、径 12 ～ 18 cm の円形を呈する。遺物は出土していない。

SB53 と東側柱列の柱筋を揃え、約 3 m の間隔をおいて南北に並ぶ。

【SB58 建物跡】(第 97 図)

南区南半部の中央付近に位置する。桁行 2 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。8 箇所すべての柱穴を検出している。なお、南側柱列は 2 間とみたが、柱穴が西側へ極端に寄っていることから、3 間である可能性も考えられる。

平面規模は桁行が南側柱列で総長 3.7m、柱間寸法は東から 2.4m・1.3m、北側柱列で総長 3.8 m、柱間寸法は、抜き取り穴の中央に柱位置を想定すると約 2.4 m 等間となる。梁行は西妻で総長 3.4m、柱間寸法は 1.7m 等間である。方向は南側柱列でみると西で北へ約 18 度偏する。柱穴は長辺 27 ～ 40 cm、短辺 23 ～ 32 cm の隅丸長方形や径 18 ～ 25 cm の円形を呈する。深さは 15 ～ 23 cm である。埋土は地山粒を含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は P2、P8 を除く柱穴で確認しており、径 13 cm のほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

【SB72 建物跡】(第 97 図)

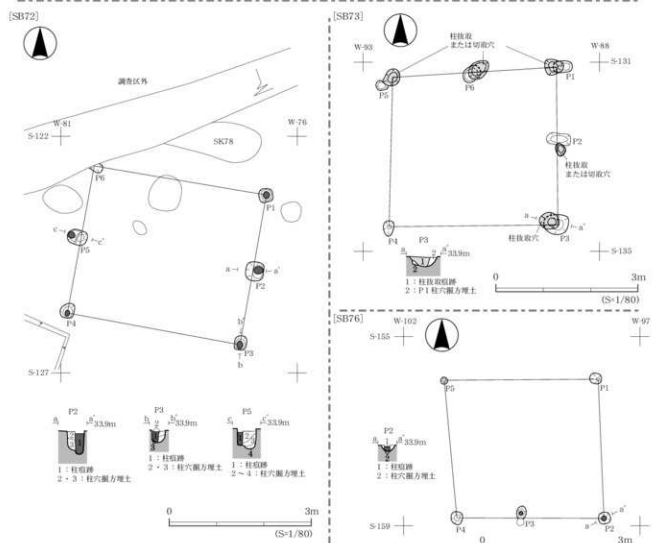
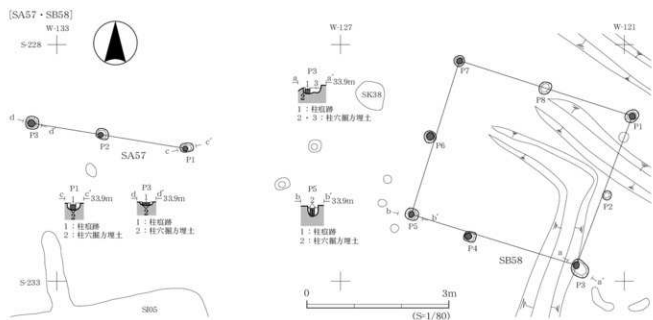
北区北端部の中央に位置する。桁行 1 間、梁行 2 間の東西棟建物跡である。6 箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は桁行が南側柱列で 3.7m、梁行は東妻で総長 3.2m、柱間寸法は 1.6m 等間である。方向は南側柱列でみると西で北へ約 11 度偏する。柱穴は長辺 30 ～ 41 cm、短辺 28 ～ 40 cm の隅丸長方形を呈する。深さは 25 ～ 43 cm である。埋土は地山粒・地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は P6 を除く柱穴で確認しており、長径 12 ～ 20 cm、短径 10 ～ 16 cm の楕円形を呈する。遺物は出土していない。

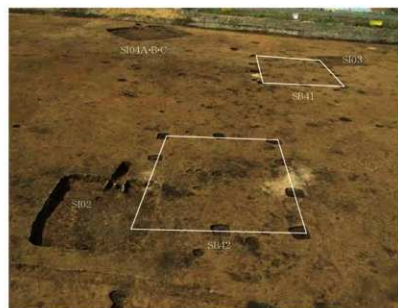
【SB73 建物跡】(第 97 図)

南区北西隅に位置する。西側柱列と南側柱列における中央の柱穴は検出できなかったが、これらを後世の削平によるものと考え、桁行・梁行ともに 2 間の東西棟建物跡と捉えた。柱穴は 6 箇所で見出したが、いずれの柱穴でも柱が抜き取られているため柱痕跡は確認できなかった。

平面規模は、柱位置を抜き取り穴の中央に想定すると、桁行が北側柱列で総長約 3.9m、柱間寸法は東から約 2.0m・約 1.9m、梁行は東妻で総長約 3.3m、柱間寸法は北から約 1.5m・約 1.8m である。方向は北側柱列でみると西で南へ約 6 度偏する。柱穴は長辺 25 ～ 50 cm、短辺 20 ～ 40 cm の隅丸長方形または不整形を呈する。深さは 20 cm ほどである。埋土は地山粒・地山ブロックを含む暗褐色シルトを基調としている。遺物は出土していない。



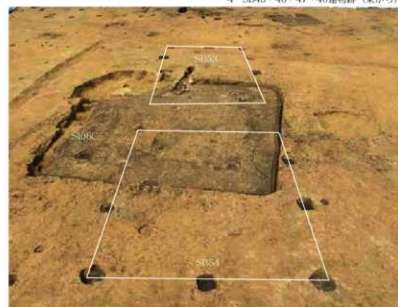
第97図 SA57崩跡、SB58・72・73・76建物跡



1 SB41・42建物跡 (南から)



4 SB45・46・47・48建物跡 (東から)



7 SB53・54建物跡 (南から)



図版54 SB41・42・45・46・47・48・53・54建物跡

#### 【SB76 建物跡】(第97図)

南区北半部の西側に位置する。南側柱列が2間、その他が1間の建物跡である。5箇所で柱穴を検出している。

平面規模は、柱位置を抜取穴の中央に想定すると、南側柱列で総長約3.1m、柱間寸法は東から1.8m・約1.3m、東側柱列で総長約3mである。方向は東側柱列でみると北で西へ3度偏する。柱穴は長辺25cm、短辺23cmの隅丸長方形、長径30cm、短径20～25cmの楕円形や径10cmの円形を呈する。深さは約16cmである。埋土は地山粒・地山ブロックを含む暗褐色シルトを基調としている。柱痕跡はP2、P3で確認されており、径8～12cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

#### 4. 堀跡

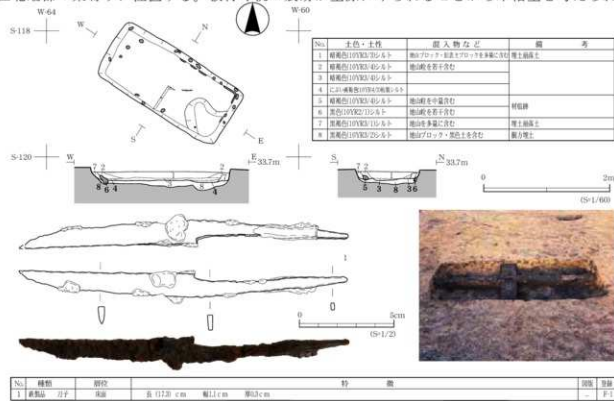
##### 【SAS7 堀跡】(第97図)

南区南半部の西側に位置する。東西2間の堀跡である。規模は、総長3.3m、柱間寸法は東から1.8m、1.5mである。方向は西で北へ約8度偏する。柱穴は長辺27～30cm、短辺18～27cmの隅丸方形または隅丸長方形を呈する。深さは約10cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は3箇所すべてで確認しており、径10～15cmである。遺物は出土していない。

#### 5. 木棺墓

##### 【SP75 木棺墓】(第98図)

南区北端部の東寄りに位置する。板材や杭の痕跡が壁際にもみられることから木棺墓と考えられる。



第98図 SP75木棺墓及び出土遺物

〔平面形・規模・壁〕長辺225cm、短辺105cmの隅丸長方形を呈する。深さは20～30cmである。壁は、東辺が直立気味に立ち上がり、その他はやや開き気味に立ち上がる。

〔方向〕北辺でみると、西で北へ約32度偏する。

〔堆積土〕5層認められた。1層は地山ブロックや旧表土ブロックを多量に含む暗褐色シルトで、木棺墓の上部または壁の埋土の崩落土である。2～4層は暗褐色シルト、にぶい黄褐色のシルトで、棺内部の自然堆積または埋土の崩落土である。7層は地山粒を多量に含む黒褐色シルトで、壁の埋土または埋土の崩落土である。

〔材の痕跡〕北東隅や東辺・北辺の一部で幅1cm程、深さ5cmほどの黒色シルトを確認し、棺の板材の痕跡と考えた。この痕跡は部分的な検出であることから、木棺の規模等の詳細は不明である。また、壁際に径3～5cm、深さ5cmほどの暗褐色～黒色のシルトの柱の痕跡とみられるものを20個ほど検出した。これらは棺の部材を支える杭と考えられる。

〔遺物〕遺物は底面中央やや東寄りから刀子(第98図1)が1点出土している。

#### 6. 土壌(第99～105図)

土壌には平面形や堆積土などの違いから、I類：縄文時代の陥し穴と考えられているものと、II類：それ以外の性格不明な土壌に分けられる。I類の土壌は、平面形から溝状を呈するもの(I A類：I基)と円形・方形を基調とするもの(I B類：2基)に細分できる。II類の土壌は40基検出しているが、この中にはSK13のように近世の墓跡とみられるものや、堆積土に焼土や炭化物や土器などを多く含む何らかの作業に伴う廃棄土壌の可能性が考えられるものなどもあるが、多くが性格不明のものである。

なお、平面図は堆積土に遺物が含まれ、出土遺物があるものなどを抽出し、図示した。土壌全体の平面形・規模・重複関係などは第8表にまとめてある。

#### 7. 溝跡

##### 【SD23 溝跡】(第56・106図)

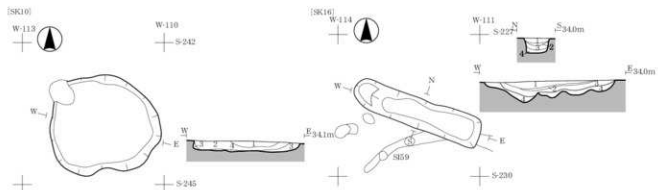
南区南半部中央に位置する。SK19・20土壌と重複し、これより新しい。長さ4.97mで南北方向に延びる。上幅34～45cmで、深さは10～18cmである。断面形は短軸方向で変形したU字形を呈する。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。遺物は破片で図示しなかったが、堆積土からロクロ調整の土師器片が出土している。

##### 【SD33 溝跡】(第56・106図)

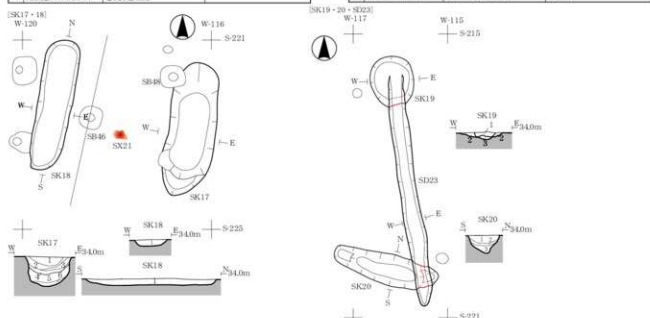
南区中央部に位置し、東西とも調査区外へと延びる。東から約31mはほぼ東西に延び、その後北西方向へ向きを変え約18m延びる。上幅31～48cmで、深さは10～15cmである。断面形は短軸方向で緩やかなU字形を呈する。堆積土は炭化物や地山粒を含む黒褐色シルトの自然堆積である。

##### 【SD35 溝跡】(第57・106図)

南区南西隅に位置する。SK36土壌と重複し、これより古い。調査区内で検出した沢に沿うように



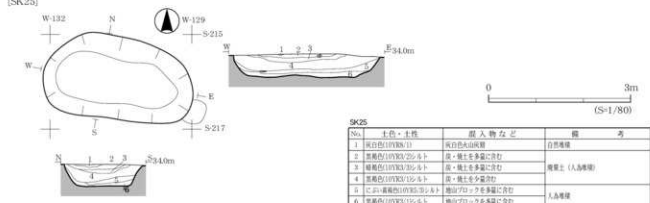
SK10	No.	土色・土性	掘入物方寸	備考
SK10	1	黒褐色の砂状シルト	掘削ノコを多量に含む	発見：(人・灰燼)
	2	黒褐色の砂状シルト	炭・焼土を多量に含む	
	3	黒褐色の砂状シルト	掘削ノコを多量に含む	焼土を少量含む
	4	灰褐色の砂状シルト	掘削ノコを多量に含む	焼土を少量含む



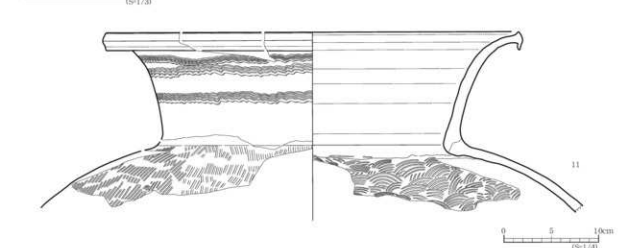
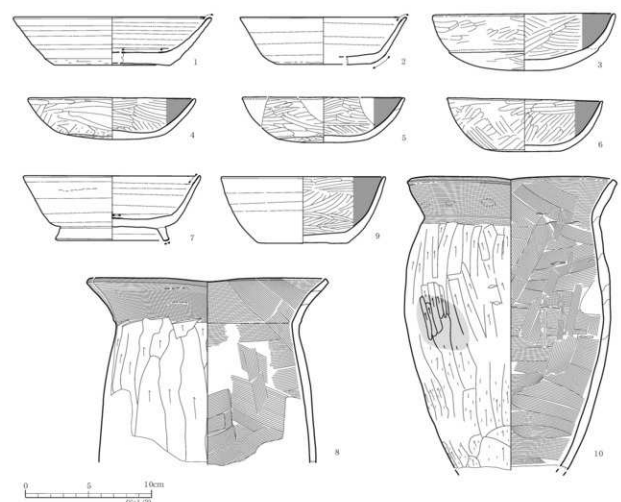
SK17	No.	土色・土性	掘入物方寸	備考
SK17	1	黒褐色の砂状シルト	掘削ノコを多量に含む	
	2	白土	掘削ノコを多量に含む	
	3	黒褐色の砂状シルト	炭・焼土を多量に含む	人・灰燼
	4	黒褐色の砂状シルト	炭・焼土を多量に含む	人・灰燼
	5	白土	掘削ノコを多量に含む	自然隆起

SK18	No.	土色・土性	掘入物方寸	備考
SK18	1	黒褐色の砂状シルト	掘削ノコを多量に含む	人・灰燼
	2	黒褐色の砂状シルト	掘削ノコを多量に含む	人・灰燼



第99図 SK10・16・17・18・19・20・25 土塊、SD23溝跡



No.	遺構	層様	形状	方位	径長	特徴	備考
1	SK19	埋藏部	円形	掘削	2.5 15.0 20.0	内：ロコナダニ→溝跡下部埋藏部へナラズ引込 掘削後埋戻し→埋戻しナラズ引込	551 831
2	SK19	埋藏部	円形	掘削	1.5 13.0 17.0	内：ロコナダニ→溝 埋藏部ナラズ引込 内：ロコナダニ→埋藏部	552 831
3	SK20	埋藏部	円形	掘削	4.5 14.5 14.5	内：埋戻し→埋戻しナラズ引込→ナラズ引込 内：ロコナダニ→埋藏部	553 831
4	+	土塊部	円形	掘削	3.4 13.4 8.2	内：埋戻しナラズ引込→ナラズ引込 内：埋戻しナラズ引込 内：ナラズ引込→埋藏部埋戻し→埋戻しナラズ引込	554 832
5	+	土塊部	円形	掘削	1.3 13.0 13.0	内：埋戻しナラズ引込→ナラズ引込 内：埋戻しナラズ引込 内：ナラズ引込→埋藏部埋戻し	555 832
6	SK20	埋藏部	円形	掘削	3.8 13.8 13.8	内：埋戻しナラズ引込→ナラズ引込 内：埋戻しナラズ引込 内：ナラズ引込→埋藏部埋戻し	556 832
7	SK31	埋藏部	円形	掘削	2.3 14.3 9.9	内：ロコナダニ→溝埋藏部埋戻し→ロコナダニ→溝埋藏部 内：ロコナダニ→溝埋藏部	557 832
8	+	土塊部	圓形	掘削	一部 19.2 7 11.6 8	内：ココナダニ→溝埋藏部埋戻し→ココナダニ→溝埋藏部埋戻し→ココナダニ→溝埋藏部埋戻し	558 832
9	SK34	埋藏部	円形	掘削	2.8 13.1 12.9	内：埋戻しナラズ引込→埋戻しナラズ引込 内：ロコナダニ→溝埋藏部埋戻し→ココナダニ→溝埋藏部埋戻し	559 832
10	SK36	埋藏部	圓形	掘削	1.2 16.7 22.0	内：ココナダニ→埋戻しナラズ引込→埋戻しナラズ引込→埋戻しナラズ引込	560 832
11	SK38	埋藏部	圓形	掘削	一部 143.0	内：4層→埋藏部埋戻し→埋戻しナラズ引込 内：埋藏部埋戻し	561 832

第100図 SK10・25・28・31・34・36・65土塊出土遺物



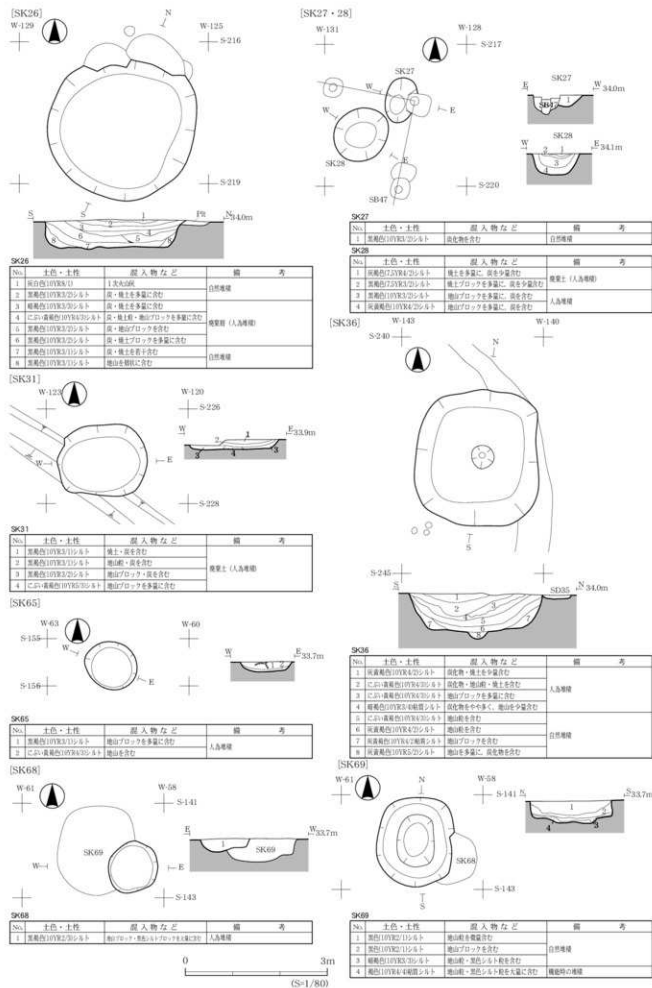
1: SK10 3, 4: SK25 6: SK28 7: SK31 9: SK34 10: SK36 11: SK65  
1,3,4,6,7,9,10: S-1/9 11: S-1/4

図版55 SK10・25・28・31・34・36・65土壌出土遺物

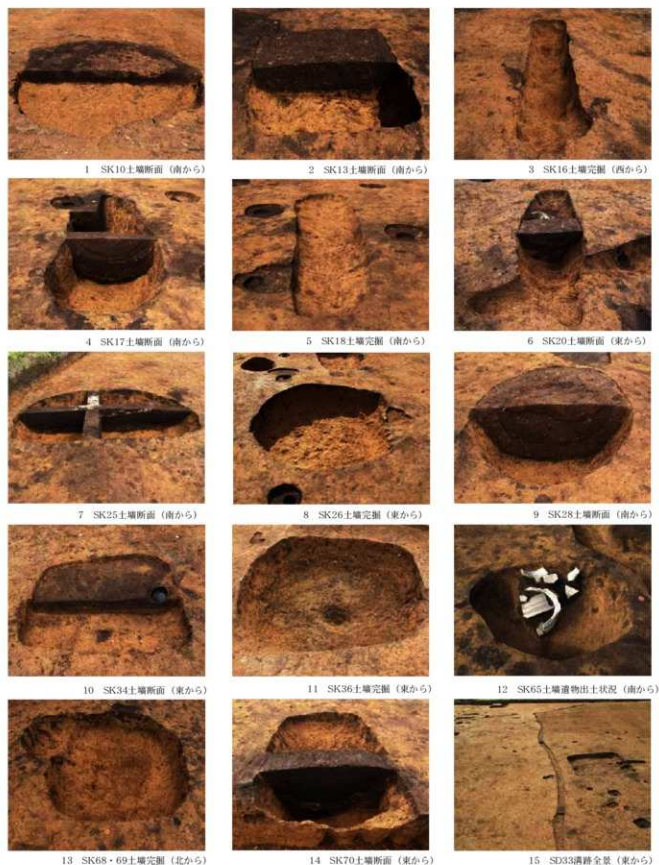
やや湾曲しながら約17m 延び、両端とも調査区外へと延びる。上幅 40 ～ 112 cm で、深さは 13 ～ 25 cm である。断面形は短軸方向で皿形を呈する。堆積土は地山粒、地山ブロックを含む黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルトの自然堆積である。破片で図示しなかったが、非ロクロ調整の土器の坏底部破片や甕の胴部破片が出土している。

【SD74 溝跡】(第 55・106 図)

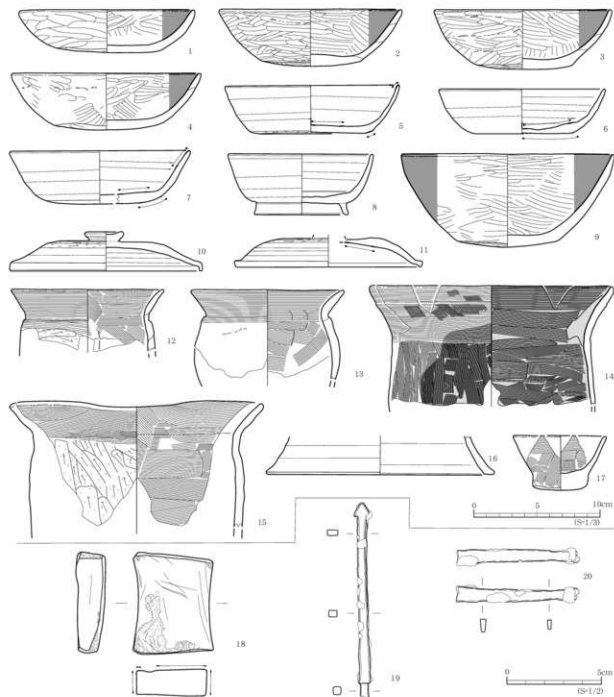
南区北半部の北側に位置する。長さ約 15m で北西～南東方向に続く。後世の削平により両端が途切れている。上幅 28 ～ 46 cm で、深さは約 20 cm である。断面形は短軸方向で開き気味な U 字形を呈する。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトの自然堆積である。遺物は出土していない。



第101図 SK26・27・28・31・36・65・68・69土壌



図版56 土壌、溝跡



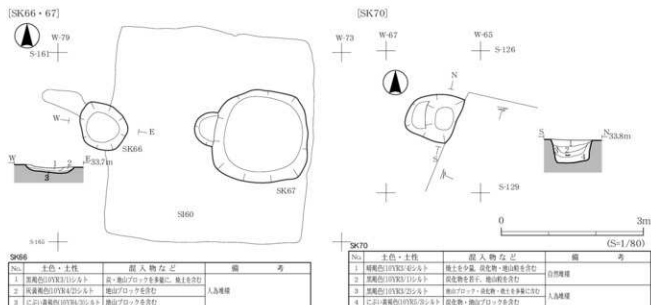
No.	器種	分類	形状	高さ	径	底径	底面	図	特 徴	図録	図
1	土師器	甕	1.60	3.4	1.49	0.1	0.4	1	内：丸口直母 (底) ハナ直母 内：ハナ直母・底面直母	163	84
2	土師器	甕	1.60	3.4	1.46	0.0	0.3	2	内：ハナ直母 (底) ハナ直母 内：ハナ直母・底面直母	163	83
3	土師器	甕	1.60	3.4	1.41	0.1	0.2	3	内：ハナ直母 (底) ハナ直母 内：ハナ直母・底面直母	163	82
4	土師器	甕	1.60	3.4	1.12	0.11	0.20	4	内：ハナ直母 (底) 内筒ハナ直母・底(1)直母 内：ハナ直母・底面直母	164	83
5	土師器	甕	0.67	1.2	0.13	0.0	0.0	5	内：口直母・底直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	85
6	土師器	甕	0.67	1.2	0.12	0.0	0.0	6	内：口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	84
7	土師器	甕	0.67	1.2	0.48	0.0	0.23	7	内：口直母 (底) 内筒ハナ直母 内：口直母 底面直母	163	86
8	土師器	甕	0.67	1.2	0.13	0.0	0.0	8	内：口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母 内：口直母	163	87
9	土師器	甕	0.67	1.2	0.12	0.0	0.0	9	内：口直母 (底) 内筒ハナ直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	88
10	土師器	甕	1.0	2.0	0.52	-	0.1	10	底面直母のみ存在 内：口直母・底面直母・口直母・口直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	164	83
11	土師器	甕	1.2	2.4	0.48	-	0.1	11	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	89
12	土師器	甕	1.62	3.2	1.22	-	0.4	12	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	90
13	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	13	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	91
14	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	14	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	92
15	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	15	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	93
16	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	16	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	94
17	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	17	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	95
18	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	18	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	96
19	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	19	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	97
20	土師器	甕	1.26	2.5	0.52	-	0.1	20	内：口直母・底面直母・口直母 (底) 内筒ハナ直母・底面直母	163	98

第102図 SK26土壌出土遺物



1~11: L14.16 : S1/1/2  
18~20 : S1/1/2

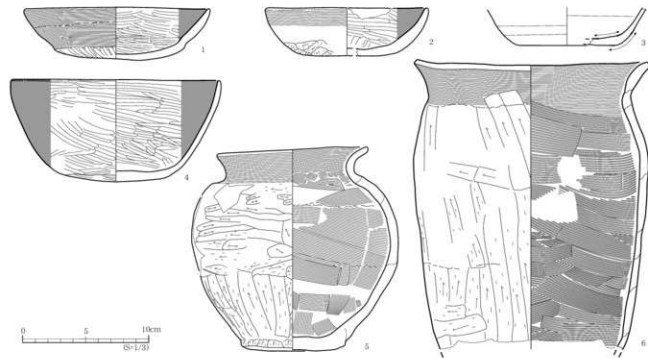
図版57 SK26土壙出土遺物



No.	主色・土性	器人物など	備考
1	黒褐色(S1)W10.5:8	底・縁付口・片手縁部、縁上全体	
2	灰黄褐色(S1)W10.5:8	縁付口・片手縁部	片手縁部
3	土上(黒褐色)W10.5:8	縁付口・片手縁部	

No.	主色・土性	器人物など	備考
1	黒褐色(S1)W10.5:8	縁上全体、縁付口、縁部(縁部)	片手縁部
2	黒褐色(S1)W10.5:8	縁部(縁部)	
3	黒褐色(S1)W10.5:8	縁付口・片手縁部、縁上全体	片手縁部
4	土上(黒褐色)W10.5:8	縁付口・片手縁部	

第103図 SK66・67・70土壙

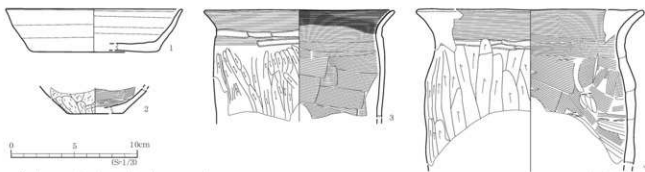


No.	器種	分類	形状	規格	経緯	出所	備考	図	説明	
1	土壙	鉢	丸縁	2.3	14.80	—	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	S21	S1.1
2	土壙	鉢	丸縁	2.5	13.30	—	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	S22	S2.2
3	土壙	鉢	丸縁	1.7	—	16.20	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	—	S1.8
4	土壙	鉢	丸縁	3.5	16.2	—	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	S24	S3.3
5	土壙	壺	丸縁	4.5	12.0	8.2	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	S25	S1.5
6	土壙	壺	丸縁	1.3	18.8	—	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	内:黒コテ子・子付・縁部(内)W10.5:8	S26	S1.6

第104図 SK67土壙出土遺物

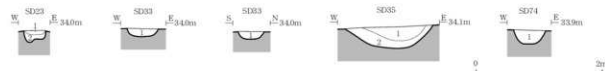


図版58 SK67土壙出土遺物



No.	遺構	分類	形状	構造	位置	特徴	図例	説明
1	基礎壁	煉瓦	溝状	溝壁	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区
2	土壁	土	壁	壁	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区
3	土壁	土	壁	壁	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区
4	土壁	土	壁	壁	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区	北1区・北2区

第105図 SK70土城出土遺物



No.	遺構	分類	形状	構造	位置	特徴	図例	説明
1	土壁・土柱	土	壁	柱	SD23	土壁・土柱	土壁・土柱	土壁・土柱
2	土壁	土	壁	壁	SD23	土壁	土壁	土壁
3	土壁	土	壁	壁	SD23	土壁	土壁	土壁

第106図 SD23・33・35・74 溝跡

## 8. 焼面遺構

住居に伴わず、掘り方等を持たず、加熱で赤く変色した痕跡を焼面遺構とした。

### 【SX21 焼面遺構】(第57・94図)

南区南半部の中央に位置する。SB48 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。長軸 30 cm、短軸 20 cm の不整形な範囲で焼け面を検出した。

### 【SX38 焼面遺構】(第56図)

南区中央部の中央に位置する。長辺 29 cm × 短辺 25 cm の範囲で焼け面を検出した。

## 9. その他の遺物

縄文・弥生土器の破片や石器などが少量出土している。弥生時代後期の土器(第107図1～3)や玉随製の石鏃(第107図4)、黒曜石製のラウンドスクレイパー(第107図5)、頁岩製の縦長剥片(第107図6)などがある。



No.	種別	遺構	形状	位置	特徴	図例	説明
1	陶器	土器	片	北1区	土器	土器	土器
2	陶器	土器	片	北1区	土器	土器	土器
3	陶器	土器	片	北1区	土器	土器	土器
4	石器	石	片	北1区	石器	石器	石器
5	石器	石	片	北1区	石器	石器	石器
6	石器	石	片	北1区	石器	石器	石器

第107図 南区その他の遺物

## 北区(北1・北2区)(第108図)

### 1. 竪穴住居跡

#### 【SI102住居跡】(第109図、図版59)

北-1区中央東縁で検出した。後世の削平で住居中央と南辺の一部が失われ、東辺と南東隅は調査区外へと延びている。床面は、南辺から中央部にかけての大半が削平により失われているが、堆積土から多量の焼土・炭化物和若干量の炭化材が検出されたことから、この住居は火災に遭っていると考えられる。

[平面形・規模] 残存している部分でみると、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西が北辺で6.0m、南北が西辺で5.8mである。

[方向] 西辺でみると北で西へ約3度偏する。

[壁] 壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りの良い西壁で27cmである。

[堆積土] 5層認められる。いずれも住居内の堆積土で、1層は灰白色火山灰を多量に含む黒褐色シルト、2・3層は地山粒、炭化物、焼土を含む暗褐色・黒褐色シルト、4層は地山粒、炭化材、炭化物、焼土を多量に含む灰黄褐色シルト、5層は地山小ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで、いずれも自然堆積である。

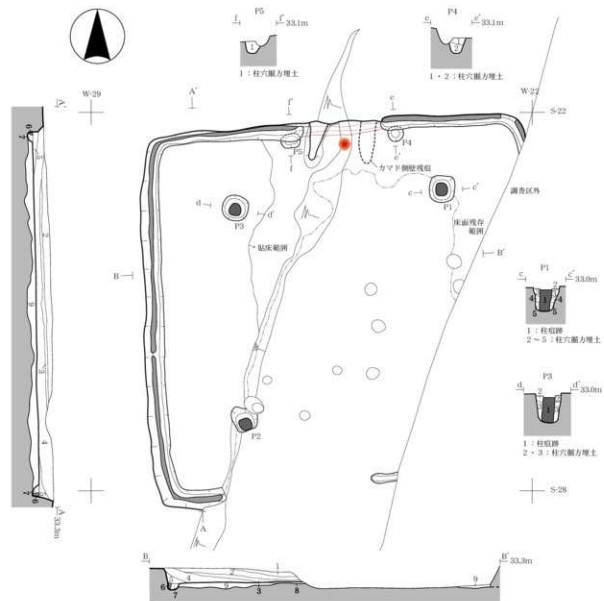
[床面] 住居西側部分と北東隅で確認した。床面はほぼ平坦で、周辺部は掘方埋土を床面とし、中央部は貼床されている。

[柱穴] 住居平面形の対角線上に位置すると考えられる3箇所(北1区)の床面に主柱穴(P1～P3)を検出した(1箇所は調査区外)。P1・P2は掘方の平面形が一边38～43cmの隅丸方形または不整形な方形を

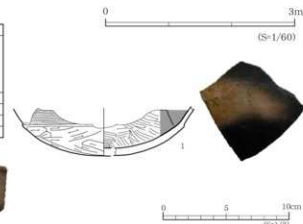




第108図 北区遺構配置図



No.	土色・土性	掘入物など	備考
1	黄褐色の砂質粘土	灰土の表面を多量に含む	
2	黄褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
3	黄褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
4	黄褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
5	赤褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
6	黄褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
7	黄褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
8	赤褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層
9	赤褐色の砂質粘土	掘削多量に、灰土を掘上を含む	灰土層



No.	図種	分層	部位	形状	寸法	重量	特徴	図例	説明
1	土層	第1層	3-層	一部	100	100	赤褐色の砂質粘土・灰土層		- R.1
2	土層	第1層	3-層	一部	100	100	赤褐色の砂質粘土・灰土層		- R.2

第109図 SI102住居跡及び出土遺物



図版59 SI102住居跡

呈し、P3は径38cmの円形を呈する。深さは36～50cmである。柱痕跡は一边18～20cmの不整形な方形を呈する。

〔カマド〕北辺中央に付設される。燃焼部の西側壁と焼成面の一部を検出した。燃焼部は白色粘土を含む暗褐色土を積み上げて構築されている。カマドの規模は燃焼部内壁の焚き口部で幅73cm、奥壁で幅50cm、奥行75cmとみられる。残存している燃焼部底面はほぼ平坦で、径20cmほどの円形の範囲で焼けて赤変している。また、燃焼部底面に周溝が認められ、壁材は抜かれている。このことから、別の場所にあった古いカマドがこの場所に作り替えられたと考えられる。

〔その他のピット〕カマド両側壁が壁に取り付く部分の外側2箇所ピットを各1個(P4、P5)検出した。P4の平面形は径25cmの円形を呈し、深さは22cmである。P5の平面形は長径30cm、短径20cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。いずれにおいても柱痕跡は確認できなかった。これらは位置からカマド部分の住居の壁構造に関連する柱穴の可能性と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕残存状態が悪いが、ほぼ全周すると思われる。周溝の幅20～30cm、深さ9～16cmで、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。また、この周溝内で北東隅や西辺の一部で途切れるが幅4～10cm、深さ6～10cmの壁材痕跡と考えられる暗褐色のシルトが認められた。

〔出土遺物〕堆積土から非クロロ調整の土師器坏(第109図1・2)が出土している。

## 2. 竪穴遺構

### 〔SX101 竪穴遺構〕(第110図)

北-1区北半部の中央付近で検出した。

〔平面形・規模〕隅丸方形を呈する。規模は東西が北辺で3.1m、南北が西辺で3.0mである。

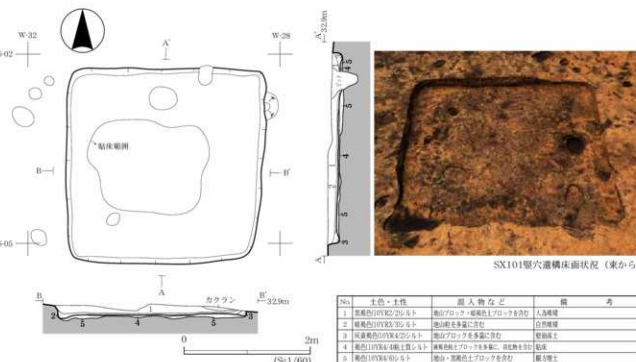
〔方向〕東辺でみると北で東へ約3度偏する。

〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、高さは残りの良い西壁で17cmである。

〔床面〕床面は中央部はほぼ平坦で、周辺部は緩やかに低くなっている。また、周辺部は掘方埋土を床面とし、中央部は貼床されている。

〔堆積土〕3層認められた。1層は、地山ブロック、暗褐色土ブロックを含む黒褐色シルトで、埋め戻されている。2・3層は地山ブロック、地山粒を多量に含む暗褐色・灰黄褐色シルトで、壁崩落土を含む自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕破片で図示できなかったが、土師器の口縁部が出土している。



第110図 SX101竪穴遺構

## 3. 掘立柱建物跡

### 〔SB103 建物跡〕(第111図)

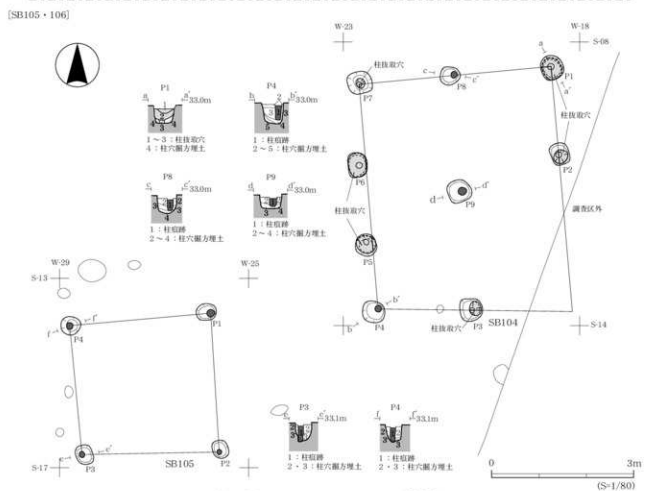
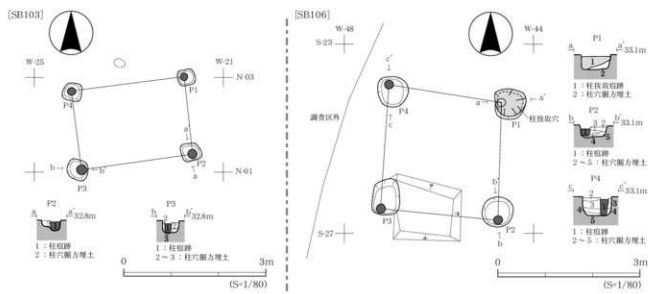
北-1区北半部に位置する。東西1間、南北1間の東西棟建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は桁行が南側柱列で2.4m、東妻で1.7mである。方向は南側柱列でみると西で南へ約7度偏する。柱穴は一边が40cmの隅丸方形を呈するものや長辺37～45cm、短辺34～42cmの隅丸長方形を呈する。深さは17～25cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトを基調としている。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認しており、径17～21cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

### 〔SB104 建物跡〕(第111図、図版60)

北-1区北半部の東壁際に位置する。建物南東隅の柱は調査区外であるが、桁行3間、梁行2間の床束を伴う南北棟建物跡である。8箇所柱穴を検出しており、6箇所柱の抜き取り穴を確認した。

平面規模は桁行が西側柱列で総長4.8m、柱間寸法は北から1.7m・1.6m・1.5m、梁行は北妻で総長4.1m、柱間寸法は東から2.1m・2.0mである。方向は西側柱列でみると北で西へ約5度偏する。柱穴は長辺40～52cm、短辺38～48cmの隅丸長方形または隅丸方形を呈する。深さは30～45cmである。



第111図 SB103・104・105・106建物跡

埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は2箇所で柱痕跡を確認しており、径13cmの円形を呈する。棟通下の床束は一辺50cmほどの隅丸方形を呈し、深さは30cmほどである。柱痕跡は径17cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡は、西に位置するSB105の北側柱列と南妻の柱筋を揃えている。

**【SB105 建物跡】** (第111図、図版60)

北-1区中央部の東側に位置する。東西1間、南北1間の建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は北側柱列で3.0m、東側柱列で3.0mである。方向は北側柱列でみると西で南へ約6度偏する。柱穴は長辺40～43cm、短辺34～38cmの隅丸方形を呈する。深さは32～40cmである。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトを基調としている。柱痕跡はいずれの柱穴で確認しており、径10～15cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡は、北側柱列の柱筋を前述のSB104の南妻と揃えている。

**【SB106 建物跡】** (第111図、図版60)

北区中央部の西壁際に位置する。東西1間、南北1間の建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出しているが、北東隅の柱穴では柱の抜き取り穴を確認した。

平面規模は南側柱列で2.5m、西側柱列で2.6mである。方向は西側柱列でみると北で東へ約5度偏する。柱穴は径65cmの円形や長辺75cm、短辺56cmの隅丸長方形を呈する。深さは23～46cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は3箇所を確認しており、径20cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

**【SB107 建物跡】** (第112図、図版60)

北-1区北半部の西壁際に位置する。西妻は調査区外にある。桁行2間以上、梁行2間の東西棟建物跡である。7箇所柱穴を検出している。

平面規模は桁行が南側柱列で総長3.8m以上、柱間寸法は東から1.5m・2.3m、梁行は東妻で総長3.6m、柱間寸法は1.8m等間である。方向は南側柱列でみると西で北へ約15度偏する。柱穴は一辺が40～43cmの隅丸方形を呈するものや長辺50cm、短辺45cmの隅丸長方形を呈する。深さは42～62cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は7箇所すべてで確認しており、径15cmのほぼ円形を呈する。破片で図示できなかったが、P1とP5の掘方埋土から非ロクロ調整の遡胴部破片が出土している。

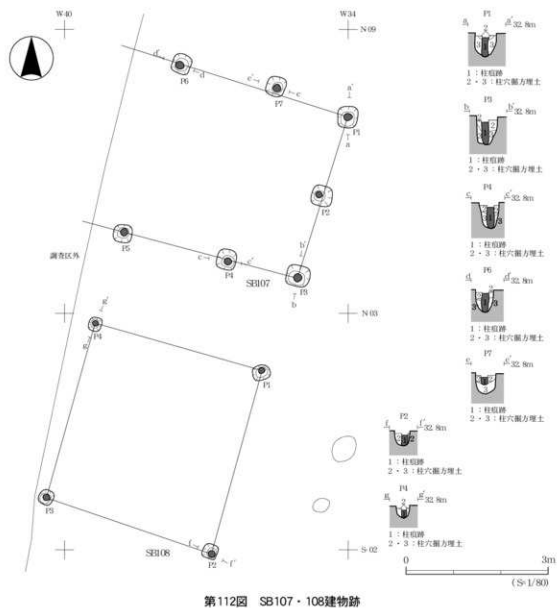
本建物跡は、SB108 建物跡の東側柱列と東妻の柱筋を揃えて南北に並ぶ。

**【SB108 建物跡】** (第112図、図版60)

北-1区北半部の西壁際に位置する。東西1間、南北1間の南北棟建物跡である。4箇所すべての柱穴を検出している。

平面規模は南側柱列で3.7m、東側柱列で4.0mである。方向は東側柱列でみると北で東へ約15度偏する。柱穴は一辺が30～32cmの隅丸方形を呈するものや長辺30～37cm、短辺27～30cmの隅丸長方形を呈する。深さは10～32cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径12～15cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡は、SB107の東妻と東側柱列の柱筋を揃えている。



第112図 SB107・108建物跡

#### 4. 土壌

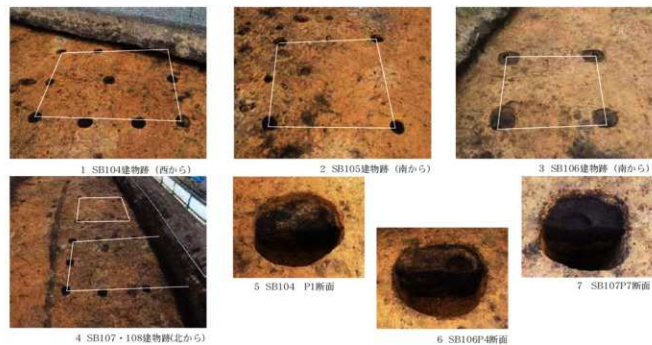
##### 【SK83 土壌】(第113図)

北-2区中央に位置する。SD82溝跡と重複し、これより古い。平面形は長辺220cm、短辺80cmの隅丸長方形を呈し、深さは約35cmである。断面形は短軸方向でみると逆台形を呈する。堆積土は炭化物、地山ブロックを含む暗褐色シルトで、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

#### 5. 溝跡

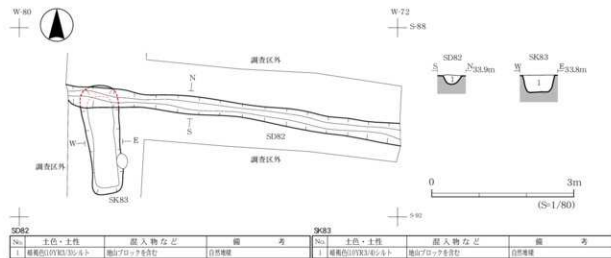
##### 【SD82 溝跡】(第113図)

北-2区中央に位置する。SK83土壌と重複し、これらより新しい。長さ7.1mで東西方向に延びる。



図版60 SB104・105・106・107・108建物跡

上幅28～50cmで、深さは約36cmである。断面形は短軸方向で逆台形を呈する。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色シルトで自然堆積である。遺物は出土していない。



第113図 SD82溝跡、SK83土壌

#### 6. その他の遺物

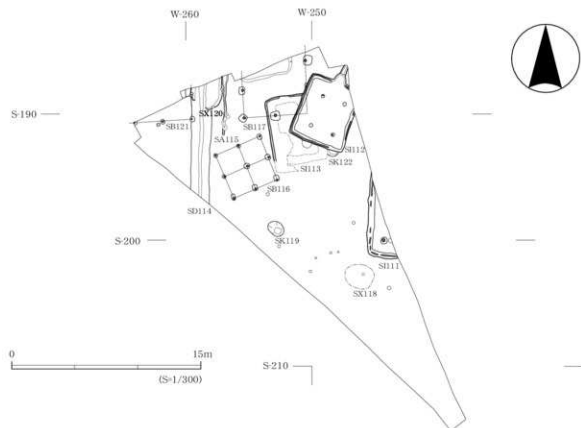
北区からは縄文土器など数点出土したが、図示できるものはない。

#### 西区(西-1・西-2・西-3・西-4区)(114図)

##### 1. 竪穴住居跡

##### 【SI111A・B住居跡】

西-1区の中央部東壁際で検出した。大部分が調査区外にあり、西辺と南辺の一部を確認したのみ



第114図 西-1区遺構配置図

である。規模を拡張する建て替えが一度認められる (SI111A → SI111B)。この建て替えは西辺を約 1m 拡張している。最初に SI111B について記載し、古い SI111A については確実に把握したことを記す。また、SI111B は炭化材等は検出されなかったが、南西隅の堆積土中に、焼土の大ブロックが (第 115 図 3) 含まれことから火災に遭っていた可能性が考えられる。

#### 【SI111B 住居跡】 (第 115 図)

〔平面形・規模〕大部分が調査区外にあるが、隅丸方形を呈すると思われる。規模は東西が南辺で 2.4m 以上、南北が西辺で 6.8m 以上である。

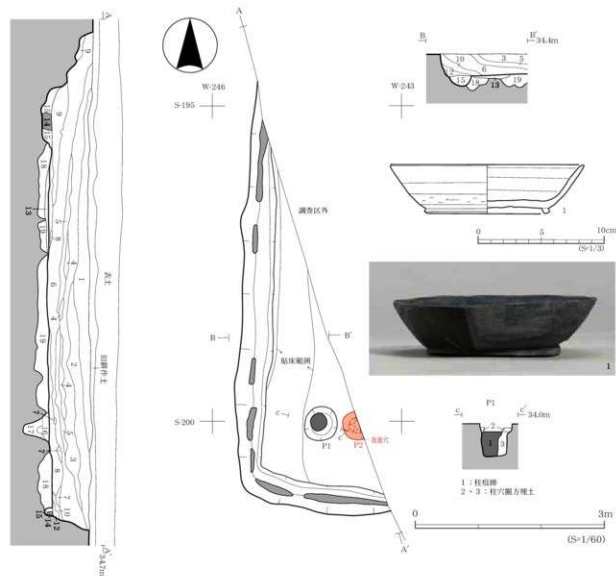
〔方向〕西辺でみると北で東へ約 2 度偏する。

〔壁〕壁はやや開き気味に立ち上がり、高はさ残りの良い南壁で 60 cm である。

〔堆積土〕12 層認められる。いずれも住居内の堆積土である。1～3 層は地山粒を含む暗褐色・黒褐色・黒色シルト、4 層は灰白色火山灰層、5 層は地山粒、炭化物を含む暗褐色シルトで、いずれも自然堆積である。6 層は地山粒、地山ブロック、炭化物、焼土ブロックを含む暗褐色シルトで、火災直後の自然堆積である。7 層は褐色粘土質シルトブロックで、部分的に焼けて赤色化している。壁または屋根葺土と考えられる。8～12 層は地山粒・地山ブロック、炭化物、焼土などを含む暗褐色・黒褐色・にぶい黄褐色・褐色シルトで、火災時または火災直後の自然堆積と考えられる。

〔床面〕部分的な検出であるが、ほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面とし、拡張分には部分的な貼床がなされている。

〔柱穴〕住居南西部の床面に主柱穴 (P1) を検出した。平面形は長径 54 cm、短径 50 cm の楕円形を呈し、深さは 50 cm である。柱痕跡は径 25 cm の円形を呈する。



No.	土色・土性	産人物など	備考	No.	土色・土性	産人物など	備考
1	暗褐色の砂状シルト	地山塊や砂かき多量		11	灰色の凝結の砂状シルト	焼土塊多量に含む	
2	黄褐色の砂状シルト	焼土塊多量		12	黄褐色の砂状シルト	焼土塊多量、炭化土ブロック多量を含む	火災時または火災直後の自然堆積
3	灰色の砂状シルト	焼土塊多量に含む	自然堆積	13	灰色の砂状シルト	焼土塊多量に含む	自然堆積
4	黄褐色の砂状シルト	灰白色火山灰ブロック		14	黄褐色の砂状シルト	焼土塊多量	壁の残骸
5	暗褐色の砂状シルト	焼土塊・炭化物多量を含む		15	暗褐色の砂状シルト	焼土塊多量	埋積土層上
6	暗褐色の砂状シルト	焼土・炭化物・焼土多量を含む	火災直後の堆積	16	暗褐色の砂状シルト	焼土塊多量に含む	火災時または火災直後の自然堆積
7	暗褐色の砂状シルト	焼土・炭化物多量	埋積土層上または埋積土層上	17	暗褐色の砂状シルト	焼土塊多量	火災時または火災直後の自然堆積
8	にぶい黄褐色の砂状シルト	地山粒・炭化物多量に、焼土層を含む	火災時または火災直後の自然堆積	18	褐色の砂状シルト	焼土塊多量	火災直後の自然堆積
9	暗褐色の砂状シルト	焼土塊多量に含む		19	黄褐色の砂状シルト	焼土塊多量	火災直後の自然堆積
10	暗褐色の砂状シルト	炭化物・焼土多量を含む					

No.	器種	分類	形状	材料	用途	特徴	図録	図録	
1	鉢	高台鉢	S111B	100	1.6	1.5A	(100)	底	底



2 SI111A・B住居跡 (南から)



3 南西隅焼土ブロック検出状況

第115図 SI111A・B住居跡及びSI111B住居跡出土遺物

【周溝・壁材痕跡】西辺と南辺で検出している。上幅 15～34 cm、深さ 15～22 cm で、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。また、この周溝内で断続的に続く幅 6～10 cm、深さ 10～13 cm の壁材痕跡と考えられる黒褐色シルトが認められた。

【出土遺物】堆積土から須恵器高台坪（第 115 図 1）が出土している。

#### 【SI111A 住居跡】（第 115 図）

【柱穴】住居西部の床面で主柱穴（P2）を検出した。平面形は径 30 cm の円形を呈すると思われる、深さは 40 cm である。柱は抜取られている。

#### 【SI112 住居跡】（第 116 図、図版 61）

西-1 区の北東隅に位置し、住居東北隅と煙道部の先端は調査区外にある。SI113 住居跡、SB117 建物跡、SK122 土壇と重複し、いずれよりも新しい。

【平面形・規模】隅丸長方形を呈する。規模は東西が南辺で 4.5m、南北が西辺で 5.1m である。

【方向】西辺のみと北で東へ約 21 度偏する。

【壁】壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りの良い北壁で 25 cm である。

【堆積土】7 層認められる。住居内の堆積土としては、1 層が灰白色火山灰層、3～6 層が地山粒・地山ブロック、炭化物、焼土を含む暗褐色シルト・にぶい黄褐色シルトで、いずれも自然堆積である。カマド部分の堆積土としては、2・7 層が地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトで、カマド煙道部崩落土である。

【床面】周溝周辺が若干窪んでいるが、ほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面としている。

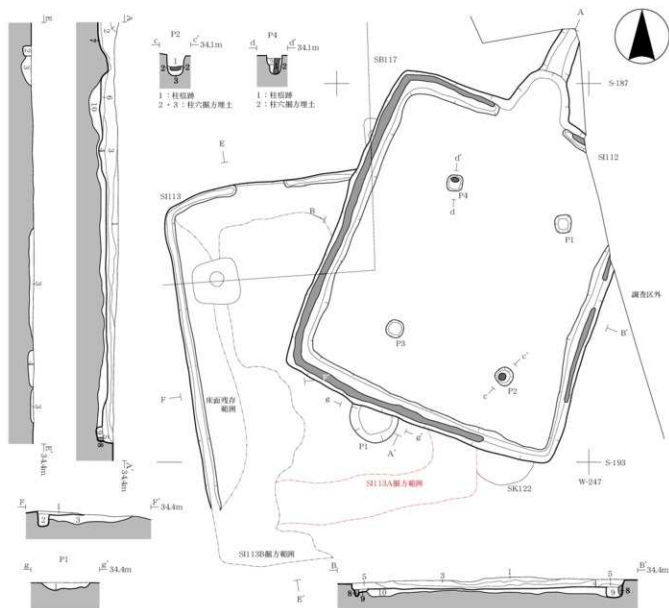
【柱穴】住居平面形の対角線上の 4 箇所（P1～P4）の床面で主柱穴（P1～P4）を検出した。P1 は長辺 28 cm、短辺 25 cm の隅丸方形、P2～P4 は一辺 28 cm ほどの隅丸方形を呈する。深さは 28～34 cm である。P2・P4 では柱痕跡が確認され、径 10～12 cm の円形を呈する。P1・P3 では柱が抜き取られている。

【カマド】北辺中央に付設される。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は住居外側へ「U」形に張り出すもので、住居の内部から外側へ、幅 100 cm で 65 cm ほど掘り込んで構築されている。地山を側壁としている。燃焼部底面は中央がやや窪んでいるが、焼成された痕跡は側壁・底面共に認められない。燃焼部と煙道部の段差は 10 cm ほどで、煙道部は先端に向かって下向きに傾斜している。煙道部は長さ 0.7m 以上である。

カマドは、燃焼部側壁や底面に焼成の痕跡がみられないこと、堆積土に焼土、炭化物が混入しないことから、未使用もしくは使用頻度が少ない段階で廃棄されたものと考えられる。

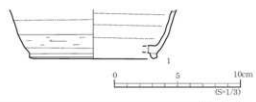
【周溝・壁材痕跡】北東隅は調査区外で不明だが、カマドが付設されていた北辺中央を除いて、全周すると考えられる。上幅 18～36 cm、深さ 10～15 cm で、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。また、この周溝内で南東隅や東辺で途切れているが、幅 6～14 cm、深さ 8～12 cm の壁材痕跡と考えられる黒褐色シルトが認められた。

【出土遺物】床面から須恵器高台坪（第 116 図 1）が出土している。堆積土から破片で図示しなかったが非クロコ調整の土師器坪が出土している。



SI112 (A-A' 中切) (S-L/60)

No.	土色・土性	遺人物など	備考
1	上から順に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	灰白色火山灰層	自然堆積
2	上から順に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
3	掘方コトナシルト	炭化物・焼土・土山・焼成跡・コトナを含む	地下埋積層遺土
4	上から順に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	炭化物・焼成跡・コトナを含む	自然堆積
5	上から順に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
6	上から順に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	炭化物・焼成跡を含む	自然堆積
7	上から順に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
8	掘方コトナシルト	炭化物を含む	自然堆積
9	掘方コトナ多量に含む	炭化物を含む	地下埋積層遺土
10	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土



SI113 (B-B' 中切)

No.	土色・土性	遺人物など	備考
1	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
2	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
3	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
4	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土

SI113 (C-C' 中切)

No.	土色・土性	遺人物など	備考
1	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
2	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
3	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土
4	掘方コトナ多量に含む	掘方コトナ多量に含む	地下埋積層遺土

第116図 SI112、SI113A-B住居跡及び出土遺物

### 【SI113A・B住居跡】(第116図)

西-1区北棟隅で検出した。SI112住居跡、SB117建物跡、SK122土壇と重複し、SI112、SB117より古く、SK122より新しい。規模を拡張する建て替えが一度認められる(SI113A→SI113B)。この建て替えは南辺を約50cm拡張している。最初にSI113Bについて記載し、古いSI113Aについては確実に把握したことのみを記す。

### 【SI113B住居跡】(第116図、図版61)

[平面形・規模] 南半部が失われており、西辺と北辺の一部しか検出していないが、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西が北辺で4.3m以上、南北が西辺で約5.6mと推定される。

[方向] 西辺でみると北で西へ約9度偏する。

[壁] 部分的に残存している。ほぼ垂直に立ち上がり、高は残りが良い西壁で約5cmである。

[堆積土] 1層認められた。地山粒を含む黒褐色シルトで自然堆積である。

[床面] 西辺沿いに部分的に残存しており、掘方埋土上面を床面としている。

[周溝] 北辺～西辺の一部にかけて検出した。上幅14～18cm、深さ19cm、断面形はU字形を呈する。地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。壁材痕跡は確認できなかった。

なお、北辺の中央西寄りに溝溝が途切れる箇所がある。カマドが付設された場所の可能性がある。

[その他の施設] 中央付近でP1を検出している。P1は平面形が径78cmの円形を呈し、深さ12cmである。白色粘土を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

### 【SI113A住居跡】(第116図、図版61)

[平面形・規模] 西辺と北辺の一部しか検出していないが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西が北辺で4.3m以上、南北が掘方範囲から約4.8mと考えられる。

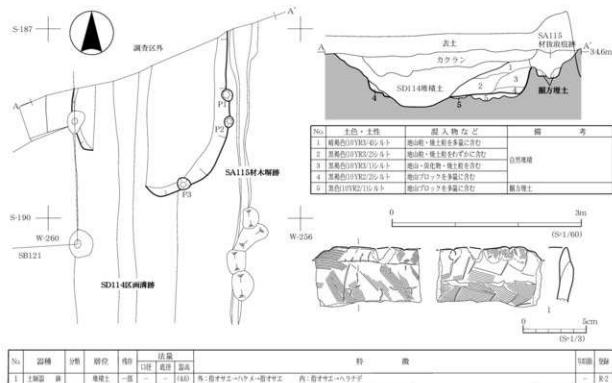


図版61 SI112住居跡、SI113A・B住居跡

## 2. 竪穴遺構・竪穴状遺構

### 【SX120竪穴遺構】(第117図)

西-1区北壁際で検出した。北半部は調査区外に続いている。SB121建物跡、SD114溝跡、SA115柱列跡と重複し、いずれよりも古い。



第117図 SX120竪穴遺構及び出土遺物

[平面形・規模] 南半部だけの検出であるが、やや丸みの強い隅丸方形を呈する推測される。規模は東西が掘り方の範囲から約2.5m、南北が東辺で2.0m以上である。

[方向] 東辺でみるとほぼ北で東へ約1度偏する。

[壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りの良い東壁で40cmである。

[堆積土] 4層認められた。1層は地山粒、焼土粒を多量に含む暗褐色シルト、2層は地山粒、焼土粒はわずかに含む黒褐色シルトである。3層は地山、炭化物、焼土を含む黒褐色シルト、4層は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト、いずれも自然堆積である。

[床面] ほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面としている。

[柱穴] 壁柱穴を3個(P1～P3)検出した。平面形は長径20～25cm、短軸15～20cmの楕円形を呈し、深さは32～39cmである。柱痕跡は検出されなかった。

[出土遺物] 堆積土から非ロクロ調整の土師器鉢の口縁部破片(第117図1)が出土している。堆積土から破片で図示できなかったが、須恵器杯の底部破片が出土している。

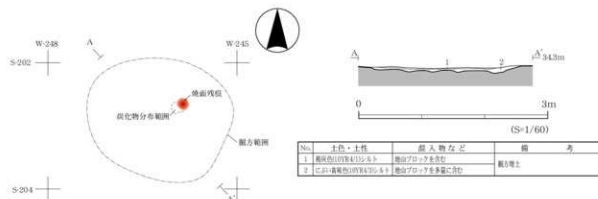
### 【SX118竪穴状遺構】(第118図)

西-1区中央部で検出した。重複する遺構はない。この竪穴状遺構は、床面は削平により失われ、掘方のみが残存している。

[平面形・規模] 掘方の残存範囲は長軸2.3m、短軸1.9mほどの楕円形である。

[その他の施設] 焼け面の残痕を15cm×20cmの範囲で検出した。また、焼け面の西側には炭化物が広がっている。

[出土遺物] 遺物は出土していない。



第118図 SX118壁穴状遺構

### 3. 掘立柱建物跡・堺跡

#### 【SB116 建物跡】(第119図、図版62)

西-1区北半部西寄りに位置する。桁行2間、梁行2間の総柱建物跡である。9箇所すべての柱穴を検出している。重複する遺構はないが、SI113及びSB117とは位置が近接することから同時に存在し得ないと考えられる。

平面規模は南側柱列で総長3.8m、柱間寸法は1.9m等間、東側柱列で総長3.7m、柱間寸法は北から1.8m・1.9mである。方向は南側柱列でみると西で南へ約23度偏する。柱穴は一边が28～39cmの隅丸方形を呈するものや長辺33～50cm、短辺25～42cmの隅丸長方形を呈する。深さは20～55cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色のシルトを基調としている。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認しており、径13～20cmのほぼ円形を呈するものや径16～20cm、短径13～16cmの楕円形を呈するものがある。破片で図示できなかったが、P1とP3から須恵器壺の胴部破片、P4から須恵器杯の底部破片、P8から非クロク調整の土師器甕の胴部破片が出土している。

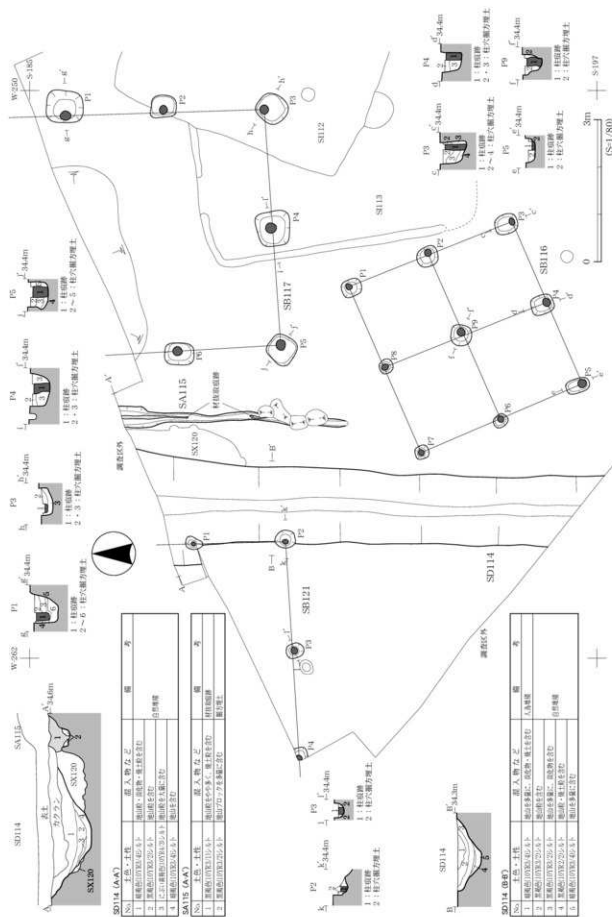
#### 【SB117 建物跡】(第119図、図版62)

西-1区北端部中央に位置し、北半部は調査区外である。桁行2間以上、梁行2間の南北棟建物跡である。6箇所で柱穴を検出している。SI112、SI113住居跡と重複し、SI112より古く、SI113より新しい。

平面規模は桁行が東側柱列で総長4.2m以上、柱間寸法は南から2.1m・2.1m、梁行は南妻で総長5.0m、柱間寸法は2.5m等間である。方向は南妻でみると西で南へ約4度偏する。

柱穴は一边が60cmの隅丸方形を呈するものや長辺45～78cm、短辺46～68cmの隅丸長方形を呈する。深さは23～60cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は検出したすべての柱穴で確認しており、径18～23cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡は、SB121建物跡の南側柱列と南妻の柱筋を揃えて、東西に並んでいる。



第119図 SB116・117・121建物跡、SD114区画溝跡、SD115材木棚跡





図版62 SB116・117建物跡

#### 【SB121 建物跡】(第119図)

西-1区北西隅に位置する。建物西・北半部は調査区外である。東西2間以上、南北1間以上の建物跡と考えられる。4箇所で柱穴を検出している。SX120 竅穴遺跡、SD114 溝跡と重複しSX120より新しく、SD114より古い。

平面規模は南側柱列で総長4.6m以上、柱間寸法は東から2.3m・2.3m、東側柱列で2.0m以上である。方向は南側柱列でみると西で南へ約3度偏する。柱穴は長辺が35～42cm、短辺が25～40cmの隅丸長方形または不整な方形を呈する。深さは23～31cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトを基調としている。柱痕跡は検出したすべての柱穴で確認しており、径10～15cmのほぼ円形を呈する。遺物は出土していない。

本建物跡は、SB117建物跡の南妻と南側柱列の柱筋を揃えて東西に並んでいる。

#### 【SA115 材木堀跡】(第119図)

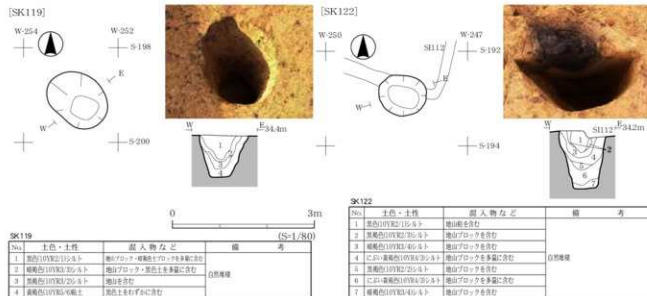
西-1区北端部中央に位置する南北方向の材木堀跡で、西側には心々距離で約1m離れてSD114区画溝跡が伴う。SX120 竅穴遺構と重複し、これより新しい。南側は削平のため途切れており長さを4.8mほど検出しているが、北端は調査区外へ続いている。方向はほぼ真北である。幅17～44cm、深さ15cmで、断面形は逆台形状を呈する。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。また、掘方埋土上面で地山粒や焼土を含むしまりのない黒褐色シルトを検出したが、材木等の抜き痕跡と考えた。遺物は破片で図示しなかったが掘方埋土から非ロクロ調整の土師器甕の胴部破片が出土している。

#### 4. 土壌

検出した土壌は2基で、いずれも平面形や堆積土から縄文時代の陥し穴と考えられるものである。

#### 【SK119 土壌】(第120図)

西-1区中央部の西寄りに位置する。平面形は長辺225cm、短辺105cmの隅丸長方形を呈し、深さ約87cmである。断面形は開き気味のU字形を呈する。堆積土は4層認められ、地山ブロック、黒色シルトを含む暗褐色シルト・黒褐色シルト・黒色シルトや黄褐色粘土で、いずれも自然堆積である。



第120図 SK119・122土壌

#### 【SK122 土壌】(第120図)

西-1区北半部の東側に位置する。SI112 住居跡と重複し、これより古い。平面形は長径103cm、短径86cmの楕円形を呈し、深さは約124cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は7層認められ、地山粒・地山ブロックを含むにぶい黄褐色・暗褐色・黒褐色・黒色シルトで、いずれも自然堆積である。

#### 5. 溝跡

#### 【SD114 区画溝跡】(第119図)

西-1区の北西部に位置し、SA115材木堀跡に伴う南北溝跡である。東側に位置するSA115とは心々で約1m離れる。調査区内で長さ10.2m検出しているが、南北は調査区外へ続く。SX120 竅穴遺構やSB121建物跡と重複し、SB121より古く、SX120より新しい。方向はほぼ真北である。

幅1.4～2.2m、深さ52～80cmで、断面形は逆台形状を呈する。堆積土はほとんどが地山粒や焼土、炭化物を含むにぶい黄褐色・暗褐色・黒褐色シルトの自然堆積である。

遺物は図示しなかったが堆積土からリング状のつまみを持つ須恵器蓋、底部が回転ヘラケズリ調整の須恵器杯、須恵器蓋の肩部破片、非ロクロ調整の土師器甕の胴部破片などが出土している。

#### 6. その他の遺物

図示しなかったが、調査区中央部の遺構確認時やSI111住居跡の堆積土から赤生土器の破片資料が数点出土している。



- 註1 貯蔵穴については、住居機能時に開口していると考えられるものについては貯蔵穴とし、その他のいわゆる貯蔵穴のピット・土壇についてはその他の施設として取り扱った。
- 註2 このような堅穴外柱穴を持つ建物跡は 桐生直彦によって集められている。「V. 堅穴外柱穴を持つ堅穴建物跡の様相」『甍を持つ堅穴建物の研究 (2005)』
- 註3 床面が大きく削平を受けているため、堅穴住居跡・堅穴遺構の区別ができなかったものを堅穴状遺構とした。

## 第五章 総括

原田遺跡では堅穴住居跡 8 軒、堅穴遺構 6 棟、掘立建物跡 19 棟以上、掘立柱塀跡 3 条、井戸跡 1 基、焼成遺構 4 基、土壇 34 基、溝跡 5 条、下萩沢遺跡では堅穴住居跡 25 軒、堅穴遺構 2 棟、掘立建物跡 26 棟以上、掘立柱塀跡 2 条、土壇 43 基、溝跡 4 条などを発見している。これらの多くが古代の遺構である。また、遺物もほとんどが古代のものであり、その他に縄文時代と弥生時代の土器・石器が少量出土しているにすぎない。したがって、ここでは古代の遺構・遺物の検討を中心に進めて行くことにし、それ以外の遺構、遺物については最後にまとめることにする。

なお、原田遺跡と下萩沢遺跡は出土土器の主体が同じ特徴を持っており、遺跡相互の距離が近いことから両遺跡を一括して取り扱うことにした。

### I. 古代の遺構と遺物

遺物の年代について検討し、その結果に基づいて各遺構の年代を求める。

#### 1. 遺物について

古代の遺物は土師器と須恵器が主体を占めるが、その他に少量ではあるが、磁石・磨石・石製垂飾品などの石製品、小札・鉄鏝・鉄鐮・刀子・鋤先などの鉄製品、槽・木錘などの木製品も出土している。これらの中で、土器類と鉄製品の小札や鉄鐮について検討する。

##### (a) 土器

土師器と須恵器があり、前者が主体を占める。これらの大部分は堅穴住居跡、特に焼失住居跡から出土しているが、土壇や堅穴遺構からままとって出土している例もある。

##### 1) 土師器の分類

土師器は製作にロクロを用いないものと用いるものがあり、前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

##### 【Ⅰ類】

Ⅰ類には坏・碗・鉢・甌・壺・甕があり、その他にミニチュア土器がある。

[坏] (第 121 図)

坏状もしくは碗状の器形で、高さが 6.4cm 以下のものを坏とした。原田遺跡 22 点、下萩沢遺跡 27

点の合計 49 点を図示した。そのうち法量・器形・調整の特徴が捉えられるものは原田遺跡の 21 点、下萩沢遺跡の 23 点である。

A 類：丸底、B 類：平底に大別でき、このうち、A 類の丸底坏は底部の形態で、1：丸みが強いものと、2：丸みが弱く平底気味のものに分けられる。また、体部外面の段・稜・沈線の有無で、a：段を有するもの、b：稜を有するもの、c：沈線を有するもの、d：段・稜・沈線がないものに細分した。なお、内面の調整は摩擦で不明なものを除き、いずれもヘラミガキののちに黒色処理が施されている（以下、内黒という）。

A：丸底のもの（第 121 図）

1：底部の丸みが強いもの。体部外面の段・稜・沈線の有無で細分できる。

a：体部中位に段を有するもの（原田 SI32・61・91、SX01、下萩沢 SI102、SK25）

口径に比して器高が浅いものと深いものがある。また、内面に軽い稜を持つものがある。体部から口縁部の形態は、内湾しながら外傾するものや直線的に外傾するものがある。外面の調整が全面ヘラミガキのもの、段より上がヨコナデ、段より下が軽いケズリ・ヘラケズリのもの、ケズリの後に部分的にヘラミガキのものがある。

b：体部上位～中位に稜を有するもの（原田 SI32・SI61、下萩沢 SI102）

外傾しながら外反するものと直線的に外傾するものがある。外面の調整は、稜以上がいずれもヨコナデであるが、稜以下がヘラケズリ・軽いケズリのものケズリの後に部分的にヘラミガキが施されるものがある。

c：体部中位に沈線を有するもの（原田 SI91・30）

体部から口縁部の形態は内湾するものと直線的に外傾するものがある。外面の調整はいずれも沈線より上がヨコナデで、沈線より下が軽いケズリ・ヘラケズリである。

2：底部の丸みが弱く、いわゆる平底風の丸底のもの

a：体部下端部付近に段を有し、体部～口縁部は内湾しながら外傾するもの（原田 SI91、下萩沢 SI05・SI64・SK67）

外面の調整が段より上がヨコナデのものには、段より下がヘラケズリのものでヘラミガキのものがある。また、段より上がヨコナデ後にヘラミガキのものは、段より下がヘラケズリ後にヘラミガキ調整が施されている。

b：器高が浅く、体部中位に稜を有し体部～口縁部は稜より上が直立気味に立ち上りが口縁部が外反するもの（原田 SI61）

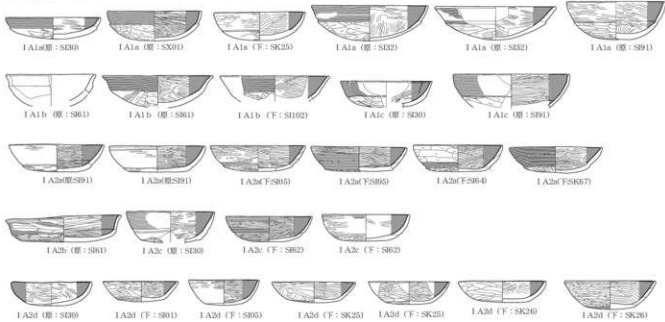
外面の調整は稜より上がヨコナデの後にヘラミガキで、稜より下もヘラミガキである。

c：体部中位～下位に沈線を有し、体部～口縁部は内湾しながら立ち上がるもの（原田 SI30、下萩沢 SI62）

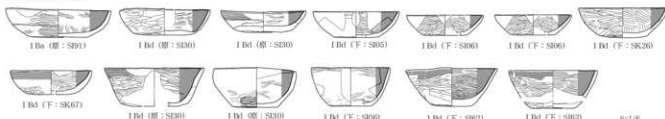
外面の調整は沈線より上がヨコナデで下がヘラケズリのもの、沈線より上がヨコナデ後にヘラミガキの場合は、下もヘラミガキのものヘラケズリのものがある。

d：稜・段・沈線がないもの（原田 SI30、下萩沢 SI01・05、SK25・26）

### 土師器環A類



### 土師器環B類



第12図 土師器環の分類

やや内湾しながら立ち上がり、器高が浅いものと深いものがある。外面の調整は荒いミガキもしくはヘラミガキで、一部黒色処理が施されるものもある。

#### B：平底のもの

##### a：体部中位に段を有するもの（原田 S191）

体部～口縁部はやや内湾しながら外傾する。外面の調整は段の上下ともヘラミガキである。

##### d：稜・段・沈線を有しないもの（原田 S130、下萩沢 S105・06・62、SK26・67）

器高が浅いものと深いものがある。底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がるものと直線的に外傾するものがある。体部外面の調整は全体がヘラミガキのもの、口縁部がヨコナデのものがある。後者の体部はケズリの後にヘラミガキのもの、軽いケズリのもの、調整がないものがある。

#### 〔椀〕

器高が 6.5cm 以上のものを椀とした。原田遺跡で 6 点、下萩沢遺跡で 5 点の計 11 点を図示した。全体形が判明しているものは、いずれも底部が丸みの弱い丸底で、内外両面にミガキ調整が施される。器高が A：10cm 未満のものとして B：10cm 以上のものに分けられる。

A：器高が 10cm 未満で、体部下半から口縁部は内湾気味に外傾する（原田 S130・S170、SK72、下萩沢 S105、SK26・67）

内黒のものと、内外両面に黒色処理が施されるもの（以下、両黒という）がある。

B：器高が 10cm 以上のもの（原田 S130・32）

体部下半から口縁部は内湾しながら外傾するもの、直線的に外傾するもの、内湾しながら外傾し口縁部でやや直線的に立ち上がるものがある。外面の調整はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキのち黒色処理が施される。

#### 〔鉢〕

口径に対して器高が低い、もしくはほぼ同じものを鉢とする。頸部のくびれはあっても弱い。原田遺跡で 10 点、下萩沢遺跡で 4 点図示した。底部の形状が判明しているものはすべて平底である。器高は 6.5cm～10cm ほどで、口径が A：15cm 未満のものとして B：15cm 以上のものに分けられ、さらに器形によって細分される。内外面の調整はヘラミガキが少ない。

A：口径が 15cm 未満のもの

##### 1：体部～口縁部が内湾するもの（原田 S130）

調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

##### 2：器高が浅く、底部から口縁部に向けて開くもの（原田 S130・70、下萩沢 S105・06）。

調整は外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリか軽いケズリ、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのものが主体であるが、外面が口縁部ハケメの後にヨコナデ、体部がハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、体部ハケメのものがある。

##### 3：体部が内湾し、口縁部が直立するもの（原田 S130・70・91）

調整は外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリか軽いケズリで、内面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデで内黒のものとハケメのものがある。

B：口径が 15cm 以上で、口縁部に向けて内湾しながら外傾するもの（原田 S132、SX05、下萩沢 S105）

調整は外面が不明で内面口縁部がヨコナデ、体部ヘラナデのもの、外面が体部・口縁部ハケメ、内面が口縁部ヨコナデ、体部ナデのもの、外面が口縁部ヨコナデ、体部不明、内面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのものがある。

#### 〔壺〕

図示したのは下萩沢 S161A の 1 点である。口縁部の小破片であるが、いわゆる無頸壺である。調整は外面が口縁部ヨコナデ、体部が軽いケズリ、内面が口縁部ヨコナデの後に一部ハケメ体部ナデのちにハケメである。

#### 〔瓶〕

原田遺跡と下萩沢遺跡で 1 点ずつ図示した。いずれも無底である。原田 SX01 出土のものは、口径と器高がほぼ同じで頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、内外両面ともヘラナデ調整が施されている。下萩沢 S163 出土のものは上半を欠き、胴部の調整は外面ヘラケズリか軽いケズリで、内面はハケメの後にヘラナデ調整が施されている。

#### [台付甕]

図示したのは下萩沢 SI05 出土の 1 点である。底部から上部の破片であるため器形の詳細は不明である。調整は外面が軽いケズリ、内面がヘラナデとナデである。

#### [甕] (第 122・123 図)

甕は鉢と比べて口径に対する器高の比率が大きく、器高が 10cm 以上のものである。原田遺跡と下萩沢遺跡で 57 点を図示した。

A : 器高が 10cm ~ 16cm 未満のものを小型、B : 16cm ~ 23cm 未満のものを中型、C : 23cm 以上のものを大型とした。器形から 1 : 鉢形、2 : 長胴形、3 : 胴張形の 3 種類に大別し、胴部最大径の位置や頸部の屈曲の強弱で分けられ、さらに頸部から口縁部にかけての段や沈線の有無と胴部外面の最終調整 (i : ヘラケズリ、ii : 軽いケズリ、iii : ヘラミガキ・荒いミガキ、iv : ハケメ、v : ナデ、vi : 調整不明) により細分が可能である。

#### A : 小型の甕

##### 1 : 鉢形

a : 胴部に張りがなく、頸部が緩やかに屈曲するもの (原田 SI30・32、下萩沢 SI04・06C)

胴部外面の最終調整は i : ヘラケズリもしくは ii : 軽いケズリであるが、内面調整はヘラナデである。

##### 2 : 長胴形

a : 胴部上半に張りを持ち頸部が緩やかに屈曲するもの (原田 SI30・31・70・91、下萩沢 SK26)

頸部に段を有するものと稜を有するものがある。胴部外面の最終調整は i : ヘラケズリもしくは ii : 軽いケズリである。内面の最終調整はヘラナデであるが、その前にハケメが施されるものがある。

b : 胴部中位に張りを持ち頸部が緩やかに屈曲するもの (原田 SI30、下萩沢 SI05)

頸部に段を有するものとなないものがあり、口唇部が角状のものがある。胴部外面の最終調整は、i : ヘラケズリもしくは iv : ハケメである。内面の最終調整はヘラナデであるが、その前にハケメが施されるものがある。

##### 3 : 胴張形

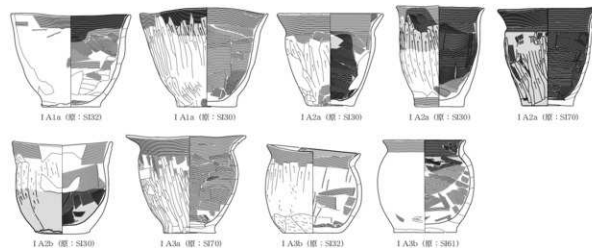
a : 胴部上半に張りを持ち頸部が強く屈曲するもの (原田 SI70)

頸部~口縁部にかけて段を有し、胴部外面の調整は ii : 軽いケズリ、内面はハケメである。

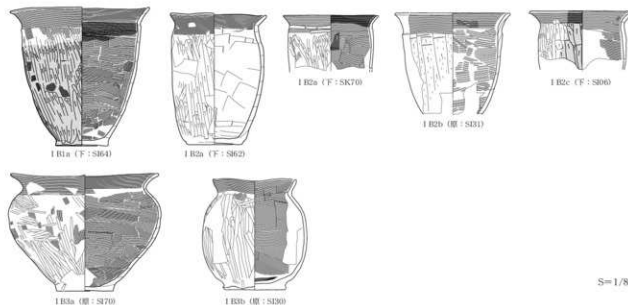
b : 胴部中位に張りを持ち、頸部が強く屈曲するもの (原田 SI30・32・SI61、下萩沢 SI04C・63、SK26)

頸部に段を有するものとなないものがある。胴部外面の最終調整は i : ヘラケズリ、ii : 軽いケズリ、iii : ヘラミガキ、iv : ハケメがある。内面の最終調整はヘラナデであるが、その前にハケメが施されるものがある。

#### 土師器甕A類



#### 土師器甕B類



第122図 土師器甕の分類 (1)

S=1/8

#### B : 中型の甕

##### 1 : 鉢形

a : 胴部上半に緩やかな張りを持ち、頸部は強く屈曲し、段を有するもの (下萩沢 SI64B)。口唇部は角状になる。胴部の最終調整は外面が ii : 軽いケズリで、その前にハケメが施されている。内面はハケメである。

##### 2 : 長胴形

a : 胴部が円筒で、頸部が強く屈曲するもの (下萩沢 SI62、SK70)

頸部には横位の沈線を有するものと有しないものがある。胴部外面の最終調整は ii : 軽いケズリで、内面の調整はヘラナデである。

- b : 胴部上半に張りを持ち、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI31、下萩沢 SI06C）  
 頸部に段を有するものとなないものがある。胴部外面の最終調整は i : ヘラケズリで、内面はハケメである。
- c : 胴部中位に張りを持ち頸部が強く屈曲するもの（下萩沢 SI06C）  
 口唇部は角状である。胴部外面の最終調整は ii : 軽いケズリで、内面調整はハケメである。

### 3 : 胴張形

- a : 胴部上半に張りを持ち、頸部は強く屈曲するもの（原田 SI70）  
 胴部外面の最終調整は iii : ヘラミガキで、内面はハケメである。
- b : 胴部中位が張り出し、頸部が屈曲するもの（原田 SI30・70・SI91）  
 胴部の最終調整は、外面が iii : ヘラミガキ・荒いミガキで、内面はヘラナデである。

### C : 器高が 23cm 以上の大型の甕

#### 2 : 長胴形

- a : 胴部は円筒形で、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI30・70、下萩沢 SI01・04B・05、SK26・70）  
 頸部に段・沈線を有するものとなないものがあり、また、口唇部が角状になるものがある。胴部外面の最終調整は i : ヘラケズリ、ii : 軽いケズリ、iii : 荒いミガキ、iv : ハケメである。内面はヘラナデ、ナデ・ハケメ、ヘラミガキである。
- b : 胴部上半に張りをもつる砲弾形をなし、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI30・91、下萩沢 SI05・06C・61・62・64、SK36・67）  
 頸部に段を有するものとなないものがあり、口唇部が角状になるものが多くみられる。底部の断面が台形になるものや底部に砂が付着するものがある。胴部外面の調整が i : ヘラケズリの場合は、内面の調整がヘラナデのものとなないものがある。外面の調整が ii : 軽いケズリの場合は内面の調整がヘラナデのものとなないもの、さらにハケメのものがある。また、外面が iii : 荒いミガキの場合は内面がヘラナデ、さらに、外面が iv : ハケメの場合は内面もハケメが主体である。
- c : 胴部が楕円形をなし、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI70、下萩沢 SI05・62・63）  
 頸部に段を有するものとなないものがあり、口唇部が角状になるものがある。胴部外面の最終調整は iii : 軽いケズリが主体で内面がヘラナデ主体のものとなないもの、外面の最終調整が i : ヘラケズリで、内面がヘラナデのものがある。
- d : 胴部下半に最大径を有し、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI30）  
 頸部に段を有するものとなないものがある。胴部調整は外面が iii : 荒いミガキ、内面はヘラナデである。
- e : 胴部は上半～中央にかけて張りをもつて下半で窄まり、頸部が緩やかに屈曲するもの（原田 SI32・61・70、下萩沢 SI161）



第123図 土師器甕の分類 (2)

胴部外面の最終調整は i : ヘラケズリと ii : 軽いケズリがあるが、後者が主体である。内面調整はヘラナデが多く、ほかにハケメの後にヘラミガキが施されるものがある。

### 3 : 胴張形

- a : 胴部上半に最大径を有し、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI30・70、下萩沢 SI64）  
 頸部に段を有するものとなないものがあり、口唇部が角状になるものがある。胴部外面の最終調整は iii : ヘラミガキ・荒いミガキで、内面がヘラナデのものが主体を占める。ほかに i : ヘラケズリが施され、内面がハケメのものがみられる。
- b : 胴部中位に張りを持ち、頸部が強く屈曲するもの（原田 SI30・70、下萩沢 SI02・05）  
 胴部外面の最終調整が ii : 軽いケズリで内面がヘラナデのものと、外面が iii : 荒いミガキ・ヘラミガキで、内面がヘラナデ主体のもの、iv : ハケメの後に軽いケズリで、内面がハケメのものがある。

### 【ミニチュア土器】

下萩沢遺跡の SI06・61 ~ 63 住居跡や SK26 土壇出土の 7 点を図示した。作り方が粗いものと丁寧なものがある。

- A : 作りが粗雑で、坏形のもの（SI06C）と鉢形のもの（SI61）がある。調整はナデが主体である。  
 B : A と比較してつくりが丁寧で、通常の坏や鉢と同様な調整が施される。坏形のもの（SI62、SK26）と鉢形のもの（SI63）がある。

### 【Ⅱ類】

ロクロ調整のⅡ類には坏と甕がある。

### 〔坏〕

図示できたのは原田遺跡 SI31 住居跡と下萩沢遺跡 SI06 住居跡、SK34 土壇、SD23 溝跡から出土した 4 点である。すべて内黒で、出土量が少なことから個別に記載する。

SI31 出土のものは、口縁部を欠損するが体部はやや内湾気味に立ち上がり、他と較べてやや大型である。底部は回転糸切り無調整である。

SI06 出土のものは、底部～体部下端の資料である。底部は静止糸切りののち、底部周縁～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。

SK34 のものは、体部が内湾気味に立ち上がり外傾する。器高はやや深く、底部は回転糸切りで、底部周縁に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

SD23 出土のものは、体部が内湾気味に立ち上がり外傾するもので、底部ヘラ切り無調整である。

### 〔甕〕

原田遺跡の SI31 住居跡から出土しており 4 点図示した。A : 器高が 16cm 未満の小型（R7・8）と B : 器高が 23cm 以上の大型（R12・13）に分けられる。

- A : 鉢形で、口縁部は「く」字状に屈曲して外傾する。外面調整は回転ヘラケズリ（R7）と手持ちヘラケズリ（R8）がある。

- B : 長胴形で、R12 は口縁部が「く」字状に屈曲して外傾し、口唇部が沈線状となる。胴部調整は平行タタキ→ロクロナデ→軽いケズリである。R13 は下端がケズリ調整の後に平行タタキが施されて底が小さくなっている。

## 2) 須恵器の分類

須恵器には坏・高台坏・蓋・鉢・壺・甕・円面甕がある。

### 〔坏〕（第 124 図）

原田遺跡の 20 点と下萩沢遺跡の 17 点を図示した。そのうち法量・器形・再調整等の特徴が捉えられるのは原田遺跡の 19 点、下萩沢遺跡の 12 点である。底部の形態で A : 丸底と、B : 平底に大別できる。さらに B の平底坏は、口径に対する底径の大きさから 1 : 底径大、2 : 底径小に細分され、底部の切り離し技法（a : ヘラ切り、b : 回転糸切り、c : 静止糸切り、d : 切り離し不明）と体部下端から底部に施される調整（以後再調整という）の種類と有無で細分できる（① : 回転ヘラケズリ、② : 手持ちヘラケズリ、③ : ナデ、軽いナデ、④ : 調整なし）。

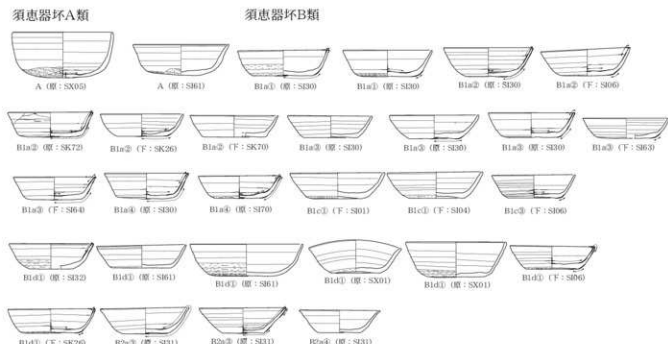
### A : 丸底

内湾しながら立ち上がりそのまま口縁部に至るやや深めのもの（原田 SX05）と、口縁部が外反し、口縁部内面に沈線が巡るもの（原田 SI61）がある。底部は切り離し技法が不明で、体部下端～底部に②手持ちヘラケズリが施される。

### B : 平底

1 : 口径に対する底径の比率が大きいもの

- a : 底部がヘラ切りのもの。再調整で細分できる。



第124図 須恵器坏の分類

- ①：回転ヘラケズリのもの（原田 SI30）
- ②：ヘラケズリのもの（原田 SI30・70、SK72、下萩沢 SI06、SK26・70）
- ③：ナデ・軽いナデのもの（原田 SI30、下萩沢 SI63・64、SK18・26）
- ④：無調整がないもの（原田 SI30）

c：底部切り離しが静止糸切りのもの。再調整で細分できる。

- ①：回転ヘラケズリのもの（下萩沢 SI01・04C）
- ③：ナデ・軽いナデのもの（下萩沢遺跡の SI06）

d：底部切り離しが再調整のため不明なもの。内面の口縁端部に沈線が巡るものがある（原田 SI32）

再調整はすべて回転ヘラケズリ（①）である（原田 SI32・61、SX01、下萩沢 SI06C、SK26）。

2：口径に対する底径の比率が小さいもの。底部の切り離し技法で細分できる。

- a：底部切り離しがヘラ切りのもので、再調整は③：ナデ・軽いナデである（原田 SI31）。
- b：底部切り離しが回転糸切りのもので、再調整は施されない（原田 SI31）。

[高台坏]

原田遺跡の9点と下萩沢遺跡の5点を図示した。このうち法量・器形等の特徴が捉えられるのは原田遺跡の5点と下萩沢遺跡の5点である。高台の高さがA：低いものと、B：高いものに分けられ、さらに口径に対する器高の比率が1：小さいものと、2：大きいものに細分される。

A：高台が低いもの

- 1：口径に対する器高の比率が小さいもの（原田 SX01、下萩沢 SI111・112）  
体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反（SX01）もしくは直線的に外傾する（SI111）。

B：高台が高いもの

- 1：口径に対する器高の比率が小さいもの（原田 SI30、下萩沢 SI06、SK26・31）  
体部は直線的に外傾するもの（原田 SI30、下萩沢 SI06、SK31）や内湾しながら外傾するもの（原田 SI30、下萩沢 SK26）がある。
- 2：口径に対する器高の割合が大きいもの（原田 SI30）。体部は直線的に外傾する。

[蓋]

原田遺跡の10点と下萩沢遺跡の6点を図示した。そのうち法量・器形等の特徴が捉えられるものは原田遺跡の7点と下萩沢遺跡の5点である。

つまみ部の形状からA：宝珠形、B：扁平な宝珠形、C：リング状に分けられる。

A：宝珠形

器高が低く、口縁端部で折れるもの（下萩沢 SI62）と、天井部下端がやや外反して口縁端部が短く折れるもの（原田 SI30）とがある。後者は天井部の再調整が手持ちヘラケズリである。

B：扁平な宝珠形

- 1：器高が低いもの（下萩沢 SI62）。天井部はほぼ水平で口縁端部が折れる。
- 2：器高が高く、天井部が丸味を持ちながら口縁部で屈曲して折り返すもの（原田 SI30・SI70、下

萩沢 SI62）。外面の再調整は回転ヘラケズリ（SI30・70）と、回転ヘラミガキ（SI62）がある。  
3：器高が高く、水平に天井部から「く」字状に屈曲し、口縁端部が折り返すもの（原田 SI30・70、下萩沢 SK26）。

C：リング状（下萩沢 SD114）

[鉢]

図示できたのは原田 SI61 住居跡出土の1点だけである。手握の鉢で、口縁部と底部は欠落している。調整は軽いナデ・ヘラナデである。

[長頸壺]

原田遺跡の3点と下萩沢遺跡の2点を図示した。そのうち1点は口縁部資料で、他は頸部の上が欠けている。残存する法量・器形からA：小型と、B：大型に分けられる。

- A：高台がなく、胴部上半は張る（原田 SI30）。胴部下端に手持ちヘラケズリが施される。
- B：高台を有する。肩部が張るもの（下萩沢 SI61）と、胴張のもの（原田 SI30、下萩沢 SI02）がある。

[甕]

原田遺跡の6点と下萩沢遺跡の2点を図示した。そのうち法量・器形等を知りうるものは3点で、器形、底部の形態、口縁部の特徴から分けられる。

- A：平底で胴部は緩やかに膨らみ上半に最大径がある。口縁端部は玉縁状となる（原田 SI30R61）。胴下半は手持ちヘラケズリが施され、内面には一部ナデが施されている。
- B：平底で胴部上半が張り、口縁端部は下につまみ出される（原田 SI30R60）。胴部外面は平行タキで、下部部には軽いケズリが施される。内面は同心円状のアテ具痕がみられる。
- C：丸底で胴部の張りが強く上半に最大径がある。口縁端部は弱く上下につまみ出される（原田 SI70R26）。胴部外面は平行タキの後でナデが施される。内面は無文アテ具で部分的にナデが施される。

この他、大型のもので底部を欠く資料として原田遺跡の SI31R14、SI32BR12、SK72R6、下萩沢遺跡の SI64BR6、SK65R1 がある。口縁端部はいずれも上下につまみ出されている。SI64R7 は頸部に波状文、胴部外面に平行タキがみられ、胴部内面のアテ具痕は上半が格子→同心円、下半が小さい格子→大きい格子である。

[円面硯]

破片資料であるが、原田遺跡と下萩沢遺跡で各1点出土している。詳細は不明であるが、原田 SI32 は脚部側面に方形の窓と縦位沈線が入る。下萩沢 SK26 は脚部の小破片資料である。

### 3) 土器群の設定

以上の分類結果に基づいて、共存関係を有する出土土器の組合せを遺構ごとに整理して土器群の成立の有無を検討する。

土器の共存関係が明らかに認められ、かつ出土土器が多い遺構としては、焼失住居跡である原田遺





徴がほとんど認められない。したがって、これら2つの土器群は、異なる特徴を有する別々の土器群であり、原田遺跡 SI32B・61B 住居跡出土土器を **IA群土器**、原田遺跡 SI30 住居跡・下萩沢遺跡 SI05 住居跡出土土器を **IB群土器**として特徴を整理する。

### 【IA群土器】

原田遺跡 SI32B・SI61B 住居跡出土土器である。土師器は有段丸底坏と、胴部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される長胴甕や胴張形の小型甕と、少量の須恵器などから構成される。器種ごとに特徴をまとめると以下のようになる。

- 1：土師器坏は、丸底で体部外面に段や稜を有する IA1 a・b 類と平底気味の丸底で体部外面に稜を有する IA2 b 類である。外面の調整は段や稜の上がヨコナデ、下はヘラケズリや軽いケズリを主体とし、一部ヘラミガキが認められる。
- 2：土師器甕には大型と小型がある。長胴甕は頸部が緩やかに反外して口縁部にいたり、胴下半が窄まる IC2 e 類が特徴的に認められる。ほかに胴張形の IA3 b 類や小型で鉢形の IA1 a 類がある。胴部外面の最終調整はヘラケズリや軽いケズリ、内面はヘラナデが主体を占めるが、部分的にハケメ・ヘラミガキが認められるものがある。
- 3：須恵器坏は丸底と平底があり、両者とも切り離し技法は不明である。丸底は再調整が手持ちヘラケズリの Ad②類、平底は口径に対して底径が大きく、再調整が回転ヘラケズリの B1 d①類である。

### 【IB群土器】

原田遺跡 SI30 住居跡・下萩沢遺跡 SI05 住居跡出土土器である。土師器坏は、平底気味丸底の IA2 類と平底の IB 類が共存する。ほかに丸底で沈線を体部中央に有する IA1 c 類がある。甕は長胴形と胴張形、小型の鉢形があり、長胴甕は胴部が砲弾形や楕円形のもの为主体を占める。胴部の最終調整は原田 SI30 がヘラケズリ・軽いケズリ、下萩沢 SI05 ではハケメが主体である。SI30 の須恵器出土量は IA群土器に比較して多い。

- 1：土師器坏は、丸底で体部外面に沈線を有する IA1 c 類、平底気味の丸底で沈線を有する IA2 c 類、平底気味の丸底で内湾気味に立ち上がる IA2 d 類、平底で体部に段・稜・沈線がない IB d 類で、IA2 d 類と IB d 類が主体を占める。
- 2：土師器甕は大型・中型・小型がある。大型は長胴形の IC2 a・b・d 類と胴張形の IC3 a・b 類、中型は胴張形の IB3 b 類、小型は鉢形の IA1 a 類や長胴形の IA2 a・b 類、胴張形の IA3 b 類が認められる。このうち長胴形の IC2 類、小型鉢形の IA1 類が主体を占める。胴部外面の最終調整は原田 SI30 がヘラケズリ・軽いケズリが主体で、下萩沢 SI05 ではハケメが主体である。この他の特徴としては、頸部に段が巡るものと、口縁端部が角状になるものもが一定量(20～30%)みられ、いずれの場合も原田 SI30 より下萩沢 SI05 の方が多い(註1)。
- 3：原田 SI30 出土の須恵器坏は平底で、口径に対して底径が大きく(底径/口径比は 0.52～0.68)、切り離しはすべてヘラ切りである。底部や体部下端の再調整は、回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ・ナデ調整が施されるもの(B1 a①・②・③類)と、無調整の B1 a④類がある。

## ②Ⅱ群土器

原田遺跡 S131 住居跡出土土器である。

非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が共存する。S131 からは、床面で須恵器環、非ロクロ調整の土師器甕、カマド焚口側壁に埋め込まれたロクロ調整の土師器甕、カマドの支脚に利用された非ロクロ調整の土師器小型甕1点が出土している。その他、カマド燃焼部堆積土からロクロ調整の土師器環、非ロクロ調整の土師器甕、住居居絶から大きく隔たらない時期の堆積と考えられる6・7層から須恵器環・高台環・甕、非ロクロ調整の甕が出土している。

土師器環は、ロクロ調整のⅡB④類がある。土師器甕は、非ロクロ調整で小型鉢形のⅠA2a類と底部付近が軽いケズリ後に叩き整形される長胴ⅡB類がある。須恵器環は底径が小さく、底部が回転ヘラケズリ後軽いナデ調整が施されるB2a③類である。

以上のように、原田遺跡と下萩沢遺跡の出土土器は非ロクロ調整の土器で構成されるⅠ群土器と、非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が共存するⅡ群土器に分けられる。そして、前者は土師器環が丸底と平底気味の丸底で構成されるⅠA群土器と、丸底、平底気味の丸底、平底が共存し、後二者が主体を占めるⅠB群土器に分けられる。

## 4) 土器群の年代

### 【ⅠA群土器】

比較資料としては、大和町一里塚遺跡第47次調査の住居跡や溝から出土した土器群（宮城県教育委員会1999）と、加美町壇の越遺跡14区の住居跡を中心とした第Ⅰ群土器（宮崎町教育委員会1999）、栗原市（旧志波姫町）御駒堂遺跡の第2群土器（宮城県教育委員会1982）などがあげられる。

一里塚遺跡は居住域に大溝と材木場で囲まれた一面が設けられた集落跡で、西郭と東郭の2ブロックが確認されている。47次は東郭を調査しており、土器は主として堅穴住居や溝から出土した。土器は在地の有段丸底環と関東地方の真間式系の環、長胴形や球胴形の甕とともに須恵器が少量共存する。甕は長胴形が主体を占め、胴部の形態は下部が膨らむもの、槽円形、円筒形のものなどがある。また、頸部に段を有するものとなないものがあり、胴部外面の調整はヘラケズリのほかハケメやナデが認められる。これらの土器は全体として1つのまとまりを有する土器群として捉えられており、年代は7世紀後葉から8世紀初頭頃に位置づけられている。

これらのうち、有段丸底環はⅠA群土器の環ⅠA1a・b類と特徴が共通する。段や稜の上がヨコナデ、段より下にヘラケズリが施されるものが主体となる点も一里塚遺跡と同様である。また、一里塚の長胴甕で、頸部から緩やかに屈曲して口縁部にいたり、胴部外面にヘラケズリが施されるⅠAⅡ2b・ⅠAⅡ2c類は、ⅠA群土器の特徴的な器種であるⅠC2e・i・ii類に類似する。以上のことから、一里塚遺跡とⅠA群土器には土師器環・甕に共通した特徴がみられる。

一方、須恵器環は一里塚遺跡が丸底で外面に段や稜を有する。段や稜の上はいずれも直立気味に立ち上がり、底部には回転ヘラケズリ調整と手持ちヘラケズリ調整が施されている。これに対してⅠA群土器は丸底があるが、稜や段を持たない。これまでの研究成果に基づくと、ⅠA群土器の須恵器は

一里塚より新しい様相を示している。以上のことから、ⅠA群土器は一里塚の土師器環・甕と共通する特徴を有するが、須恵器環は新しい様相を持つ土器群と捉えられる。

壇の越遺跡第Ⅰ群土器の土師器は、有段丸底環と胴部外面にヘラケズリが施される長胴形と胴張形の甕が主体をなし、ほかに深身の平底環や高環、長胴形のハケ甕、鉢類などがみられる。土師器は有段丸底環が体部中位に段あるいは稜を有し、段より上がヨコナデ、段より下がヘラケズリ。軽いケズリのもので、ⅠA群土器の環ⅠA1a・b類と共通した特徴を持っている。甕はⅠA群土器や一里塚遺跡で特徴的にみられたⅠC2e類はない。須恵器は環・蓋・甕などが少量出土しており、環は丸底で手持ちヘラケズリが施されたもので、ⅠA群土器のA類と類似する。以上のことから、ⅠA群土器は壇の越遺跡第Ⅰ群土器の土師器環・須恵器環と共通する特徴を有するが、土師器甕の様相が異なる。

御駒堂遺跡の第2群土器は内面ナデ調整の土師器環、胴部ヘラケズリの長胴甕や胴張甕などからなる真間式系土器が主体となり有段丸底環やハケメ調整の長胴甕といった在土土師器が客体的に伴う土器群で、須恵器が少量認められる。御駒堂第2群には、ⅠA群土器の土師器環ⅠA1a類や須恵器環A d②類とB1 d①類が認められる。

以上のことから、ⅠA群土器は土師器環が一里塚遺跡出土土器群や壇の越遺跡第Ⅰ群土器及び御駒堂第2群土器とそれぞれ共通する特徴を有するものの、須恵器環は一里塚とは異なり、壇の越Ⅰ群や御駒堂2群と共通する（註2）。壇の越遺跡第Ⅰ群土器や御駒堂遺跡第2群土器は8世紀前半に位置付けられている。また、須恵器環の類例は、A d②類が8世紀初頭の日の出山窯跡第Ⅰ群土器（色麻町教育委員会1993）、B1 d①類は8世紀前半の木戸窯跡出土資料（註1984、野崎1974）があげられる。したがって、ⅠA群土器の年代は8世紀前半と考えられる。

### 【ⅠB群土器】

比較資料としては、栗原市（旧志波姫町）糠塚遺跡第Ⅰ群土器（宮城県教育委員会1978）、栗原市（旧高清水町）経ヶ崎遺跡のS16住居跡などから出土した土器群（高清水町教育委員会2000）があげられる。

糠塚遺跡第Ⅰ群土器は、土師器環に丸底と平底があり、後者が主体を占める。甕には台付甕、中型の鉢形甕、長胴甕や胴張甕があり、長胴甕が主体を占め、頸部に段が巡るものがほぼ半数ある。胴部の最終調整は軽いケズリ・ヘラケズリ・ハケメ・ミガキがあり、軽いケズリが主体を占める。このほか高環や甕が伴う。高環や大型の胴張甕のなかには赤彩が施されたものがある。須恵器は環・蓋・高環・甕があり、環には切り離し技法がヘラ切りのものと同軸糸切りのものがある。

経ヶ崎遺跡では9軒の堅穴住居跡が発見されており、これらの住居跡から出土した土器は一つのまとまりを有する土器群と捉えられている。土師器環は平底気味の丸底と平底が共存し、甕は胴部外面の調整がヘラケズリである長胴形が主体を占める。頸部には段や軽い段が巡るものが半数近くみられる。この他に鉢形と小型の長胴形・胴張形のものがある。須恵器は環・蓋・鉢が少量出土しているだけで、環は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ調整のものと同軸無調整のものがある。

ⅠB群土器は、土師器環に丸底で体部に沈線をもつⅠA1c類、平底気味の丸底で沈線を有する

I A 2 c 類、平底気味の丸底で段を有する I A 2 a 類、平底気味の丸底と平底で段・稜・沈線がない I A 2 d 類と I B d 類がある。丸底と平底が共存し、中でも平底の I B d 類が主体を占める。

甕は長胴形の I C 2 a・b・d 類と胴張形の I C 3 a・b 類、中型の I B 3 b 類、小型の I A 1 a 類、I A 2 a・b 類、I A 3 b 類があり、長胴甕は砲弾形の I C 2 b 類、小型甕は胴部中央に張りを持つ I A 2 b 類が主体を占める。胴部外面の最終調整はヘラケズリ・軽いケズリが主体で、ハケメ調整や荒いミガキもみられる。頸部に段、軽い段が巡るものや、口唇部が角状になるものが少量みられる。この他に腕や鉢がある。

須恵器は坏・蓋・高台坏・長頸壺・甕がある。坏はいずれも底部の切り離し技法がヘラ切りで、再調整には回転ヘラケズリ、ヘラケズリ、ナデ・軽いナデ、無調整が認められ、ナデ・軽いナデのものが主体を占める。

このような特徴をもつ I B 群土器と糠塚遺跡第 1 群土器や経ヶ崎遺跡の住居跡出土土器を比較すると、土師器坏で平底気味の丸底の I A 2 類と平底の I B 類が共存すること、土師器甕は長胴形で胴部外面の最終調整がケズリ調整である I C 2 類が主体を占めること、また甕には頸部に段を有する甕が認められること、須恵器の坏では体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ調整のものやヘラ切り無調整のものがあるなど、I B 群土器と糠塚遺跡第 1 群土器、経ヶ崎遺跡の住居跡出土土器は共通する特徴が多くみられる。したがって、これらの土器群は共通した特徴を有する土器群と捉えられる。

ところで、経ヶ崎 S16 出土土器は土師器の坏が平底のものが半数以上を占め、平底風の丸底の坏では明瞭な段や稜を有するものが少ないという特徴がある。糠塚遺跡第 1 群土器では平底の坏が大半を占めるが、その中でも体部外面に明瞭な段や沈線を有するものが主体を占める。I B 土器群の原田 S130 出土土器は、土師器坏が平底と平底風の丸底ともほぼ同数認められ、明瞭な段・沈線を有するものは少ない。これまでの古代の土器研究の成果に基づけば、土師器坏の器形的変遷は丸底が古く、年代が新しくなるにつれて平底化していくことや、体部外面の段や沈線が次第に形態化してなくなることが明らかにされている。したがって、坏の中で平底の坏の割合や体部外面の段や沈線のあり方などから、I B 群土器は経ヶ崎 S16 出土土器より相対的に古い可能性が考えられる。

年代については、経ヶ崎遺跡 S16 住居跡出土土器は 8 世紀後半でもやや新しい時期と指摘されている（高清水町教育委員会 2000）。このため、S16 と大きくみれば同じ特徴を有する I B 群土器は、8 世紀後半代の土器群と考えられる。

## 【II 群土器】

II 群土器は非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が共存する土器群である。

土師器坏はロクロ調整で底部から内湾気味に立ち上がるもので、回転糸切り無調整である。甕は長胴形と小型の鉢形があり、後者はロクロ調整と非ロクロ調整がある。長胴甕はヘラケズリの後に、胴下端付近に平行タキを施し丸底状に仕上げられた II B 類が特徴的である。須恵器坏は器高が低く、口径に対して底径が小さい (0.49)。底部の切り離し技法・再調整は、ヘラ切りでナデ調整の B 2 a ③類が 2 点、回転糸切りで無調整の B 2 b ④類が 1 点ある。

非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が共存する例としては、伊治城跡第 173 号住居跡出土土器があ

る（築館町教育委員会 1991）。伊治城 173 号住居跡出土土器は、坏と甕に非ロクロ調整とロクロ調整が認められ、ほかに須恵器食膳具が多数に出土している。須恵器坏は、II 群土器に比べて口径に対する底径が大きい (平均 0.55)。底部の切り離し技法や再調整はヘラ切りのちナデや無調整が主体である。

伊治城 173 号住居跡出土土器と II 群土器を比較すると、非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が共存し、須恵器坏の底部の切り離し技法・再調整に共通点が認められる。ところで、これまでの須恵器坏の研究成果に基づけば、時代が降るに伴い、底部の切り離し技法がヘラ切りから糸切りへ、底径が大きなものから小さくなる傾向が指摘されている。このような観点から伊治城 173 号住居跡出土土器と II 群土器の須恵器の坏をみると、前者は底部の切り離し技法が不明なもの以外はすべてヘラ切りである。一方、II 群土器の須恵器の坏には回転糸切り無調整のものが 1 点ある。また、底部の大きさは 173 号住居の方が II 群土器より大きい。したがって、II 群土器は伊治城跡第 173 号住居跡出土土器より新しい可能性が考えられる。

II 群土器の年代は、伊治城 173 号住居跡出土土器の年代が 8 世紀末～9 世紀初頭と考えられていることから、9 世紀前半頃とみておきたい。

また、土師器長胴甕 II B 類はヘラケズリの後に叩き整形される特徴的なものであり、本県では桃生城周辺の石巻市角山遺跡 S11013 住居跡（宮城県教育委員会 2006）と同市山居遺跡 S1105 住居跡（宮城県教育委員会 2006）出土土器の中に数例認められるだけである。このような特徴を持つ長胴甕は会津地方で特徴的に認められ、非陸奥国的な器形を持った疑似北陸系の派生型と理解されている（山中雄志 2003）。年代は 9 世紀前半から 10 世紀後半で、9 世紀後半以降に広く普及したと指摘されており、これは前述の在地土師器や須恵器の年代観と矛盾しない。

## （b）鉄製品

原田遺跡の竈穴住居跡から小札と鉄鐔が発見されている。甲の部品である小札は S130 住居跡から比較的多く出土している。その他には S170 住居跡の床面直上と堆積層から 3 点出土している。

鉄鐔は S130 住居跡の床面から 2 点まとも出土している。ここでは S130 住居跡から出土した小札と鉄鐔について若干の考察を加える。

## 1) 小札

小札は緒を通す孔をあけた鉄製の細長い板で、S130 住居跡の中央部東側と西辺部の床面からまとも出土している。重ね組られた甲本来の一部ではなく、上下・表裏が揃っていないことから、バラバラにした小札を寄せ集めたものと考えられる（図版 5-6）。縦組や威組の痕跡も僅かにみられた。出土した小札は、破片で 30 点以上あるが、接合できないものなどを考慮に入ると 20 枚程度と考えられる。

「延喜式」兵庫令の甲製作工程の規定に「挂甲一領。札八百枚。（以下略）」と記載されていることからみると、本住居跡出土の小札は、挂甲一領分の 1/40 ほどの数量にすぎないものであるが、以下、小札の形態的特徴や年代について検討する。

## ①分類

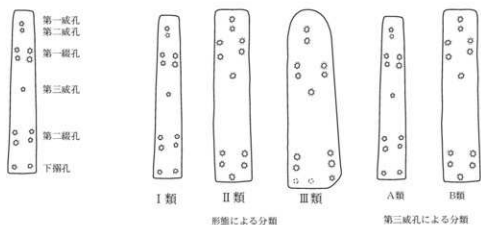
札幅（上端幅と下端幅）と長さから以下の3類に分けられる。

第Ⅰ類：上端（札頭）幅が1.2～1.4cm、下端（札足）幅が1.7cmで、長さが8.5cm前後のもの。札頭と札足の幅比が1：1.2～1.4で札足に向かって幅が広がるもの。

第Ⅱ類：札頭幅が1.6～1.9cm、札足幅が1.7～1.8cmで、長さが8.3～9.2cmのもの。札頭と札足の幅の比が1：1.0～1.05で、札頭と札足の幅がほぼ同じもの。

第Ⅲ類：札頭幅が2.4cm、札足幅が2.9cmで、長さが9.6cmであり、Ⅰ・Ⅱ類より大形のもの。札頭と札足の幅比が1：1.2で、札足に向かって幅が広がるもの。

これらの各類について、威孔の位置と個数についてみると、第Ⅰ類は第三威孔がすべて第一級孔と第二級孔の中間の中央部に1個あり、また下端部の威孔もすべて両側辺部に各1個あるものである。第Ⅱ類は第三威孔がすべて第一級孔側に偏った中央部に1個、また下端部の威孔もすべて中央部に1個あるものである。第Ⅲ類は第三威孔がすべて第一級孔側に偏った中央部に1個あるが、下端部の威孔は、中央と両側辺に沿って各1個の合計3個ある場合（A）と、中央と片側部に各1個の合計2個ある場合（B）に分かれる。



第125図 小札の分類

## ②年代

小札の変遷は、第三威孔の有無と幅からある程度推測される。この第三威孔については、綴り方が小札2枚重ねになることによって、威す段数を減らしても防衛性が保てるようになり、8世紀後半～9世紀初めにかけて減少し消滅すると考えられており（津野 1994）、8世紀末～9世紀前葉と考えられている鹿の子C遺跡（茨城県教育財団 1983）出土の小札にはほとんどみられなくなる。一方、本遺跡出土の小札にはいずれも確認できることから、本遺跡出土の小札の年代は8世紀末～9世紀前葉以前と考えられる。

また、小札の幅は7世紀代から8世紀にかけて狭くなり、8世紀中葉もしくは8世紀第3四半期頃にもっとも狭くなると考えられている（津野 1994）。この最も狭くなる時期の資料としては、8世紀第3四半期頃に位置づけられている青森県根岸（2）遺跡（百石町教育委員会 1995）や8世紀後半とされている千葉県山田水香遺跡（山田水香遺跡発掘調査団 1977）、栃木県瑞穂野田地遺跡（宇都宮市教育委員会 1978）出土の挂甲小札があげられる。

根岸（2）遺跡の小札はⅠ類とⅡ類に分類されている。Ⅰ類は、Ⅱ類に較べやや大形で、札頭幅が1.7～2.0cm、札足幅が1.8～2.1cm、Ⅱ類は、札頭幅が0.8～1.5cm、札足幅が1.0～1.5cmで、札頭と札足の幅がほぼ等しいものである。

山田水香遺跡、瑞穂野田地遺跡の小札は、札頭幅が1.5cm、札足幅が1.6～2.0cmで、札頭と札足の幅の比が1：1.2ほどの下端部が広がるものである。

以上の各遺跡の資料と本遺跡の小札について幅を比較すると、札頭と札足の幅がほぼ等しい本遺跡のⅡ類は幅が1.6～1.9cmで、幅が1.7～2.1cmである根岸（2）遺跡のⅠ類とほぼ同じである。また、札頭幅が1.2～1.4cm、札足幅が1.7cmで札足が広がる本遺跡のⅠ類は、札頭幅が1.5cm、札足幅が1.6～2.0cmである山田水香遺跡、瑞穂野田地遺跡のものと同様している。このことから本遺跡出土の小札Ⅰ類・Ⅱ類の年代は8世紀後半頃とみられる。

なお、本遺跡の第Ⅲ類については、使用される部位の違いなのか年代の違いなのかは判然としない。

## ③綴り方について

小札の綴り方については、横方向の綴り方に関係する綴り孔の列の数と縦方向の綴り方に関係する綴り孔の位置により綴り方が異なる。最初に横方向の綴り方についてみてゆく。

本遺跡の小札の綴り孔は、第Ⅰ～Ⅲ類とも上半部と下半部の2ヵ所にあり、穴の数はそれぞれ4個で、ほぼ対称となる位置の両側辺に沿って上下に2個並んでいる。これまでの類別からみれば、横方向は小札2枚重ねの綴り方がなされたものと考えられる。また、わずかに残存していた紐の痕跡からみて左重ねと右重ねの両方の場合が想定される。

縦方向の綴り方については第三威孔の位置が関係している。本遺跡の小札の第三威孔の位置は、第Ⅱ類と第Ⅲ類が第一級孔に偏ったところであり、第Ⅰ類は第一級孔と第二級孔の中間にある。第三威孔が第一級孔と第二級孔の中間にある第Ⅰ類は、上下の段の重なりを多くした威技法によるもので、第一級孔に偏ったところにある第Ⅱ類と第Ⅲ類は、上下の段の重なりを少なくした威技法によるものと考えられる。すなわち、本遺跡の資料は、綴り方における小札2枚重ねの定着により、第三威孔を必要とする威技法から必要としない威孔一列の威技法への過渡期にあたるものである可能性が考えられる。

## ④その他

奈良時代の道具・武器は、『令集解』『營繕令 营造軍器条』にあるように、国家の管理下下として「様」にしたがって製作されていたとされる。このことは国衙や地方官衙などで使用されていた武器・道具が「様」にしたがって製作された一定の規格品であることを意味している。実際、城櫓である秋田城跡と官衛付工房である前述の鹿の子C遺跡から出土した小札についてみると、両遺跡と

も一定の規格性を示す方形のものが主体を占めている。

一方、根岸(2)遺跡出土の小札は側面を丁寧に磨いて緩やかな円形をなすものが主体を占め、それらは蝦夷の挂甲小札とされている。この根岸(2)遺跡出土の小札と本遺跡の小札を比較すると、両者は形態が異なっており、本遺跡出土の小札は威孔の対応関係も明瞭であり、形状の規格性も高い。

以上のことから、本遺跡から出土した小札は、国家の管理のもとで「様」にしたがって製作された可能性が高いものと考えられる。

以上の他に本遺跡出土の第Ⅰ類の中に表側の上部に繊維質の錆の固まりがあるものがある(第15図7)。これは繊維質を綴じ付けた肩上部分と考えられ、堅上第一段の札板の可能性が考えられる。単品のため甲の中央なか縁辺であるかは明確ではない。

## 2) 鉄鐔

SI30 住居跡から2点の鉄鐔が出土している。本住居跡は火災で焼失しており、遺物の出土状況は、火災に遭遇する直前の状態をほぼそのまま保っていると考えられる。

第14図13は住居跡の出入口施設東脇の炭化材の下の床面直上から出土している。長さ7.6cmであり、上端の長径1.2cm、短径1.0cm、下端の長径1.6cm、短径1.4cmで、下端に向けて広がっている。厚さ1mmほどの鉄板を筒状に折り曲げたもので、上端付近には径2mmの孔が内側から外側へ向かってあけられている。鐔内部には上半部を欠損した舌部下半が長さ4.8cm、幅4～6mmほど残存していた。鐔身と舌を連結する部品は確認されなかった。

第14図14は住居跡南辺の柵状施設東端の床面から検出した。長さ8.1cmであり、上端の長径1.1cm、短径1.0cm、下端の長径1.8cm、短径1.6cmで、下端に向けて広がっている。厚さ1mmほどの鉄板を筒状に折り曲げたもので、上端付近には径2mmの孔が外側から内側に向かってあけられている。鐔内部には舌部は残存していない。鐔身と舌を連結する部品は確認されなかった。

類例が出土した遺跡として、県内では古代賀美郡家跡と考えられている加美町東山官街遺跡があげられる(宮城県多賀城跡調査研究所1988)。上面に灰白色火山灰が認められる基本層序第Ⅱ層から出土しており、長さが7.5cm、上端の径1.0cm、下端の径2.6cmと本遺跡のものより下端の広がりがやや大きい。舌部が残存しており、懸垂部は先端部を細く延ばして丸く曲げる形状である。年代は賀美郡家跡の存続年代から8世紀前半から10世紀前半と考えられる。

この他の県内の類例としては、栗原市佐内屋敷遺跡第9号住居跡出土の筒状鉄製品がある。筒状鉄製品は堆積土第Ⅲ層から出土しており、銚の装着部と考えられていた(宮城県教育委員会1983)。実見したところ、部分的に欠損しており舌部もないが、形態・法量などから鉄鐔の可能性も考えられるものである。年代は、土器から8世紀後半の中頃と考えられる。

また、県外の主な類例としては、集落跡などからは、群馬県天引向原遺跡第39住居跡から1点、第92住居跡から3点(群馬県教育委員会1997)、長野県吉田川西遺跡SB58・86・207住居跡から6点(長野県教育委員会1989)、同県くまのかわ遺跡第6号住居跡からは鉄鐔1点、舌2点(松本市教育委員会1982)、石川県寺家遺跡では8世紀後半～9世紀後半の祭祀地区などから13点出土している(石川県立埋蔵文化センター1988)。祭祀に関連する遺跡では、福岡県宗像大社津宮祭祀遺跡(沖

ノ島学術調査隊1979)や日光男体山山頂遺跡(日光二荒山神社1963)などが挙げられる。また、諏訪大社では宝鈴「さなぎのすず」として今も信仰の対象となっている。鉄鐔が祭祀に用いられていることは確実であり、本遺跡の鉄鐔についても祭祀用のものと考えられる。

なお、鉄鐔の他に、8世紀後半～11世紀にかけて、東北地方北部で「錫杖状鉄製品に伴う鉄鐔」が認められるが、形態的に長さが短く、舌が付かない形状のもので錫杖状鉄製品とセット関係で出土している。これらの錫杖状鉄製品に伴う鉄鐔も祭祀に使用されたものと考えられるが、本遺跡出土の鉄鐔とは大きく形態に違いがみられることから用途もしくは分布が異なる可能性が考えられる(註3)。

## 2. 遺構について

古代の主な遺構としては、堅穴住居跡、堅穴遺構、掘立柱建物跡、塀跡、土壇などがある。

### (a) 遺構の年代

遺構の年代について検討する。遺構としては堅穴住居跡、堅穴遺構、掘立柱建物、塀跡、一部の土壇がある。

#### 【堅穴住居跡】

検出した堅穴住居跡は原田遺跡で8軒、下萩沢遺跡で25軒である。

##### ①原田遺跡

既述のように、SI32B・61B住居跡の床面などからⅠA群土器が出土しており、年代は8世紀前半頃と考えられる。また、SI30住居跡はⅠB群土器が出土していることから8世紀後半頃、SI31住居跡はⅠB群土器が出土していることから9世紀前半頃と考えられる。

SI70住居跡は焼失住居跡で、出土土器は住居使用時の一括資料と考えられる。土師器坏は出土していないが、甕が比較的多く出土している。小型のⅠA2a類とⅠA3a類、中型のⅠB3a類とⅠB3b類、大型のⅠC2a類とⅠC2c類、ⅠC2e類、ⅠC3a類、ⅠC3b類がある。また、須恵器の坏にはB1a④類がある。

これら中で、大型のⅠC2e類はⅠA群土器に、また、小型のⅠA2a類、中型のⅠB3b類、大型のⅠC2a類・ⅠC3a類・ⅠC3b類はⅠB群土器にそれぞれ類似するものがみられる。このようにSI70住居跡出土土器の土師器の甕にはⅠA群土器とⅠB群土器双方の特徴を有するものがみられるが、主体はⅠB群土器にみられる大型のⅠC2a類・ⅠC3a類・ⅠC3b類であり、また須恵器の坏はⅠB群土器にみられるB1a④類である。したがってSI70住居跡出土土器はⅠB群土器の範疇で捉えられ、住居の年代は8世紀後半頃と考えられる。

SI91住居跡出土土器は床面とその直上から出土しており、一定のまとまりのある、住居の使用・廃絶時から大きく時間が経過してはいない資料と考えられる。土師器は坏が丸底のⅠA1a類とⅠA1c類、平底気味の丸底のⅠA2a類・平底のⅠBa類が出土している。甕は小型のⅠA2a類、中型のⅠB3b類、大型のⅠC2b類が出土している。須恵器は出土していない。

丸底の坏 I A 1 a 類・I A 1 c 類及び平底気味の丸底の坏 I A 2 a 類は、I A 群土器にみられるものであるが、I B 群土器にみられる平底の坏 I B 類も存在している。すなわち、SI91 住居跡からは、I A 群土器と I B 群土器の双方の土師器坏が出土している。土師器甕は I B 群土器の I A 2 a・I B 3 b・I C 2 b 類があり、I A 群土器に特徴的な I C 2 e 類は認められない。以上のことから、SI91 住居跡出土土器は I B 群土器の範疇に入るもので、住居の年代は 8 世紀後半頃と考えておきたい。土師器の坏のあり方からみると I B 群土器の中では古い様相を示している可能性がある。

この他、本住居からは底部に砂が多量に付着したいわゆる砂底土器（図版 29）が出土している。SI32A・61A 住居跡は、建て替え後の SI32B・61B 住居跡が I A 群土器であることから、I A 群土器期に属する可能性が高いと思われる。

#### ②下沢沢遺跡

SI05 住居跡からは I B 群土器が出土しており、年代は 8 世紀後半頃である。

SI06C 住居跡は焼失住居である。床面やカマド、堆積層から土器が出土しており、少なくとも床面やカマドから出土した土師器甕・鉢は住居使用時の土器と考えられる。土師器の甕は大型の I C 2 b 類、中型の I B 2 c 類、小型の I A 1 a 類が出土しており、いずれも体部外面の最終調整はケズリ（i 類）・軽いケズリ調整（ii 類）である。これらは I B 群土器にみられることから、SI06C 住居跡出土土器は I B 群土器の範疇に入り、住居の年代は 8 世紀後半頃と考えられる。なお、比較的多く出土した堆積層出土資料も I B 群土器である。

SI62 住居跡は焼失住居で、床面直上やカマドから出土した土器は住居使用時の土器と考えられる。カマドから土師器甕、床面直上から土師器坏・甕、須恵器蓋が出土した。土師器坏は平底気味丸底の I A 2 c 類と平底の I B d 類が出土している。甕は大型の I C 2 b ii 類、I C 2 c i 類、中型の I B 2 a i 類が出土しており、いずれも体部外面の最終調整はケズリ・軽いケズリ調整である。これらの中で、土師坏 I A 2 c・I B d 類、大型の甕 I C 2 b ii 類は I B 群土器にみられることから、SI62 住居跡出土土器も I B 群土器であり、住居の年代は 8 世紀後半頃と考えられる。

SI64B 住居跡は焼失住居跡で、床面直上やカマドから出土した土器は住居使用時の土器と考えられる。出土土器には土師器の坏と甕、須恵器の坏がある。土師器坏は平底気味丸底の I A 2 b 類、甕は大型の I C 2 b ii 類と中型の I B 1 a ii 類が出土している。須恵器坏は口径に対して底径が相対的に大きい平底の B 1 a ③類が出土している。これらは I B 群土器にみられることから SI64B 住居跡出土土器は I B 群土器の範疇に入る土器群であり、住居の年代は 8 世紀後半頃と考えられる。

このほか SI01・02・04C・07・61B・63 住居跡の年代は量的に少ないものの、床面やカマドから I B 群土器と共通する特徴の土器が出土しており、8 世紀後半頃と推定される。

また、出土土器が極めて少ない SI60・102・111B・112 住居跡は、クロコ調整の土師器が出土していないこと、表採資料を含めて I 群土器より古い土師器は出土していないことから I 群土器期と考えておきたい。SI111B 住居跡より古い SI111A 住居跡は同様に I 群土器の時期とみられる。

一方、遺物が出土していない SI03・113A・B 住居跡は年代が限定できないが、SI113A・B 住居跡は I 群土器期の SI112 住居跡より古いことから、同時期とみられる。また、SI03 住居跡は I B 群土器

期の SI02 住居跡より古い SB42 建物跡と同時期の SB41 建物跡より古いことから I 群土器期とみられる。ところで、SI04A・B・06A・B・61A・64A 住居跡の年代は、建て替え後の SI04C・06C・61B・64B 住居跡が I B 群土器期と考えられることや I A 群土器が極めて少ないことから、概ね 8 世紀後半頃と考えられよう。なお、調査区内から I A 群土器や II 群土器がほとんど出土していないことを重視すれば、下沢沢遺跡の竅穴住居跡はすべて 8 世紀後半頃のものである可能性が考えられる。

#### 【竅穴遺構】

古代の竅穴遺構は原田遺跡で 2 棟、下沢沢遺跡で 3 棟発見している。

原田遺跡 SX01 竅穴遺構出土土器は堆積層からの出土ではあるが、比較的床面に近いことから住居廃絶後それほど大きく時間が経過したものではないと思われる。土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台坏が出土している。土師器坏は丸底の I A 1 a 類で、須恵器坏は底径が大きく、切り離し技法が不明な B 1 d 類である。須恵器高台坏は底部が丸底状の A 類が出土している。これらは I A 群土器期の SI32B 出土土器の中に類例が求められることから、SX01 竅穴遺構の年代は 8 世紀前半頃と考えられる。

原田遺跡 SX05 竅穴遺構からは、床面直上から I A 群土器の須恵器坏 A 類が出土していることから、年代は 8 世紀前半頃と考えておきたい。

下沢沢遺跡の竅穴遺構のうち 2 棟（SX08・09）は竅穴部が削平のため全く残っておらず、時期が限定できない。掘方のみが残った小規模な竅穴住居の可能性もある。また、SX101 竅穴遺構は堆積土から土師器甕の小片が出土したのみなので、時期が限定できない。

#### 【掘立柱建物跡・塀跡】

出土遺物で年代を決定できるものはない。遺構の重複状況からは、原田遺跡で SB42 建物跡は II 群土器期の SI31 住居跡より古く、I 群土器期とみられる。下沢沢遺跡の SB42 建物跡は 8 世紀後半頃の SI02 住居跡より古いこと、SB53・54 建物跡は 8 世紀後半頃の SI06A・B・C 住居跡より古いこと、SB117 建物跡は I 群土器期の SI112 住居跡より古いこと、SB121 建物跡は後述するように I 群土器期の SD114 溝跡より古いことから、SB42・53・54・117 建物跡は I 群土器期をみられる。また、SB41 建物跡と SB42 建物跡はそれぞれ西側柱筋、東側柱筋を揃えていることから、I 群土器期の可能性がある。

ところで、これまでの古代集落跡における掘立柱建物跡の発掘調査の成果によれば、建物跡の柱穴は一般的に隅丸方形を基調とし、同じ建物では柱穴の規模・形状に斉一性が認められる。上述の建物跡もこうした特徴を有しており、同様の特徴を有する原田遺跡 SB11・33～36・73・74 建物跡や SA41 塀跡、下沢沢遺跡の SB45～48・103～108・116 建物跡は古代と考えられる。

#### 【区画施設跡】

下沢沢遺跡の SA115 材木塀跡と西側の SD114 溝跡である。SA115 材木塀跡の掘方埋土からは、非クロコ調整の土師器甕胴部破片が出土している。また、SD114 溝跡の堆積土からは、リング状のつまみ部を持つ須恵器蓋、底部が回転ヘラケズリ調整の須恵器坏、非クロコ調整の土師器甕の胴部破片などが出土している。クロコ調整の土師器が出土していないことから、これらの年代は、I 群土器期の可能性が考えられる。

## 【土壌】

原田遺跡 SK72 土壌は堆積土から I B 群土器の土師器環 I A 2 a 類、須恵器環 B 1 a ②類が出土していることから、8 世紀後半頃と考えられる。

下萩沢遺跡 SK18・25・26・28・31・67・70 土壌は、I B 群土器の土師器環 I A 2・I B 類や甕 I C 2 類、須恵器の環 B 1 a ③類が出土していることから、8 世紀後半頃と考えられる。一方、SK34 は II 群土器にみられる底部が回転糸切り後ヘラケズリ調整が施されるロクロ調整の土師器環が出土していることから 9 世紀前半頃とみられる。

その他の土壌（原田遺跡 SK02・16・22・23・51・84・89・92 土壌、下萩沢遺跡 SK11～17・19・20・22・24・27・29・32・36～38・40・51・55・56・65・66・68・69・71・77・78）については、遺物が出土しておらず、年代を特定できない。

以上の竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡・塀跡、区画施設、土壌について、それぞれの遺跡ごとに年代を整理すると次のようになる。

### 【原田遺跡】

8 世紀前半（I A 群土器）：SI32A・B・61A・B 住居跡、SX01・05 竪穴遺構

8 世紀後半（I B 群土器）：SI30・70・91 住居跡、SK72 土壌

9 世紀前半（II 群土器）：SI31 住居跡

年代を明確に限定できなかった遺構は次のとおりである。

8 世紀代（I 群土器）：SB42 建物跡

古代：SB11・33～36・73・74 建物跡、SA41 塀跡

なお、時期が限定できなかった古代の遺構は、原田遺跡出土土器の大部分が I 群土器と II 群土器であったことを勘案すると、8 世紀前半から 9 世紀前半頃のものである可能性が高いと考えられる。

### 【下萩沢遺跡】

8 世紀後半（I B 群土器）：SI01・02・04A・B・C・05・06A・B・C・07・61A・B・62・63・64A・B 住居跡、SK18・25・26・28・31・34・67・70 土壌

9 世紀前半（II 群土器）：SK34 土壌

年代を明確に限定できなかった遺構は次のとおりである。

8 世紀代（I 群土器）：SI03・60・102・111B・112・113A・B 住居跡、SB41・42・53・54・117 建物跡、SA115 材木塀跡と西側の SD114 溝跡

古代：SB45～48・103～108・116 建物跡

なお、時期が限定できなかった古代の遺構は、下萩沢遺跡出土土器の大部分が I B 群土器であったことを勘案すると、大半は 8 世紀後半頃のものである可能性が高いと考えられる。

## （b）遺跡の様相

### 【原田遺跡】

8 世紀前半の遺構は SI32A・B・61A・B 住居跡と SX01・05 竪穴遺構で、調査区内の南寄りに分布する。ただし、調査区は東西に長い遺跡を南北に縦断するものであるため、この時期の遺構がこの周辺にまとまって存在するかどうかは不明である。

8 世紀後半頃の遺構は SI30・70・91 住居跡と SK72 土壌である。調査区内の北寄りに存在しており、8 世紀前半頃とは分布が異なる。が、前述の理由で、集落全体からみてこうした傾向が指摘できるのかは不明である。竪穴住居跡は 3 軒で、2 軒は火災に遭っている。2 軒とも床面に多量の遺物が残されており、不慮の火災で廃絶したものと考えられる。残りの 1 軒はカマド改修中か改修直後に廃絶しており、突発的な事情で廃絶したものと推定される。

SB42 建物跡は 8 世紀代としか限定できなかったが、小規模で平面形が歪んだ建物跡であり、他の建物跡や竪穴住居跡とセットになって存在していた可能性が考えられる。この場合、位置関係から SI30 住居跡とセットになっていた可能性が高い。

SB73 建物跡は桁行 3 間、梁行 2 間の建物で、平面積が大きく住居などとして存在したと考えられる。ところで、西に隣接してこの時期の SK72 土壌があり、多くの土器片が出土していることからゴミ穴と考えることができよう。ゴミは SB73 建物跡由来のものとも考えられ、この場合、SB73 建物跡は 8 世紀後半頃のものと考えられる。なお、上述の推定が妥当な場合、この時期の集落は竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成されていたことになる。

9 世紀前半頃の遺構は SI31 住居跡がある。明確な遺構は他にはなく、かなり閑散としている。

ところで、SB33・34 建物跡と SA41 塀跡についてみると、SB33・34 建物跡は柱筋を描いて南北に並んでおり、位置関係から SA41 塀跡はこれらに付属するものであり、同時期に存在していたと考えられる。一方、SB33・34 建物跡は総柱の建物で倉庫と考えられることから、居住施設である竪穴住居跡や掘立柱建物跡とセットになって存在したと考えられるが、北～北東には各時期の竪穴住居跡があることや、倉庫の西側（調査区外）にセットとなる居住施設が存在した可能性もあることから、時期を決定することはできない。

### 【下萩沢遺跡】

8 世紀前半は土師器の小片が少量出土しただけで、明確な遺構はない。遺物が出土していることから調査区周辺にはこの時期の遺構が存在する可能性が考えられる。なお、本遺跡の 2 次調査では、本調査区からはかなり北に離れてはいるが、7 世紀末～8 世紀前半頃の竪穴住居跡が発見されている（本書所収）。また、北-1 区の東隣接地での調査では、8 世紀中葉前後の竪穴住居跡が発見されている（栗原市教育委員会 2008）。

8 世紀後半には SI01・02・04A・B・C・05・06A・B・C・07・61A・B・62・63・64A・B 住居跡、SK18・25・26・28・31・34・67・70 土壌がある。調査区の全面に遺構が分布しており、時期が判明した遺構の大部分はこの時期であることから、本遺跡の主体となる時期である。竪穴住居跡は適度な間隔をおいて分散しており、方向や構造、カマドの位置などは様々であり、有意なまとまりは把握で



きない。なお、既述のように、今回の調査で発見した遺構の大半が8世紀後半である可能性が考えられた。この場合、集落は竪穴住居と掘立柱建物で構成されていたと考えられる。

掘立柱建物跡のうち、SB41・42建物跡、SB53・54建物跡、SB45～47建物跡、SB104・105建物跡、SB107・108建物跡、SB117・121建物跡はそれぞれ柱筋が揃っており、同時期と考えられる。これらは平面積が竪穴住居跡と比べても遜色がなく、住居などとして存在したとも考えられるが、配置に計画性が窺える点で異なっている。一方、総柱で倉庫と考えられる建物跡や小規模な建物跡は他の掘立柱建物跡や竪穴住居跡とセットになって存在していたと考えられるが、調査区が限定されていたためそれらの関係を把握することはできなかった。

また、重複状況を見ると以下のように4箇所を確認でき、掘立柱建物跡と竪穴住居跡との前後関係は一樣ではない。

SB53・54建物跡→SI06A住居跡→SI06B住居跡→SI06C住居跡

SI01住居跡→SB45～47建物跡

SI02住居跡→SB41・42建物跡

SI113住居跡→SB117・121建物跡→SI112住居跡

9世紀前半頃にはSK34土壌がある。他に遺構はなく、遺物も少ないことから遺跡内はほとんど利用されなくなっていた可能性がある。

#### (c) 焼失住居跡について

焼失住居跡は、炭化材や炭化物、屋根葺土などが焼けた焼土及び焼土ブロック、住居内の焼面の有無、出土遺物における再火熱の有無を総合的に検討して判断したものである。原田遺跡 SI30・70住居跡と下萩沢遺跡 SI01・02・05・06C・07・62・64B・102・111B住居跡が焼失住居跡で、時期が限定できるものはすべて8世紀後半であり、いずれの住居跡も火災によって廃絶している。

遺物の出土状況を見ると、床面に多量の遺物が残されていたもの（原田遺跡 SI30・70住居跡、下萩沢遺跡 SI05住居跡）と、床面に遺物が少量残されていたもの（下萩沢遺跡 SI01・02・06C・07・62・64B住居跡）とがある。下萩沢遺跡 SI102・111B住居跡は、炭化物や焼土などがやはり焼失住居ではあるが、床面の検出面積が狭く遺物の有無は判断できない。

なお、炭化材が少量しか検出されなかった住居跡（下萩沢遺跡 SI01・02・06C・07・62住居跡）については、炭化しなかった材が腐朽して残っていない可能性も考えられる。

遺物が多量に出土している原田遺跡 SI30・70住居跡と下萩沢遺跡 SI05住居跡の床面で発見された土器は、出土状況からみて火災後に投げ入れられたものではなく、火災になるまで営まれていた生活の中で使用されていた状態を保ったまま出土したものと考えられる。すなわち、火災が突発的な出来事であったため、土器などの家財道具類をほとんど持ち出し得ないまま焼失したものと考えられる。

なお、原田遺跡 SI70住居跡では火災時の堆積と考えられる炭化物層（4層）上に土師器の甕が数個まとめて廃棄されている状況が確認できた。これらの土器の中には、床面出土のものと同距離をおいて接合するものがあることや、床面からは土師器が多く出土しているにもかかわらず、その中に坏

が全くみられないことから、動機は不明であるが、火災後に坏類を中心に一部の土器が取り出され、その後、必要ない甕をまとめて廃棄した可能性も考えられる。

床面からの遺物の出土量が少ない下萩沢遺跡 SI01・02・06C・07・62・64B住居跡については、①火災時に空家であったなど本来住居内に土器が少なかった場合、②火災に際し、土器など家財道具類をある程度持ち出し得た場合、③必要な土器などを持ち出した後に意図的に火をつけて住居を焼却した場合、などの可能性が考えられる（註4）。

ところで、焼失住居跡の中には火災の原因がほぼ間違いなく特定されている場合がある。石巻市新田東遺跡では、8世紀第3四半期頃の竪穴住居跡が29軒発見されており、この中の7軒が焼失住居跡である（宮城県教育委員会 2003）。これらの住居跡が焼失した原因は、「続日本紀」の宝亀5（774）年の記事にみえる海道の新羅による桃生城への襲撃と考えられている。

新田東遺跡の焼失住居跡の検出状況を見ると、炭化材や焼土ブロックなどとともに、完形品の土器が多量に床面から出土している SI8・34D住居跡と、床面から少量の遺物、少量の炭化材・焼土層や焼面などがみられる SI22・11B・52住居跡があり、前者は原田遺跡 SI30・70住居跡と下萩沢遺跡 SI05住居跡、後者は下萩沢遺跡 SI01・02・06C・07・62・64B住居跡とそれぞれ検出状況が類似している。また、原田遺跡では同時期の住居跡3軒のうち2軒、下萩沢遺跡では同時期に存在している最大15軒のうち9軒が火災になっており、同時期に広範囲に火災に遭った蓋然性が高いと考えられる。したがって、原田遺跡と下萩沢遺跡での火災も新田東遺跡の場合と同様に、可能性としては宝亀5（774）年の海道の新羅による桃生城への襲撃のような事件によるとみることでもできる。

そこで本地域についてみると、原田遺跡・下萩沢遺跡の北約3.5kmの栗原市築館宇城生野には古代の城柵である伊治城跡がある。「続日本紀」には、神護景雲元（767）年に伊治城の造営が終了したこと、宝亀11（780）年に陸奥国上治郡大領伊治公善麻呂が按察使紀広純らを伊治城で殺害し、その後、国府である多賀城も焼き討ちしたことが記されている。実際、伊治城跡や多賀城跡などの発掘調査で政府をはじめとする各所から8世紀後半に焼失した掘立柱建物跡や竪穴住居跡が発見されており、この8世紀後半の火災は、「続日本紀」の宝亀11（780）年の記事にみえる事件によるものと考えられている（註5）。以上のことより、原田遺跡と下萩沢遺跡の焼失住居跡は、宝亀11（780）年の事件に際して焼失した可能性が高いと考えられる。

#### (d) 竪穴住居の構造

原田遺跡 SI30住居跡では、土器以外に多量の炭化した木材や焼土や焼土ブロックの他、植物繊維などが発見されている。これらは住居に用いられていた建築部材や内部の施設などが焼け落ちたままの状態で見出されていることから、竪穴住居の構造を復元する上で良好な資料と考えられる。以下では最初に原田遺跡 SI30住居跡について検討し、次に他の住居跡について検討する。

#### 【原田遺跡SI30住居跡】

##### ①柱

柱とみられる炭化材は検出できなかったが、主柱は隅丸方形をなす平面形の対角線上の4箇所に建

でられている。支柱穴は住居の掘方埋土で覆われていることから、堅穴部の掘り下げ時に支柱穴を掘り込んで柱を立て、その後には床を構築していることがわかる。支柱は、柱痕跡が直径が 30 cm 前後の不整形であることから、割り材が用いられていた可能性がある。それぞれの柱の間隔は約 4.4 m である。

その他に南東・南西隅の各 1 箇所に壁柱がみられた。

#### ②屋根の構造

炭化材は床面あるいは床面直上で発見されている。主な炭化材は住居の壁から放射状に住居の中央に向かって倒れ込んでいるもの、それらの上に接して直交するもの、住居の壁に張り付くように 20 ～ 40cm 間隔で並ぶものなどがある。

#### ・垂木と椀木

これらの中で、放射状に住居の中央に向かって倒れ込んでいるものは、壁際の周辺部床面を中心に 10 ～ 20cm 間隔で認められた。北辺・西辺で多く遺存しており、南辺・東辺では少ない。この中の遺存状況の良好な北辺中央部では、放射状に倒れ込んでいる炭化材の上に直交する細い炭化材が 25 ～ 40 cm ほどの間隔で認められた。上下の炭化材は直に接していることから一連の組み合わせ部材と捉えられ、下の放射状に住居の中央に向かって倒れ込んでいるものが垂木、それに直交するのが椀木と考えられる。これらの垂木と椀木は、鉄釘やほぞ穴がみられないことから、紐などで緊縛されていたとみられる。

なお、復元住居を用いた焼失実験では、本住居跡と同様に垂木と椀木の重なる部分は抉られたような状態になることや、火災時には上屋上部の燃焼が早く、本住居跡の場合と同様に住居中央部の上屋の炭化材の遺存が少なくなることが確認されている。また、屋根の葺土が火災による崩壊に際し、垂木および椀木等の建築部材を瞬時にバックし、バックされた建築部材が蒸し焼き状態の炭化材になることが確かめられている。(石守 2001)。

#### ・籾状の炭化した茅状植物繊維と焼土ブロック

垂木と椀木の上で平行もしくは直行して並ぶ籾状の炭化した茅状植物繊維が認められた(図版 5-7)。また、その上には焼土の大きなブロック(住居堆積土 13 層)が各辺の壁際の所々で確認された。焼土ブロックはいずれも強く焼けたため赤褐色を呈している。

遺存状態の良好な北辺中央部では、下から、垂木→椀木→籾状の炭化した植物繊維→赤褐色の焼土ブロックの順で堆積していることが確認できた。このような堆積から想定される屋根の構造は、群馬県渋川市巾着遺跡 1 号堅穴住居跡で確かめられた、垂木→茅を縦横交互に葺く→土を 10 cm 位の厚さで均等に全体に乗せる→土の上に草を葺くという「土葺屋根」構造と同様であると考えられる(渋川市教育委員会 1987、大塚 1995)。

また、大崎市新田柵跡 SI73b 住居跡では、炭化材や炭化植物繊維をバックする形で焼土や黒褐色土、地山の黄褐色土ブロックが混入する褐色土が認められており、屋根に土が葺かれていた可能性を示唆している(田尻町教育委員会 1998)。同様に、焼土塊・焼土・炭片・小礫片を多量に含む堆積層が確認された石巻市新田東遺跡の SI8・SI34D 住居跡なども「土葺屋根」構造の屋根と考えられている

(宮城県教育委員会 2003)。

#### ③壁の施設

壁に張り付くように 20 ～ 40cm 間隔で並ぶ炭化材と炭化した網代状の植物遺存体がある。炭化材の遺存状態は良くないが、幅 5 ～ 15cm、厚さ 1 ～ 3 cm ほどの板状のものとみられる。これらは周溝上面まで続いているものはないが、検出状況から、一端を周溝内に据えて壁の押さえとした板材とみられる。これが周溝で検出されるいわゆる「壁材痕跡」に対応する部材と考えられる。

炭化した網代状の植物遺存体は、西・北辺の壁際沿いの床面上で部分的に検出している。垂木とみられる炭化材の下で検出していることから前述の屋根に葺かれた籾状の炭化した茅状植物繊維とは異なるものである。このような炭化材と炭化した網代状の植物遺存体は、前述の大崎市新田柵跡 SI73b 住居跡でも確認されており、検出状況から、炭化した網代状の植物遺存体を壁の崩落防止のために壁にあてがったもの、炭化材をその押さえの部材(壁柱)と想定している。以上のことから、SI30 住居跡の炭化した網代状の植物遺存体と壁に張り付いた炭化材は、住居の壁の崩落を防ぐために壁に施された施設と考えられる。

なお、以上の他に住居の壁に施された諸施設のあり方がある程度明らかにされている例としては、地域と時期は異なるが、福岡県八女市道添遺跡第 15 号住居跡があり、竹や小枝を横組にしてこれを壁柱で押さえられていると考えられている(福岡県教育委員会 1977)。また、上述の中筋遺跡 1 号堅穴住居跡では、竹を編んだアンペラ状のもので壁を覆っていたと想定しており、群馬県渋川市の黒井峰遺跡の住居跡では網代で壁を覆っていたと考えられている(子持村教育委員会 1990)。

#### ④出入口

出入口に関係する施設としては、2 枚の炭化した板材と壁際の穴(P12)がある。

#### ・壁際の穴

南辺中央部の壁際から 65 cm ほど離れた床面で小さな穴(P12)を検出した。この穴は深さ約 40 cm で、材の痕跡を確認している。位置関係から出入口に関係する何らかの施設の据方であると考えられる。材の痕跡は垂直ではなく、南辺側(外側)へ約 28 度傾いている。このように、住居の壁際で、垂直ではなく壁側へ傾いた材の痕跡が認められる穴の類別としては、時期は異なるが、弥生時代の神奈川県大塚遺跡 Y50 号住居址があげられる(横浜市埋蔵文化財センター 1991)。ここでは壁側へ 25 ～ 30 度傾いた材の痕跡を有する穴が確認されており、この穴を出入口に設置した梯子の据方としている。この神奈川県大塚遺跡 Y50 住居址の推定が認められるならば、原田遺跡 SI30 住居跡の P12 についても出入口の梯子の据方と考えられる。なお、本住居跡のものは材の痕跡がそれほど大きくないことから、梯子が動かないように固定しておく杭のようなものであった可能性も考えられる。

#### ・板材

前述の P12 の東西の床面で、2 枚の板状の炭化材を発見している。いずれも炭化した垂木材の下にあり、東側のものは長辺 75cm、短辺 45cm、厚さ 2cm、西側のものは長辺 130cm、短辺 35cm、厚さ 2cm である。所々に挟りが見られるが、本来は方形をなすとみられる。このような壁際で発見された炭化した板材は、前述の新田柵跡 SI73b 住居跡でも発見されており、①改築で埋め戻して作ったものらしい壁

土の押さえ、②板材を並べて作った棚という二つの可能性を考えている。しかし本住居跡では建て替へによるもうい壁が存在しないことから壁の押さえではないことは明らかである。棚などの可能性も考えられるが、発見した場所が出入口を挟んだ東西という位置を重視して、梯子の両側に立てられた板壁のような出入口に関連する施設の可能性を考えておきたい。

#### ⑤住居の壁の高さと周堤帯

住居の壁の高さを考える上で参考となりうる資料としては、前述の黒井峰遺跡 C-1 号住居跡（子持村教育委員会 1990）があげられる。C-1 号住居跡は住居の周りに周堤帯を巡らし、周堤帯頂部から床面までの高さは約 150cm である。このように当時の状況がほぼそのまま残された例はほとんどないが、前述の弥生時代の神奈川県大塚遺跡 Y50 号住居址では、材の痕跡の傾きに基づいて住居の壁の高さを 100～150cm と推定している。同様な方法で本住居跡の壁の高さを推定すると、約 140 cm になる（横浜市埋蔵文化財センター 1991）。

ところで、本住居跡の確認できた壁の高さは約 30～40cm である。旧表土やその上部に堆積土があり、それらが大きく削平されたとは周辺の状況からみて考えにくいことから、梯子の痕跡から推定された壁の高さが妥当だとすれば、本住居跡は黒井峰遺跡 C-1 号住居跡のように周堤帯が巡る堅穴住居跡であったと考えられる。

#### ⑥その他の内部の施設

##### ・間仕切りなどの据方

周溝に連結している溝状の遺構についてみると、東辺で 2 条（M2・3）、西辺で 2 条（M1・5）、南辺で 1 条（M4）検出している。西辺の M1 と東辺の M2・3 はほぼ真直ぐに住居の内部に続き、主柱に取り付いて終わっている。

南辺の M4 は周溝の中央西寄り部分からやや東側に傾斜して 70cm ほど北へ続き、そこで西側へほぼ直角に折れて 50cm ほど続いて終わる。南西隅の壇状施設の東側と北側の東端部を取り囲んでいる。M1～M4 では、堆積土中に、掘えられた部材の痕跡とみられる幅 3～10cm、深さ 10cm 前後の褐色シルトが認められることから、これらの溝状の遺構は、M1～M3 が主柱と壁の間に設置された間仕切りの据方、M4 が南西隅部の壇状施設を囲う施設の据方と捉えられる。なお、これらの施設の炭化材と思われるものは確認できなかった。

M5 は新しいカマドに相対する西辺中央部壁際の床面で発見した東西溝である。周溝と重複してこれより新しく、M1～M4 のような部材の痕跡は認められない。しかし、前述の M1～M3 と長さほぼ同じであること、周溝との位置関係からみて壁に取り付いた間仕切りの据方から部材を抜き取った跡とみられる。

##### ・壇状施設

南西隅部に盛土で作られた壇状施設（長さ 215 cm、幅 45～115 cm、高さ 5 cm）が認められる。その上面には約 40×30cm 範囲で、高さ 30cm の白色粘土の固まりが、また、その裾部には縦横 20cm ほどの不整形な方形で、厚さ 5cm ほどの白色粘土が認められた。このような施設は「ベッド状遺構」、「棚状施設」「台床状の高まり」などと呼ばれ、確証はないが寝台、棚、祭壇などの機能が想定され

ている。県内の類例をみると、時期は異なるが名取市野田山遺跡第 2・6・23 号住居跡で検出した「台床状の高まり」がある（宮城県教育委員会 1992）。野田山遺跡の「台床状の高まり」は 3 例とも住居の南西隅部にあり、東辺が溝で仕切られている。また、出入口がこの溝の東側に想定されている。このような状況は、本遺跡 SI30 住居跡の壇状遺構のあり方と極めて類似しているといえる。

##### ・簀子状の敷物

西辺付近の床面で、炭化した竹の割材を素材とした簀子と、間隔が 4 cm ほどの南北・東西方向の直行する筋状の圧痕を検出している。簀子は M5 の堆積土上面で部分的に検出されているだけであるが、筋状の圧痕は南北 3.3m×東西 1.8m の範囲に認められた。筋状の圧痕は、断面形が逆三角形、深さ約 3mm で、その南北方向が炭化した簀子の方向と一致することから、この炭化した簀子の圧痕と考えられる。なお、圧痕は直交しているが、これは東西方向に敷かれていた簀子を南北方向に敷き直したためと考えられる。すなわち、西側の壁際に沿う一定の範囲は、簀子状の敷物が敷かれていた何か特定の使われ方がされていた場所といえる。

類例をみると、佐内屋敷遺跡第 8 号住居跡でカヤもしくは竹状の敷物が検出されている（宮城県教育委員会 1983）。また、黒井峰遺跡 B-198 号平地式住居の床面には、1～2 cm 幅の篠竹風の植物を同じ長さで切り揃え敷いた圧痕が確認され、寝るための場と想定されている（子持村教育委員会 1990）。

##### ・その他

以上の他に、北辺の古いカマド付近の床面で、炭化した垂木の下から直交する炭化材とそのすぐ南で籐状の炭化した植物遺存体を発見した。垂木の下からの発見であることから、住居内部の施設の一部と考えられるが、具体的にその施設について検討できる資料はない。また、住居北辺のやや西側付近の床面で垂木と考えられる炭化材の下で並んだ状況の須臾器の蓋 4 点、住居の出入口の梯子の据方とみられた P12 東側の床面で逆位の炭化した槽を発見している。いずれの場合も具体的にこれ以上検討できる資料はないが、周辺に棚などの内部施設の存在も想定される。

#### 【その他の堅穴住居跡の状況】

##### ①カマド

##### ・両脇に位置する柱穴

原田遺跡の SI32A・B・61A・B 住居跡、下萩沢遺跡の SI60・102 住居跡で、カマドの両脇に位置する柱穴を検出している。これらの柱穴は、カマド燃焼部が住居の壁に接続する部分の外側に 1 対あり、カマドの側壁に接するように立てられている。県内における類例は、御駒堂遺跡第 2 群土器期の第 1・13・15・27・28 号住居跡（宮城県教育委員会 1982）や石巻市（旧桃生町）角山遺跡 SI130 住居跡（宮城県教育委員会 2005）で確認されており、時期は御駒堂遺跡が 8 世紀前半、角山遺跡が 8 世紀前半から後葉である。

##### ・構築材

カマド本体が把握できる住居跡としては、原田遺跡の SI30・31・32B・61B・70・91 住居跡、下萩沢遺跡の SI01・02・03・04C・05・06C・60・61B・62・63・64B・102・112 住居跡がある。これらの中で原田遺跡 SI31・70 住居跡と下萩沢遺跡 SI112 住居跡を除く全ての住居跡で、カマド本体は白色粘



#### 【堅穴住居跡】

下萩沢遺跡で縄文時代中期後半の SI59 住居跡を 1 軒発見している。周溝及び柱穴の位置関係から平面形は径 6.8m 前後の円形と推定され、壁柱穴の出土土器から、年代は縄文時代中期の大木 8 b ～ 9 a 式期と考えられる。

#### 【土壇（陸し穴）】

原田遺跡で 25 基、下萩沢遺跡で 3 基発見している（第 7 表）。これらは、平面形が溝状の I 類と円形や隅丸方形をなす II 類に分けられる。I 類では底面に杭の痕跡がみられないが、II 類には底面には杭の痕跡を有するものと無いものがある。

原田遺跡では、調査区全体に疎らに分布しており、特異な偏りはみられない。遺物が出土していないことから時期を特定できないが、縄文時代のものである可能性が考えられる。

#### 【焼面遺構】

下萩沢遺跡 SX21・38 焼面遺構は上述の SI59 住居跡で炉跡と考えた痕跡と類似することから、縄文時代の堅穴住居跡の炉跡などの可能性が考えられるものである。

#### 【縄文時代・弥生時代の遺物】

遺物としては、縄文時代中期後半頃の土器や、弥生時代後期の土器の他に、石鏃などの石器類が少量出土している。

## 2. 古代と特定できない遺構

古代に特定できない遺構として堅穴遺構、堅穴状遺構、掘立建物跡、塀跡、井戸跡、土壇、溝跡などがある。

#### 【堅穴遺構】

原田遺跡 SX03・04・07 堅穴遺構と SK50 土壇は、堆積土から古代の遺物が少量出土しているだけなので年代の特定できない。しかし、栗原市（旧築館町）木戸遺跡で遺物から中世と考えられた堅穴遺構と特徴が類似していることから（宮城県教育委員会 1980）、これら SX03・04・07・50 の年代は中世の可能性が考えられる。なお、これらが分布する場所は、中世以降と考えた掘立建物跡の集中する場所と重なる。

#### 【掘立建物跡】

原田遺跡の SB12 ～ 15・36・56・57・82・83・85・86・100 建物跡や下萩沢遺跡の SB50・52・58・72・73・76・116 建物跡は、柱穴の規模が小規模で形状に斉一性が認められず、建物方向も偏りの大きいものが多いなど、古代と考えられる建物跡との共通性が認められない。集落跡における掘立建物跡に関するこれまでの研究成果を参考にすれば、これらの建物跡は中世以降の建物跡である可能性が高いと考えられる。

#### 【塀跡】

下萩沢遺跡 SA57 塀跡は SB58 建物跡の南側柱列と柱筋をほぼ揃えてその西側に位置していることから、中世以降の可能性が考えられる。

#### 【井戸跡】

原田遺跡 SE06 井戸跡は遺物から年代を特定できない。しかし、堆積土に 10 世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰が認められないことや、位置が中世の堅穴遺構と中世以降の掘立建物跡が集中する場所にあることから、年代は中世がそれ以降である可能性が考えられる。

#### 【土壇】

原田遺跡の SK02・16・22・23・51・84・89・92 土壇、下萩沢遺跡の SK11 ～ 17・19・20・22・24・27・29・32・36 ～ 38・40・51・55・56・65・66・68・69・71・77・78 土壇は、年代を特定できる遺物が出土しておらず、他の遺構との重複関係からも年代を特定できない。なお、これらの諸属性については第 6 表に示してある。

#### 【溝跡】

原田遺跡の SD08・09・10・59・60 溝跡と下萩沢遺跡の SD23・33・35・74・82 溝跡は、年代を特定できる遺物が出土しておらず、他の遺構との重複関係からも年代を特定できない。

なお、原田遺跡の SD59 溝跡は、灰白色火山灰の堆積した SI61 住居跡との重複関係から、灰白色火山灰の降灰した 10 世紀前葉以降のものであることが判明している。また、下萩沢遺跡の SD23 溝跡は、ロクロ調整の土師器の坏が出土していることから 9 世紀以降とみられる。

註 1 原田 SI30 と下萩沢 SI05 の出土土器を比較すると、土師器坏・甕の器形は共通するものの、長胴甕の外面調整が原田がヘラズリ主体で下萩沢はハケメ主体である。さらに、口縁部端部が角状となる土師器甕の割合は下萩沢に多い。須恵器は原田で一定量保有するのに対し下萩沢では認められない、といった違いが認められる。こうした違いは甕胴部の調整がヘラズリは関東地方、ハケメが在地製作技術の系譜につらなるとの指摘があること（宮城県教育委員会 1999）、角状の口縁部は東北北部の在地煮炊具の伝統的な特徴であること（宇部 1989）、須恵器の供給は都賀層が掌握していたことから、双方の住居構成員の出自や支配者側との結びつきの違いを示すと考えられる。

註 2 壇の越遺跡では同じ土器群の住居跡について、出土した土師器坏の器形的特徴の違いから、前後関係を想定している。年代は須恵器坏の特徴から古段階が 8 世紀初頭頃、新段階は 8 世紀第 2 四半期頃とみている（宮崎町教育委員会 1999）。

註 3 井上氏は長野県や日光男体山で出土している鉄鏝と錫杖鉄製品付属の鉄鏝について用語を再整理する必要があるだろうと述べており、筆者も同意見である。ここでは便宜的に「鉄鏝」と用語を用い、錫杖鉄製品に付属する場合は必ずその旨を記すことにした。

註 4 下萩沢遺跡 SI06C・SI62 住居跡では、カマド側壁が壊れており、意図的に破壊されたとも考えられる。また、床面や堆積土からミニチュア土器や土玉が出土している。こういった状況から、ミニチュア土器を用いたいわゆる「カマドの祭祀」（堤 1995、青木 1999）が行われた可能性も考えられるが、断定できなかった。

註 5 この事件で焼失したと考えられている伊治城跡の SI04 住居跡をみると、原田遺跡 SI30・70 住居跡や下萩沢遺跡 SI05 住居跡、新田東遺跡 SI8・SI34D 住居跡と同様に、多量の炭化材や焼土の堆積層がみられ、床面からは多数の完形土器が出土している（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）。

## 第六章 まとめ

原田遺跡と下萩沢遺跡は栗原市築館萩沢及び下萩沢に所在し、ともに築館丘陵の端部～平坦部に立地する遺跡である。両遺跡の間は東から沢が入り源光遺跡があるものの、距離的に近い。範囲は原田遺跡が東西 500m、南北 300m、下萩沢遺跡が東西 200～400m、南北 900m に及ぶ。以下、今回の調査で得られた成果について簡単にまとめる。

1. 両遺跡で発見された遺構は、古代を中心に縄文時代、弥生時代、中世～近世にわたり、古代の遺構は 8 世紀前半頃、8 世紀後半頃、9 世紀前半頃の 3 期に分けて捉えられた。
2. 古代は両遺跡ともに自然集落とはみられず、いわゆる官衙に関連する集落、すなわち律令政府の辺境政策のもとにつくられた集落の可能性が考えられた。
3. 両遺跡ではいわゆる焼失住居が多くみられた。突発的な出来事による火災と考えられ、原因としては宝龜 11 年 (780) のいわゆる伊治公皆麻呂の反乱に関連して焼き討ちされた可能性が考えられた。
4. 焼失住居を中心に竪穴住居の屋根構造や住居の深さ・周提帯の有無、内部の間仕切り・壁の押さえ・入り口など諸施設の状況について多くの知見を得ることができた。

## 引用・参考文献

- 青木 敬 1999 『鹿鹿考—多摩市和田西遺跡事例からみた検討—』『土壁』第 3 号 考古学を楽しむ会
- 青森県教育委員会 2000 『岩ノ沢平遺跡—東北縦貫自動車道八戸線 (八戸～八戸) 建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書 第 28 集
- 秋田市教育委員会 1982 『秋田城跡 昭和 57 年度秋田城跡調査概報』秋田城跡調査事務所
- 秋田市教育委員会 1982 『秋田城跡 昭和 58 年度秋田城跡調査概報』秋田城跡調査事務所
- 秋田市教育委員会 1982 『秋田城跡 昭和 59 年度秋田城跡調査概報』秋田城跡調査事務所
- 秋田市教育委員会 1999 『秋田城跡 平成 10 年度秋田城跡調査概報』秋田城跡調査事務所
- 猪狩みち子 1996 『落合遺跡における竪穴式住居の家屋構造について』『いわき市教育文化事業目録研究紀要』第 7 号 財団法人いわき市教育文化事業団
- 石川 卓立 埋蔵文化財センター 1988 寺家遺跡発掘調査報告 II
- 石野博信 1990 『日本源始・古代住居の研究』吉川弘文館
- 石野博信 1990 『源始・古代住居の研究』吉川弘文館
- 石野博信 1995 『古代住居のはなし』吉川弘文館
- 石守 晃 1995 『復元住居を用いた焼失実験の成果について』『研究紀要』12 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石守 晃 1996 『住居の焼絶の一形態『焼却処分』について』『すまいる考古学—住居の焼絶をめぐる』資料集 山梨県考古学会
- 石守 晃 1999 『竪穴住居と竪穴住居遺構に就いて—多比良遺跡野遺跡の古墳時代後期の竪穴住居をサンプルとして—』『研究紀要』第 17 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石守 晃 2003 『復元住居を用いた焼失実験 再び』『研究紀要』19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石守 晃 2001 焼失実験と閉塞部の焼失住居『考古学ジャーナル』No.509
- 一戸町教育委員会 2004 『御所野遺跡 II—一戸町文化財調査報告書 第 48 集』
- 伊東信雄 1957 『古代史』『宮城県史』第 1 巻
- 伊東信雄編 1981 『資料集 V 考古資料』『宮城県史』第 34 巻
- 井上尚明 1989 『古代集落遺跡の再検討—部部・郷部—一般集落—』『研究紀要』第 5 号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上尚明 1998 『郷部の構造と性格』『律令国家の地方末端支配機構をめぐる—研究集いの記録—』奈良国立文化財研究所
- 今泉隆雄 1992 『7 律令国家とエミシ』『新版古代の日本』⑩東北・北海道
- 氏家と典 1957 『東北土師器の形式分類とその編年』『歴史』第 14 輯 東北史学会
- 氏家と典 1967 『陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐる』『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 宇部国保 2000 『古代東北地方北部の土器文化のある土師器』『考古学ジャーナル』No. 462
- 宇部国保 2002 『東北北部型土師器にみる地域性』『—市川金丸先生古稀記念献呈論文集— 海と考古学とロマン』
- 江口忠保 1998 『竪穴住居復元のための一考察』『研究紀要』第 9 号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大野 亨 2001 『竪穴建物跡とは何か—八戸市根城跡を中心に—』『熊立と竪穴—中世の遺構論の課題』東北中世考古学会編
- 加藤 亨 2004 『新潟県域における北方系の土師器—事例紹介と問題提起—』『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 加藤道男 1993 『宮城県の土器様相』『特集シンポジウム「北日本における律令期の土器様相」』第 18 回古代城権官衙遺跡検討会 古代城権官衙遺跡検討会
- 榎生直彦 2005 『V. 竪穴外柱穴を持つ竪穴建物跡の様相』『竪穴を持つ竪穴建物跡の研究』六—書房
- 工藤雅樹 1989 『城権と蝦夷』考古学ライブラリー—51 ニュー・サイエンス社
- 熊谷公男 2004 『古代の蝦夷と城権』歴史文化ライブラリー—178 吉川弘文館
- 熊谷公男 2004 『蝦夷の地と古代国家』日本史リブレット 山川出版社
- 栗駒町教育委員会 1995 『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第 3 集
- 群馬県教育委員会 1997 『白倉下原・天引向原遺跡 V』『関越自動車道 (上越線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第 47 集』
- (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 『村主遺跡』『大原日遺跡 村主遺跡 一般国道 17 号線 (月夜野バイパス) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—III—』
- 小林清隆 1989 『カマド内出土遺物の意味について』『研究連絡誌』第 24 号
- 小林清隆 山口 典子 1988 『千葉市荒久遺跡の焼失住居の調査について』『研究連絡誌』第 22 号 財団法人千葉県文化財センター
- 子持村教育委員会 1990 『黒井峯遺跡発掘調査報告書 (本文編・図版編)』子持村文化財調査報告書 第 11 集
- 財団法人茨城県教育財団 1991 『中世の竪穴遺構について』『研究—』創刊号
- 財団法人茨城県教育財団 1994 『うぐいす平遺跡』『(仮称) 上高津市地建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 寄居遺跡 うぐいす平遺跡』茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告書 第 34 集
- 笹森健一 1990 『住まいのたから—上層復元の試み』『季刊考古学』第 32 号 鶴岡市
- 佐藤敏幸 2006 『東北地方における 7 世紀から 8 世紀前半の土器の研究史—関東系土師器研究の現状と新研究視点の模索』『宮城考古学』第 8 号

滋賀県教育委員会 2004 『下五反田遺跡』 滋賀県高島郡安曇川町田中 県道小浜杵木高島線改良工事に伴う発掘調査報告書

色麻町教育委員会 1993 『日の出山竪穴跡―詳細分布調査とC地点西部の発掘調査―』 色麻町文化財調査報告書 第1集

白鳥良一 1980 『多賀城跡出土土器の変遷』 『研究紀要』 W 宮城県多賀城跡調査研究所

菅宮裕志 1998 『陸奥国南部における宮室部居住の考察』 『古代の融合と村落・郷里の支配』 奈良国立文化財研究所

福井県教育委員会 1983 『大江山遺跡』 福井県文化財調査報告書第4集

仙台市教育委員会 1992 『神橋遺跡―発掘調査報告書―』 仙台市文化財調査報告書 第159集

大町教育委員会 2003 『一里塚遺跡―古岡東官倉遺跡―』 大町町文化財調査報告書第12集

高清水町教育委員会 2000 『経ヶ崎遺跡』 『経ヶ崎遺跡 観音沢遺跡』 高清水町文化財調査報告書 第2集

高橋泰子 2002 『歴史家の一考―聖久宮の上部構造復元をめぐる―』 『土壁』 第6号 考古学を楽しむ会

田尻町教育委員会 1978 『天宮堂遺跡』 田尻町文化財調査報告書 第1集

田尻町教育委員会 1998 『新田継緒推定地』 田尻町文化財調査報告書第3集

谷 匂 1982 『古代東国のカマド』 『研究紀要』 財団法人千葉県文化財センター

千草山遺跡発掘調査団 1979 『千草山遺跡発掘調査報告書』

堤 隆 1991 『住居廃絶時における竈解体をめぐって』 『東海史学』 第25号

堤 隆 1995 『鹿塚アモレスとその意味』 『山梨県考古学協会誌』 7号

津野 仁 1998 『東大寺出土土器と古代子札甲の建築案』 『研究紀要』 第6号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

津野 仁 2003 『奈良時代武器武具生産への変化』 『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸問題』 七世紀研究会

津野 仁 1994 『第3巻 風埴(2) 遺跡出土の刀子および甲小札について』 『根津(2) 遺跡発掘調査報告書』 百石町教育委員会 文化財調査報告書第4集

津野 仁 1998 『郷長とその性格』 『律令国家の地方末端支配機構をめぐって―研究集いの記録―』 奈良国立文化財研究所

津野 仁 1998 『古代小札甲の特徴』 『時の時代 古代末の東国社会』 群馬県歴史博物館

津野 仁 2004 『古代の武器』 『鉄器文化の多面的探求』 鉄器文化研究会

津野 仁 1995 『甲小札土器園工所―茨城県石岡市の湧きのC遺跡をめぐる―』 『大平蔵史』 13号

(財) 栃木県文化振興事業団 1999 『多功南原遺跡―住宅・都市整備公団宇都宮都市計画事業 多功南原地区埋蔵文化財発掘調査―』

仲田茂司 1989 『陸奥国における奈良時代土師器の地域性について』 『歴史』 第72号

長野県教育委員会 1976 『野狩野遺跡』 『長野県中央遺埋蔵文化財発掘調査報告書―茅野市・原村の1富士見町その2』

(財) 長野県埋蔵文化センター 1989 『吉田山西遺跡 本文編』 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書三―塩尻市内その二―附録

奈良文化財研究所 2003 『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』

奈良文化財研究所 2004 『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺構編』

西原進久 2003 『新羅宮の地味住居と弥生・古墳時代住居における竈火祭祀について』 『考古学ジャーナル』 №509

原 肇 2001 『竈復元の試み』 『土壁』 第5号 考古学を楽しむ会

平野 修福 2000 『住いと住い方一遺跡―遺物か何を捉ら取るの―』 帝京大学山梨文化財研究所 研究集会報告集3

福島県教育委員会 1077 『遺跡遺跡』 『九州縦貫自動車道福岡県築城文化財調査報告Ⅰ―X―1』 福岡県八女市官署所在遺跡群の調査

財団法人福島県文化センター 1978 『谷地前C遺跡』 『国営総合農地開発事業 母知地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』

財団法人福島県文化センター 1980 『谷地前C遺跡』 『国営総合農地開発事業 母知地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』

財団法人福島県文化センター 1981 『沼平東遺跡』 『国営総合農地開発事業 母知地区遺跡発掘調査報告Ⅳ』

松永満夫 1978 『鉄鐔を出土した土壌墓―長野県茅野市野狩野遺跡―』 『信濃』 第30巻第12号

松本市教育委員会 1982 『くまのかわ遺跡』 松本市文化財調査報告書第24集

宮城県教育委員会 1978 『糠塚遺跡』 『宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)』 宮城県文化財調査報告書 第53集

宮城県教育委員会 1980 『藤原遺跡』 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書 第63集

宮城県教育委員会 1980 『原田遺跡』 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書 第63集

宮城県教育委員会 1980 『木戸遺跡』 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』 宮城県文化財調査報告書 第69集

宮城県教育委員会 1981 『清水遺跡』 『東北幹線幹線遺跡調査報告書Ⅴ―Ⅰ』 宮城県文化財調査報告書 第77集

宮城県教育委員会 1981 『上新田遺跡』 『長原原貝塚 上新田遺跡』 宮城県文化財調査報告書 第78集

宮城県教育委員会 1982 『駒駒堂遺跡』 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』 宮城県文化財調査報告書 第83集

宮城県教育委員会 1983 『佐内屋敷遺跡』 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』 宮城県文化財調査報告書 第93集

宮城県教育委員会 1985 『今原野遺跡』 『今原野遺跡―一本杉遺跡 馬越石塚』 宮城県文化財調査報告書 第104集

宮城県教育委員会 1991 『丸塚遺跡』 『丸塚丸塚遺跡』 宮城県文化財調査報告書 第140集

宮城県教育委員会 1992 『野田山遺跡』 宮城県文化財調査報告書 第145集

宮城県教育委員会 1992 『金鈴神遺跡』 『金鈴神遺跡』 宮城県文化財調査報告書 第150集

宮城県教育委員会 1995 『聖別湯宮跡―A地点南部の発掘調査―』 宮城県文化財調査報告書 第166集

宮城県教育委員会 1999 『一里塚遺跡―第44・47次発掘調査報告書』 宮城県文化財調査報告書 第179集

宮城県教育委員会 2003 『藪合貝塚』 宮城県文化財調査報告書 第192集

宮城県教育委員会 2003 『新田東遺跡―一三線自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ―』 宮城県文化財調査報告書 第191集

2004 『沢田山西遺跡』 『沢田山西遺跡』 『一三線縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ』

2005 『角山遺跡―一三線縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅳ―』 宮城県文化財調査報告書 第200集

2006 『角山遺跡』 『角山遺跡 山居遺跡―一三線縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅴ』

2006 『山居遺跡』 『山居遺跡 山居遺跡―一三線縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅵ』

1990 『利府町菅原遺跡Ⅱ―山居遺跡関連遺跡発掘調査報告書―』 宮城県文化財調査報告書 第134集 利府町文化財調査報告書 第5集

1977 『伊治城跡』 『多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊 研究報告』

1988 『東山跡Ⅱ』 『多賀城関連遺跡発掘調査報告書第13冊 研究報告』

1989 『早風遺跡発掘調査報告書』 宮崎町文化財調査報告書 第3集

1999 『陣の越道跡田―平成10年度発掘調査報告書―』 宮崎町文化財調査報告書 第11集

村本長二郎 1990 『ハット状遺構と室内施設』 『季刊考古学』 第32号 榎山園

1997 『陸奥中野にみる北との交流』 『歴史・律令国家・日本海―シンポジウムⅡ・資料集』 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会

2000 『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺―移民の時代―』 『宮城考古学』 第2号

2005 『7・8世紀における陸奥北辺の様相―宮城県域を中心として―』 『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』

1993 『古代郡部2層階級土器様相』 『特集シンポジウム「北日本における律令期の土器様相」』 第18回古代権威官衙跡踏査会 古代権威官衙跡踏査会

1998 『陸奥における土師器の地域性』 『岩手考古学』 第10号 岩手考古学会

2004 『蝦夷考古学の地平』 『古代蝦夷と律令国家』 東北研究企画編

1977 『山田水呑遺跡』 上田国山田郡山田郡推定遺跡群の発掘調査報告書

山中敏史 1998 『律令国家の地方末端支配機構―研究の現状と課題―』 『律令国家の地方末端支配機構をめぐって―研究集いの記録―』 奈良国立文化財研究所

1999 『福島県津地方の越後・出羽日本海系ロクロ土器―そのウケラシについて―の研究ノート―』 『福島考古』 40号記念号

2000 『クロコ土師器を中心とする会津地方の土器様相(前編)』 『福島考古』 41号

2002 『クロコ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)』 『福島考古』 43号

山中雄志 2003 『会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って』 古代会津地方の長歴史にみる特質について』 『行政社会論集』 第15巻第3号 福島大学行政社会論

山中雄志 2004 『古代の越と会津―丸世紀の煮炊き土器に見る人々の交流―』 『越後佐渡の古代ロマン―行き交う人々の姿を求めて―』 新潟県立歴史博物館

1996 『住居の変遷』 『考古学による日本歴史15 家屋と住居』 榎山園

1991 『大塚遺跡―弥生時代農産物集積地の発掘調査報告』 遺構編 港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告Ⅱ

1988 『古代国家の辺境支配と権・藩・郡について』 『秋田埋蔵文化財センター研究紀要』 第3号 秋田埋蔵文化財センター

1995 『砂室集器の一考察』 『研究紀要』 第10号 秋田埋蔵文化財センター

2000 『平安時代の砂室土器と東北北部長頭領』 『考古学ジャーナル』 №462

1992 『「聖久住居」か「聖久建物」か』 『研究連絡誌』 第34号 財団法人千葉県文化財センター

平成 19 年度

しも はぎ さわ  
下 萩 沢 遺 跡 第 2 次 調 査



原田遺跡・下萩沢遺跡遠景（正面奥に伊治城跡がみえる）



## 調査要項

遺跡名：下萩沢遺跡（宮城県道跡搭載番号 41067）  
所在地：宮城県栗原市築館源光・木戸地内  
調査原因：①国道4号線築館バイパス建設工事  
②県道若柳・築館線歩道設置工事  
調査主体：宮城県教育委員会  
調査担当：宮城県教育委員会  
調査期間：平成19年6月4日～7月3日  
対象面積：①7,531㎡ ②225㎡ 計7,756㎡  
調査面積：①4,274㎡ ②122㎡ 計4,396㎡  
調査員：柳澤和明、尾形祐之、生田和宏

## 1. 調査の経緯と概要

平成16年度に引き続き、国道4号線築館バイパス建設工事に伴う発掘調査を行ったものである。調査対象範囲は、①県道若柳・築館線より北側の築館バイパス建設工事箇所、②県道若柳線・築館線より南側の歩道設置箇所である。

平成16年度調査区のうち本調査区に最も近い県道若柳・築館線より南側の北区では、遺構が比較的少なく密度も希薄であったので、①の調査対象範囲の50%以上をトレンチによる確認調査をまず実施することにした。その際、調査範囲内の私道や地形等を考慮してA区・B区・C区・D区・E区に便宜的に細分した（第1図）。

確認調査の結果、①調査区中央部では南東から西、北端では南から北へ沢地が大きく広がることが判明し、遺構や遺物も少なかったため、A区とD区で遺構・遺物が検出された箇所周辺を拡張した後、引き続き本発掘調査を行った。

その結果、①のD区で時期不明の掘立柱建物跡1棟（SB201）、7世紀末頃から8世紀前葉頃の竪穴住居跡1軒（S1202）、縄文時代の陥し穴1基（SK203）、近代以降の溝跡1条（SD205）、A区で近代以降の溝跡1条（SD204）を検出した。遺物はS1202住居跡出土の土器のみで、天箱0.5箱分である。

また、②県道若柳線・築館線より南側の歩道設置箇所では、柱穴1箇所や土壇1基、溝跡3条を検出したが、確認調査に留めた。なお、調査区・遺構の平面図は電子平板を使用して作成した。遺構の断面図は縮尺1/20で作成し、あわせてデジタルカメラによる写真撮影を行った。

## 2. 発見した遺構と遺物

### （1）県道若柳・築館線より北側

①調査区で検出した主な遺構には、掘立柱建物跡1棟（SB201）、竪穴住居跡1軒（S1202）、縄文時代の陥し穴1基（SK203）、近代以降の溝跡2条（SD204・205）などがある（第1図、図版1）。いずれも地山面の黄褐色シルト層で検出した。遺物はS1202住居跡からのみ出土した。

### 【SB201 建物跡】（平面図・断面図：第2図）

〔位置〕D区中央部

〔規模・構造〕桁行1間、梁行1間の東西棟で、平面形は歪んでいる。

〔柱穴の検出状況〕4箇所すべての柱穴を検出し、そのすべてで柱抜き取り穴を確認した。

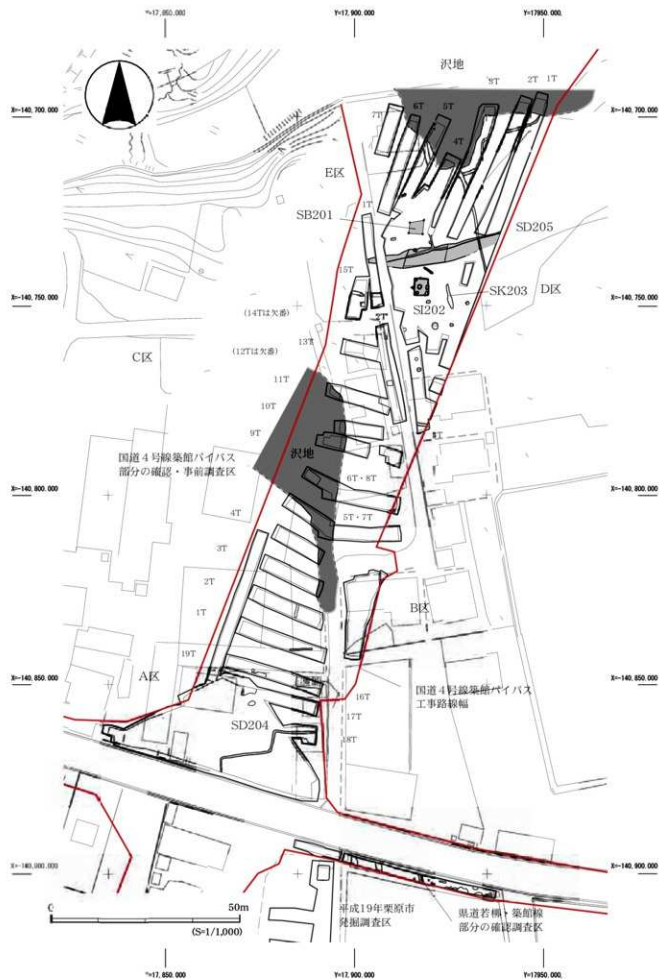
〔柱間寸法〕桁行総長は北側柱列で約3.8m（南側柱列で約3.7m）、梁行総長は東妻で約3.8m（西妻で約2.8m）である。

〔方向〕真北に対して東妻でみると北で東に約5°（西妻でみると北で東に約6°）偏る。

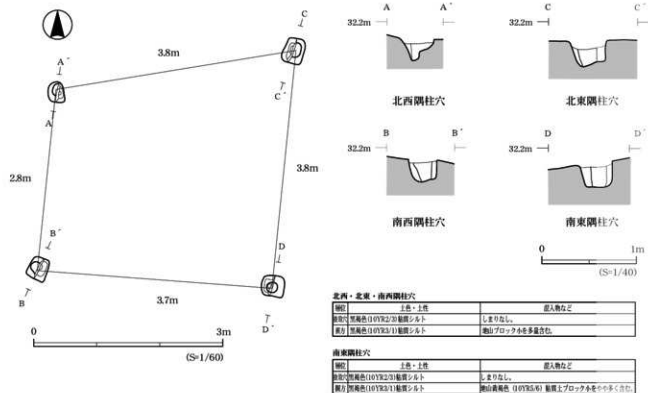
〔柱穴〕長辺0.3～0.4m、短辺0.2～0.4の隅丸長方形を基調とする。深さは0.2～0.3m。掘方埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルト土である。

〔柱痕跡〕径約0.1mの円形とみられる。柱材は残存していない。

〔年代〕不明である。



第1図 調査区全体図



第2図 SB201掘立柱建物跡平面・断面図

【S1202住居跡】(平面図・断面図：第3図、遺物：第4図、図版2)

〔位置〕D区中央部。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北(西辺)約4.6m、東西(北辺)約3.8mである。面積は約18㎡である。

〔方向〕真北に対して西辺でみると北で東に約1°偏る。

〔壁〕最も残存する東辺では深さ0.1~0.3mである。

〔床面〕四隅と東辺の中央部は固くしまっている。地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトを床面としている。

〔支柱穴〕なし。

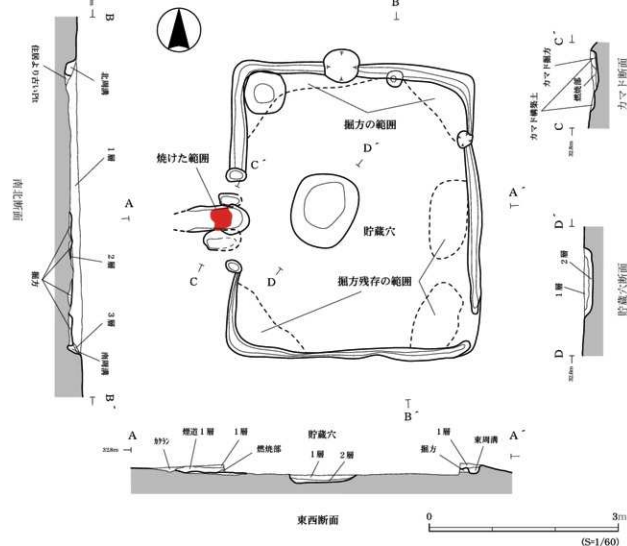
〔カマド〕西辺のほぼ中央部に付設されている。カマドの天井部は削平されていたが、燃焼部・煙道・側壁の積土・カマドの掘方を一部確認できた。燃焼部は奥行きと幅が約0.3m、深さ約0.1mの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。煙道は長さ約0.6m、幅約0.4m、深さ約0.1mほど残存する。なおカマドは地山ブロックを含む黒褐色粘質土で整地されており、カマドの右側壁と燃焼部はその上に設けられている。

〔貯蔵穴〕カマドの前に位置する。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ約0.1mのほぼ円形である。堆積土は2層に分かれるが、ともに人為的に埋め戻されている。

〔周溝〕カマド前面と南東隅を除く各辺に巡る。最もよく残存する北辺では幅約0.3m、深さ約0.2mある。人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕地山ブロックをわずかに含む黒褐色シルトが自然堆積している。

〔出土遺物〕堆積土から土師器坏(第4図1・2)、土師器甕(第4図3)などが少数出土した。全て非ロクロ調整で、坏の内面はヘラミガキが施された後、黒色処理されている。1は口縁部がほぼ直立するが僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、

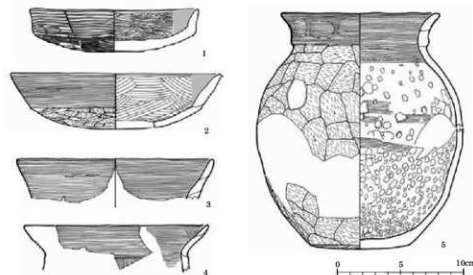


層位	土質・土色	遺物・形状	備考
1層	褐色シルト	土師器坏	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。
2層	褐色シルト	土師器甕	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。
3層	褐色シルト	土師器坏	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。

第3図 S1202 住居跡平面図・断面図

口縁部は横位のハケメの後、一部ヘラミガキが、体部から底部はハケメの後、ヘラミガキが施される。また2は口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。

〔年代〕赤井遺跡出土の土器を検討した佐藤の分類と編年によれば、1の形状はD1にあたり7世紀末から8世紀前葉、2はA2類にあたり、7世紀後半から8世紀前葉と考えられ、栗園式期にあたる(佐藤ほか2001)。よって遺構の年代はおおむね7世紀末から8世紀前葉とみておきたい。なお1の口縁部外面にはハケメが施されるが、外面にハケメが施される例は住社式・栗園式期にみられ、栗原市御駒堂遺跡第12号住居(小井川・小川1982)、多賀城市山王遺跡八幡地区SD2050B河川跡(後藤・村田ほか2001)、仙台市栗遺跡9・12号住居(東北学院大学考古学研究所1973、工藤・成瀬1982)に出土例がある。こうした土器は北上盆地南部の遺跡を中心に認められるもので、東北地方北部で多くみられる(村田2002)。



層位	遺物	層位	形状	特徴	写真
1	土師器坏	横溝	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	24
2	土師器甕	横溝	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	25
3	土師器坏	横溝	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	
4	土師器甕	横溝	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	
5	土師器甕	横溝	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	口縁部がほぼ直立するが、僅かに外傾する。体部との境に段が形成される。底部は丸底気味となる。外面調整について、口縁部が外傾し体部との境に稜が形成される。底部は丸底気味になるとみられる。外面調整について、口縁部はヨコナゲ、体部～底部は手持ちヘラケズリ後、一部にヘラミガキが施される。	26

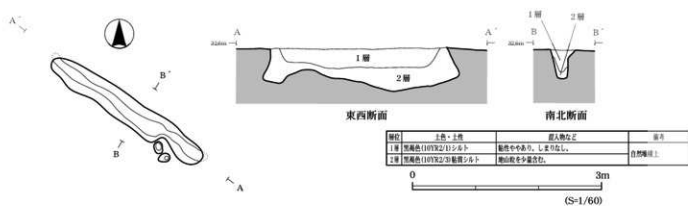
第4図 S1202 住居跡出土遺物

【S K203 竈し穴】(平面図・断面図: 第5図)

〔位置〕D区中央部

〔規模・形状〕長軸約3m、短軸0.3～0.4mの長楕円形。断面形はフラスコ状で、深さ約0.7mある。(埋土の特徴)2層に分かれ黒色シルトと地山ブロックを少量含む黒褐色シルトが自然堆積している。

〔年代〕形態的特徴から、縄文時代の竈し穴とみられる。



第5図 SK203 土壌跡平面・断面図

【SD204 溝跡】(平面図・断面図：第6図)

〔位置〕A区中央部

〔検出した長さ〕クランク状に曲がる。長さ約33m検出した。

〔規模・形状〕断面形はU字状で、上幅約0.4~0.5m、下幅約0.1~0.4m、深さ0.6mである。

〔堆積土〕地山ブロックを僅かに含む黒色シルトの自然堆積土である。

〔年代〕不明確だが形状や堆積土からみて近代以降の可能性がある。

【SD205 溝跡】(平面図：第1図)

〔位置〕D区中央部からE区1T

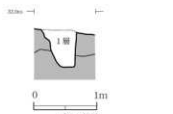
〔検出した長さ〕東西溝で長さ約33m検出した。

〔方向〕真北に対して北で西に13°偏る。

〔規模・形状〕断面形は逆凸字状で、上幅約0.2~2m、下幅約0.1~0.3m、深さ約0.2~0.6mである。

〔堆積土の特徴〕褐色粘質シルト層の自然堆積土である。上部がオーバーフローしている。

〔年代〕不明確だが、形状や堆積土からみて近代以降の可能性はある。

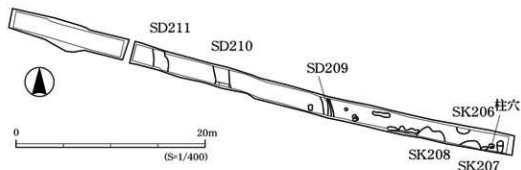


第6図 SD204 溝跡断面図

層別	土色・土質	遺物・植物など
1層	黄褐色(10YR2/1)シルト	動物ブロックを本層内に認め、植物や骨あり、しまりありなし。

(2) 県道若柳・築館線より南側

②調査区で検出した主な遺構には、柱穴1箇所、土壌3基(SK206~208)、溝跡3条(SD209~211)などがあるが、平面上の確認に留めた(第7図、図版2-2)。全て地山面の黄褐色シルト層で検出した。遺物は出土しなかった。年代も不明である。



第7図 県道若柳・築館線歩道設置箇所の確認調査区

【SK206 土壌】

〔位置〕東部

〔規模・形状〕長軸約1.4m、短軸0.6m以上の円形と推測される。

〔埋土の特徴〕地山ブロックを多く含む黒褐色土が自然堆積している。

【SK207 土壌】

〔位置〕東部

〔規模・形状〕長軸約2.4m、短軸0.7m以上の楕円形と推測される。

〔埋土の特徴〕地山ブロックを少し含む黒褐色土が自然堆積している。

【SK208 土壌】

〔位置〕東部

〔規模・形状〕長軸約3.1m、短軸0.9m以上の楕円形と推測される。

〔埋土の特徴〕地山ブロックを少し含む黒褐色土が自然堆積している。

【SD209 溝跡】

〔位置〕中央部

〔検出した長さ〕長さ1.9m検出した。

〔方向〕真北に対して北で西に8°偏る。

〔規模・形状〕上幅約0.6mである。

〔堆積土〕地山ブロックを少し含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積している。

【SD210 溝跡】

〔位置〕西部

〔検出した長さ〕長さ1.9m検出した。

〔方向〕真北に対して北で西に5°偏る。

〔規模・形状〕上幅約1.5mである。

〔堆積土〕地山ブロックを僅かに含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積している。

【SD211 溝跡】

〔位置〕西部

〔検出した長さ〕長さ2m検出した。

〔方向〕真北に対して北で西に1°偏る。

〔規模・形状〕上幅約1.6mである。

〔堆積土〕炭化物粒を僅かに含む黒褐色粘土質シルトが自然堆積している。

3. まとめ

今回の調査では、縄文時代の陥し穴跡、7世紀末から8世紀前葉の竪穴住居跡が検出され、遺跡北半部にも遺構が広がっていたことが明らかとなった。第1次調査の調査成果とあわせると、遺構分布の中心は遺跡南半部で、北部にかけて遺構は次第に希薄になっていくと考えられる。

## 引用・参考文献

工藤哲司・成瀬茂 1982『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集

小井川和夫・小川淳一 1982『御駒堂遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集

後藤秀一・村田晃一ほか 2001『山王遺跡八幡地区の調査2—古墳時代後期SD2050B 河川跡編—』宮城県文化財調査報告書第186集

佐藤敏幸ほか 2001『赤井遺跡1—牡鹿郷・郡家推定地—』矢本町文化財調査報告書第14集

東北学院大学考古学研究所 1973『栗遺跡発掘調査報告』『風古』第11号

村田晃一 2002『7世紀集落研究の視点(1)—宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として—』『宮城考古学第4号』



1. A区全景（東から）



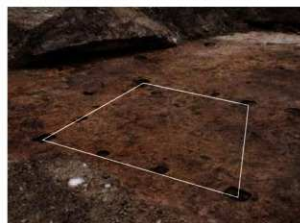
2. B区北半部（南から）



3. C区5トレンチ沢の落ち込み（東から）



4. D区全景（南から）



5. 5S201 掘立柱建物跡（南から）



6. 5S201 建物跡西隅柱穴（東から）



7. 5S1202 住居跡（東から）



8. 5SK203 陥し穴跡（北東から）

図版1 A～D区と検出遺構

報告書抄録



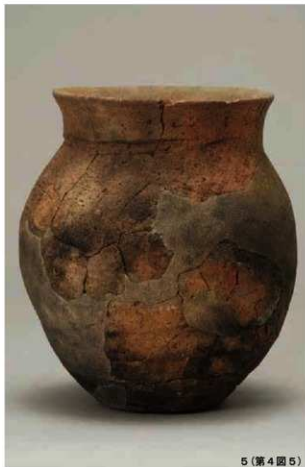
1. E区1トレンチ全景（北から）



2. 県道若柳・築館橋部分の確認調査区東端部（東から）



3 (第4図2)



5 (第4図5)



4 (第4図1)



4の口縁部詳細



4の底部から底部

図版2 E区、県道若柳・築館橋確認調査区とS1202住居跡出土遺物

ふりがな	はらだ・しもはざわいせき							
書名	原田・下萩沢遺跡							
副書名	一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書1							
巻次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第219集							
編著者名	大和幸生							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8-1 TEL 022-211-3684							
発行年月日	西暦2008年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はらだいせき 原田遺跡	みやぎけんくろはらしの 宮城県栗原市築 館字萩沢新田前	042137	41036	38度 43分 39秒	141度1 分38秒	2004.4.12 ～12.9	事前調査 9,600㎡ 確認調査 4,960㎡	一般国道 4号築館バ イパスに伴 う事前調査
しもはざわいせき 下萩沢遺跡	みやぎけんくろはらし 宮城県栗原市 築館字下萩沢	042137	41067	38度 44分 1秒	141度2 分10秒	2004.4.12 ～12.9 確認調査 (1次調査) 2,800㎡ 2007.6.4 ～7.3 事前調査 (2次調査)	事前調査 8,500㎡ 確認調査 (1次調査) 2,800㎡ 事前調査 4,396㎡ (2次調査)	一般国道 4号築館バ イパスに伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
原田遺跡	集落跡	奈良・平安	材木堀跡・掘立柱 竪穴住居跡・竪穴遺 構・掘立柱建物跡・ 井戸跡・焼成遺構・ 土壇・溝跡	土師器・須恵器・ 石製品・金属製品		8世紀後半の竪穴住居 跡から、小札や鉄錐が出 土した。		
下萩沢遺跡	集落跡	奈良	材木堀跡・堀跡竪 穴住居跡・竪穴遺構・ 掘立柱建物跡・木 棺墓跡・土壇・溝 跡	土師器・須恵器・ 土製品・石製品・ 金属製品・木製品				
要約	<p>原田遺跡は宮城県栗原市築館字萩沢、下萩沢遺跡は宮城県栗原市築館字下萩沢に所在する遺跡である。奥羽山脈から東に延びる丘陵末端の台地に立地しており、両者は南北で約280m離れる。発掘調査の結果、原田は竪穴住居跡8軒、竪穴遺構6棟、掘立柱建物跡19棟以上、掘立柱建物跡2条、材木堀跡1条、井戸跡1基、焼成遺構4基、土壇34基、溝跡4条等が発見され、多くは8世紀前半から9世紀前半と考えられた。下萩沢は1・2次合わせて竪穴住居跡26軒、竪穴遺構2棟、竪穴遺構3棟、掘立柱建物跡27棟以上、掘立柱建物跡1条、材木堀跡1条、木棺墓1基、土壇42基、焼成2箇所、区画溝跡1条、溝跡4条等が発見された。遺構の多くは8世紀代で、年代によって場所が異なり北半に前半代、南半に後半代の集落が営まれたと考えられる。両遺跡と、8世紀代の集落は竪穴住居と掘立柱建物、竪穴遺構などで構成されており一般集落と異なること、礎が出土していることから官衙と密接に関連する集落と考えられる。</p> <p>8世紀後半の集落は、原田遺跡で住居跡3軒のうち2軒、下萩沢遺跡で住居跡1軒に存在し最大15棟のうち9棟が大規模な火災に遭った蓋然性が高いと考えられ、その原因としては、宝龜11(780)年の伊治公普麻呂の乱によるものとみられる。焼失住居では、住居に用いられた建築部材や内部の施設などが焼け落ちた状態で検出されており、竪穴住居の構造を復元する上で良好な資料が得られた。</p>							



SI30 住居跡出土挂甲小札

---

---

宮城県文化財調査報告書第219集  
原田遺跡・下萩沢遺跡

平成21年 3月19日印刷

平成21年 3月25日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 佐々木印刷所

〒983-0035 仙台市宮城野区日の出町2丁目2番16号

TEL.022-236-1281 1281 1282 FAX.022-236-1284

E-mail sasaki\_insathu3@syd.odn.ne.jp

---

---